

四條畷市文化財調査報告 第50集  
寝屋川市文化財資料28  
公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第252集

四條畷市・寝屋川市

# 讚良郡条里遺跡

イオンモール四條畷建設に係る文化財発掘調査報告書

—第二分冊—

2015年1月

四條畷市教育委員会  
寝屋川市教育委員会  
公益財団法人 大阪府文化財センター



四條畷市文化財調査報告 第50集  
寝屋川市文化財資料28  
公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第252集

四條畷市・寝屋川市

# 讚良郡条里遺跡

イオンモール四條畷建設に係る文化財発掘調査報告書

—第二分冊—

四條畷市教育委員会  
寝屋川市教育委員会  
公益財団法人 大阪府文化財センター



# 目 次

## —第一分冊—

巻頭図版

序文

例言

凡例

第1章 調査に至る経緯と調査の経過	(濱田延充・村上始・實盛良彦)	…1
第2章 調査の方法	(後川恵太郎)	…5
第3章 地理・歴史的環境		
第1節 地理的環境	(後川恵太郎)	…7
第2節 歴史的環境	(實盛良彦)	…8
第4章 調査成果		
第1節 基本層序	(後川恵太郎)	…15
第2節 1・2・4区の調査成果	(後川恵太郎)	…16

## —第二分冊—

第3節 3区の調査成果	(村上始・實盛良彦)	…415
第4節 大將軍社跡の調査成果(11-6区、13-6・7区)	(村上始・實盛良彦)	…497
第5節 13-2区の調査成果	(後川恵太郎)	…511
第6節 13-3区の調査成果	(後川恵太郎)	…528
第7節 13-4区の調査成果	(後川恵太郎)	…535
第8節 13-5・8区の調査成果	(井上智博)	…555
第5章 自然科学分析		
第1節 讀良郡条里遺跡出土ガラス小玉の分析	(降幡順子・後川恵太郎)	…573
第2節 讀良郡条里遺跡出土鍛冶関連遺物の分析	(大澤正己・鈴木瑞穂・真鍋成史ほか)	…575
第6章 総括		
第1節 遺構の変遷と出土遺物	(後川恵太郎・實盛良彦)	…581
第2節 小型海獣葡萄鏡および柴垣柳樹双鳥鏡について	(實盛良彦)	…593
写真図版		
報告書抄録		



### 第3節 3区の調査

3区の調査で確認できた遺構面は、11面あった。第1遺構面から第3遺構面にかけては、中世から古代にかけての遺構面であり、第4遺構面から第9遺構面は古代から古墳時代にかけての遺構面、第10<sup>丁</sup>および第10遺構面は弥生時代の遺構面であった。以下、それぞれの遺構面で検出した主な遺構、および出土した主な遺物について詳述する。なお、遺構番号は3区のみ独立させて0001番からの番号を遺構の種別に関係なく連続させて各遺構に付与した。また、各遺構面の遺構はそのほとんどが遺構検出面に基づいた面分けており、各遺構面と各時代が完全に分離できたわけではないことを断わっておく。

この調査区の調査前の現状は他の調査区と同様水田耕作地であった。重機により現代耕土と床土を約30cm掘削するとすぐに遺物包含層である灰黄褐色系砂質土を中心とする土層があり、この上面が中世に属する第1遺構面であった。以下、当調査区の基本層序について述べる(図495~502、図版38)。

第I層：現代耕土層 厚さ約20cm。

第II層：床土層 厚さ約10cm。

第III層：灰黄褐色系砂質土を中心とする土層 厚さ約20cm。中世。上面が第1遺構面。

第IV層：黄褐色系砂質土を中心とする土層 厚さ約25cm。古代から中世。上面が第2遺構面。

第V層：上面が酸化し黄色系になった緑灰色系粘質土を中心とする土層 厚さは約25cm。古代。上面が第3遺構面。

第VI層：灰色系シルトを中心とする土層 厚さ約35cm。古代。上面が第4遺構面。

第VII層：灰色系粘質土の水田耕土と灰色系中砂の洪水砂層 厚さ約35cm。古墳時代後期から古代。耕土上面が第5遺構面。

第VIII層：黄灰色系シルトの水田耕土と灰黄色系中砂・粗砂の洪水砂層 厚さ約35cm。古墳時代後期。耕土上面が第6遺構面。

第IX層：灰色系粘質土の水田耕土と黄色系中砂の洪水砂層 厚さ約25cm。古墳時代後期。耕土上面が第7遺構面。

第X層：黒褐色系シルトの水田耕土と灰白色系粗砂の洪水砂層 厚さ約30cm。古墳時代後期。耕土上面が第8遺構面。

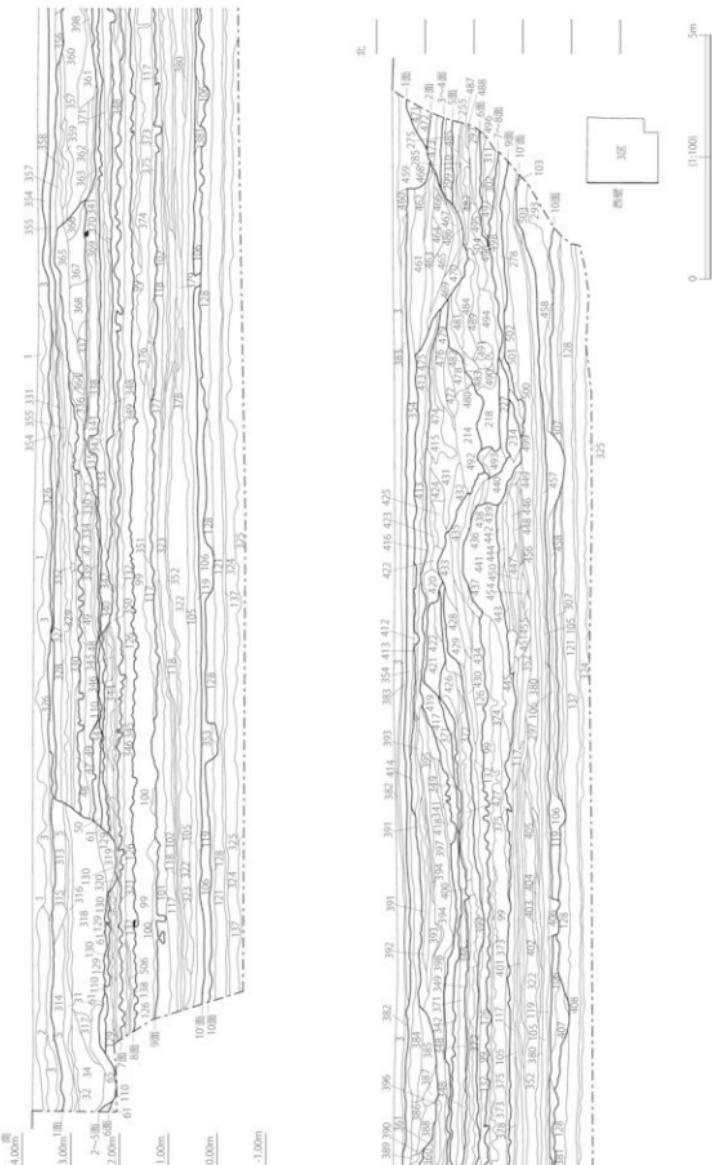
第XI層：水田耕土層 黒色系粘土。厚さ約35cm。古墳時代中~後期。上面が第9遺構面。

第XII層：無遺物層 灰色系粘質土。厚さ約35cm。植物遺体や炭化物を多量に含む粘土層であり、湿原に草等が生えるような景観が存在したとみられる。その時期は上下の土層の対応関係等から弥生時代後期から古墳時代前期にかけてとみられる。

第XIII層：水田耕土層 オリーブ黒色粘質土。厚さ約20cm。弥生時代中期。上面が第10<sup>丁</sup>遺構面。

第XIV層：地山層 灰黄色粗砂。厚さ約20cm。弥生時代中期。上面が第10遺構面。

第XV層：無遺物層 緑灰色粘土より下層は完全に包含遺物がなくなる。



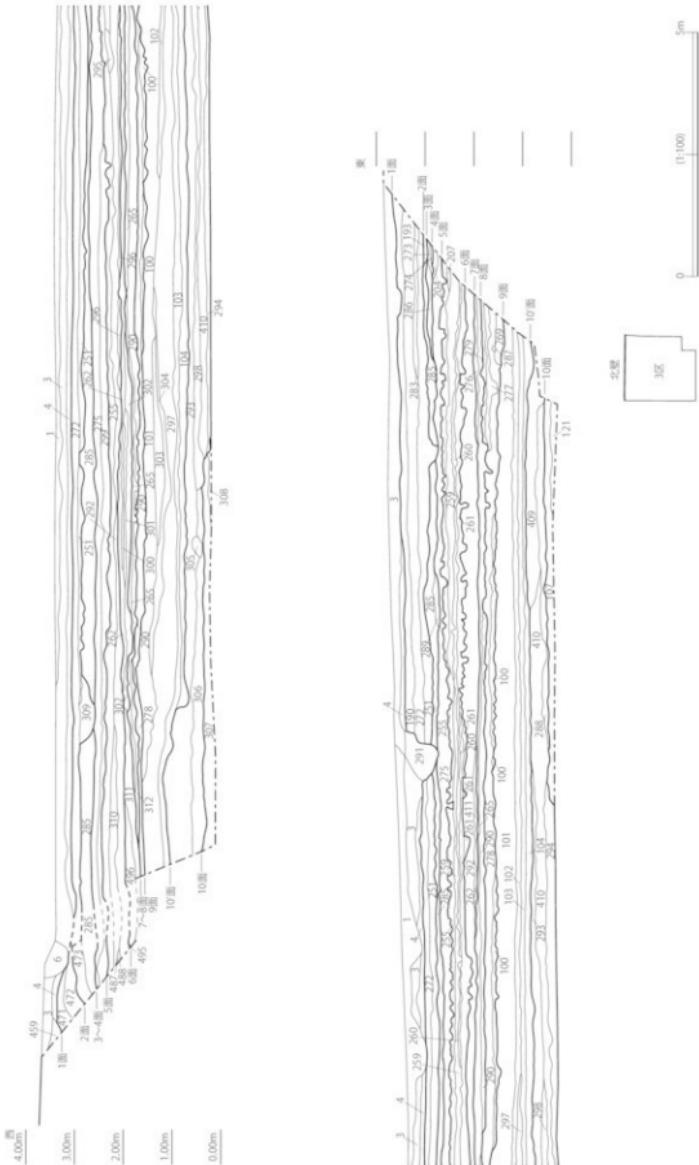


图 496 3区 调查区北壁断面图

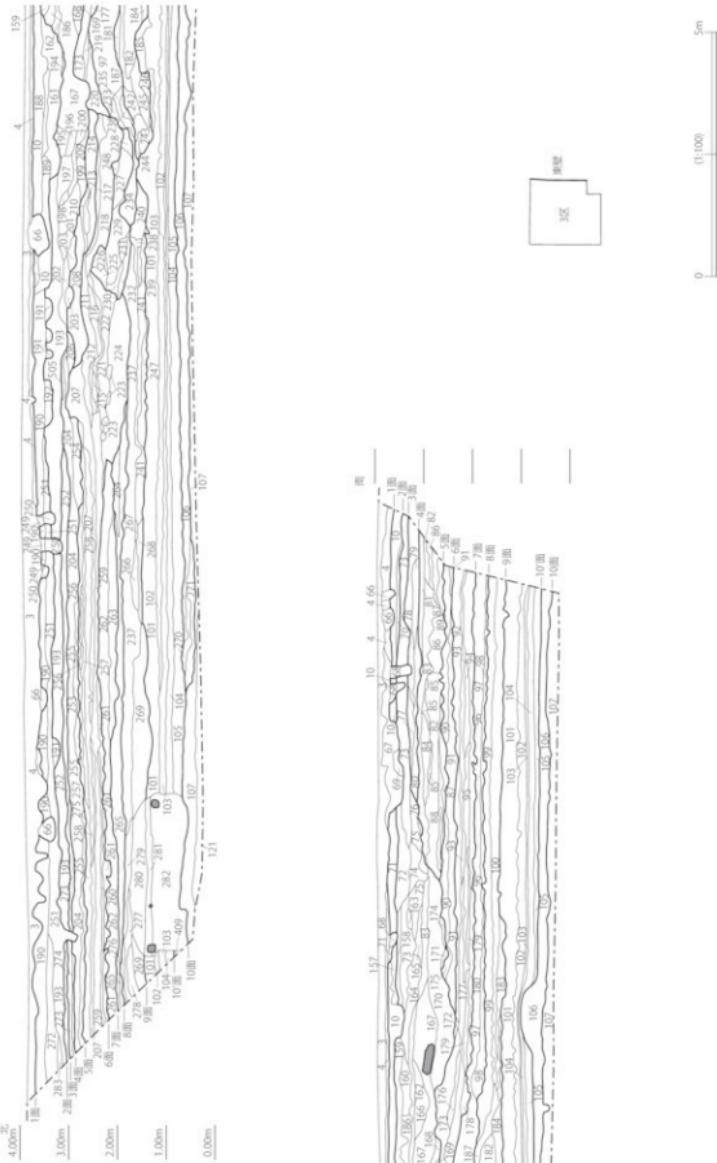


图 497 3区 调查区东壁断面图

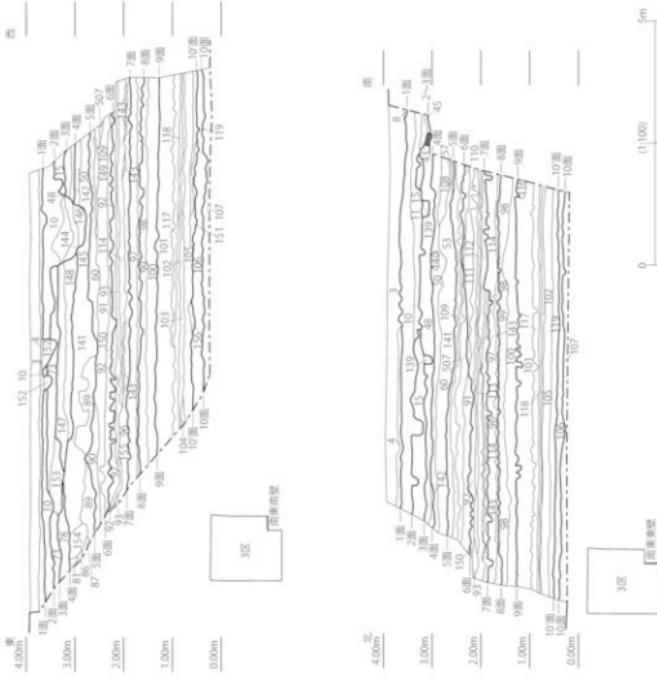


図 498 3 区 調査区南東面壁・南東壁断面図

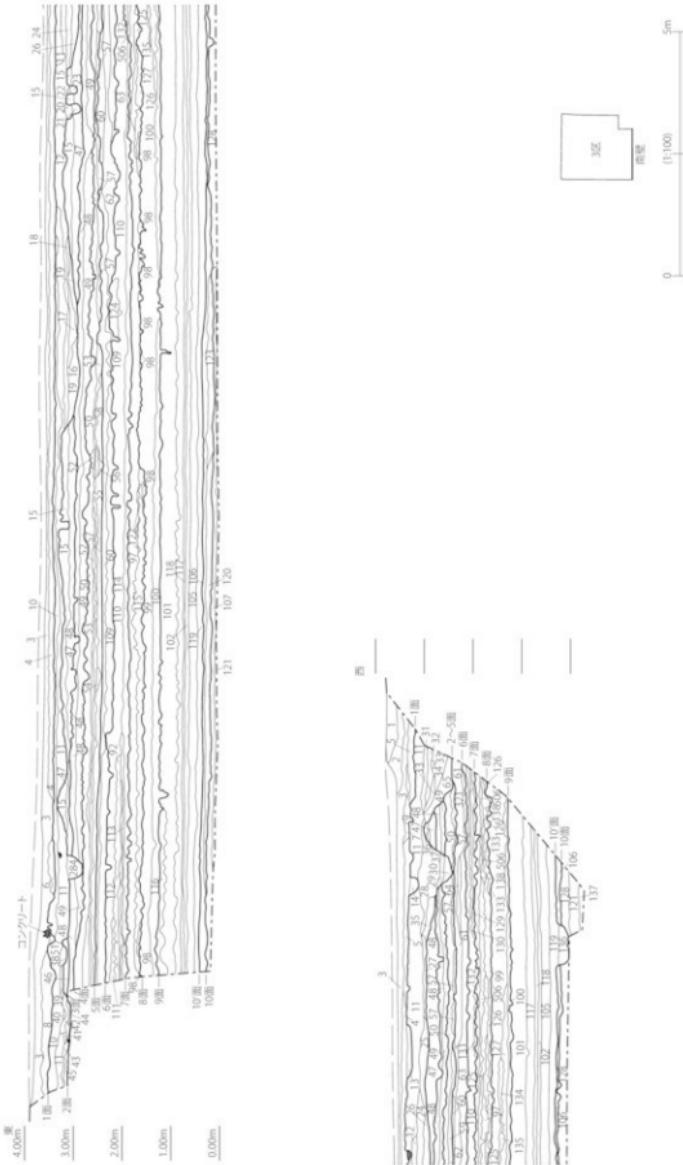


図 499 3 区 調査区南壁断面図

- 1 SV6/オリーブ 黄 砂質土 砂質土  
 2 SV4/赤オーリーブ 中砂混粘質土 反応性地耕土  
 3 SV5/黄オーリーブ 中砂混粘質土 反応性地耕土  
 4 SV5/5黄オーリーブ 黄 砂質土 砂質土  
 5 SV5/3黄土 黄 砂質土 砂質土  
 6 3割~4割の ブロック 岩質土  
 7 3割~4割の ブロック 岩質土  
 8 2SY/2黒黄土 中砂混粘質土 通構理土  
 9 TOYR/1褐灰土 中砂混粘質土 φ~1cmの礫が混じる 床土  
 10 TOYR/1褐灰土 中砂混粘質土 φ~1cmの礫が混じる 1面地山  
 11 2SY/2黒黄土 中砂混粘質土 φ~1cmの礫が混じる 1面地山  
 12 7SY/3黒土 黄 砂質土 φ~2cmの礫が混じる 施用層  
 13 7SY/4/3黄 中砂混粘質土 φ~2cmの礫が混じる 通構理土  
 14 2SY/2黒黄土 中砂混粘質土 通構理土  
 15 2SY/2黒黄土 中砂混粘質土 φ~1cmの礫が混じる 包含層 2面地山  
 16 TOYR/4灰 黄土 1面地山  
 17 2SY/2黒黄土 黄 砂質土 1518灌埋土  
 18 2SY/2黒黄土 黄 砂質土 耐性やや強い  
 19 7SY/3黒土 黄 砂質土 中砂混粘質物が多く混じる 1518灌埋土  
 20 7SY/3黒土 黄 砂質土 2面地山  
 21 SY3/オリーブ 黄 中砂混粘土 2面地山  
 22 SY3/オリーブ 黄 中砂混粘土 2面地山  
 23 SY4/3黄 黄 中砂混粘土 2面地山  
 24 SY4/3黄 黄 中砂混粘土 2面地山  
 25 TOYR/4灰 黄土 中砂混粘土 φ~2cmの礫が混じる 1391土坑埋土  
 26 TOYR/4灰 黄土 中砂混粘土 φ~2cmの礫が混じる 1391土坑埋土  
 27 SY4/3黄 黄 中砂混粘土 191土坑埋土  
 28 2SY/4オリーブ 黄 中砂混粘質土 砂質土やや強  
 29 2SY/4黄 中砂混粘質土 191土坑埋土  
 30 2SY/5/1黒黄土 黄 砂質土 一ブロックで 191土坑埋土  
 31 2SY/2黒黄土 中砂混粘土 1972土坑埋土  
 32 SY4/3黄 黄 中砂混粘土 1972土坑埋土  
 33 SY4/3黄 黄 中砂混粘土 1972土坑埋土  
 34 7SY/4/1黄 黄 中砂混粘土 1972土坑埋土  
 35 2SY/1黄土 黄 砂質土  
 36 SY3/3黒土 黑 黄 砂質土  
 37 SY3/オリーブ 黄 中砂混粘土 2面地山  
 38 TOYR/5/1褐灰土 黄 砂質土 φ~2cmの礫が混じる 2面地山  
 39 TOYR/4褐灰土 黄 砂質土 φ~1cmの礫が少混じる  
 40 SY3/3黒土 黑 黄 砂質土 φ~1cmの礫が少混じる  
 41 SY3/3黒土 黑 黄 砂質土 φ~1cmの礫が少混じる  
 42 2SY/3/3黒オリーブ 黄 黄 砂質土 1856土坑埋土  
 43 TOYR/2黑黄土 黄 砂質土 1856土坑埋土  
 44 SY3/3黒土 黑 黄 砂質土 1856土坑埋土  
 45 TOYR/4灰 黄土 黄 砂質土 φ~2cmの礫が混じる  
 46 2SY/5/4黄 黄 砂質土 φ~3cmの礫が混じる  
 47 2SY/5/4黄 黄 砂質土 一部中砂土  
 48 2SY/5/4黄 黄 砂質土 上面1cm程のみ酸化して、  
 49 SY3/3黒土 黑 黄 砂質土  
 50 2SY/5/1オリーブ 黄 中砂混粘土に砂が部分的にブロックで混じる  
 51 2SY/5/1オリーブ 黄 中砂混粘土 砂質土やや強  
 52 2SY/5/1オリーブ 黄 中砂混粘土 5面水耕土 4面地山  
 53 2SY/5/1オリーブ 黄 中砂混粘土 5面水耕土 4面地山  
 54 2SY/5/1オリーブ 黄 中砂混粘土 5面水耕土 4面地山  
 55 2SY/5/1オリーブ 黄 中砂混粘土 5面水耕土 4面地山  
 56 2SY/5/1オリーブ 黄 中砂混粘土 5面水耕土 4面地山  
 57 2SY/1/2黄 黄 砂質土  
 58 2SY/1/2黄 黄 砂質土  
 59 SY/4/4黄 黄 砂質土 2SY/3黒土 黑中砂混粘土 黑状態で  
 60 TOB/66/1青灰 黄土 1部粘土質土 5面水耕土 5面地山  
 61 2SY/6/1オリーブ 黄 中砂混粘土 5面水耕土 5面地山  
 62 2SY/6/1オリーブ 黄 中砂混粘土 5面水耕土 5面地山  
 63 2SY/6/1オリーブ 黄 中砂混粘土 5面水耕土 5面地山  
 64 2SY/6/1オリーブ 黄 中砂混粘土  
 65 SY3/3黒土 黑 黄 砂質土  
 66 SY3/3黒土 黑 黄 砂質土  
 67 SY3/3黒土 黑 黄 砂質土  
 68 TOYR/5/1黑 黑 中砂混粘土  
 69 SY3/3黒土 黑 黄 砂質土  
 70 SY3/3黒土 黑 黄 砂質土  
 71 TOYR/5/1 黑 黄 砂質土  
 72 2SY/3黄 黄 砂質土 一部砂が混じる  
 73 2SY/4/1黄 黄 砂質土 一部砂が混じる  
 74 2SY/4/1黄 黄 砂質土 一部砂が混じる  
 75 2SY/4/1黄 黄 砂質土 一部砂が混じる  
 76 2SY/5/2黄 黄 砂質土 一部砂が混じる  
 77 2SY/5/2黄 黄 砂質土  
 78 SY/5/3オリーブ 黄 砂質土 φ~2cmの礫が混じる  
 79 SBGS/1黄 黄 砂質土 φ~2cmの礫が混じる  
 80 SY/6/2オリーブ 黄 中砂 φ~2cmの礫が混じる  
 81 SY/6/2オリーブ 黄 中砂 φ~2cmの礫が混じる  
 82 SY/7/1灰 黄 中砂 1部砂が混じる  
 83 2SY/6/1オリーブ 黄 中砂混粘土  
 84 2SY/6/1オリーブ 黄 中砂混粘土  
 85 2SY/6/1オリーブ 黄 中砂混粘土  
 86 2SY/6/1オリーブ 黄 中砂混粘土  
 87 2SY/7/2灰 黄 砂質土 TOYS/1シルトが混じる  
 88 2SY/7/2灰 黄 砂質土  
 89 SY/5/1黑 黑 中砂混粘土 一部 SY/7/2灰 黄中砂が混じる  
 90 SY/4/1灰 黄 地質改良土 5面水耕土 5面地山  
 91 SY/6/2オリーブ 黄 中砂 92%が部分的に混じる  
 92 SY/6/2オリーブ 黄 中砂 92%が部分的に混じる  
 93 SY/5/1 黑 中砂混粘土 土耕土  
 94 2SY/6/2灰 黄 中砂 1部砂が混じる  
 95 2SY/6/1オリーブ 黄 中砂 1部砂が混じる  
 96 2SY/6/1オリーブ 黄 中砂 1部砂が混じる  
 97 SY/4/1灰 黄 地質改良土 5面水耕土 5面地山  
 98 SY/4/1灰 黄 地質改良土 5面水耕土 5面地山  
 99 2SY/3/3黒土 黑 水耕土  
 100 2SY/7/1灰 黄 地質改良土 5面水耕土 5面地山  
 101 SY/2/1灰 黄 地質改良土 9面水耕土 6面地山  
 102 SY/5/1灰 黄 地質改良土 9面水耕土 6面地山  
 103 2SY/6/1オリーブ 黄 中砂混粘土 砂質土  
 104 2SY/6/1オリーブ 黄 中砂混粘土 砂質土  
 105 2SY/5/4灰 黄 中砂混粘土 砂質土  
 106 SY3/1/2オリーブ 黄 中砂混粘土 土耕土  
 107 SY/4/1灰 黄 地質改良土 5面水耕土 5面地山  
 108 2SY/5/3灰 黄 中砂 φ~2cmの礫が混じる  
 109 SY/7/2白 黄 中砂 φ~3cmの礫が混じる  
 110 2SY/6/1オリーブ 黄 砂質土シルト 6面水耕土  
 111 2SY/6/2灰 黄 中砂 一部92層が混じる
- 112 2SY/7/2灰 黄 中砂 シルト 水耕土  
 113 2SY/4/1灰 白 黄 砂質土  
 114 2SY/4/1灰 白 黄 砂質土  
 115 7SY/4/1灰 黄 砂質土シルト 水耕土  
 116 10Y/4/1灰 中砂混粘土 9面水耕土  
 117 5SY/6/灰 黄 砂質土 植物遺体が多く混じる  
 118 10Y/4/1灰 中砂混粘土 植物遺体が混じる 無通物質  
 119 5SY/4/1灰 中砂混粘土 砂質土  
 120 10Y/5/1灰 黄 砂質土 中砂が少量混じる 包含層
- 121 10Y/4/1灰 黄 砂質土  
 122 10Y/4/1灰 白 黄 砂質土  
 123 N4/0灰 黄 砂質土  
 124 5Y/4/灰 黄 砂質土シルト  
 125 2SY/8/2灰 白 黄 砂質土  
 126 2SY/8/2灰 黄 中砂混粘土  
 127 2SY/4/1灰 黄 中砂混粘シルト 黄やや強い  
 128 2SY/7/2灰 黄 砂質土 しりめがやや強い 10面地山  
 129 2SY/7/1灰 黄 砂質土  
 130 2SY/7/1灰 黑 黄 中砂混粘シルト  
 131 SY3/6/オリーブ 黄 中砂  
 132 SY3/6/オリーブ 黄 中砂混粘シルト 水耕土  
 133 10Y/4/1灰 黄 砂質土  
 134 10Y/4/1灰 黄 砂質土 φ~1cmの礫が混じる  
 135 2SY/8/3白 黄 砂質土  
 136 10Y/3/オリーブ 黄 中砂混粘質土 植物遺体が混じる 2186土坑  
 137 2SY/8/3白 黄 中砂混粘質土  
 138 7SY/1/灰 黄 中砂混粘土  
 139 10Y/4/1灰 黄 砂質土 3面地山  
 140 10Y/6/1灰 黄 砂質土  
 141 10Y/6/1灰 黄 砂質土 一部シルトが層状に混じる  
 142 SY3/6/オリーブ 黄 砂質土  
 143 10Y/5/1灰 黄 シルト 水耕土  
 144 10Y/6/1灰 黄 砂質土 φ~1cmの礫が混じる  
 145 10Y/6/1灰 黄 中砂混粘土  
 146 10Y/4/1オリーブ 黄 砂質土 10Y/2/1灰シルトがブロックで混じる  
 147 2SY/6/3/3灰 黄 中砂混粘土  
 148 2SY/6/3/3灰 黄 中砂混粘土  
 149 2SY/6/3/3灰 黄 中砂混粘土  
 150 2SY/8/2灰 黄 砂質土 φ~3cmの礫が多く混じる  
 151 2SY/7/1灰 白 黄 中砂  
 152 2SY/7/1灰 黄 砂質土 1面地山  
 153 2SY/7/2灰 黄 中砂 φ~2cmの礫が混じる  
 154 5SY/3/2オリーブ 黄 シルト 一部細砂が層状に混じる  
 155 2SY/6/1灰 黄 中砂  
 156 10Y/6/2灰 黄 砂質土 φ~2cmの礫が混じる  
 157 2SY/6/3/3灰 黄 砂質土 φ~2cmの礫が混じる  
 158 2SY/6/3/3灰 黄 砂質土  
 159 10Y/6/4/1灰 黄 黄 中砂 φ~2cmの礫が混じる  
 160 10Y/6/4/1灰 黄 黄 中砂 φ~2cmの礫が混じる  
 161 10Y/6/4/1灰 黄 黄 中砂 φ~2cmの礫が混じる 1169河川堆積土  
 162 2SY/6/2灰 黄 砂質土の多く混じるシルト  
 163 10Y/6/2灰 黄 砂質土  
 164 2SY/6/2灰 黄 砂質土 φ~4cmの礫が混じる  
 165 2SY/8/1灰 白 黄 砂質土  
 166 2SY/6/2灰 黄 砂質土 一部砂が混じる  
 167 2SY/7/2灰 黄 砂質土 φ~4cmの礫が混じる 1577河川堆積土  
 168 2SY/7/2灰 黄 砂質土  
 169 10Y/6/2灰 黄 砂質土 φ~3cmの礫が混じる  
 170 10Y/6/4/1灰 黄 黄 中砂 φ~2cmの礫が混じる 1577河川堆積土  
 171 2SY/7/2灰 黄 砂質土  
 172 2SY/5/1灰 黄 シルト 一部砂が混じる  
 173 10Y/5/1灰 黄 砂質土シルト 2042路路堆積土  
 174 2SY/5/1灰 黄 シルト  
 175 2SY/5/1灰 黄 砂質土  
 176 2SY/2灰 黄 砂質土 植物遺体・液化物が混じる  
 177 2SY/2灰 黄 砂質土  
 178 2SY/4/1灰/オリーブ 黄 中砂混粘シルト  
 179 2SY/4/1灰/オリーブ 黄 中砂混粘シルト  
 180 2SY/6/4/2/3灰 黄 砂質土  
 181 5SY/2/灰オリーブ 黄 砂質土  
 182 2SY/6/2/3灰 黄 中砂混粘シルト  
 183 2SY/6/2/3灰 黄 中砂混粘シルト  
 184 SY/6/1 灰 中砂  
 185 N3/0/灰 黄 中砂混粘シルト  
 186 2SY/6/1灰 黄 中砂 φ~2cmの礫が混じる  
 187 10Y/4/1灰 シルト 中砂が少混じる  
 188 10Y/4/1灰 黄 砂質土 φ~3cmの礫が混じる  
 189 2SY/6/3/3灰 黄 砂質土  
 190 10Y/6/4/1灰 黄 黄 中砂  
 191 7SY/3/2灰 黄 砂質土 2面地山  
 192 7SY/3/1灰 黄 砂質土 2面地山  
 193 10Y/5/2灰 黄 黄 中砂混粘土 2面地山  
 194 10Y/6/1灰 黄 砂質土  
 195 10Y/7/6/9月白 黄 砂質土  
 196 5SY/6/灰 シルト 所々2SY/7/1灰 黄が混じる  
 197 10Y/6/4/1灰 黄 黄 中砂 φ~2cmの礫が混じる  
 198 10Y/6/4/1灰 黄 黄 中砂 φ~2cmの礫が混じる  
 199 2SY/7/1灰 白 黄 砂質土  
 200 5Y/7/1灰 白 黄 砂質土  
 201 2SY/7/1灰 白 黄 砂質土  
 202 2SY/8/2灰 黄 中砂混粘シルト  
 203 10Y/5/1灰 中砂混粘シルト  
 204 10Y/5/1灰 中砂混粘シルト 4面地山  
 205 10Y/6/1灰 中砂混粘シルト  
 206 5SY/6/1灰 中砂混粘シルト  
 207 2SY/4/2灰 黄 中砂混粘シルト  
 208 2SY/6/3/3灰 黄 砂質土  
 209 2SY/6/3/3灰 黄 砂質土  
 210 10Y/6/1灰 黄 砂質土シルト  
 211 5SY/4/1灰 シルト 10Y/6/6/にい 黄相中砂が混じる  
 212 10Y/6/6/にい 黄相中砂が混じる  
 213 2SY/6/3/3灰 黄 砂質土  
 214 2SY/6/3/3灰 黄 砂質土 2042路路堆積土  
 215 5SY/6/灰 黄 砂質土  
 216 10Y/7/3/3灰 黄 黄 中砂  
 217 10Y/7/3/3灰 黄 黄 中砂  
 218 2SY/6/2灰 黄 砂質土 φ~4cmの礫が混じる 2048路路堆積土  
 219 10Y/7/2灰 黄 砂質土シルト  
 220 3SY/4/2灰 黄 黄 中砂  
 221 3SY/4/2灰 黄 黄 中砂  
 222 3SY/5/2灰 黄 黄 中砂  
 223 10Y/4/1灰 黄 砂質土シルト  
 224 10Y/7/2/1灰 黄 黄 中砂 φ~3cmの礫が混じる 2078がらみ堆積土

225	2.5Y3/3にこし 黄 稲穀		332	2.5Y3/3黒穀 砂質土 通構理土	
226	586/1黄赤 シルト		333	2.5Y5/2底灰質 土 中砂 φ~3cmの塊が混じる	
227	586/1底灰質 土 中砂 稲穀 φ~3cmの塊が混じる 2100流域堆積土		334	2.5Y5/2底灰質 土 中砂 φ~3cmの塊が混じる	
228	586/1開拓 リード 中砂 砂質土 所々2.5Y3/6黄赤細砂がブロックで混じる 2100流域堆積土		335	2.5Y5/2底灰質 土 中砂 φ~3cmの塊が混じる	
229	2.5Y3/3黒穀 シルト		336	10Y6/1底灰 賽土 2.5Y8/1底灰細砂が混じる	
230	2.5Y3/3黒穀 稲穀		337	2.5Y5/2底灰質 土 中砂	
231	N0/0白 黃色		338	2.5Y5/2底灰質 土 中砂 φ~1cmの塊が混じる	
232	2.5Y1/1黄赤 シルト		339	2.5Y5/2底灰質 土 稲穀	
233	N0/0白 黃色		340	10Y4/1灰 シルト	
234	2.5G4/4開拓オーブ灰 中砂の塊が混じる 2136流域堆積土		341	7.5Y6/1灰 稲穀 一部粗粒が混じる	
235	2.5G4/4開拓オーブ灰 中砂の塊が混じる 2136流域堆積土		342	10Y4/1灰 黃色 5Y3/1オリーブ黒シルトと5Y8/2底灰砂の混質した ブロックで混じる	
236	NG/0灰粗砂と5Y8/2底灰粗砂の混成土		343	2.5Y8/3黒穀 中砂	
237	2.5Y3/1黒穀 中砂シルト 8面地山		344	2.5Y7/3底灰 賽土	
238	2.5Y3/1黒穀 稲穀		345	2.5Y7/3底灰 シルト	
239	N4/0白 黃色		346	2.5Y3/3黒穀 中砂	
240	5Y3/1オリーブ黒 稲穀 黒シルト φ~1cmの塊が混じる		347	2.5Y7/3底灰 賽土 一部粗粒が混じる	
241	N0/0白 黃色 中砂シルト 10Y5/1底灰質土		348	2.5Y7/3底灰 稲穀 一部5Y3/1オリーブ黒シルトが層状に混じる	
242	2.5Y4/1底灰 黃色 しまかわやや強い		349	2.5Y7/3底灰 黃色 一部5Y3/1オリーブ黒シルト	
243	2.5Y7/2底灰 稲穀 φ~2cmの塊が混じる 2163流域堆積土		350	9Y7/1白 灰 中砂	
244	2.5Y3/1黒穀 シルト 粘性やや強い 2163流域堆積土		351	5Y5/2底灰 シルト 5Y6/2底灰シルトが混じる	
245	10Y5/1底灰 黃色 5面地山		352	2.5Y7/3底灰 黃色 5Y6/2底灰シルト	
246	5Y7/1底灰 白 黃色 5面地山		353	2.5Y7/3底灰 黃色 10Y6底灰質土	
247	N7/0底灰 白 黃色		354	2.5Y5/3黒穀 砂質土 φ~1cmの塊が混じる	
248	7.5Y4/1灰 シルト		355	2.5Y6/2底灰 賽土 シルト 一部中の塊が混じる しまかわやや強い	
249	2.5Y3/1黒穀 稲穀		356	2.5Y7/3底灰 黃色 5Y6/2底灰シルト	
250	2.5Y4/2底灰 黃色 粉土		357	2.5Y7/3底灰 黃色 やや強い φ~1cmの塊が多く混じる	
251	10Y4/1灰 赤 稲穀 黑シルト 一部粗粒が混じる		358	10Y6/4底灰 黃色 稲穀 シルトが混じる ややまる	
252	10Y5/2灰 黃色 黑シルト 一部粗粒が混じる		359	10Y6/1灰 黃色 φ~3cmの塊が少な混じる	
253	10Y5/2灰 黃色 粉土		360	2.5Y7/3底灰 黃色 φ~2cmの塊が混じる	
254	2.5Y6/2底灰 黃色		361	2.5Y7/2底灰 黃色	
255	2.5Y5/2底灰 黃色 細砂とシルトの混成土 5面地山		362	2.5Y7/3底灰 黃色	
256	10Y5/1底灰 黃色 5面地山		363	2.5Y7/3底灰 黃色	
257	2.5Y7/2底灰 中砂 一部細粒が混じる		364	6.5Y6/1オリーブ灰 シルト 5Y6/2底灰シルトが混じる	
258	2.5Y7/2底灰 中砂 一部細粒が混じる		365	2.5Y6/4底灰 こし 黄 中砂 φ~2cmの塊が混じる	
259	2.5Y8/2底灰 稲穀		366	2.5Y6/2底灰 黃色 シルト 一部中の塊が混じる	
260	10Y5/1底灰 黃色 中砂シルト 所々2.5Y8/3底灰細砂が混じる		367	2.5Y6/2底灰 小葉 稲穀 φ~2cmの塊が混じる	
261	5Y4/1灰 黃色 中砂シルト 6面地山		368	2.5Y7/3底灰 黃色 一部細粒シルトが混じる	
263	5Y7/2白 黃色 一部シルトが混じる		369	7.5Y4/1灰 シルト	
264	2.5Y4/1底灰 黃色 5面地山		370	5Y4/1灰 粘土	
265	2.5Y7/2底灰 黃色 相手		371	2.5Y7/3底灰 黃色 10Y5/1灰シルトがブロックで混じる	
266	2.5Y7/2底灰 黃色		372	2.5Y3/3底灰 黃色 粘土土 中砂がブロックで混じる	
267	2.5G6/1オーブ灰 シルト 粘性無し		373	6.5Y6/0白 中砂 粘土土 中砂がブロックで混じる	
268	2.5Y3/1底灰 黃色 φ~2cmの塊が少な混じる		374	2.5Y3/1黒穀 粘土土 一部砂中が混じる 水田耕土	
269	7.5Y3/1オリーブ灰 黃色 粗砂粘土土		375	2.5Y6/1灰 粘土土 5面地山	
270	N3/0底灰 中砂 黃色		376	2.5Y6/1灰 粘土土 5面地山	
271	10Y5/1底灰 黃色 5面地山		377	2.5Y6/1底灰 黃色 5面地山	
272	2.5Y4/1底灰 黃色 5面地山		378	5Y6/0白 粘土土 5面地山	
273	10Y6/1灰 黃色 稲穀 φ~2cmの塊が混じる		379	2.5Y7/3底灰 黃色 5面地山	
274	2.5M6/4底灰 黃色 φ~2cmの塊が混じる		380	2.5Y3/1底灰 粘土土 稲穀 地盤が多く混じる	
275	2.5Y6/4底灰 黃色 φ~2cmの塊が混じる		381	2.5Y3/1底灰 中砂 黑粘土土 稲穀	
276	2.5Y4/1底灰 黃色 5面地山		382	2.5Y6/3底灰 中砂 黑粘土土 稲穀	
277	2.5Y3/1底灰 黃色 5面地山		383	2.5Y6/3底灰 黑粘土土 稲穀	
278	7.5Y3/1オリーブ灰 黃色シルト 5面地山		384	10Y5/4底灰 黃色 中砂 φ~3cmの塊が混じる	
279	5Y2/2底灰 黃色 中砂正シルト		385	10Y6/4底灰 黃色 稲穀 φ~3cmの塊が混じる	
280	2.5Y6/1底灰 黃色 5面地山		386	2.5Y6/3底灰 黃色 5Y6/2底灰シルトが部分的に混じる	
281	2.5Y4/1底灰 黃色 粘土土 0001井戸辺込		387	2.5Y7/3底灰 黃色 φ~3cmの塊が混じる	
282	5Y4/1底灰 黃色 中砂粘土土 一部5Y7/2灰中砂が層状に混じる		388	2.5Y7/3底灰 黃色 5Y6/2底灰シルト φ~2cmの塊が混じる	
283	10Y3/0底灰 黃色 台原土 φ~3cmの塊が混じる		389	2.5Y7/3底灰 黃色 5Y6/2底灰シルト φ~2cmの塊が混じる	
284	10Y4/1灰 赤 砂質土 1501灰粘土土		390	2.5Y7/3底灰 黃色 5Y6/2底灰シルト φ~2cmの塊が混じる	
285	2.5Y4/2底灰 黃色 台原土 粘性やや強い φ~1cmの塊が混じる		391	5Y5/1灰 シルト	
286	2.5Y3/2底灰 黃色 5面地山		392	2.5Y7/2底灰 黃色	
287	2.5Y7/1底灰 中砂 しりめりがや強い		393	2.5Y7/1底灰 稲穀	
288	2.5Y3/2底灰 黃色 5面地山		394	2.5Y7/1底灰 黃色	
289	2.5Y4/1底灰 黃色 5面地山		395	2.5Y6/2底灰 黃色 中砂	
290	2.5Y7/1底灰 白 黃色 5面地山		396	2.5Y6/1灰 5面地山	
291	2.5Y4/2底灰 黃色 台原土 φ~2cmの塊が混じる 10世~近代水田護岸机 ・溝土		397	2.5Y6/1灰 こし 黄 稲穀 φ~3cmの塊が混じる	
292	2.5Y6/1底灰 黃色 稲穀 黒シルト 動植物塊が混じる		398	2.5Y7/3底灰 黃色 5Y6/2底灰シルト φ~1cmの塊が混じる	
293	2.5Y3/2底灰 黃色 稲穀 しりめりがやや強い 所々N3/0底灰 黃色 黑粘土土が混じる		399	2.5Y7/3底灰 黃色 5Y6/2底灰シルト φ~3cmの塊が混じる	
294	2.5Y3/2底灰 黃色 稲穀 しりめりがやや強い φ~1cmの塊が混じる		400	2.5Y3/1底灰 中砂 黑粘土土	
295	2.5Y6/2底灰 黃色 稲穀 動植物塊が混じる		401	2.5Y7/2底灰 黃色 稲穀	
296	2.5Y7/2底灰 黃色 動植物塊が混じる 5面地山		402	2.5Y7/2底灰 黃色 稲穀	
297	2.5Y7/1底灰 黃色 2.5Y7/2底灰中砂がやや多く混じる		403	5Y3/1底灰 黃色 稲穀	
298	2.5Y4/2底灰 黃色 5面地山		404	10Y7/1底灰 黃色 稲穀	
299	2.5Y4/2底灰 黃色 5面地山		405	2.5Y6/3底灰 黃色 動植物塊が多く混じる	
300	2.5Y6/1底灰 黃色 5面地山		406	2.5Y3/1底灰 黃色 動植物塊が多く混じる	
301	5Y6/1灰 黃色 一部シルトが混じる		407	2.5Y5/1底灰 黃色 シルト 中砂 φ~1cmの塊が混じる	
302	2.5Y7/3底灰 黃色 中砂		408	2.5Y6/1底灰 黃色 稲穀 φ~3cmの塊が混じる	
303	2.5Y6/2底灰 黃色 5面地山		409	2.5Y6/1底灰 黃色 5Y6/2底灰シルト φ~1cmの塊が混じる	
304	2.5Y6/1底灰 黃色 5面地山		410	5Y3/2底灰 黃色 中砂正シルト	
305	2.5Y7/2底灰 黃色 5面地山		411	2.5Y8/2底灰 黃色 稲穀	
306	5Y6/2オーブ 灰 中砂 φ~1cmの塊が混じる		412	10Y5/2底灰 黃色 益シルト しまがやや強い	
307	2.5Y4/1底灰 黃色 5面地山		413	2.5Y7/3底灰 黃色 中砂正シルト しまがやや強い	
308	2.5Y6/2底灰 黃色 5面地山		414	2.5Y8/2底灰 黃色 中砂正シルト	
309	2.5Y4/1底灰 黃色 粘土 土 通構理土		415	2.5Y6/3底灰 黃色 中砂正シルト	
310	2.5Y6/2底灰 黃色 中砂		416	5Y6/2オーブ 灰 中砂正シルト	
311	2.5Y7/1底灰 黃色 5面地山		417	2.5Y7/1底灰 黃色 中砂正シルト	
312	2.5Y7/1底灰 黃色 5面地山		418	2.5Y7/1底灰 黃色 稲穀	
313	2.5Y6/4底灰 黃色 黑粘土土 φ~2cmの塊が混じる		419	2.5Y4/1底灰 黃色 中砂正シルト	
314	10Y4/2底灰 黃色 黑粘土土 φ~2cmの塊が混じる		420	2.5Y6/3底灰 黃色 5Y6/2底灰シルト φ~2cmの塊が混じる	
315	2.5Y5/2底灰 黃色 黑粘土土 φ~2cmの塊が混じる		421	2.5Y6/1底灰 黃色 中砂正シルト しまがやや強い	
316	2.5Y5/2底灰 黃色 黑粘土土 1977土壤理		422	5Y5/2底灰 黃色 中砂正シルト	
317	2.5Y6/2底灰 黃色 25G3/1底灰粘土土 25G6/1底灰シルト		423	2.5Y3/2底灰 黃色 中砂の塊が混じるシルト	
318	2.5Y6/1底灰 黃色 1977土壤理		424	2.5Y6/3底灰 黃色 5Y6/2底灰シルト	
319	2.5G6/1底灰 黃色 5Y3/1底灰シルト 25G6/1底灰粘土土		425	2.5Y5/2底灰 黃色 中砂正シルト	
320	2.5Y6/1底灰 黃色 5面地山		426	2.5Y3/1底灰 黃色 稲穀 黑粘土土	
321	5Y7/1底灰 白 中砂 5Y3/1底灰シルト		427	2.5Y7/4底灰 黃色 N7/0底灰白シルトが混じる	
322	5Y8/2底灰 黃色 稲穀		428	2.5Y7/4底灰 黃色 N7/0底灰白シルトが混じる	
323	5Y8/2底灰 黃色 稲穀 動植物塊が非常に多く混じる		429	5Y8/1底灰 白	
324	5Y6/1底灰 黃色 粘土 動植物塊が混じる		430	2.5Y3/1底灰 黃色 稲穀 黑粘土土	
325	5Y6/1底灰 黃色 粘土 動植物塊が混じる		431	10Y7/4底灰 黃色 稲穀 黑粘土土	
326	10Y5/2底灰 黃色 粘土		432	2.5Y7/4底灰 黃色 稲穀 黑粘土土	
327	2.5Y6/1底灰 黃色 粘土 動植物塊が混じる		433	5Y4/1底灰 中砂正シルト	
328	10Y6/2底灰 黃色 粘土 動植物塊が混じる		434	2.5Y8/2底灰 黃色 中砂の塊が混じるシルト	
329	10Y6/2底灰 黃色 粘土 動植物塊が混じる		435	2.5Y7/3底灰 黃色 稲穀 黑粘土土	
330	5Y5/2底灰 オーブ 黃色 粘土 動植物塊が混じる		436	2.5Y7/3底灰 黃色 中砂正シルト	
331	2.5Y6/2底灰 黃色 中砂 ややしまがや		437	2.5Y3/1底灰 黃色 中砂正シルト	
			438	2.5Y5/2底灰 黃色 中砂正シルト	
			439	2.5Y6/3底灰 黃色 粘土 動植物塊が混じる	
			440	2.5Y8/2底灰 黃色 中砂 N6/0底灰シルトが層状に混じる	
			441	2.5Y3/1底灰 中砂 黑粘土土	
			442	N6/0/0 粘土 壓化物が混じる	
			443	N5/0/0 粘土 壓化物が混じる	

図 501 3区 調査区断面注記 (2)

444	5Y4/1底 細砂混シルト 厚化物が混じる 一部粘質土がブロックで混じる	476	7.5Y4/1底 細砂混シルト 黏性やや強い
445	4.5Y6/1底 黄褐色 粗砂 一部粗粒が混じる	477	2.5Y6/1底 黄褐 シルト
446	5Y6/1底 黄褐色 粗砂シルト	478	10Y5/1底 シルト 5Y6/2底オリーブ中砂が混じる
447	10Y6G/1底 黄褐色 粗砂シルト	479	2.5Y6/1底オリーブ中砂
448	10Y5/1底 中砂 黄褐色	480	2.5G6/6オリーブ灰 シルト
449	4.5Y6/1底 黄褐色 粗砂	481	5Y4/1底 細砂混シルト
450	2.5Y6/2底 黄褐色 粗砂	482	5Y4/1底 黄褐色 粗砂混シルト
451	2.5Y6/2底 白 粗砂	483	7.5Y4/1底 黄褐色 植物遺体が混じる
452	5Y6/1底 粗砂 混シルト	484	2.5Y7/3浅黄 中砂 5Y6/3黄褐色シルトが層状に混じる
453	2.5Y6/2底 白 粗砂 カー3cmの塊が混じる	485	2.5Y6/3/1灰 黄褐色 中砂
454	2.5Y6/2底 黄褐色 粗砂	486	2.5Y6/3/2灰 黄褐色 中砂
455	7.5Y6/1底 中砂 カー2cmの塊が混じる	487	10Y5/1底 シルト
456	10Y6/1底 白 シルト 5Y4/1底粘質シルトが混じる	488	2.5Y7/2底 黄褐色 中砂
457	5Y5/1底 シルト 混中砂	489	5Y6/1底 ホワイト 植物遺体が混じる
458	2.5Y6/1底 黄褐色 植物混シルト 混中砂	490	5Y6/1底 黄褐色 植物遺体が混じる
459	2.5Y5/2底 黄褐色 植物混シルト 近世溝理土	491	5Y4/1底 シルト
460	埋土	492	7.5Y3/1オリーブ灰 シルト 植物遺体が混じる
461	10Y6/2底 黒褐色 粘質土 1963溝理土	493	5Y4/1底 シルト 5Y6/2底白 粘質土がブロックで混じる
462	2.5Y6/2底 黄褐色 中砂混粘質土 カー1cmの塊が混じる 1963溝理土	494	10Y4/1底 黄褐色 5Y7/2底 黄褐色粉砂がブロックで混じる
463	2.5Y4/1底 黄褐色 中砂混粘質土 カー1cmの塊が混じる 1963溝理土	495	2.5Y7/4浅黄 粗砂
464	10Y9/4/1底 中砂粘質土 1963溝理土	496	2.5Y6/3/1オリーブ灰 中砂 粘質土
465	2.5Y6/1底 黄褐色 中砂粘質土 カー1cmの塊が混じる 1963溝理土	497	2.5Y6/3/2灰 黄褐色 中砂
466	2.5Y3/1底 黑褐色 中砂粘質土 1963溝理土	498	5Y3/1オリーブ灰 粘質土
467	3Y3/1リーフ 黃褐色 粘質土 植物遺体が多量混じる 1963溝理土	499	5Y7/1底 白 粗砂
468	10Y5/1底 黄褐色 粘質土 植物遺体が多量混じる 1963溝理土	500	5Y6/1底 細砂混シルト
469	2.5Y6/1底 黄褐色 中砂粘質土 1963溝理土	501	5Y6/1底 黄褐色 植物遺体
470	2.5Y4/1底 黄褐色 中砂粘質シルト 1963溝理土	502	5B5/1青黄 シルト
471	10Y6/2底 黑褐色 粘質土	503	10Y3/1底 黑褐色 中砂混シルト
472	10Y9S/4/1底 黑褐色 粘質土	504	10Y5/1底 細砂混シルト 黄砂混粘質土
473	2.5Y6/1底 黄褐色 粘質土	505	2.5Y7/1底 黄褐色 粗砂混シルト
474	2.5G6/1底 黄褐色 粗砂	506	2.5Y7/1底 白 粗砂 植物混シルト
475	5Y6/2底 オリーブ灰 シルト	507	2.5G6/4/1底オリーブ灰 細砂混シルト
476	5Y6/2底 オリーブ灰 中砂		

図 502 3区 調査区断面面注記（3）

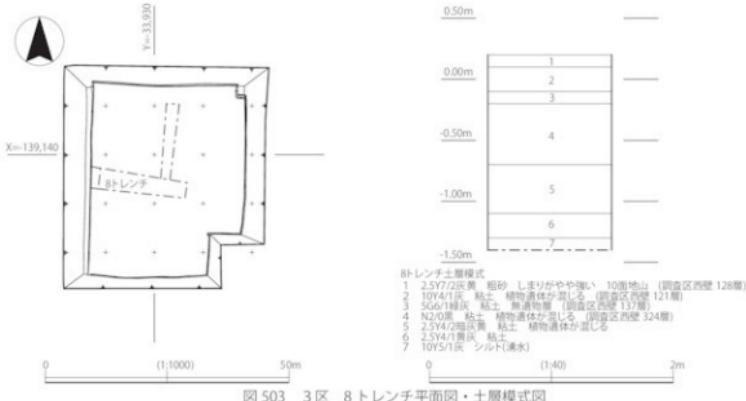


図 503 3区 8トレンチ平面図・土層模式図

第10遺構面までの調査終了後に調査区内にトレンチ（8トレンチ）を設定し、下層の確認を行った。その結果、第10遺構面より下層では湿原等により形成されたとみられる植物遺体を含む粘土層が主に堆積しており、弥生時代前期以前に積極的に土地利用された痕跡は確認されなかった（図503）。

### 1. 第1遺構面（図504、図版30）

第1遺構面は、基本層序における1-3面に対応する遺構面である。第1遺構面の調査で確認した遺構は、平安時代から江戸時代にかけてのもので、井戸4基、溝118本、土坑300基、柱穴28基を検出した（図504）。遺構面の標高は調査区内の北東隅T.P.+3.339m、北西隅T.P.+3.236m、南東隅T.P.+3.516m、南西隅T.P.+3.345mであった。調査区北半は耕作溝の検出が多く、南半は集落で土坑等がまとまって検出された。主な遺構の詳細は次のとおりである。

0001 井戸（図505、図版119） 最大径5.88m、深さ2.83m以上で円形を呈する。一辺2.96mで隅柱を持つ方形横柱縦柱井戸である。規模や立地から野井戸として機能した井戸とみる。調査区の北東端付近に位置する。遺物は江戸時代の犬形土製品（図505-1）、瓦を転用した硯（図505-2）などが棒内から出土した。

0026 井戸（図 505、図版 30・119） 最大径 1.03 m、深さ 0.76 m で円形を呈する。二段掘りを行って曲物を二段以上組み上げ設置した井戸であるが、残存していた二段の曲物のうち上部の一段は木質の残存は底部付近の一部のみであった。遺構南東部を他の土坑に切られている。調査区の東側やや南寄りに位置する。出土遺物として瓦器碗 2 点（図 505-3・4）等がある。3 は大和型で裏込め土からの出土である。4 は大和型で上段曲物の残存底部内側に張り付くように出土した（図 504:505-4）。出土遺物から 13 世紀前半の構築と見られる。

0372 井戸（図 505、図版 30・119） 最大径 1.78 m、深さ 2.16 m で円形を呈する。井戸内のほぼ中央付近で三段階にわたってそれぞれ竹紐が一周するのを確認しており、縦板を組み合わせ竹紐で三段以上結桶状に縛られていた円形縦板組の井戸構造であったものが、井戸廃絶時に縦板のみ抜き取られたものとみられる。調査区の南端に位置する。遺物は土器皿（図 505-5）等が出土した。14～15 世紀

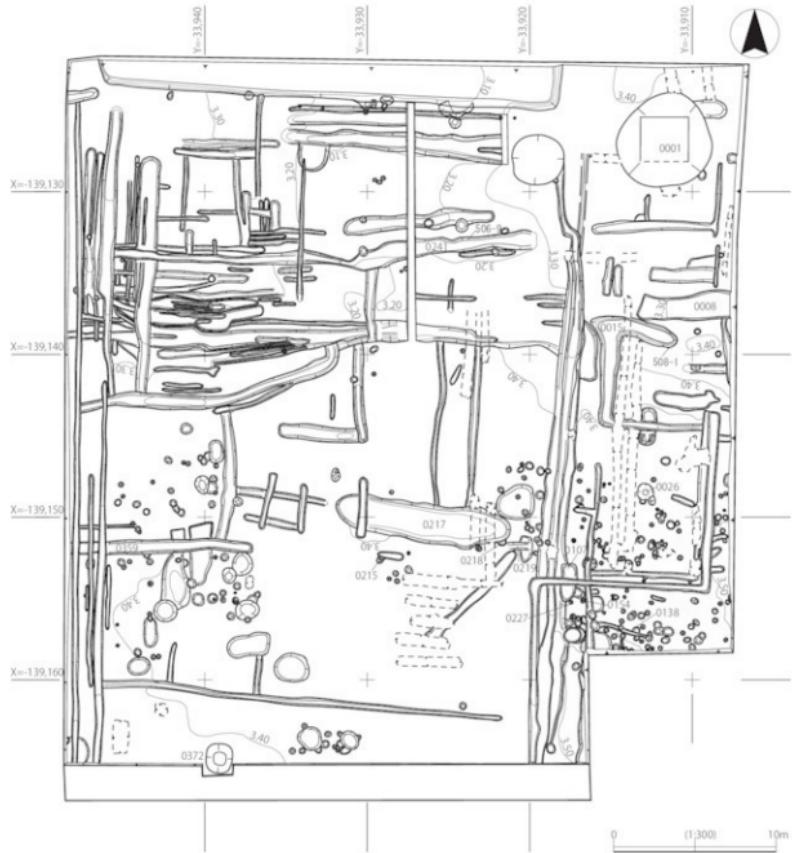


図 504 3 区 第1遺構面 平面図

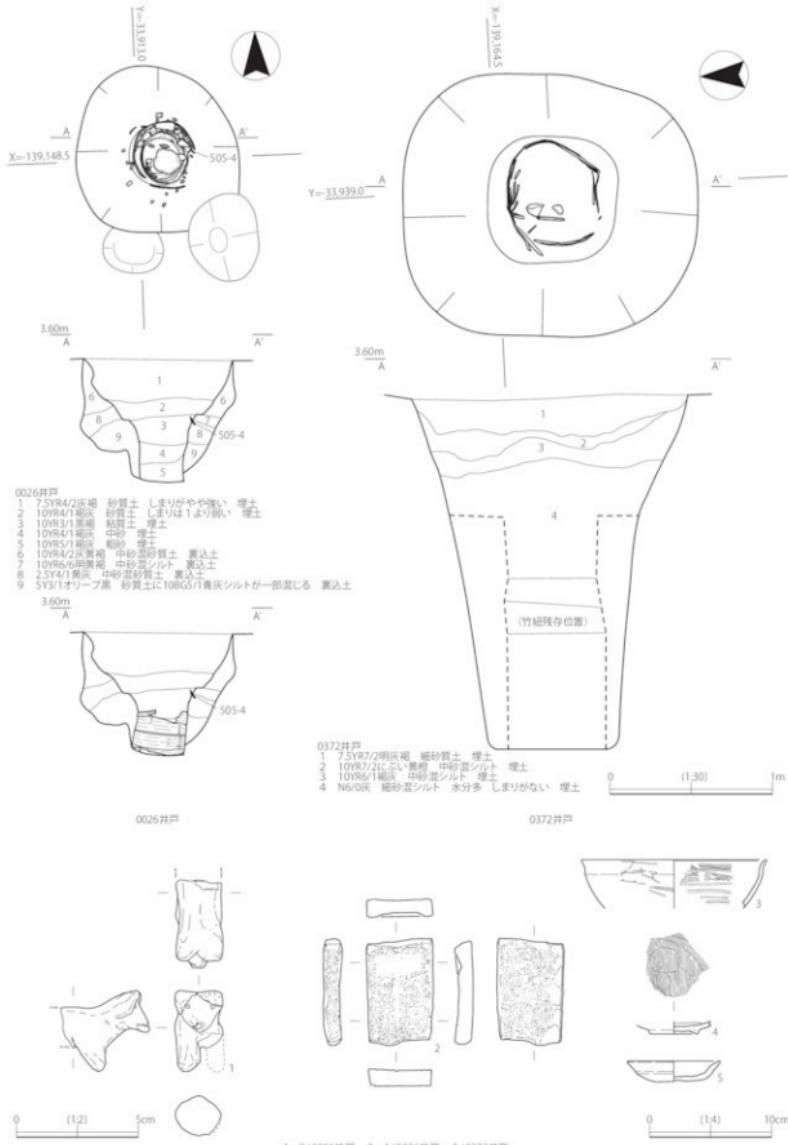


図 505 3区 第1遺構面 1・2・372井戸平・断面図・出土遺物

頃の遺構とみられる。

0008 溝（図 506、図版 119） 検出できた長さ 5.80 m、幅 1.32 m、深さ 0.15 m で断面 U 字形であり、東西方向のほぼ直線的な溝である。東端は調査区外へ延びている。調査区の東端に位置する。出土遺物は上師器皿（図 506-1）、黒色土器碗（図 506-2）等が出土した。1 は口縁部を内側に丸く收める。C タイプのものである。11 世紀のものと見られる。2 は黒色土器 A 類である。9 世紀のものと見られる。これらの図化遺物は混入品の可能性もあると見られる。

0015 溝（図 506、図版 119） 長さ 15.85 m、最大幅 1.20 m、深さ 0.26 m で断面 U 字形であり、平面逆コ字状を呈する溝である。遺構南東端を他の溝に切られている。調査区の中央東端に位置する。遺物は遺構北側の方向変換部付近で（図 506）須恵質土器（国産陶器）壺（図 506-3）、瓦質土器浅鉢（図 506-4）、国産陶器壺（図 506-5）等が出土した（図 506）。3 は内傾接合の痕跡が三段観察される。4 はいわゆる奈良火鉢である。5 は備前焼とみられる。14 世紀頃の遺構と見られる。

0219 溝（図 506、図版 119） 検出できた長さ 1.35 m、幅 0.46 m、深さ 0.11 m で断面 U 字形であり、東西方向に走る直線的な溝である。調査区の東南寄りに位置する。遺物は上師器皿（図 506-6）等

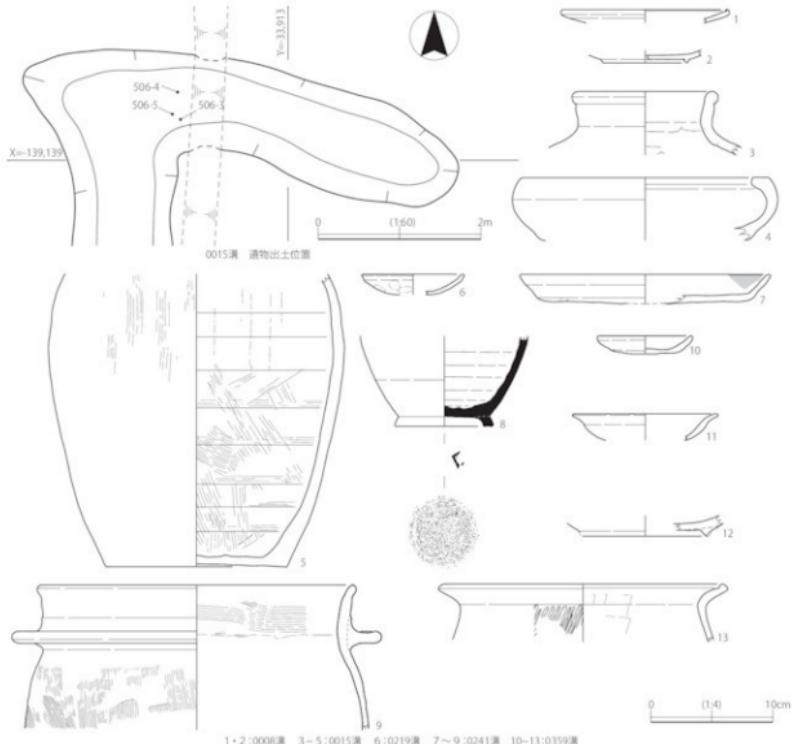


図 506 3 区 第 1 遺構面 8・15・219・241・359 溝平面図・出土土器

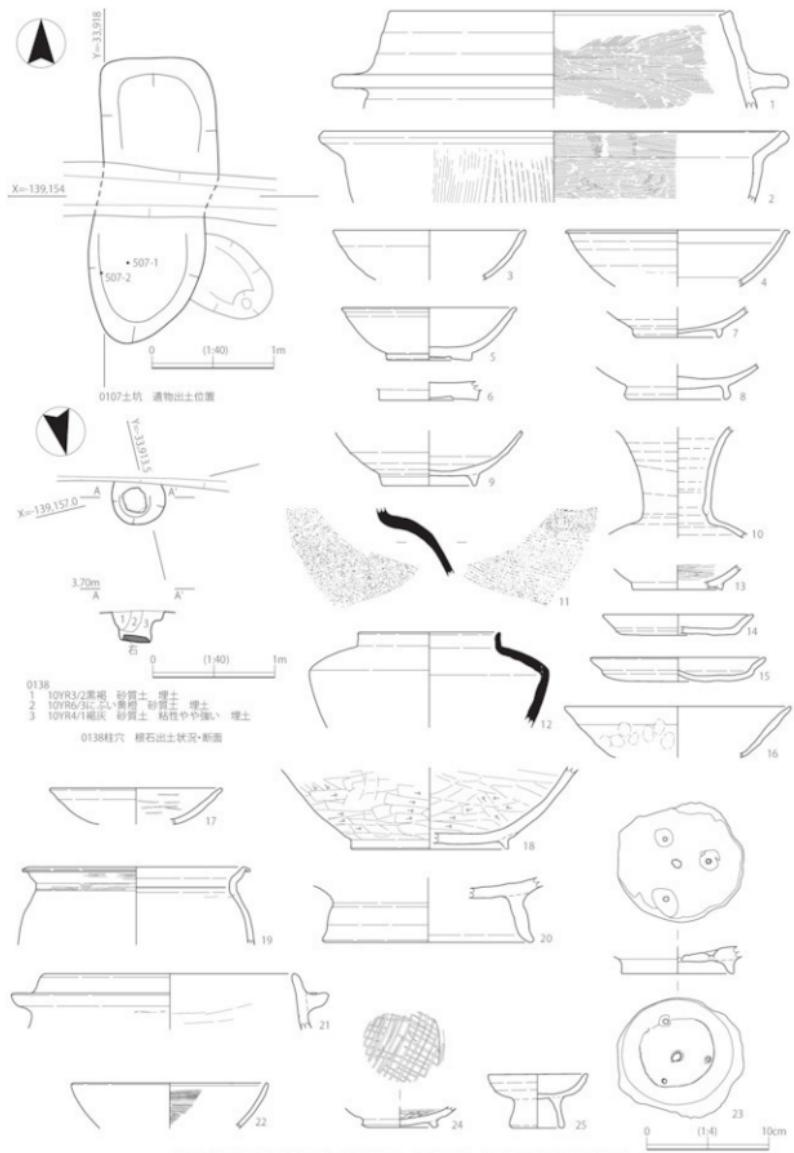


图 507 3区 第1遺構面 107・215・217・218・227土坑、138・154柱穴平・断面図・出土遺物

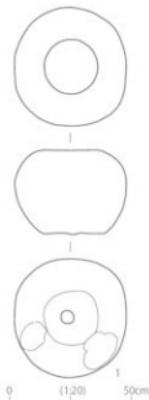


図 508 3区第1遺構面  
機械掘削出土遺物

が出土した。

0241溝(図506、図版119) 長さ25.91m、最大幅0.47m、深さ0.10mで断面U字状であり、東西方向に走る溝である。溝中央付近で若干蛇行する。遺構西端を他の溝に切られている。調査区北半部に位置する。遺物は土師器皿(図506-7)、縫窯系須恵器長頸壺(図506-8)、瓦質土器羽釜(図506-9)等が出土した。7は口縁部内外面に煤が付着し灯明皿と思われる。8世紀中頃~後半と見られる。8は底部に墨書きがなされており、高台接合前の糸切痕が見られる。8世紀末~9世紀前葉とみられる。9は遺構の北側肩部付近から出土した(図504:506-9)。2面に属する0242土坑を切る形で溝が掘られているため、出土遺物の中には0242土坑の時期に属する遺物も含まれているものとみられる。

0359溝(図506、図版119) 検出できた長さ11.20m、最大幅0.82m、深さ0.12mで断面U字状であり、東西方向に走る直線的な溝である。西端は調査区外へ延びる。調査区西侧に位置する。遺物は土師器皿(図506-10・11)、土師器甕(図506-13)、緑釉陶器碗(図506-12)等が出土した。

0107土坑(図507、図版119) 長径南北2.35m、短径東西0.94m、深さ0.08mの楕円形を呈する。遺構ほぼ中央部を後世の東西方向溝によって切られている。調査区の南東部に位置する。遺物は土師器皿(図506-10・11)、土師器甕(図506-13)、緑釉陶器碗(図506-12)等が出土した(図507)。

0215土坑(図507、図版119) 直径0.39m、深さ0.32mで円形を呈する。遺構北側を他の土坑に切られている。調査区の中央やや南寄りに位置する。遺物は土師器碗(図507-3)等が出土している。

0217土坑(図507、図版119・120) 長径東西10.84m、短径南北2.42m、深さ0.16mで楕円形を呈する。遺構西部を他の溝に、遺構東部を後世の搅乱に切られている。調査区の中央やや南寄りに位置する。遺物は白磁碗(図507-4)、緑釉陶器碗(図507-5・6)、灰釉陶器碗(図507-7~9)、灰釉陶器長頸壺(図507-10)、須恵器甕(図507-11)、須恵器短頸壺(図507-12)、黒色土器碗(図507-13)、土師器皿(図507-14・15)、土師器碗(図507-16~18)、土師器甕(図507-19)、土師器台付底部(図507-20)、瓦質土器羽釜(図507-21)等が出土した。13は黒色土器A類である。20は台付きの壺もしくは甕の底部である。本遺構は性格不明だが、平安期の遺物を多く包含する。

0218土坑(図507、図版119) 直径0.51m、深さ0.18mで円形を呈する。遺構北側を0217土坑に切られている。調査区の中央やや南東寄りに位置する。遺物は楕葉型の瓦器碗(図507-22)等が出土した。13世紀前半頃のものと見られる。

0227土坑(図507、図版119) 直径0.25m、深さ0.15mで円形を呈する。調査区の南東部に位置する。遺物は土師器台付碗(図507-23)、瓦器碗(図507-24)等が出土した。23は台付きの底部で、三カ所に焼成後の穿孔がある。24は大和型である。12世紀前半のものと見られる。

0138柱穴(図507、図版30) 直径0.58m、深さ0.22mで円形を呈する。柱穴底部に一辺0.21m、厚さ0.05mの根石を設置する(図507)。柱穴南側は隣接する溝によって切られている。調査区の南東部に位置する。

0154 柱穴（図 507、図版 120） 長径 0.29 m、短径 0.25 m、深さ 0.28 mで橢円形を呈する。調査区の南東部に位置する。遺物は上師器台付皿（図 507-25）等が出土した。

包含層出土遺物（図版 120） 機械掘削時に表土層から出土した遺物として、五輪塔水輪（図 508-1）がある。砂岩製で、調査区東端中央付近の地点（図 504：508-1）から出土した。

## 2. 第2遺構面（図 509・510、図版 30）

第2遺構面は、基本層序における2-1面に対応する遺構面である。第2遺構面の調査で確認した遺構は、平安時代から室町時代にかけてのもので、井戸4基、河川1本、溝44本、土坑946基、柱穴54基（うち復元できた掘立柱建物6棟、杭列2基）、落込7基、土器群1基を検出した（図 509）。遺構面の標高は調査区内の北東隅 T.P. + 3.292 m、北西隅 T.P. + 3.116 m、南東隅 T.P. + 3.280 m、南西隅 T.P. + 3.140 mであった。調査区北半南半ともに集落面で、南半におびただしい数の柱穴等が検出された。主

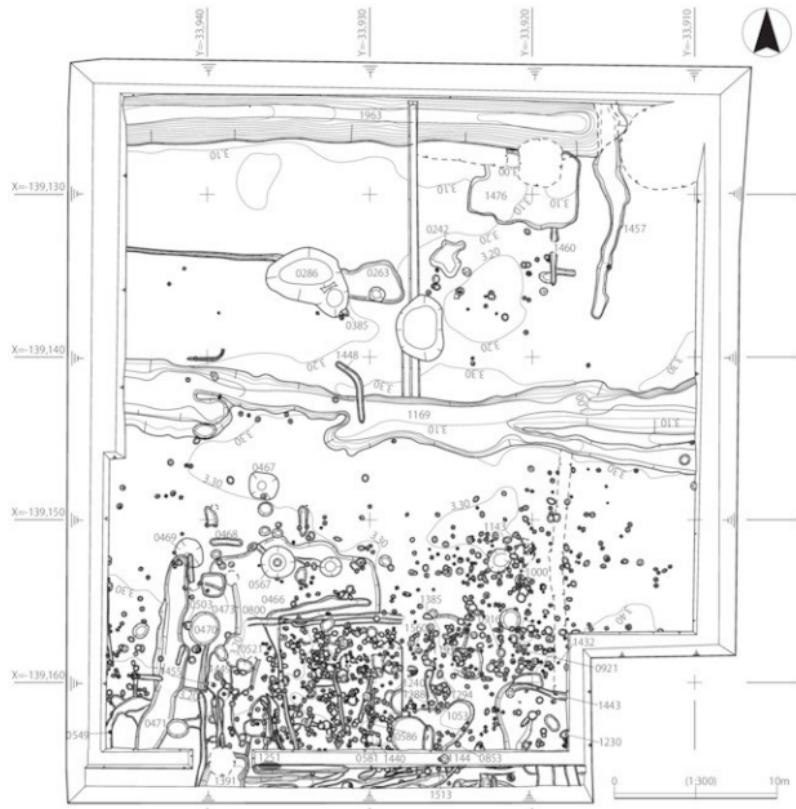


図 509 3 区 第2遺構面 平面図

な遺構の詳細は次のとおりである。

掘立柱建物 1 (図 510・511) 梁間 1 間、桁行 2 間の建物で、梁間 2.02 m、桁行 2.95 m である。柱間は桁行 1.31 ~ 1.73 m である。柱穴は 5 力所認められ、北東隅のものは検出できなかった。柱穴掘形は長径 0.26 ~ 0.44 m の不整円形もしくは梢円形で、柱穴底は T.P. + 2.986 ~ 3.199 m であった。調査区の中央やや南に位置する。

掘立柱建物 2 (図 510・511) 梁間 1 間、桁行 2 間の建物で、梁間 2.37 m、桁行 2.91 m である。柱間は桁行 1.26 ~ 1.68 m である。柱穴は 5 力所認められ、南東隅のものは検出できなかった。柱穴掘形は長径 0.40 ~ 0.52 m の不整円形もしくは梢円形で、柱穴底は T.P. + 2.901 ~ 3.161 m であった。調査区の中央やや南に位置する。後述する 1000 井戸を覆う井戸上屋とみられる。

掘立柱建物 3 (図 510・511) 梁間 1 間、桁行 2 間の建物で、梁間 1.90 m、桁行 2.20 m である。柱間は桁行 0.98 ~ 1.22 m である。柱穴は 5 力所認められ、東列中央のものは検出できなかった。柱穴掘形は長径 0.32 ~ 0.54 m の不整円形もしくは梢円形で、柱穴底は T.P. + 2.828 ~ 2.922 m であった。調査区の南側に位置する。

掘立柱建物 4 (図 510・512、図版 124) 梁間 1 間、桁行 1 間の建物で、梁間 2.05 m、桁行 2.24 m である。柱穴は 4 力所認められた。柱穴掘形は長径 0.37 ~ 0.46 m の不整円形で、柱穴底は T.P. + 2.872 ~ 2.999 m であった。調査区の南東部に位置する。南西隅柱の 0872 柱穴から玉縁口縁の白磁碗 (図 512-1) が出土した。

掘立柱建物 5 (図 510・512、図版 30) 梁間 1 間、桁行 3 間の建物で、梁間 2.12 m、桁行 3.99 m である。柱間は桁行 0.79 ~ 1.63 m である。柱穴は 7 力所認められ、南東隅のものは検出できなかった。柱穴



図 510 3 区 第 2 遺構面 掘立柱建物・杭列位置図

掘形は長径 0.23 ~ 0.49 m の不整円形もしくは椭円形で、柱穴底は T.P. + 2.856 ~ 3.067 m であった。調査区の南東部隅に位置する。

掘立柱建物 6（図 510・513、図版 30） 梁間 1 間、桁行 3 間の建物で、梁間 1.99 m、桁行 3.46 m である。柱間は桁行 0.90 ~ 1.43 m である。柱穴は 8 カ所認められた。柱穴掘形は長径 0.21 ~ 0.29 m の不整円形もしくは椭円形で、柱穴底は T.P. + 2.934 ~ 3.194 m であった。調査区の南東部隅に位置する。

杭列1(図510・513) 長さ4.69 mで、柱穴4基からなる東西方向の杭列である。柱穴間隔は1.54～2.63 mで、柱穴掘形は長径0.26～0.38 mの不整円形もしくは楕円形で、柱穴底はT.P.+3.146～3.198 mであった。調査区の東側に位置する。

杭列2(図510・513) 長さ9.70 mで、柱穴5基からなる東西方向の杭列である。柱穴間隔は1.89～2.79 mで、柱穴掘形は長径0.25～0.40 mの不整円形もしくは梢円形で、柱穴底はT.P.+3.075～3.171 mであった。調査区の中央やや南に位置する。

0467 井戸（図 514・515、図版 31・120） 挖形の最大径 1.80 m、深さ 1.02 m で不整円形を呈する。南側のみ 2 段掘りをおこなっており、こちらから井戸材を設置したとみられる。底部に集水施設として曲物枠（図 515-17）を設置し、その上部は建築部材を再利用したと思われる内法一辺 0.62～0.47 m のいびつな方形板枠構造の井戸である。上部構造の南辺・西辺は加工痕のある横板材（図 515-18）

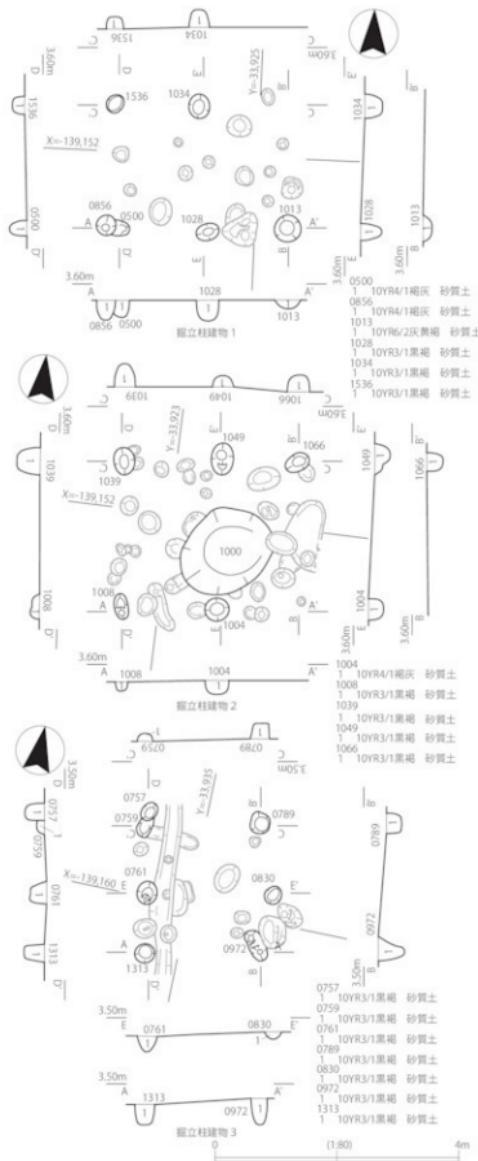
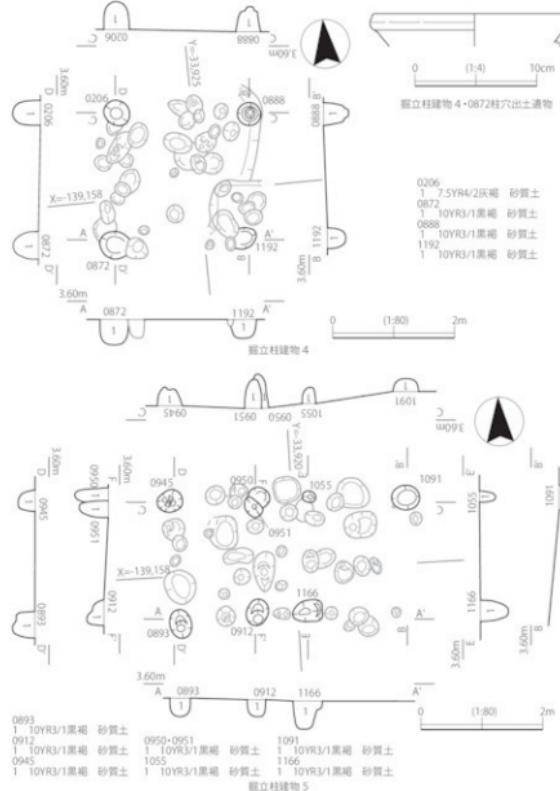


図 511 3区 第2遺構面 掘立柱建物 1～3平・断面図

15・16) を用いる。東辺はやや曲線を描く一枚の縦板材を用い、その外側に細い縦板材を支えとして挿入する。北辺は細長い縦板材を4枚程度組み合わせて枠とする。北辺は土圧で中央が内側にやや膨らんだ状況で検出した。調査区の中央西寄りに位置する。遺物は土師器皿(図515-1・2)、土師器大皿(図515-3・4)、白磁碗(図515-5)、黒色土器环(図515-6)、瓦器皿(図515-7)、瓦器碗(図515-8~10)、瓦質土器羽釜(図515-11)、土師器甕(図515-12)、須恵質土器練鉢(図515-13)、平瓦(図515-14)等が出土した。また、井戸枠材のうち南辺横板材(図515-15)、西辺横板材(図515-16)、集水施設曲物(図515-17)を図化した。5は白磁II類とみられる。6は黒色土器A類で、畿内系IVとみられる。8は底部外面にヘラ書き記号がある。9は大和型である。10は大和型で、井戸枠北辺外側の埋め戻し土から2片に割れて出土した(図514:515-10)。15・16はいずれも表裏とも手斧削り痕が明瞭に観察され、各短辺には井戸構造とは無関係の段加工があり、井戸枠に再利用された建築部材とみる。17は内側に縦方向の細かい切れ込みを入れ、材を曲げている。出土遺物から12世紀後半に廃絶された遺構と見られる。

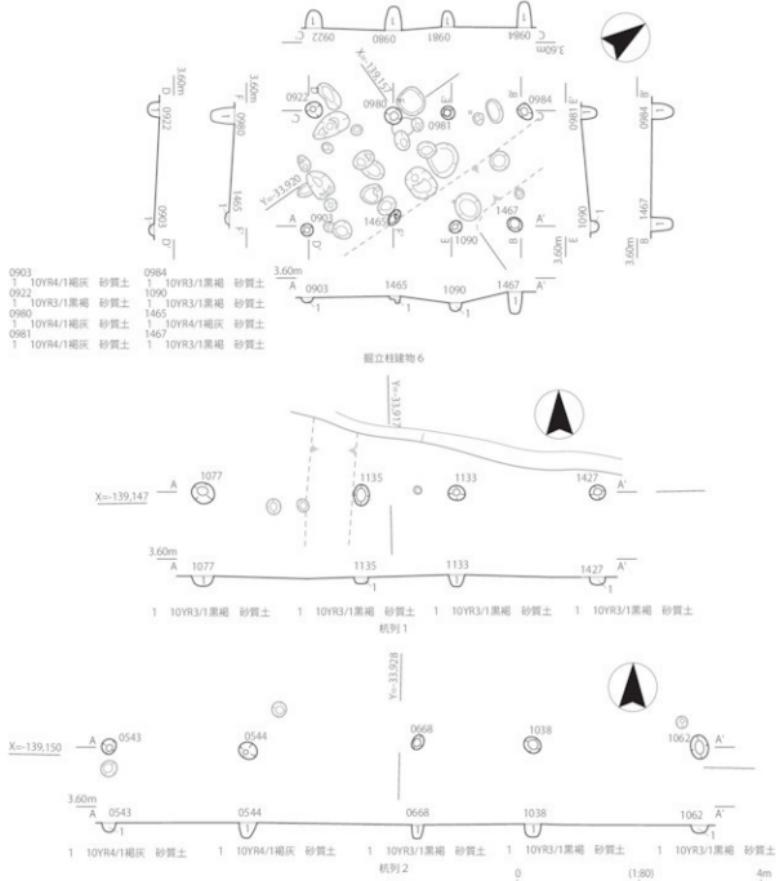


0469 井戸(図514・515、図版31・120・121) 挖形の最大径1.92m、深さ1.15mで不整円形を呈する。2段掘りを行い、残存2段の曲物を積み上げた構造で、井戸内法は上部で径0.34m、下部で径0.24mである。遺構南西部を0471溝等に切られている。調査区中央南寄り西端付近に位置する。遺物は土師器皿(図515-18・19)、瓦器碗(図515-20・21)、漆器碗(図515-22)、等のほか、木質編物残欠(図515-24)が出土した。井戸枠材のうち下段の曲物枠(図515-23)を図化した。18は井戸枠内9層出土(図514:515-18)、19は最下層の10層出土である(図514:515-19)。20は大和型である。21は大和型で、井戸枠内7層で22

図512 3区 第2遺構面 掘立柱建物4・5平・断面図・出土遺物

の漆器碗より下部から出土した（図 514：515－21）。22 は内外面とも黒漆塗りで、外面はその上に赤漆で文様が施されており、7 層出土である（図 514：515－22）。24 も 7 層出土である（図 514：515－24）。23 は木皮での接合部を除く内面に縱方向と斜方向の細かい切れ込みを入れ、材を曲げている。出土遺物から 13 世紀前半頃に廃絶されたものと見られる。

0567 井戸（図 516・517、図版 31・120・121）掘形の最大径 2.11 m、深さ 1.57 m で円形を呈する。曲物を残存 5 段積み上げた構造で、井戸内法は径 0.41 m である。調査区中央南西寄りに位置する。遺物は土師器皿（図 517－1・2）、大和型瓦器碗（図 517－3）、須恵器壺（図 517－4）、東播系須恵器練鉢（図 517－5）、滑石製石鍋底部（図 517－6）、木製曲物底部（図 517－8・9）等が出土



した。井戸枠材のうち下から3段目の曲物（図517-7）を図化した。7は木皮での接合部を除く内面に縦方向と斜方向の細かい切れ込みを入れ、材を曲げている。上部の曲物との間に支えとして挿入されていた半円形の板材が底部内側に接合したため、曲物桶の再利用品である。曲物下部には穿孔があり、底部に残存した木釘箇所と位置が一致した。8は井戸枠内の上層部出土（図516：517-8）、9は井

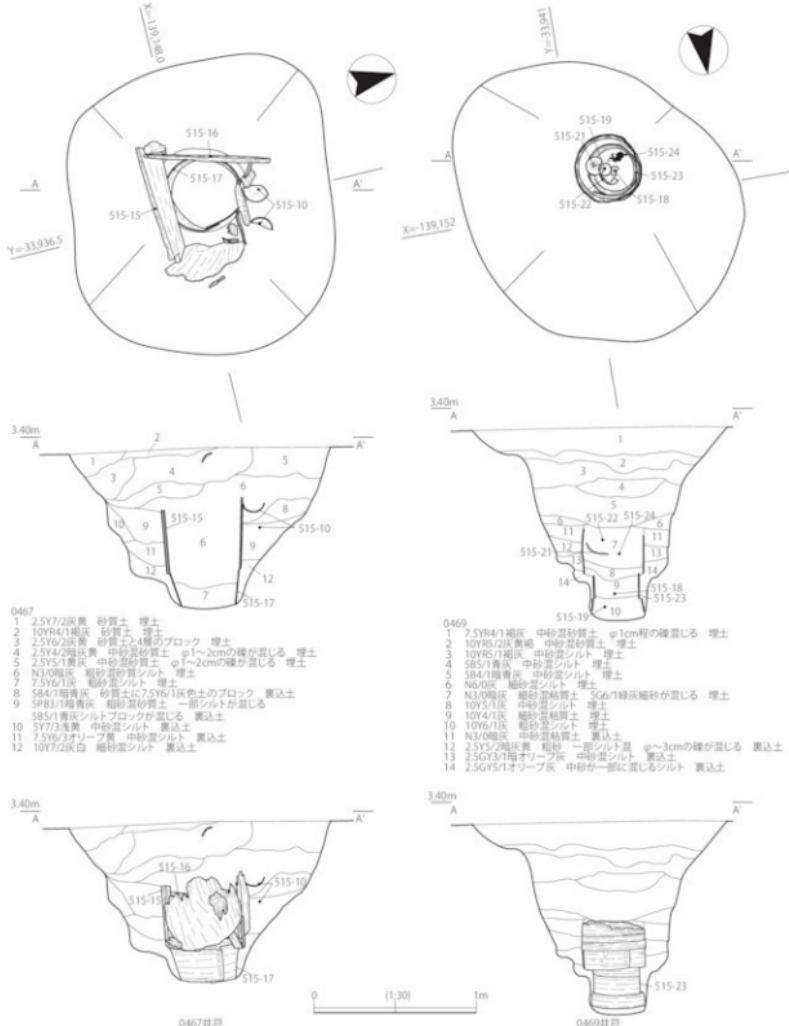


図514 3区 第2遺構面 467・469 井戸平・断面図

戸枠内の下層部出土である(図516:517-9)。出土遺物から13世紀中頃の廃絶と見られる。

1000井戸(図516・517、図版32・121) 挖形の最大径1.61m、深さ0.81mで不整円形を呈する。

井戸は2段に掘られていて、下段は集水施設とみられる。調査時点では素掘様の井戸となっていて、井戸枠の痕跡等は検出されなかった。堆積状況をみても井戸枠が設置されていたものを再掘削した痕跡は

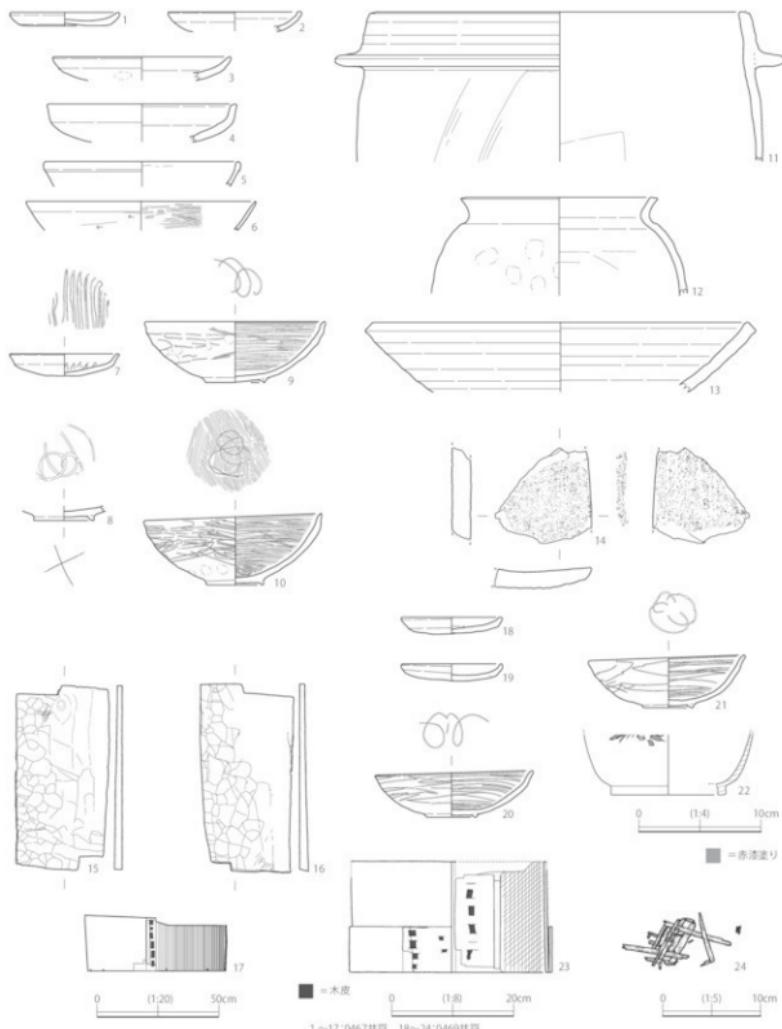


図515 3区 第2遺構面 467・469井戸 出土遺物

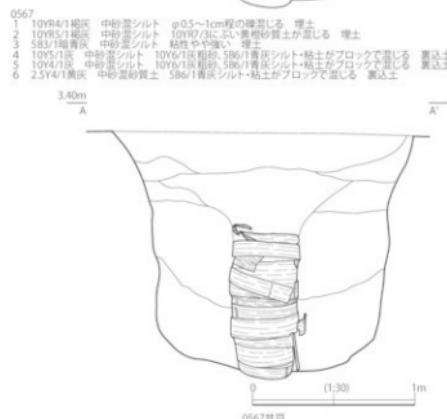
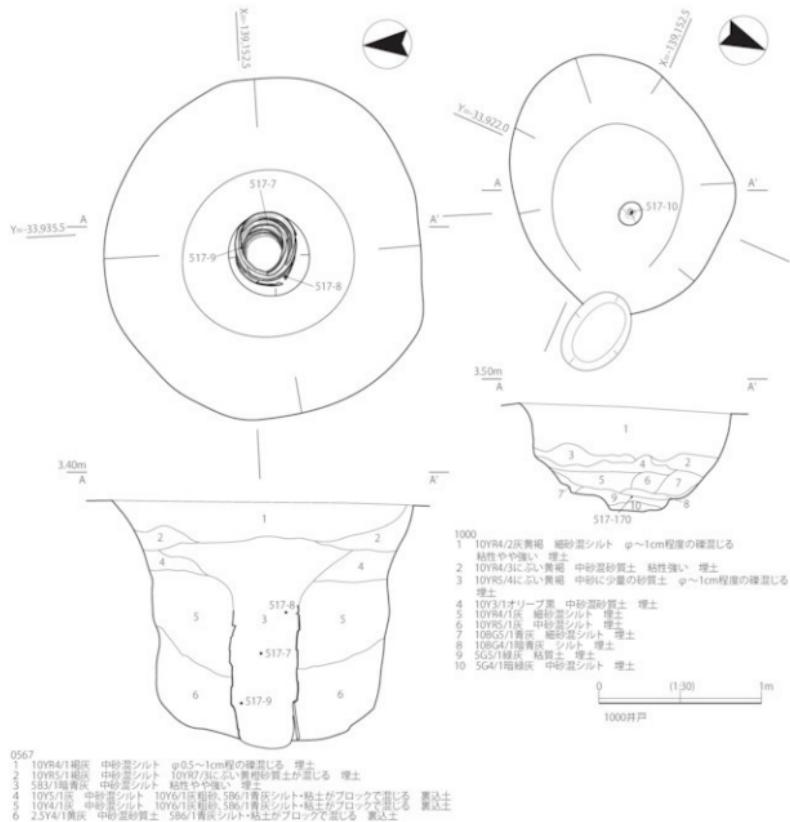


図 516 3区 第2遺構面 567・1000 井戸平・断面図

見られないため、素掘井戸である可能性が高いが、井戸枠再利用のため井戸を完全に再掘削した可能性は残る。遺構東端を他の土坑に切られている。調査区の中央やや南に位置する。先述の掘立柱建物2が、この井戸を覆う井戸上屋とみられる。遺物は井戸中央底部付近から(図516:517-10)完形の瓦器碗が出土した(図517-10)。10は大和型のものである。13世紀中頃のものとみられ、井戸廃絶時に遺棄されたとみられる。

1144井戸(図518、図版32・121) 検出できた最大径0.57m、残存深さ0.58mで円形を呈する。調査区側溝削中に検出したため、掘形の上部は検出できていない。下部に径0.32m~0.27m、高さ0.13m~0.08mの曲物を3段重ね、その上部に底を打ち欠き上下逆さに向けた瓦質羽釜(図518-2)を

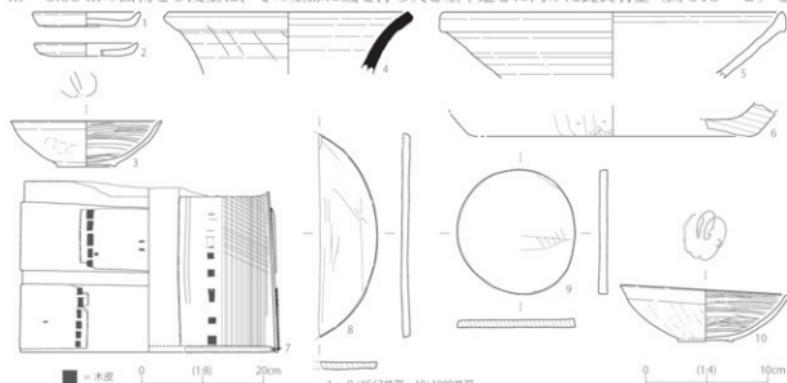


図517 3区 第2遺構面 567・1000井戸 出土遺物

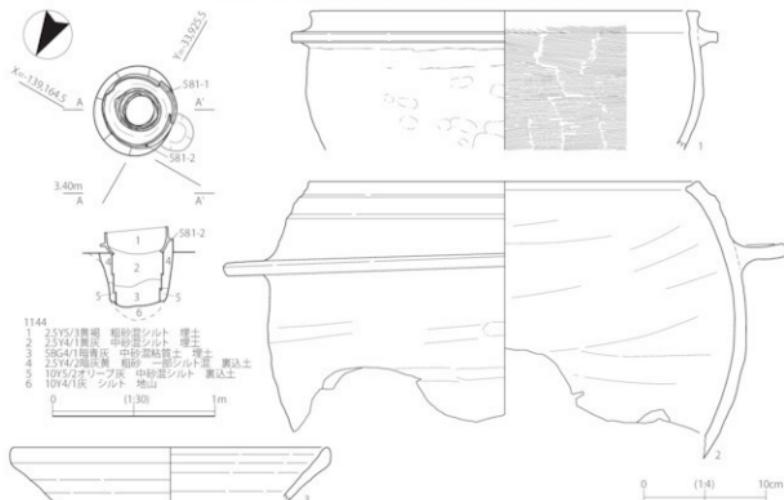
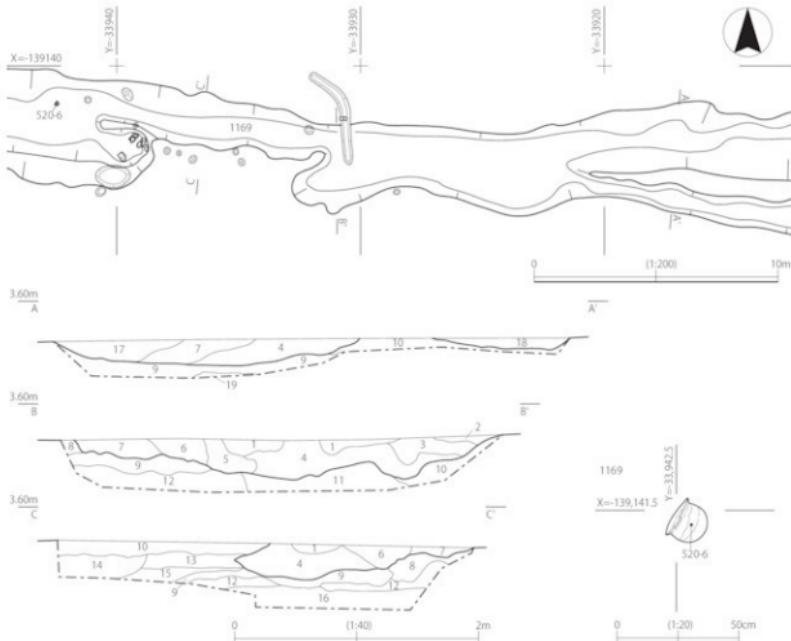


図518 3区 第2遺構面 1144井戸平・断面図・出土遺物

重ねた構造である。調査区南端に位置する。遺物は井戸枠として瓦質土器羽釜（図 518-1・2）が、井戸内から須恵質土器練鉢（図 518-3）等が出土した。1は、2の欠損部を覆う形で口縁部を上に向けて2に添えられて出土した。2は上下逆さに向け井戸枠として設置されていて、銚が口縁部と比較して斜めに取り付けられている。14世紀に構築された井戸とみられる。

1169 河川（図 519・520、図版 32・121） 検出できた長さ 35.32 m、最大幅 4.89 m、深さ 0.36 m であり、調査区のほぼ中央を東から西へ流れ河川である。調査区内では、上流側では流路が二つに分かれている。下流側には一部に河岸の張り出し部が存在し、その西側には人頭大以上の大きさの礫がいくつか検出された。この河川の南岸に存在する集落への船着き場状に機能したものとみる。北岸中央部を 1448 溝に切られている。遺物は須恵器壺口縁（図 520-1）、灰釉陶器皿（図 520-2）、緑釉陶器碗（図 520-3）、黒色土器碗（図 520-4・5）、土師器甕（図 520-6～8）、平瓦（図 520-9）、軒平瓦（図 520-10）等が出土した。4・5は黒色土器 A 類である。6は河川内の下流側で川床付近



- |   |   |
|---|---|
| 109Y8/1堀底 極細砂 1169堆積土                               | 12 7.5Y7/1灰白 一部粗砂層 一部5BG6/1青灰粘質土が混じる 地山   |
| 2 10Y9/1堀底 シルト                                      | 13 2.5Y5/3黄褐 シルト ややしまる 所々2.5Y4/1黄灰        |
| 3 10Y9/3にらい 黄橙 一部に中の砂が混じるシルト                        | 14 2.5Y5/2暗灰黄 粗砂 φ～3cmの礫が混じる 地山           |
| 4 2.5Y7/2灰 黃 中間に少量のシルトが混じる                          | 15 2.5Y6/1黄灰 シルト 一部細砂混入 地山                |
| φ～3cmの礫が多量に混じる 1169堆積土                              | 16 2.5Y6/2灰黄 粗砂混入シルト φ～4cm程の礫が非常に多く混じる 地山 |
| 5 2.5Y6/1堀底 極細砂シルト                                  | 17 2.5Y6/6明黄褐 粗砂 φ～3cmの礫が多く混じる 1169堆積土    |
| 6 2.5Y6/2堀底 黄 粗砂 ややしまる 1169堆積土                      | 18 10Y9/5/1堀底 粗砂 φ～2cmの礫が混じる 1層に似る        |
| 7 2.5Y7/2灰 黃 粗砂シルト しまりがない 1169堆積土                   | 19 10BG4/1堀青灰 シルト質土 一部粗砂混入 地山             |
| 8 5Y5/2灰オーブ シルト 一部でN2/0葉シルトが層中に混じる しまりは葉よりやや強い 地山   |   |
| 9 2.5Y6/3/1灰 黄 粗砂 φ～3cmの礫が多量に混じる N2/0葉シルトが層中に混じる 地山 |   |
| 10 2.5Y5/2堀底 黄 シルト しまりは8層と同程度 地山                    |   |
| 11 2.5Y6/2灰 黃 中間にシルトが混じる 地山                         |   |

図 519 3 区 第2遺構面 1169 河川平・断面図

から横転した状態で出土した（図 519：520-6）。10は唐草文軒平瓦である。8世紀から9世紀にかけての遺物を多く含む。

0468溝（図 521、図版 121）長さ 2.01 m、幅 0.42 m、深さ 0.08 mで断面U字状であり、東西方向に走る直線的な溝である。調査区の南西寄りに位置する。遺物は土師器甕（図 521-1）等が出土した。

0471溝（図 521、図版 121）検出できた長さ 12.06 m、幅 2.08 m、深さ 0.22 mで断面U字状であり、南北方向に走る直線的な溝である。溝の南端は調査区外に延びている。遺構両岸を他の土坑や溝に切らされている。調査区の南西端に位置する。遺物は青磁碗（図 521-2）等が出土した。

0800溝（図 521、図版 121）長さ 9.48 m、幅 0.38 m、深さ 0.06 mで断面U字状であり、東西方向に走る直線的な溝である。調査区の中央南寄りに位置する。この溝より南側では地山面がやや高まって

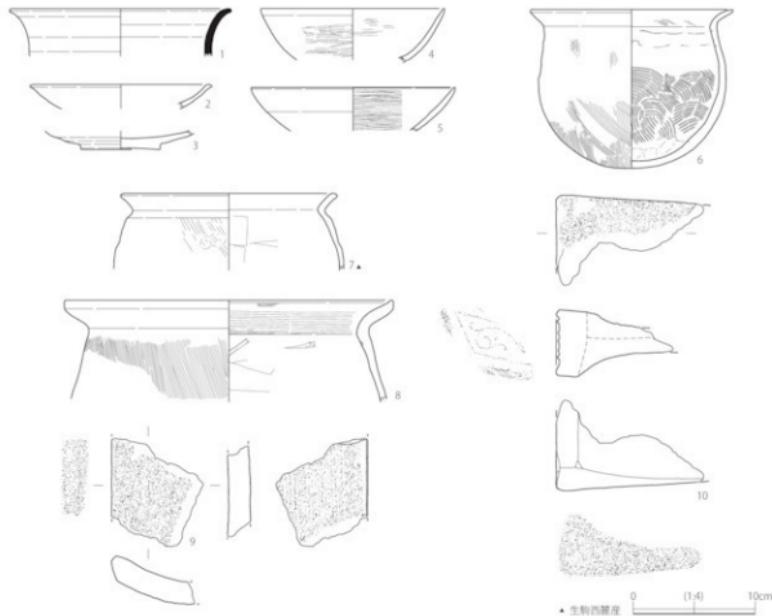


図 520 3区 第2遺構面 1169河川 出土遺物

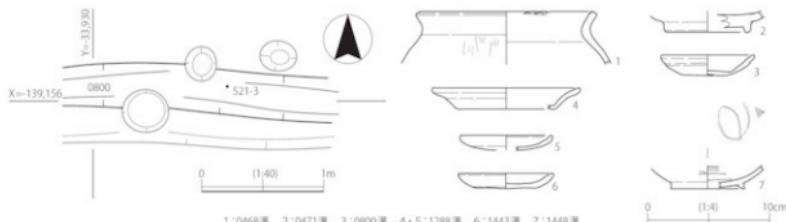


図 521 3区 第2遺構面 468・471・800・1288・1443・1448溝平面図・出土遺物

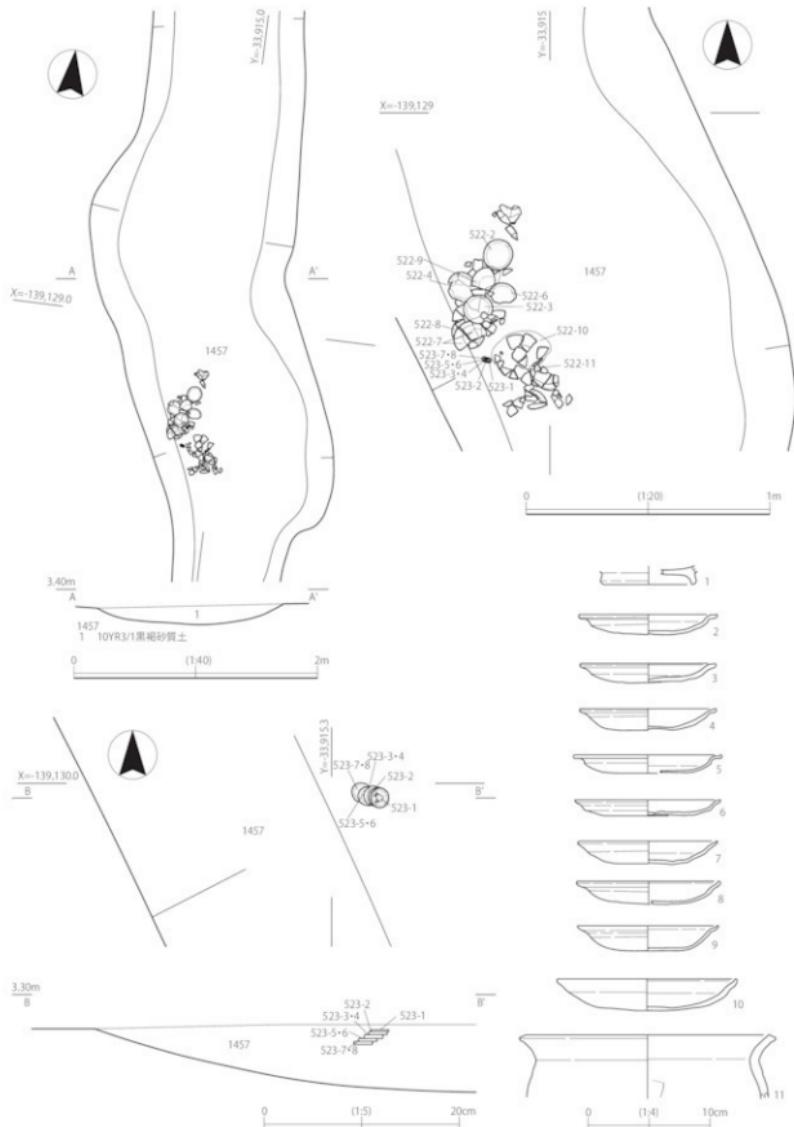


図 522 3区 第2遺構面 1457溝平・断面図・出土遺物

おり、その部分に柱穴・土坑が密集していて、集落内の区画溝の可能性がある。遺物は土師器皿（図 521-3）等が出土した。3は遺構東端付近から出土した（図 521:521-3）。

1288 溝（図 521、図版 121） 残存長 2.79 m、幅 0.60 m、深さ 0.06 mで断面U字状であり、南北方向に走る直線的な溝である。遺構南端は 1053 落ち込みに切られている。調査区の南寄りに位置する。遺物は土師器皿（図 521-4・5）等が出土した。

1443 溝（図 521、図版 121） 長さ 3.55 m、幅 0.45 m、深さ 0.10 mで断面U字状であり、東西方向でややS字状に蛇行して走る溝である。溝東端は調査区外に延びていて、西端は他の土坑に切られている。調査区の南東端に位置する。遺物は土師器皿（図 521-6）等が出土した。

1448 溝（図 521、図版 121） 長さ 4.33 m、幅 0.43 m、深さ 0.16 mで断面U字状であり、南北方向で南から西へと蛇行して走る溝である。調査区の中央付近に位置する。遺物は瓦器碗（図 521-7）等が出土した。12世紀後半から13世紀初頭頃のものとみられる。

1457 溝（図 522・523、図版 32・121・122） 検出時の長さ 13.12 m、幅 1.70 m、深さ 0.15 mで断面U字状であり、南北方向にやや蛇行して走る溝である。溝北端は 1963 溝によって切られていたと思われる。調査区の北東端に位置する。溝の南北方向ほぼ中央付近で、土師器皿を主体とする土器群と重なった状態の銅錢 8 点を一括で検出した。図化遺物はいずれもこの土器群からのもので（図 522:522-2～4・6～11、523-1～8）、灰釉陶器碗（図 522-1）、土師器皿（図 522-2～10）、土師器甕（図 522-11）、銅錢（図 523-1～8）等が出土した。土師器皿のうち 2～6、8、9 は「て」

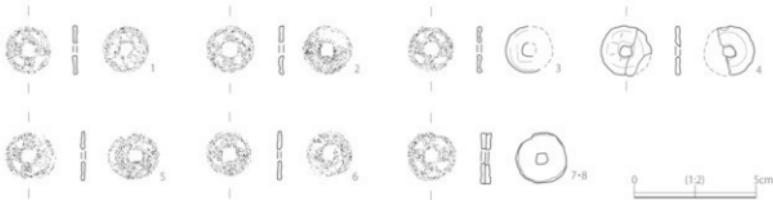


図 523 3 区 第2遺構面 1457 溝 出土遺物（銅錢）

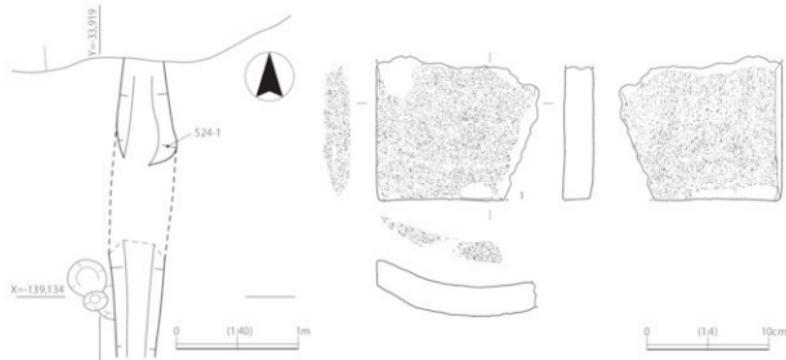


図 524 3 区 第2遺構面 1460 溝平面図・出土遺物

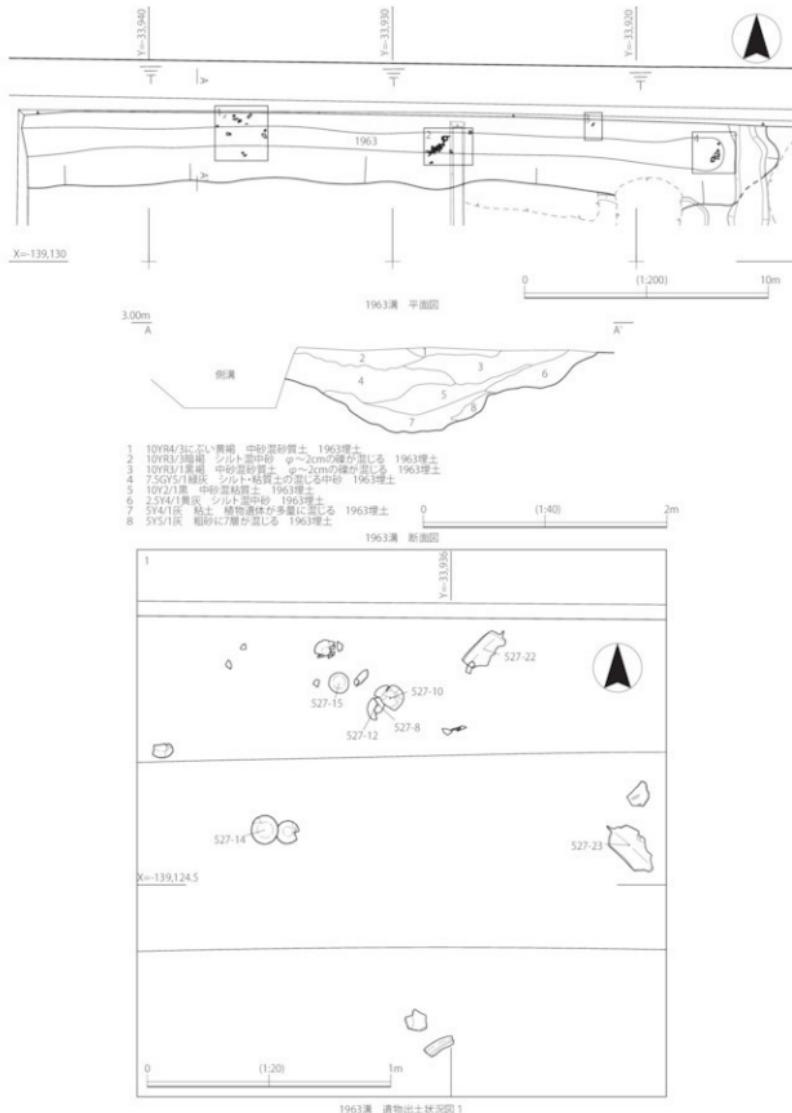


図 525 3区 第2遺構面 1963溝平・断面図・出土状況図

字状口縁を持つものに属する。銅錢はいずれも銅質は悪く色調白緑色に近いもので、1～3、5～7は銭文が延喜通宝と判読でき、4・8も銅質や銭径が同様であることから、8点とも皇朝十二銭の一つで907年初鑄の延喜通宝である可能性が高い。上から1、2、4、3、6、5、8、7の順で重なって出土し、1・2・4・6は表面を上に、3・5・7・8は背面を上に向け出土した。3と4、5と6、7と8は銹着状態で出土し、このうち3・4の一帯と5・6は整理時にそれを外したが、7・8は銹着の度合いが著しく外せていない。出土状況から、銭差に差した状態で土器群とともに溝に遺棄されたと思われる。この一括遺物群は溝における祭祀状況を示すとみられる。おおよそ平安京Ⅲ期に属す10世紀の一群とみられ、これらの土器と延喜通宝が共伴した点で重要である。

1460溝（図524、図版122） 検出できた長さ3.56m、幅0.50m、深さ0.11mで断面U字状であり、南北方向に走る直線的な溝である。溝北端を1476土坑に、溝中央を上層の搅乱に切られている。調査区の北東寄りに位置する。遺物は平瓦（図524-1）等が出土した。1は搅乱によって切られた箇所

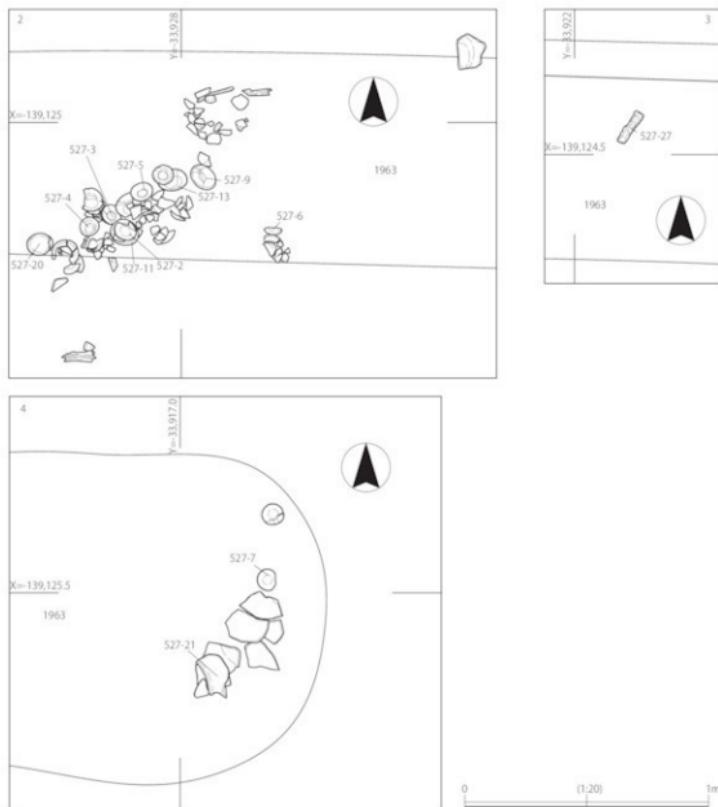


図526 3区 第2遺構面 1963溝出土状況図

の北側から出土した。

1963溝(図525～257、図版32・33・122) 検出できた長さ31.13m、検出幅3.39m、検出できた深さ0.80mで断面U字状であり、東西方向に走る直線的な溝である。溝西端は調査区外に延びている。溝北岸は調査区外のため検出できていない。調査区の北端に位置する。溝内で3ヶ所の土器群を検出した。図化した出土遺物は土師器皿(図527-1～15)、青磁碗(図527-16)、白磁碗(図527-17)、縁釉陶器碗(図527-18)、瓦器碗(図527-19・20)、瓦質土器羽釜(図527-21～24)、瓦質土器鉢(図527-25)、瓦質土器擂鉢(図527-26)、鉄斧(図527-27)である。このうち8・10・12・14・22・23は最も西側の土器群から(図525-1)、2～6・9・11・13・20・24は中央の土器群から(図525・526-2)、7・21は最も東側の土器群から出土した。16は龍泉窯系の青磁で

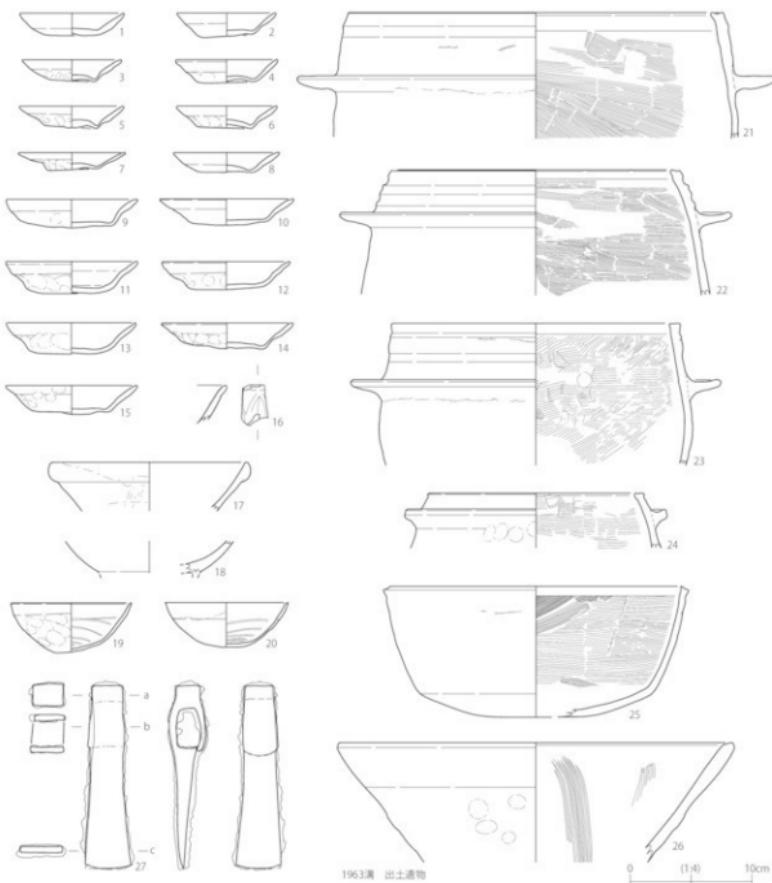


図527 3区 第2遺構面 1963溝 出土遺物

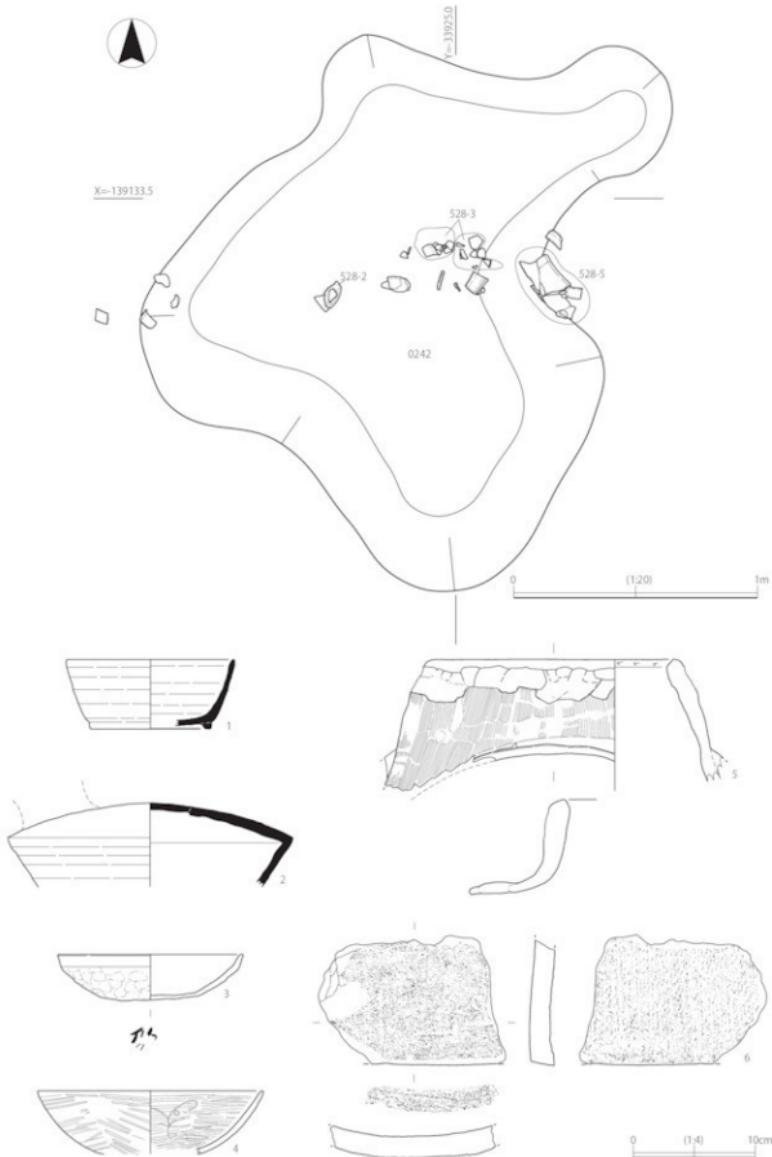


図528 3区 第2遺構面 242土坑平面図・出土遺物

ある。19・20は大和型である。27は縦斧で、遺構東寄りから出土した（図526：527－27）。遺物は14世紀から15世紀にかけての時期にまとまりをもつ。

0242 土坑（図528、図版33・122）長軸1.80m、短軸1.09m、深さ0.12mの不整形な土坑である。遺構北側の上層を第1遺構面の0241溝に切られている。調査区の北東寄りに位置する。遺構中央部分を中心で遺物がまとまって出土した（図528）。遺物は須恵器环身（図528－1）、須恵器平瓶（図528－2）、土師器碗（図528－3）、黒色土器碗（図528－4）、土師器移動式竈（図528－5）、平瓦（図528－6）等が出土した。1は貼付高台である。3は外面底部に墨書がある。墨書は人偏をもつが傍が明瞭でなく判読できない。旁の上部はウ冠のようにも観察できる。4は黒色土器A類である。遺物は9世紀から10世紀頃にまとまりをもつ。

0263 土坑（図529、図版33・123）長軸3.49m以上、短軸3.31m、深さ0.19mでややいびつな楕円形を呈する。遺構西端を0286土坑に切られている。調査区の北寄りに位置する。遺物は土師器蓋（図529－1）等が出土した。

0286 土坑（図530・531、図版33・123）長軸4.83m、短軸3.34m、深さ0.83mでいびつな楕円形を呈する。調査区の北寄りに位置する。遺物は土師器皿（図531－1～5）、土師器台付皿（図531－6）、白磁碗（図531－7）、緑釉陶器碗（図531－8～10）、灰釉陶器皿（図531－11）、黒色土器碗（図531－12）、瓦器皿（図531－13～16）、瓦器碗（図531－17～21）、瓦質土器竈（図531－22）、平瓦（図531－23）等が出土したほか、多くの加工木材や樹皮も検出した（図530）。遺物は断面図9層からの出土が最も多かった。3は遺構東端から出土し、粘土接合痕跡が見られる。5は遺構西側からの出土である。6は粘土接合痕跡が見られ、貼付高台で、高台の位置は中心からずれており、口縁部に煤が付着し、灯明皿とみられる。7は削り出し高台である。12は黒色土器A類である。17は小型で器壁が厚い。18は大和型で遺構内の別の位置で出土したものが接合した。19は大和型で18のうち一つの破片と近接して出土した。20は楢葉型、21は大和型である。22は遺構中央から出土したもので竈の焚口である。12世紀後半の遺構とみられる。

0385 土坑（図529、図版33・123）長軸0.48m以上、短軸0.39m、深さ0.26mで楕円形を呈する。遺構北西部を0286土坑に切られている。調査区の北寄りに位置する。遺物は瓦器碗（図529－2）等が出土した。2は大和型で、遺構中央から出土した。12世紀後半のものである。

0470 土坑（図529、図版123）最大径2.05m、深さ0.11mで円形を呈する。調査区南西寄りに位置する。遺物は大和型の瓦器碗（図529－3）等が出土した。13世紀中頃のものとみられる。

0473 土坑（図529、図版123）長軸1.72m、短軸1.71m、深さ0.29mの隅丸方形を呈する。遺構西側の一部を他の土坑に切られている。調査区南西寄りに位置する。遺物は遺構北端からの大和型瓦器碗（図529－4）等が出土した。13世紀後半のものとみられる。

0503 土坑（図529、図版33・123）直径0.52m、深さ0.20mで円形を呈する。遺構西端が一段低くなっている。遺構東側を0470土坑に切られている。調査区南西寄りに位置する。遺物は銅銭4枚（図529－6～9）が重なった状態で出土した。上から8、6、9、7の順で重なって出土した。6は表面を上にして出土し、開元通宝（621年初鑄）である。背面は無文である。7は背面を上にして出土し、下半が欠損し1字不明だが、残存した3字から景祐元宝（1034年初鑄）である。字体は篆書である。8は背面を上にして出土し、祥符元宝（1008年初鑄）である。銹着した土とともに銭差とみられる有機質が遺存している。9は銭種不明である。銹着した土には図の表側に6の銭文が反転複写され、背に

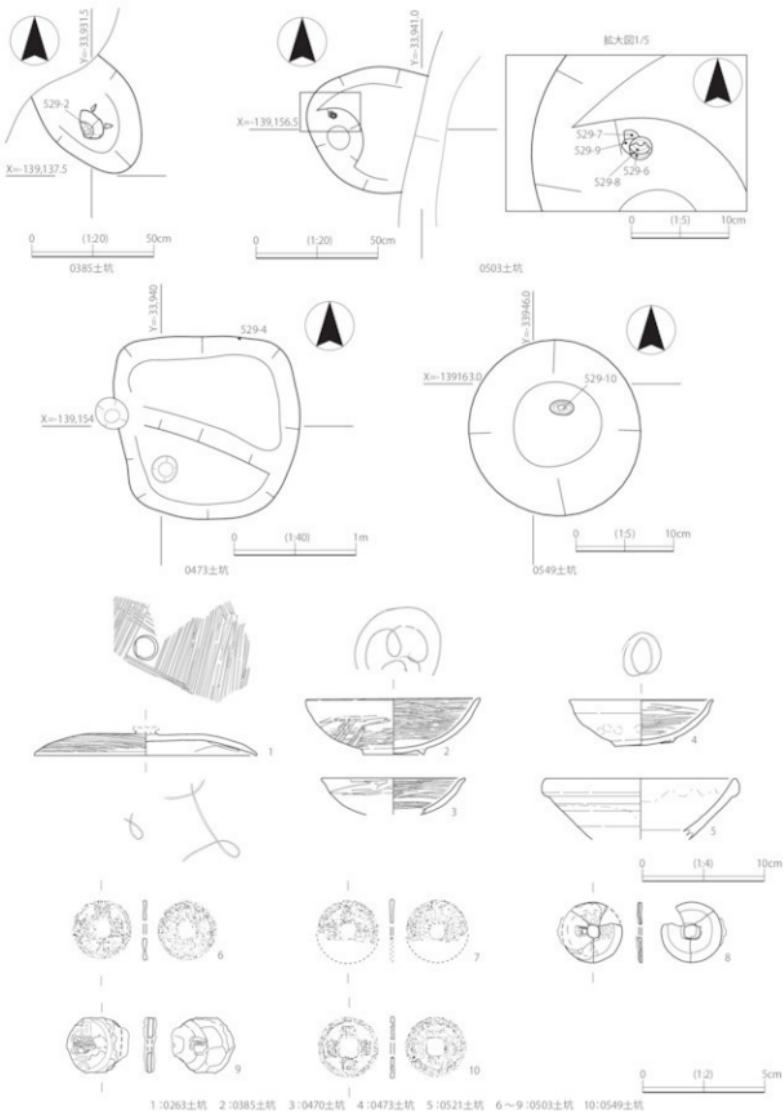


図529 3区 第2遺構面 263・385・470・473・503・521・549土坑平面図・出土遺物

も8の型が写っている。両面に銭差とみられる有機質が遺存している。出土状況から銭差に差した状態で埋納されたと思われる。

0521 土坑（図529、図版123） 長軸1.04m、短軸0.67m、深さ0.19mの隅丸方形の遺構である。遺構南側を他の土坑に切られている。調査区南西寄りに位置する。遺物は白磁碗（図529-5）等が出土した。5は11世紀中葉から12世紀初頭のものである。

0549 土坑（図529、図版33・123） 直径0.18m、深さ0.05mで円形を呈する。調査区南西端に位置する。遺物は銅鏡（図529-10）が出土した。10は天聖元宝（1023年初鋤）である。背面を上に向

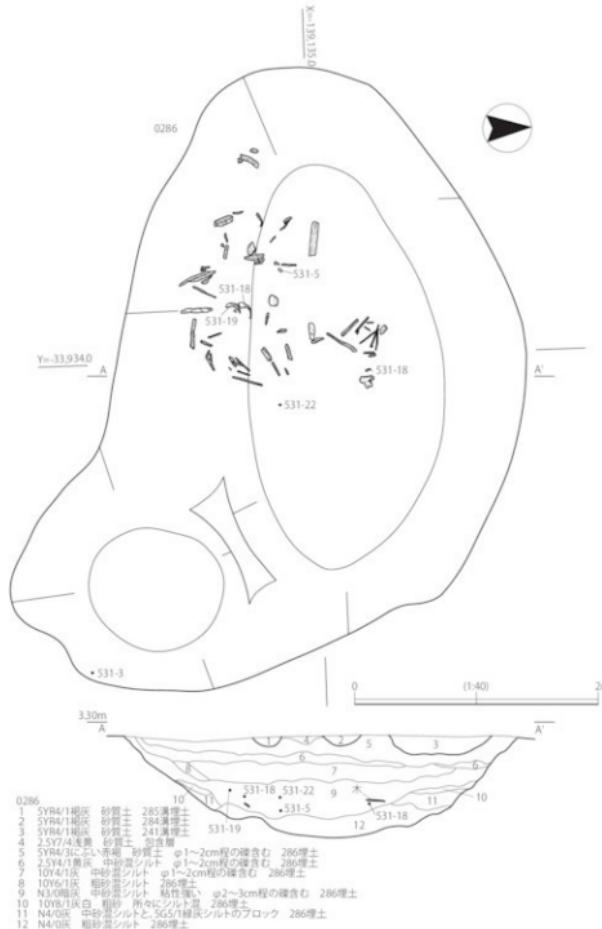


図530 3区 第2遺構面 286土坑平・断面図

けて出土した。篆書体の銭文である。銅質等の特徴から模鋤鏡と見られる。

0581 土坑（図532、図版123） 最大径0.31m、深さ0.38mで円形を呈し調査区南端付近に位置する。遺物は玉縁口縁の白磁碗（図532-1）等である。

0586 土坑（図532、図版123） 最大径0.34m、深さ0.19mで円形を呈する。調査区南端付近に位置する。一部を他の土坑に切られている。遺物は土師器皿（図532-2~10）等が出土した。13~14世紀頃の遺構とみられる。

0853 土坑（図532、図版123） 最大径0.37m、深さ0.07mで円形を呈する。調査区南端付近に位置する。遺物は玉縁口縁の白磁碗（図532-11）等が出土した。

0916 土坑（図 532、図版 123） 最大径 0.57 m、深さ 0.36 m で円形を呈する。調査区南西側に位置する。遺物は白磁碗（図 532-12）等が出土した。

0921 土坑（図 532、図版 123） 長径 0.66 m、短径 0.35 m、深さ 0.61 m で南北に細長い楕円形を呈する。調査区南東端に位置する。遺物は土師器皿（図 532-13・14）、瓦器皿（図 532-15・16）、瓦器碗（図 532-17）等が出土した。13・14 は J b タイプとみられる。17 は大和型である。出土遺物は 12 世紀後半から 13 世紀前半ごろにまとまりをもつ。

1143 土坑（図 532、図版 123） 長径 0.36 m、短径 0.28 m、深さ 0.35 m で楕円形を呈する。調査区やや南東寄りに位置する。遺物は土師器皿（図 532-18）等が出土した。

1191 土坑（図 532、図版 123） 残存長径 0.50 m、短径 0.34 m、深さ 0.18 m で楕円形様である。遺構南端を他の土坑に切られている。調査区南東寄りに位置する。遺物は緑釉陶器碗（図 532-19）等

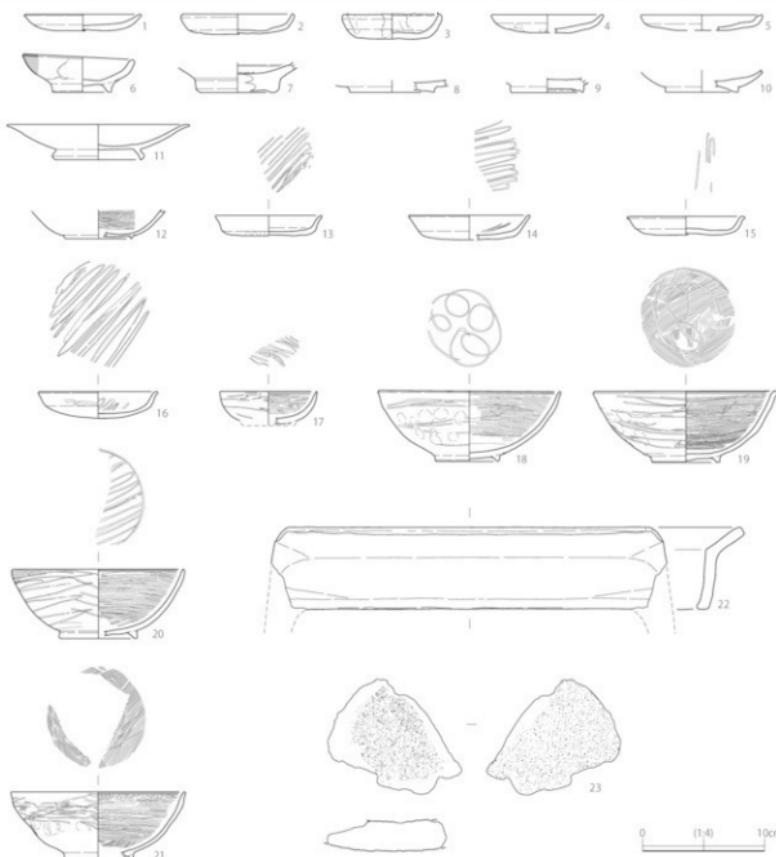


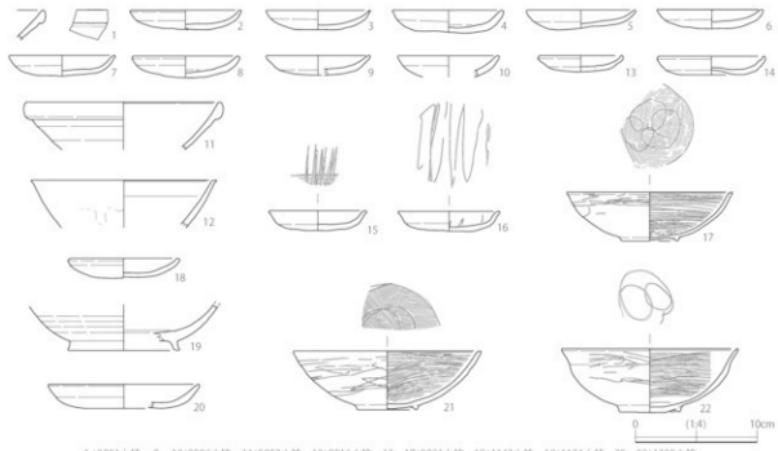
図 531 3 区 第2遺構面 286 土坑 出土遺物

が出土した。

1230 土坑（図 532、図版 123） 長径 0.57 m 以上、短径 0.50 m、深さ 0.44 m で楕円形を呈する。遺構東側は調査区外である。調査区南東端に位置する。遺物は土師器皿（図 532-20）、瓦器碗（図 532-21・22）等が出土した。21、22 ともに大和型である。13世紀の遺構とみられる。

1240 土坑（図 533、図版 33・123） 残存長径 0.94 m、深さ 0.21 m で楕円形様である。遺構東側および南西端は他の土坑に切られている。調査区南寄りに位置する。遺構の中心付近と思われる位置から土師器皿（図 533-1～10）、土師器大皿（図 533-11・12）がまとめて出土した（図 533）。11・12 は A b タイプである。出土遺物から 12世紀中頃の遺構とみられる。

1294 土坑（図 534、図版 124） 長径 0.51 m、短径 0.37 m、深さ 0.19 m で楕円形を呈する。調査区南寄りに位置する。遺物は土師器皿（図 534-1）等が出土した。1 は I a タイプで 15～16世紀の



1:0581土坑 2~10:0586土坑 11:0853土坑 12:0916土坑 13~17:0921土坑 18:1143土坑 19:1191土坑 20~22:1230土坑

図 532 3区 第2遺構面 581・586・853・916・921・1143・1191・1230 土坑 出土遺物

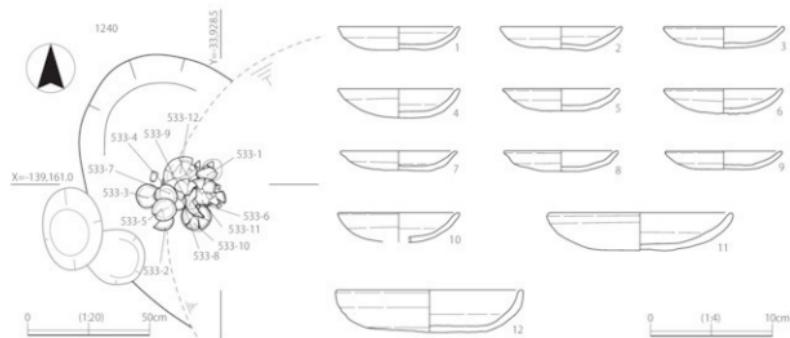


図 533 3区 第2遺構面 1240 土坑平面図・出土遺物

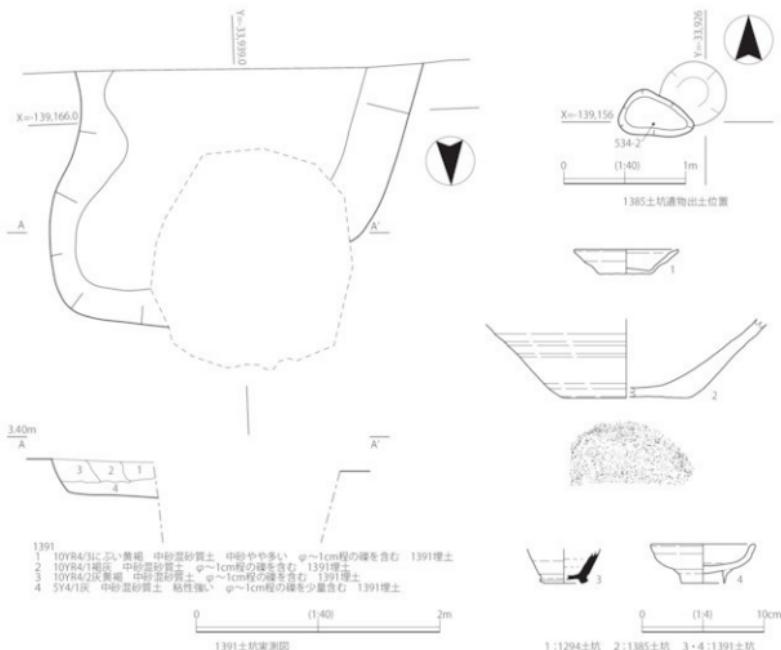


図534 3区 第2遺構面 1294・1385・1391 土坑平・断面図・出土遺物

ものとみられる。

1385 土坑(図534、図版124) 長径0.60m、短径0.38m、深さ0.07mで、いびつな梢円形を呈する。調査区南寄りに位置する。遺物は遺構中央南からの東播系須恵器鍤鉢(図534-2)等が出土した(図534:534-2)。2は糸切底で、12世紀中頃～13世紀初頭頃のものとみられる。

1391 土坑(図534、図版124) 長径2.61m、深さ0.59mの不整形な遺構である。遺構南半は調査区外で、遺構北西部は第1遺構面の0372井戸に切られている。調査区南端西寄りに位置する。遺物は須恵器壺(図534-3)、土師器台付皿(図534-4)等が出土した。3は縦窓系須恵器長頸壺の底部である。4はかなり先の細い断面形態の底部を張り付ける。平安京I期中頃に属す8世紀末から9世紀初頭頃の遺構とみられる。

1432 土坑(図535、図版124) 最大径0.17m、深さ0.41mで円形を呈する。調査区南東端に位置する。遺物は土師器脚部片(図535-1)等が出土した。1は器種不明だが台付皿の脚部である可能性があり、

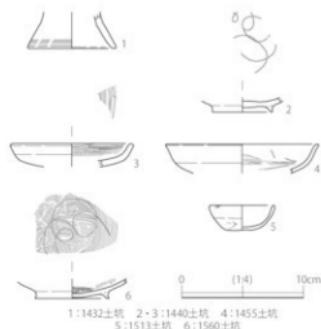


図535 3区 第2遺構面 1432・1440

1455・1513・1560 土坑 出土遺物

13世紀頃のものとみられる。

1440 土坑(図535、図版124) 残存長軸1.17m、残存短軸0.78m、深さ0.33mの不整形の土坑である。

0581 土坑を含め複数の遺構に肩が切られている。調査区南端付近に位置する。遺物は瓦器碗(図535-2)、瓦器皿(図535-3)等が出土した。2は大和型である。12世紀後半ごろの遺構とみられる。

1455 土坑(図535) 径0.38m、深さ0.04mで、西側は他の溝に切られている。調査区南西に位置する。遺物は瓦器皿(図535-4)等が出土した。

1476 土坑(図536・537、図版33・124) 長軸6.74m、短軸4.72m、深さ0.22mの不整形の遺構である。1面の遺構により北側の一部を切られている。調査区北部に位置する。遺物は須恵器环身(図537-1)、須恵器甌(図537-2)、須恵器壺(図537-3・4)、縁袖陶器碗(図537-5~8)、灰釉陶器皿(図537-9)、灰釉陶器碗(図537-10)、黒色土器碗(図537-11)、土師器碗(図537-12~17)、土師器把手手小型甌(図537-18)、土師器壺(図537-19~21)、面戸瓦(図537-22)、土鉢(図537-23~27)、土師器脚部(図537-28)、銅錢(図537-29)等が出土した。4は長頸壺である。5・9・10は貼付高台で、7・8は削出高台である。11は黒色土器A類である。土鉢は23~26は灰白色系だが、27のみ黒褐色である。28は三足盤の脚部と思われる。29は皇朝十二銭の一つで818年初鑄の富寿神宝で、表を上にして出土した。これらの出土遺物は8世紀末~9世紀後半にかけての時期にまとまりをもつ。このことから本遺構は9世紀後半の遺構とみられ、

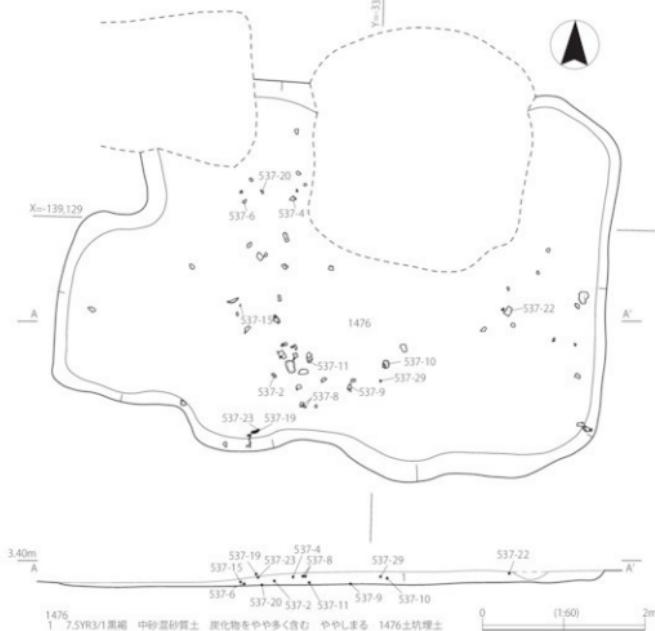


図536 3区 第2遺構面 1476 土坑平・断面図

非常に浅い遺構で住居等の可能性も考慮していたが、性格は不明である。

1513 土坑（図 535、図版 124）最大径 0.28 m、深さ 0.20 m で円形を呈する。調査区南端に位置する。

遺物は土器小碗（図 535-5）等が出土した。5 は粘土の接合痕が観察できる。

1560 土坑（図 535、図版 124）最大径 0.20 m、深さ 0.13 m で円形を呈する。調査区南寄りに位置する。

遺物は瓦器碗（図 535-6）等が出土した。6 は大和型で、12 世紀中頃から後半のものとみられる。

1251 土器群（図 538、図版 33・124）調査区南端で検出したもので、南北 0.51 m、東西 1.26 m の範囲に土器・瓦・奉大の礎が密集して出土した。遺構の検出に努めたが、埋納遺構等は存在せず、不要となつた土器等を一ヶ所にまとめたものと見られる。遺物は青磁碗（図 538-1）、国産陶器擂鉢（図 538-2）、瓦質土器火鉢（図 538-3・4）、国産陶器甕（図 538-5）、軒丸瓦（図 538-6）、軒平瓦

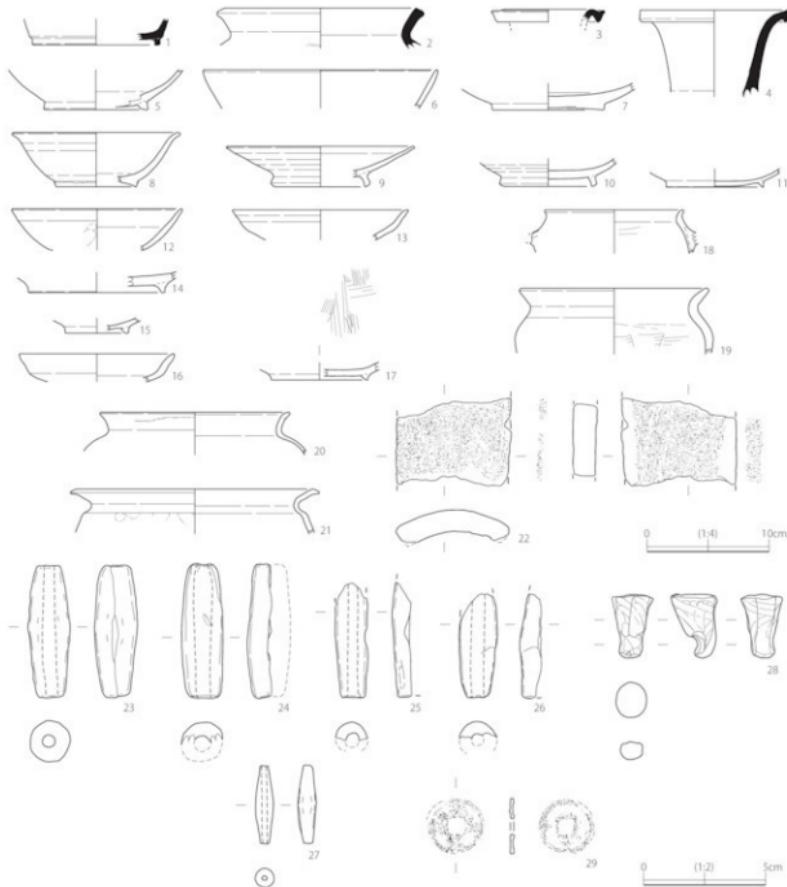


図 537 3 区 第 2 遺構面 1476 土坑 出土遺物

(図538-7)等が出土した。1は外面に蓮華文をもつ。2は備前焼である。3・4はいわゆる奈良火鉢である。5は信楽焼とみられる。6は巴文軒丸瓦である。7は波状文軒平瓦である。これらの遺物はおおよそ15世紀頃にまとまりをもち、この土器群の時期もその頃のものとみられる。

0466 落込(図539、図版33・124・125) 調査区南西側の広範囲で検出したもので、 $9.03 \times 4.67$ mで深さ0.16mの隅丸方形形状の規模を持つ。落ち込み底面からは多くの遺構を検出している。遺構面機能時の浅い窪み状の落込と見られる。落込のほぼ中央部に上器群を検出したほか(図539)、その他の位置から多くの遺物が出土した。出土したのは土師器皿(図539-1~9)、縁釉陶器碗(図539-10)、灰釉陶器碗(図539-11)、白磁碗(図539-12~16)、瓦器碗(図539-17・18)、瓦質土器ミニチュア三足釜(図539-19)、瓦質土器羽釜(図539-20)、土師質土器鍋(図539-21)、砥石(図539-22)等である。2・3・4・7・8・9・12・17・18・20・21は遺構上面、6は遺構底面からの出土である。1・2は内面に煤付着部があり灯明皿と思われる。10は貼付高台である。13・14は玉縁口縁を持つ。13は白磁II類、16は白磁VII類である。17・18は大和型である。21はうけ口状鍋である。22は長辺側に4面とも使用痕がある。和泉砂岩製の中砥用砥石である。これ

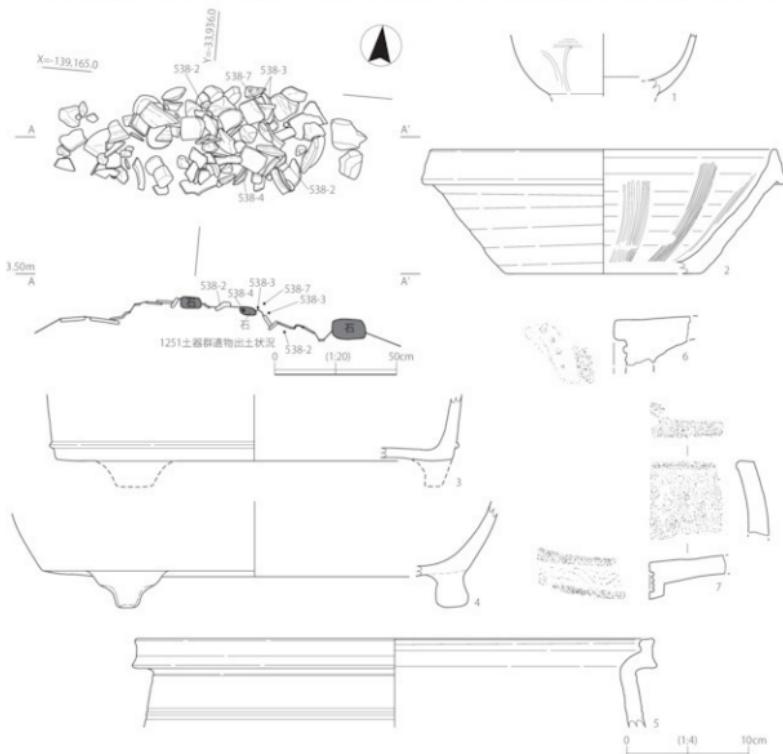


図538 3区 第2遺構面 1251土器群平・断面図・出土遺物

らの遺物は施釉陶磁器類を除けば 13 ~ 14 世紀にまとまりがあり、この落込はこの時期に埋没したとみられる。

1053 落込（図 540、図版 34・125） 調査区南のやや東寄りで検出したもので長軸 3.07 m、短軸 2.01 m、深さ 0.16 m の不整形な落込である。落込の南端付近で土師器皿を中心とした土器群を検出した（図 540）。図化できたのはいずれも土師器皿（図 540-1 ~ 10）である。いずれもいわゆる「て」字状口縁のもので、1・2・3・10 には内面や外面に明瞭に二次被熱部（トーン部分）が観察された。その他のものも被熱部があるものがあり、この土器群のはとんどの土師器皿は灯明皿として用いられた可能性がある。これらの遺物は 11 世紀中頃から末にかけての時期にまとまりをもち、この土器群はこの

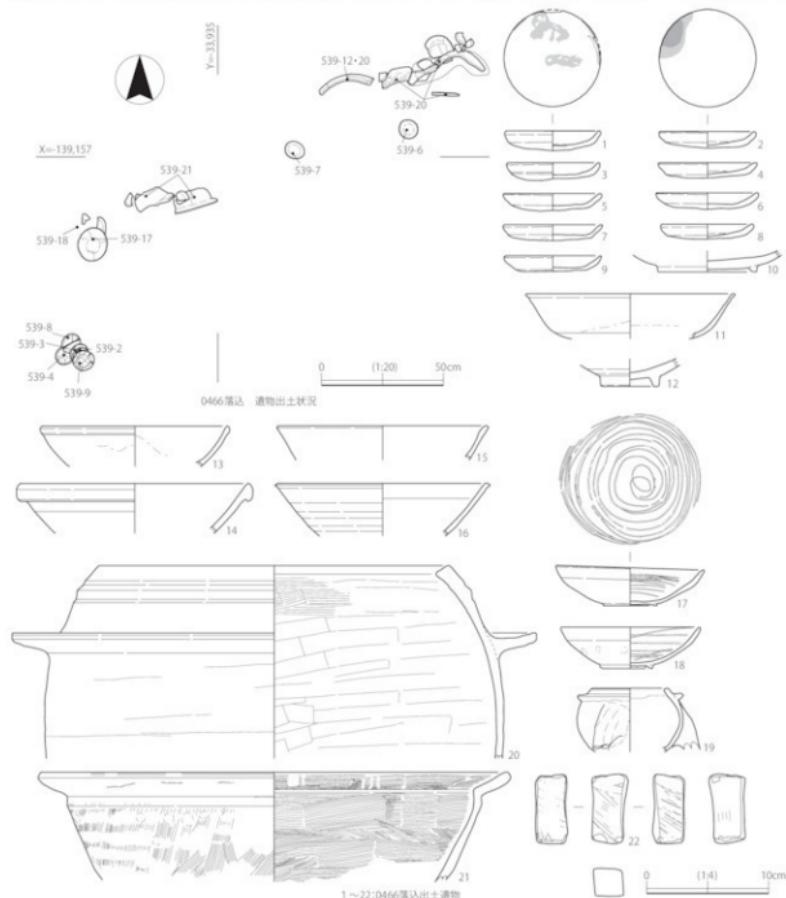


図 539 3 区 第 2 遺構面 466 落込遺物出土状況図・出土遺物

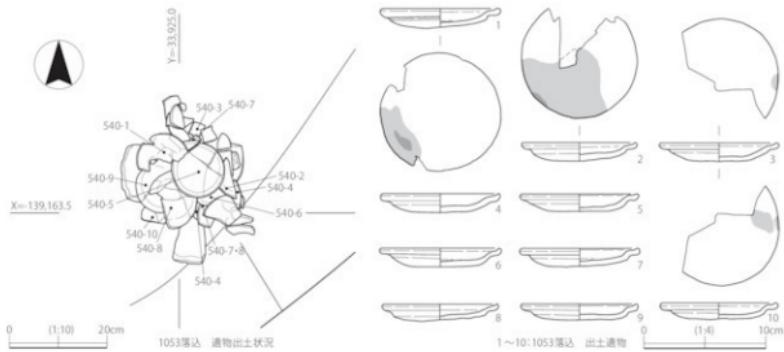


図 540 3区 第2遺構面 1053 落込平面図・出土遺物

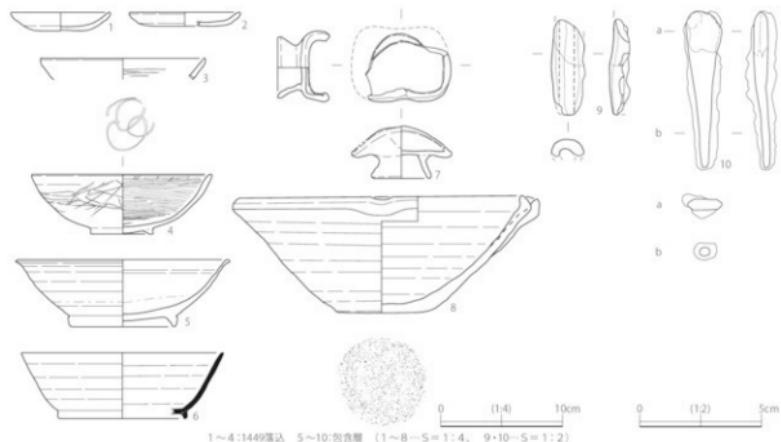


図 541 3区 第2遺構面 1449 落込・包含層 出土遺物

時期のものとみられる。

1449 落込（図 541、図版 125） 調査区南西寄りで検出したもので、残存長軸 2.40 m、短軸 1.47 m、深さ 0.19 m の落込である。遺物は土師器皿（図 541-1・2）、瓦器碗（図 541-3・4）等が出土した。4 は大和型で、12世紀中ごろのものと見られる。

包含層出土遺物（図 541、図版 125） このほか包含層出土遺物として灰釉陶器碗（図 541-5）、須恵器环身（図 541-6）、土師器台付耳皿（図 541-7）、東播系須恵器片口練鉢（図 541-8）、土鍤（図 541-9）、鉄鐵（図 541-10）等が出土した。6 は 9 世紀のものとみられる。7 は平安時代のものであろう。8 は底部に糸切痕がある。12世紀末から 13世紀初頭のものとみられる。

#### 第2.5 遺構面（図 542）

この遺構面は、第2遺構面と同じ遺構面であるが、その中に調査区南半の一部において落込内等を中

心に遺構が上面と下面の2面にわたって存在するような箇所が見受けられたため、便宜上第2.5遺構面と仮称したものである。この面に便宜上属させた遺構は、井戸3基、土坑57基、柱穴10基（うち復元できた杭列2基）を検出した（図542）。主な遺構の詳細は次のとおりである。

杭列3(図543) 長さ2.01mで、柱穴3基からなる東西方向の杭列である。柱穴間隔は0.94～1.04mで、柱穴掘形は長径0.28～0.37mの円形もしくは楕円形で、柱穴底はT.P.+3.000～3.075mであった。調査区の中央南寄りに位置する。

杭列4(図543) 長辺5.41m×短辺3.23mで、柱穴7基からなる。東西方向の杭列と南北方向の杭列が、北東角で柱穴を共有している。柱穴間隔は長辺1.28~1.46m、短辺1.61~1.62mで、柱穴掘形は長径0.22~0.34mの不整円形もしくは楕円形で、柱穴底はT.P.+2.853~3.047mであった。

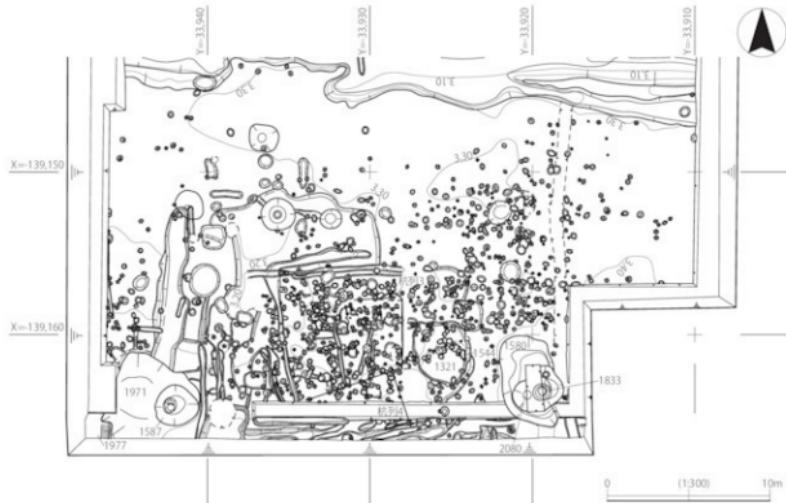


図 542 3区 第2.5 遺構面 平面図（南半部）

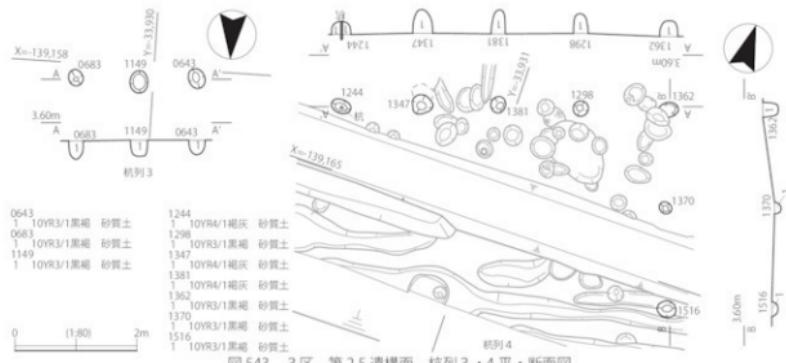


図 543 3 区 第 2.5 遺構面 桁列 3・4 平・断面図

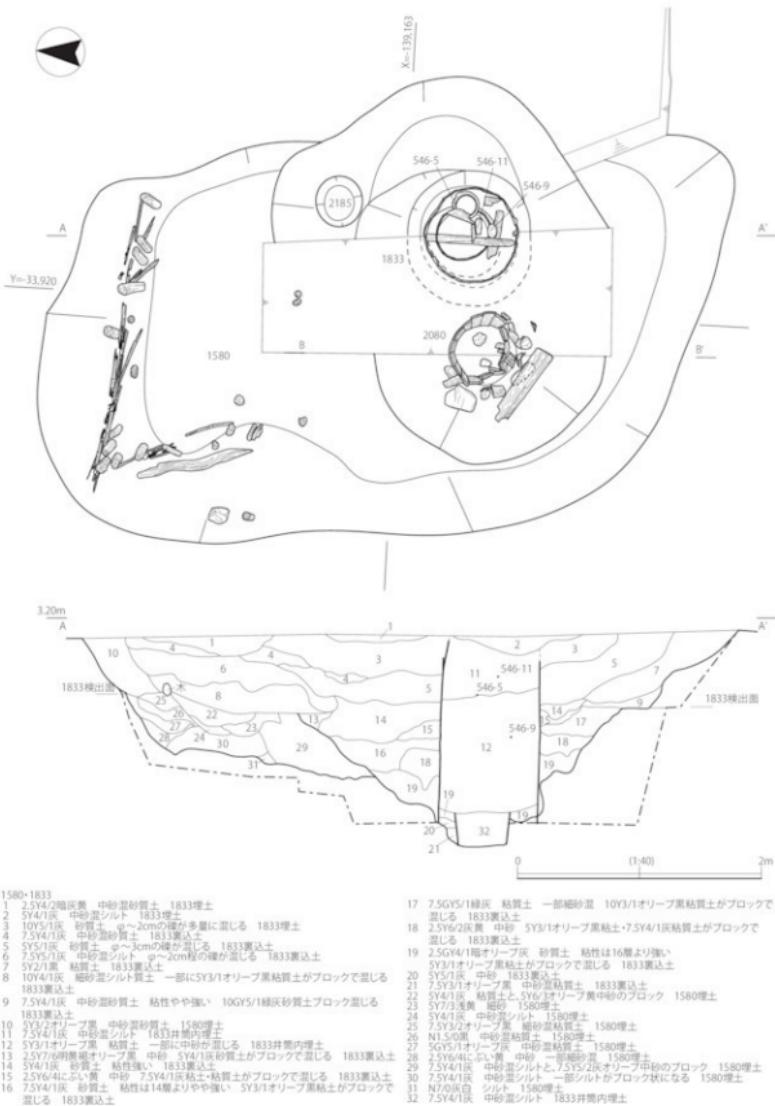


図 544 3区 第2.5 遺構面 1580土坑・1833井戸平・断面図

調査区の南端に位置する。

1580 土坑・1833 井戸・2080 井戸（図 544～547、図版 34・125・126）これら 3 基の遺構は調査区南東端のほぼ同一の位置で検出したもので、検出当初は 1580 土坑の掘形としてのみ認識し、調査進行中に 1833 井戸・2080 井戸の井戸枠をそれぞれ検出し、その後の精査でそれぞれの掘形を検出したものである。1833 井戸は断面観察により 1580 井戸より後に掘削されていることを確認した。一方

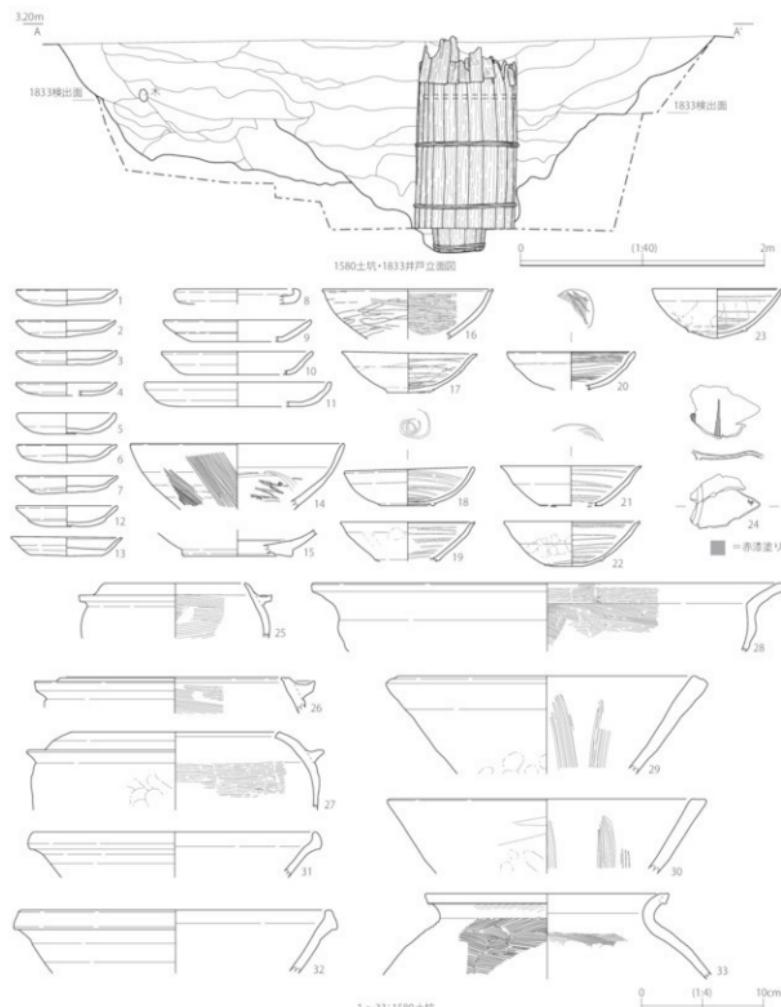


図 545 3 区 第 2.5 遺構面 1580 土坑・1833 井戸断面図・出土遺物

1833 井戸を精査するためトレンチを設定して掘削中に2080 井戸を検出したため、両者の切り合いは不明確である。ただ、2080 井戸は上部構造が既に取り払われている一方で 2080 井戸はほぼ完全に構成材が遺存していたため、1580 土坑→2080 井戸→1833 井戸の順で築造されたとみられる。

1580 土坑は長軸 5.96 m、短軸 3.17 m、深さ 1.02 m で梢円形を呈する。土坑の北側に木杭と竹や細い丸太の横木を組み合わせたしがらみ状の木組みがある。木組みは東西 2.31 m × 南北 1.79 m の長方形形状に復元できる。1580 土坑出土として取り上げた遺物は、土師器皿（図 545-1～11）、白磁皿（図 545-13）、青磁碗（図 545-14）、緑釉陶器碗（図 545-15）、瓦器皿（図 545-12）、瓦器碗（図 545-16～23）、漆器碗（図 545-24）、土師器鍋（図 545-28）、瓦質土器羽釜（図 545-25～27）、瓦質土器擂鉢（図 545-29・30）、東播系須恵器練鉢（図 545-31・32）、須恵質土器甕（図 545-33）等がある。ただし、上記の調査進行であった関係上、これらの土器の中には 1580 土坑使

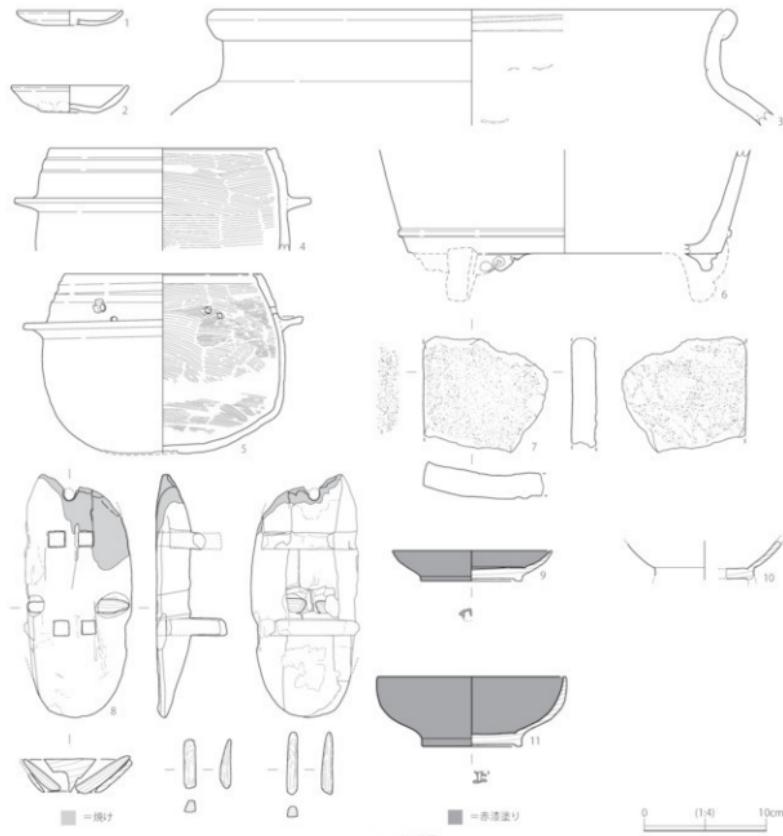


図 546 3 区 第 2.5 遺構面 1833 井戸 出土遺物

用・廃絶時の遺物の他に、1833 井戸設置時、2080 井戸設置・廃絶時のそれぞれの遺物が含まれている可能性がある。8はCタイプである。13は口禿白磁皿である。14は同安窯系青磁で内外面全体に施釉貫入がある。16～23は18を除き全て大和型である。24は内外面とも黒漆塗りで、両面とも赤漆により文様が施されている。25は外面体部に煤が付着する。25・27は三足釜の可能性がある。28は外面全体に煤が付着する。32は片口練鉢と見られる。33は東播系須恵器の甕である。これらの遺物は13世紀中ごろから14世紀にかけてにまとまりを持ち、遺構の時期を示すと見られる。

1833 井戸は残存径 2.76 m、残存深 1.73 m で不整円形を呈する。1580 土坑が埋没した段階で掘削されている。井戸内には径 0.72 m、高さ 1.18 m の円形縦板組枠が遺存していて、計三カ所を竹組で結桶状に縛られていた。その上部はさらに外側が縦板で円形に囲われており、地上部施設の基部が遺存していたものと見られる。円形縦板組枠の下部には、径 0.39 m、高さ 0.23 m の、縦板を円形に組み二カ所を竹組で結桶状に縛った構造の集水施設が設置されていた。集水施設の板材のうち南側部分のものは掘形に張り付ける形で設置されており、集水施設の裏込め土は北側部分にのみ見られた。1833 井戸の出土遺物として取り上げた遺物はいず  
 れも円形縦板組枠内部からの出土で、土師器皿（図 546-1・2）、国産陶器甕（図 546-3）、瓦質土器羽釜（図 546-4・5）、瓦質土器火鉢（図 546-6）、平瓦（図 546-7）、木製下駄（図 546-8）、漆器皿（図 546-9）、漆器碗（図 546-10）等があった。3は備前焼である。5は11層からの出土で、口縁部付近の相対する二カ所に計四孔の孔が開けられており、釣瓶として使用されていたものと見られる。14世紀中ごろのものと見られる。14世紀中ごろのものと見られる。6はいわゆる奈良火鉢である。8は差し込み式の歯をもち、鼻緒取り付け部のうち指で挟む部分を除く二カ所に別材が挿入されている。この別材は鼻緒の取り付け方法に関連するとみられる。爪先側が焼損している。9・11は内外面赤漆塗りで、底部は黒漆塗りに赤漆の漆書がある。9は12層から、11は11層からの出土である。10は内外面とも黒漆塗りである。これらの遺物は14世紀中ごろから15・16世紀にかけてのものであり、井戸の廃絶時期は室町時代中ごろであろう。

2080 井戸は 1580 土坑底部付近で検出し、残存径 2.01 m、残存深 0.98 m で円

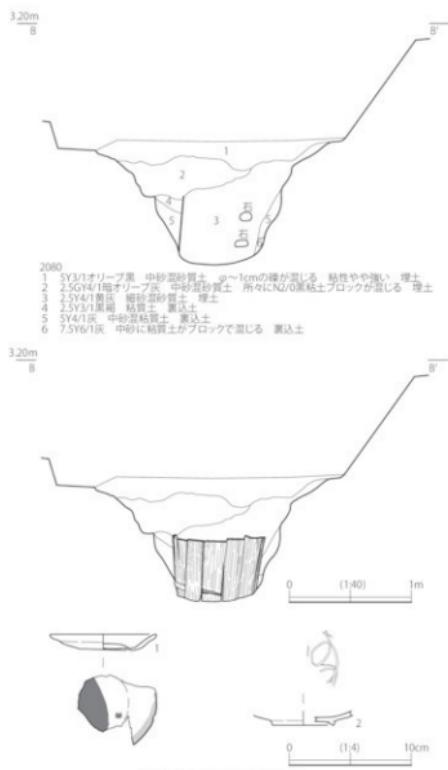


図 547 3 区 第 2.5 遺構面 2080 井戸断面図・出土遺物

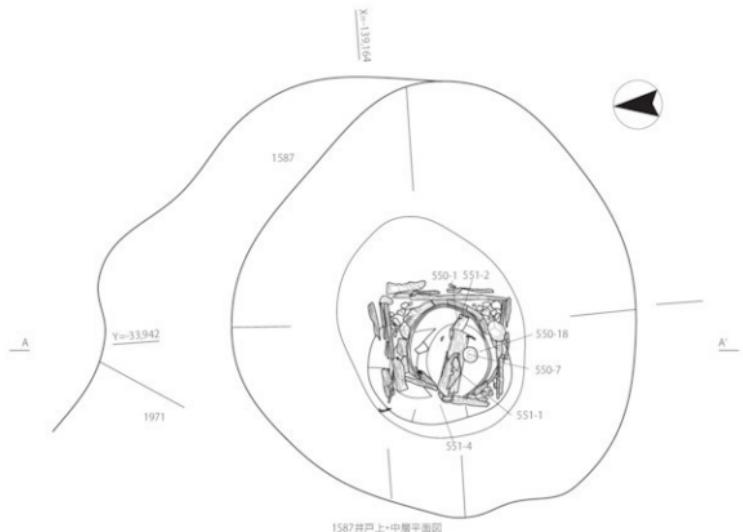


図 548 3区 第2.5遺構面 1587井戸平面図

形を呈する。上部構造は遺存しておらず、板材が横位で遺存したのみで構造は不明である。縦板を円形に組み、下部一カ所を竹組で結桶状に縛った構造の集水施設が遺存していた。施設の裏込め土には拳大～人頭大の礫が、集水施設の縦板材が崩壊した部分にのみ見られた。出土遺物は土師器皿（図 547-1）、瓦器碗（図 547-2）等があった。1 は集水施設内からの出土で、外面の底部に煤が付着し、内面全体と外面口縁部に酸化した被熱部が觀察され灯明皿とみられる。2 は大和型である。井戸の廃絶時期は出土遺物から 14 世紀後半から 15 世紀中ごろの間と見られる。

1587 井戸（図 548～551、図版 34・126・127） 挖形の最大径 2.68 m、検出できた深さ 1.70 m ではほぼ円形を呈する。調査区南西端に位置する。上部構造は隅柱を置きそこにはぞ孔を用いて横桟木を設置し、建築部材を含む縦板を外側に置いた一辺 0.62 m の方形縦板組横桟留枠である。その下部構造として縦板を円形に組んだ円形縦板組枠が二段設置されていた。上部の円形枠は径 0.58 m、高さ 0.39 m、下部の円形枠は径 0.47 m、高さ 0.42 m で二カ所を竹組で結桶状に縛っていた。その下部に集水施設として底部のない曲物枠が設置されていた。出土遺物のうち土器等は土師器皿（図 550-1～7）、土師器ミニチュア壺（図 550-8）、瓦器碗（図 550-9・10）、須恵質土器練鉢（図 550-11・12）、瓦質土器擂鉢（図 550-13・14）、瓦質土器火鉢（図 550-15・16）、瓦質土器羽釜（図 550-17）

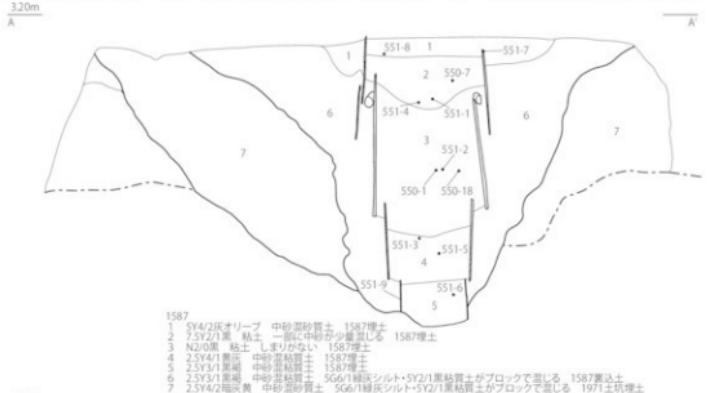


図 549 3 区 第 2.5 遺構面 1587 井戸断面図

～20)、平瓦(図550-21)等があった。1は3層から、7は2層からの出土である。6は灯明皿である。9・10は大和型である。11は東播系須恵器片口練鉢である。12は東播系須恵器片口練鉢とみられる。15は円形もしくは三葉文様の透かしを持つもので、内面全体にこげつき・煤がみられる。また、木器類としては、漆器碗(図551-1・2)、曲物桶(図551-3)、曲物桶底部(図551-4~6)、加工井戸枠部材(図551-7・8)、井戸枠曲物(図551-9)を図化した。1は内外面とも黒漆塗りで口縁部外側に一条の沈線がある。2は内外面黒漆塗りで、外面に赤漆による文様が描かれる。3は4層より出土した。4は2層からの出土である。5は4層から出土した。3と5は出土位置が近接して

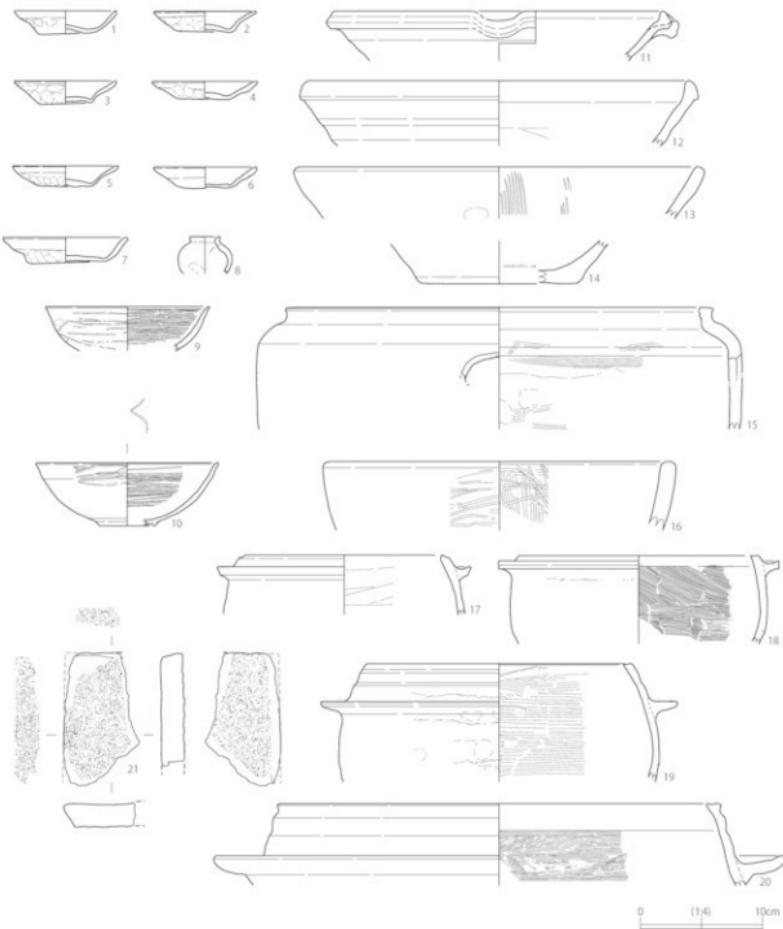


図550 3区 第2.5遺構面 1587井戸出土遺物(1)

おり、同一個体の可能性がある。6は井戸内最下層の5層から出土した。7・8は下部に井戸枠としては不要の円孔が各5カ所穿たれており、建築部材の転用と見られる。9は集水施設として使用されていた。出土遺物は13世紀～14世紀にかけてにまとまりを持ち、最も新しいもので15世紀初頭と見られるものが含まれることから、そのころに廃絶されたものと見られる。築造時期は、この井戸に切られている後述する1971土坑から13世紀後半～14世紀初頭の遺物が出土しており、その時期以降であろう。

1321土坑(図552、図版34・127) 最大径4.46m、深さ0.34mで不整円形を呈する。土坑上面にも

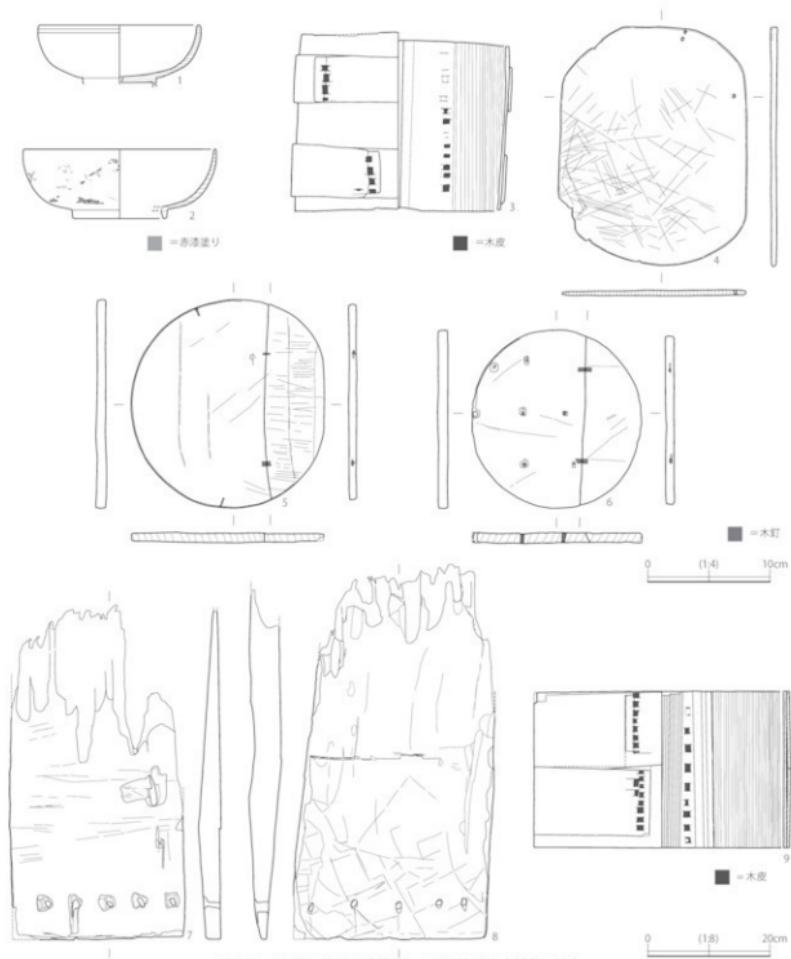


図551 3区 第2.5遺構面 1587井戸出土遺物(2)

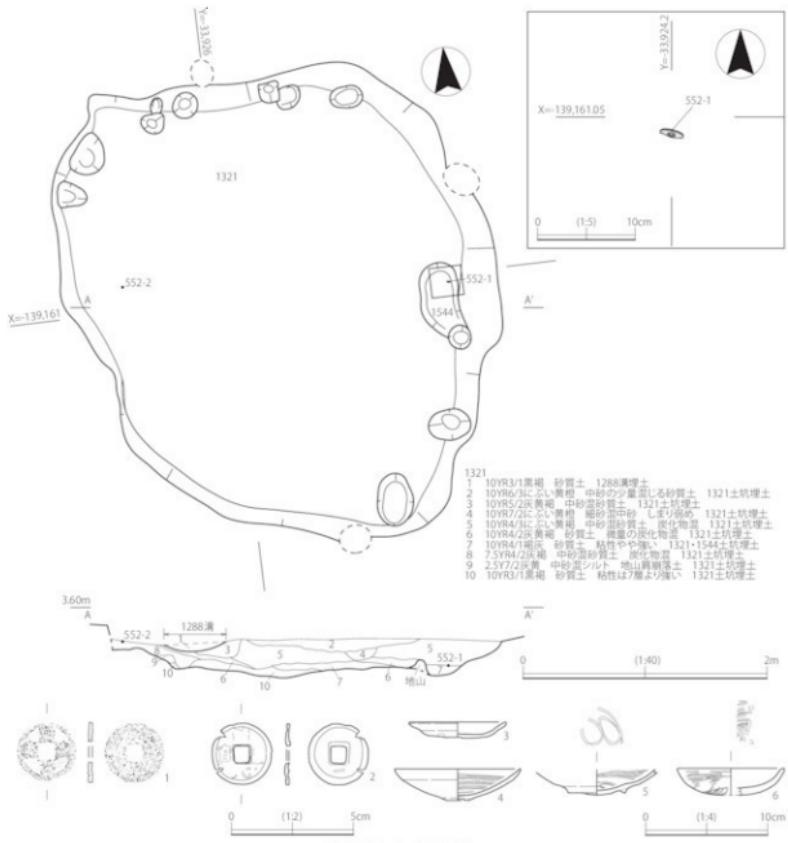


図 552 3区 第2.5遺構面 1321・1544土坑平・断面図・出土遺物

下部にも複数の遺構が存在する落ち込み状の土坑である。調査区南端やや東寄りに位置する。銅銭（図 552-2）、土師器皿（図 552-3）、瓦器碗（図 552-4・5）、瓦器皿（図 552-6）等が出土した。2は銭文が一部不鮮明だが、開元通宝（唐 621 年初鋤）と見られる。背面下部に「一」と読める銭文がある。表面を上に向けて出土した。4・5は大和型である。出土遺物から 13世紀の遺構と見られる。1544土坑（図 552、図版 34・127） 残存長軸 0.59 m、短軸 0.31 m、深さ 0.05 m で不整形円形を呈する。1321土坑の底部に存する。遺構南端は他の土坑に切られている。遺物は遺構上面より銅銭（図 552-1）が出土した。1は熙寧元寶（北宋 1068 年初鋤）である。銭文の字体は篆書で、背面は無文である。銭文につぶれが見られ銅質も黄銅色に近い色調を示すもので、模鋤銭と見られる。

1971土坑（図 553、図版 127） 残存長軸 5.98 m、残存短軸 5.29 m、深さ 1.32 m の不整形の遺構である。遺構東側を 1587 井戸に切られる。遺構西側は調査区側溝で肩の一部を失っている。遺構南側は

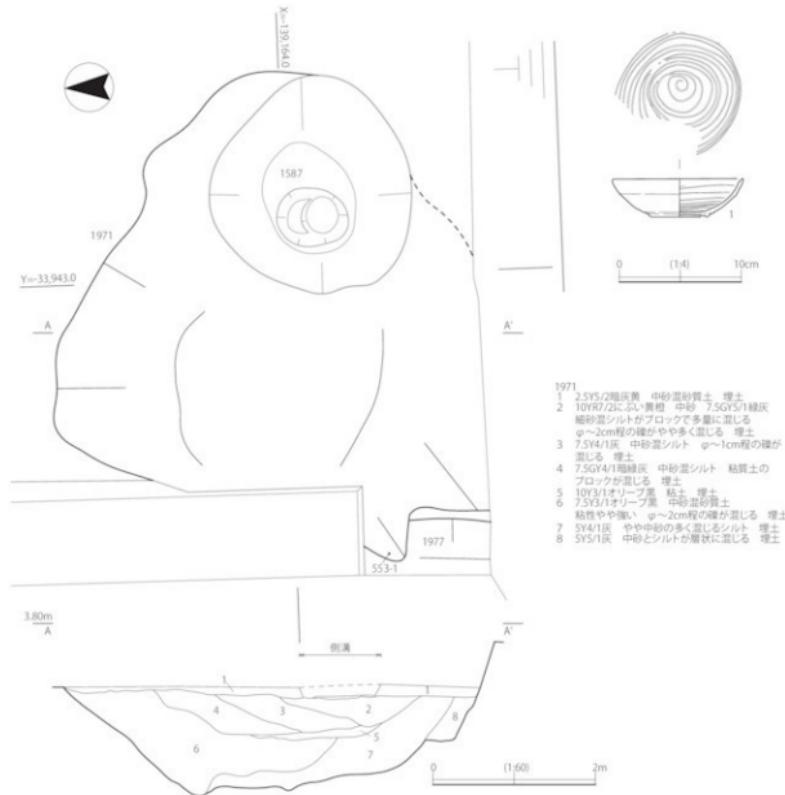


図 553 3区 第2.5遺構面 1971 土坑平・断面図・出土遺物

調査区外である。出土遺物のうち遺構西端の上面付近から出土した瓦器碗（図 553-1）を図化した。

1は大和型で、13世紀後半～14世紀初頭のものと見られる。

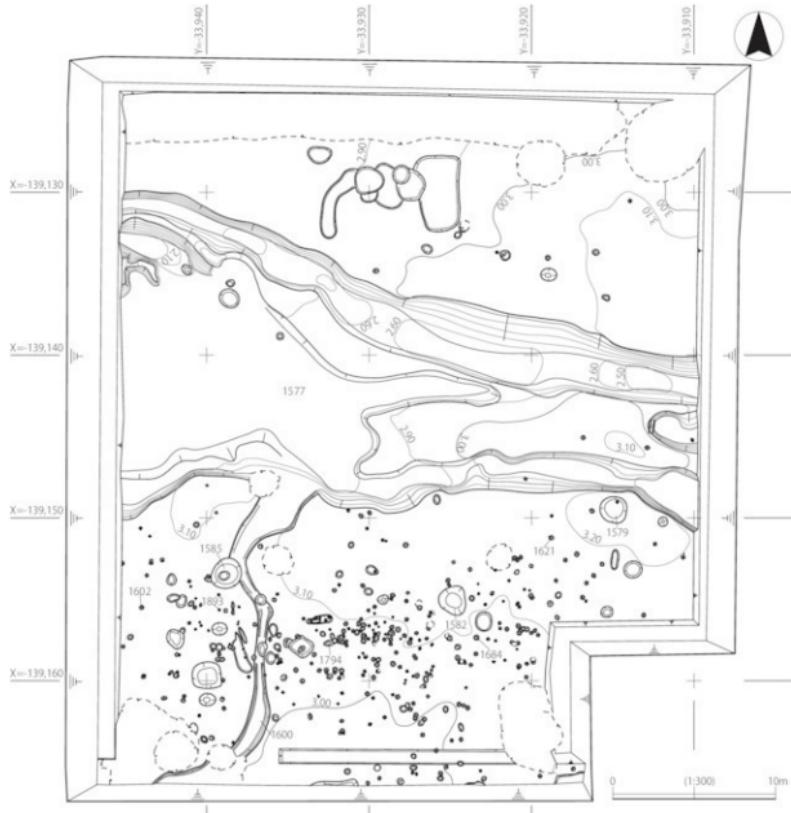
### 3. 第3遺構面（図 554、図版 34）

第3遺構面は、基本層序における3-1面に対応する遺構面である。第3遺構面の調査で確認した遺構は、飛鳥時代から鎌倉時代にかけてのもので、井戸3基、河川1本、溝4本、土坑374基、柱穴11基を検出した（図 554）。遺構面の標高は調査区内の北東隅T.P. + 2.905 m、北西隅T.P. + 2.978 m、南東隅T.P. + 3.114 m、南西隅T.P. + 3.005 mであった。調査区中央に東から西へと河川が走り、それを境に南北が集落として利用されていた。北半にも遺構は存在するが、その分布は南北と比較するとやや希薄であった。主な遺構の詳細は次のとおりである。

1577 河川（図 555～557、図版 35・127） 最大幅 20.09 m、検出した長さ 37.11 m、深さ 0.53 m で、調査区のほぼ中央を東から西へ向かって流れる河川（流路）である。遺構上面には別の遺構が少數

存在した。第3遺構面に属する遺構として調査したが、堆積状況や出土遺物から次の第4遺構面存続時から継続して存在し、第3遺構面存続時に完全に埋没した流路の可能性がある。遺物は須恵器环身（図556-1～3）、須恵器高环（図556-4・5）、須恵器平瓶（図556-6）、須恵器甕（図556-7）、土師器高环（図556-8～11）、丸瓦（図556-12）等が出土した。1～3はTK217型式期のもので、3は底部外面にヘラ書き記号がある。5は7世紀のものである。

1582井戸（図558・559、図版35・127） 挖形の最大径1.82m、深さ1.27mで不整円形を呈する。調査区南側やや東寄りに位置する。直径0.36mの曲物を高さ0.35mに二段に積み重ね、その上部には隅柱を持つ一辺0.55mの方形板枠構造が存在したとみられる。上部の方形枠は材が抜き取られており、横板構造か縦板構造かは不明である。遺物は土師器皿（図559-1～4）、瓦器碗（図559-5）、黒色土器碗（図559-6）、国産陶器甕（図559-7）、須恵質土器練鉢（図559-8）、瓦質土器羽



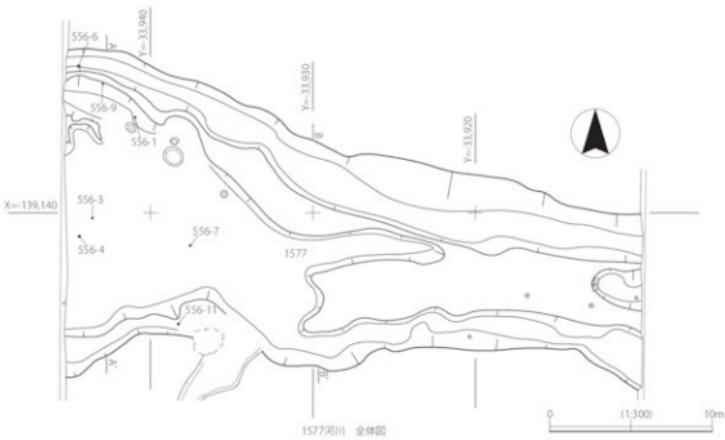


図 555 3区 第3遺構面 1577河川 平面図

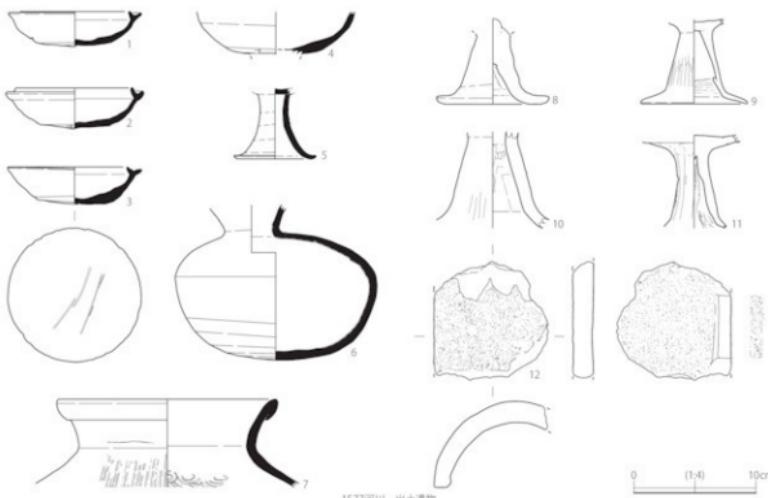


図 556 3区 第3遺構面 1577河川 出土遺物

釜（図 559-9～11）、木製曲物桶（図 559-12）、砥石（図 559-13）等が出土した。5は大和型とみられる。6は黒色土器B類である。9は三足羽釜である。13は仕上げ砥石である。出土遺物の多くは12～13世紀頃その中心があり、遺構もその時期のものとみられる。

1585井戸（図 558・559、図版 35・127）掘形の直径1.88m、深さ1.29mで円形を呈する。調査区南側西寄りに位置する。残存していた井戸枠は曲物を2段に積み上げたもので、内法直径0.45m、高さ0.43mであった。曲物設置時の支えとして板材を曲物どうしの間に縦方向に挿入していた。曲物の

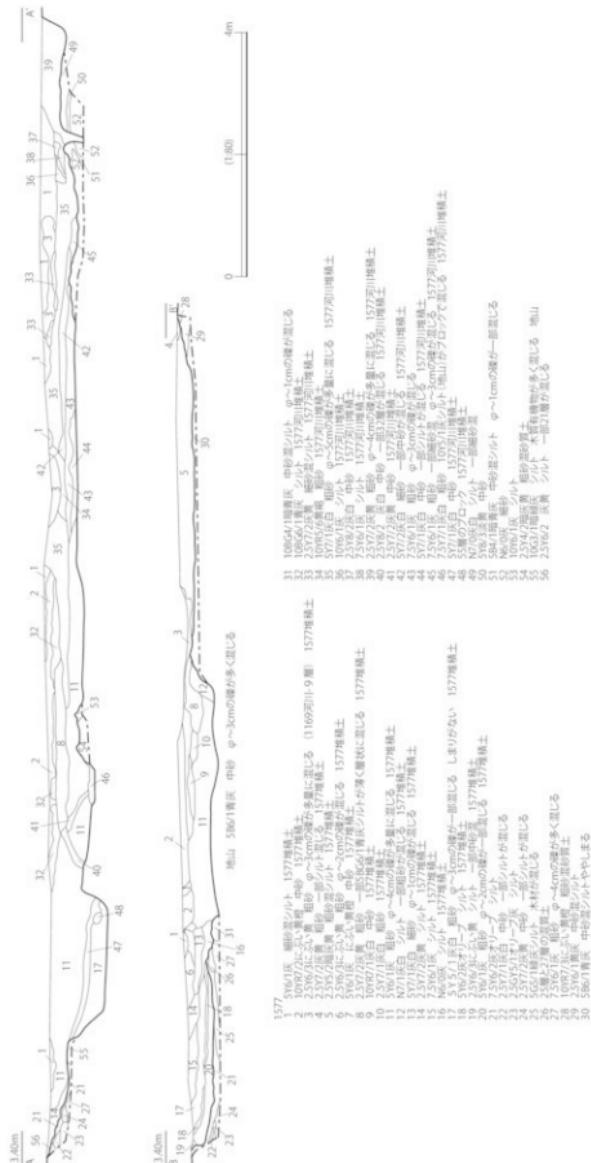


図557 3区 第3遭構面 1577 河川 断面図

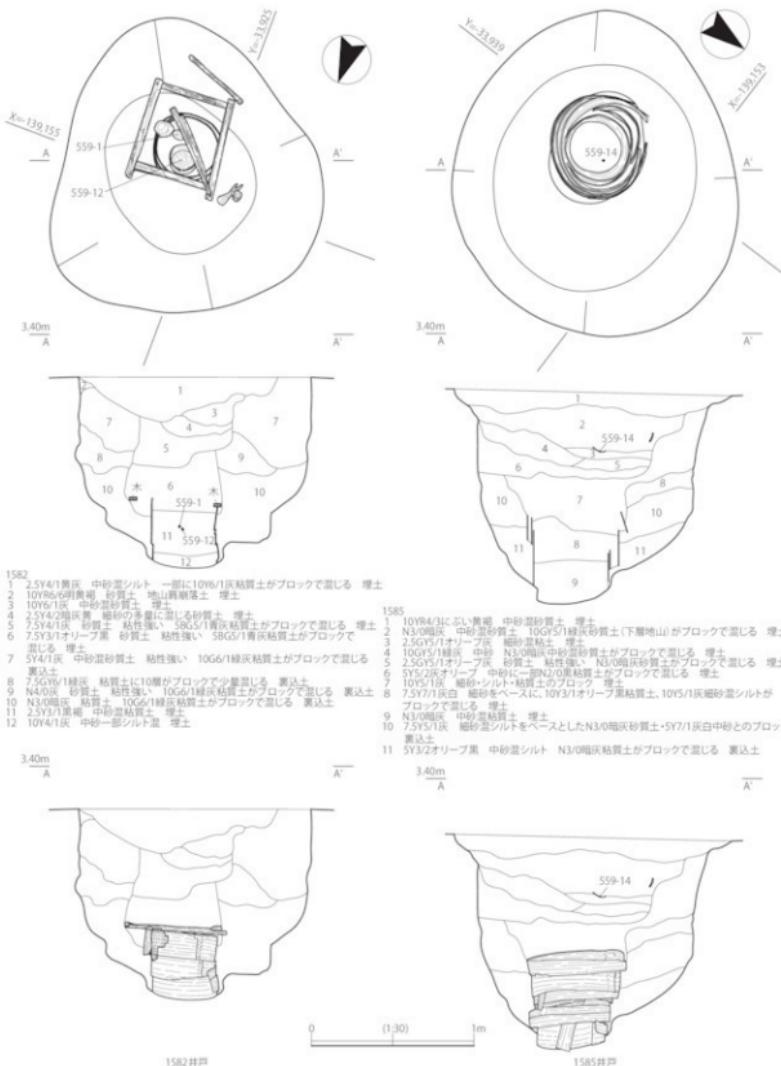


図 558 3 区 第3遺構面 1582・1585 井戸平・断面図

残存位置はやや低く、上部構造が存在した可能性がある。遺物は土師器皿（図 559-14～16）、瓦器碗（図 559-17～20）等が出土した。14 は 2・3 層の層界から出土したものである。その位置は遺構のほぼ中央にあたる。19 は大和型とみられ、20 は大和型である。出土遺物から 12 世紀頃の遺構

とみられる。

1600 溝（図 560、図版 128） 検出できた長さ 20.32 m、最大幅 2.96 m、深さ 0.26 mで、調査区南側西寄りに位置し、南北方向に走る S字状に蛇行する溝である。南端は調査区外に延びている。底部の標高は北端で 3.052 m、南端で 2.727 mであり、北から南へと流れる溝である。北端は 1577 河川と繋がっており、1577 河川から集落へと導水する溝である。図化した出土遺物は黒色土器碗である（図 560-1）。1 は黒色土器 A 類である。9世紀末ごろのものであろう。

1579 土坑（図 560、図版 128） 直径 1.64 m、深さ 0.30 mで円形を呈する。調査区南東寄りに位置する。遺物は土師器碗（図 560-2）等が出土した。

1602 土坑（図 560、図版 35・128） 直径 0.23 m、深さ 0.09 mで円形を呈する。調査区南寄りの西端に位置する。瓦器碗（図 560-3）の埋納遺構である。3 は大和型である。12世紀初頭から前半頃のものとみられる。

1794 土坑（図 560、図版 35・128） 長径 0.60 m、短径 0.34 m、深さ 0.29 mで橢円形を呈する。調

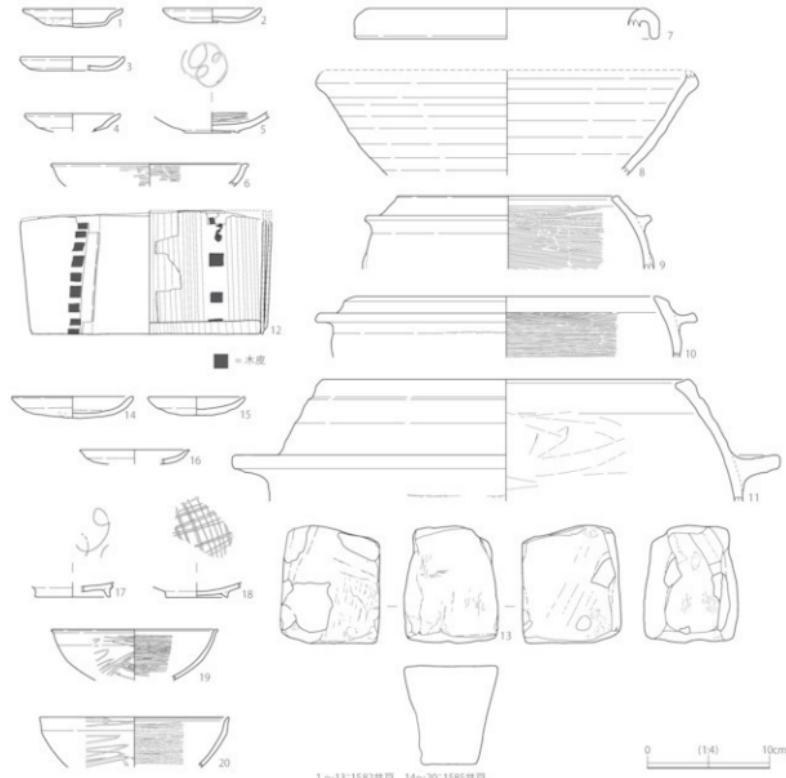


図 559 3 区 第3遺構面 1582・1585 井戸 出土遺物

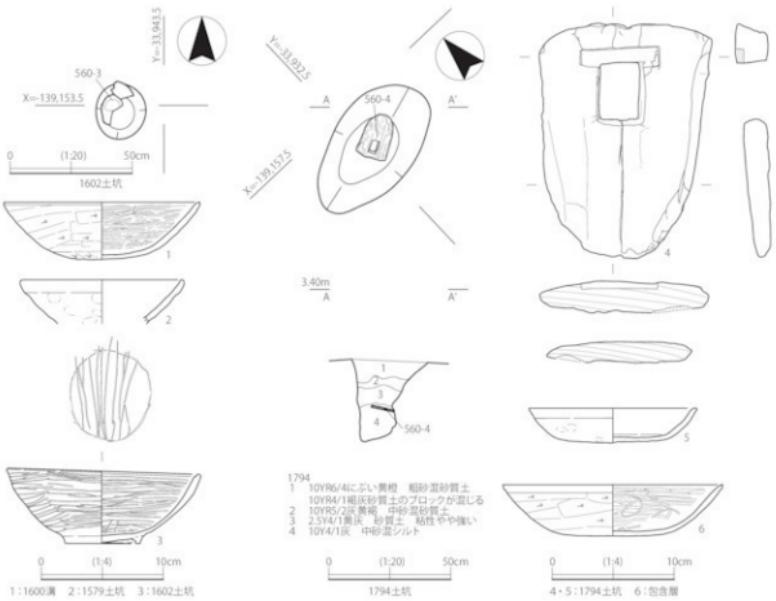


図 560 3区 第3遺構面 1602・1704土坑平・断面図 1600溝・1579・1602・1794土坑・包含層出土遺物

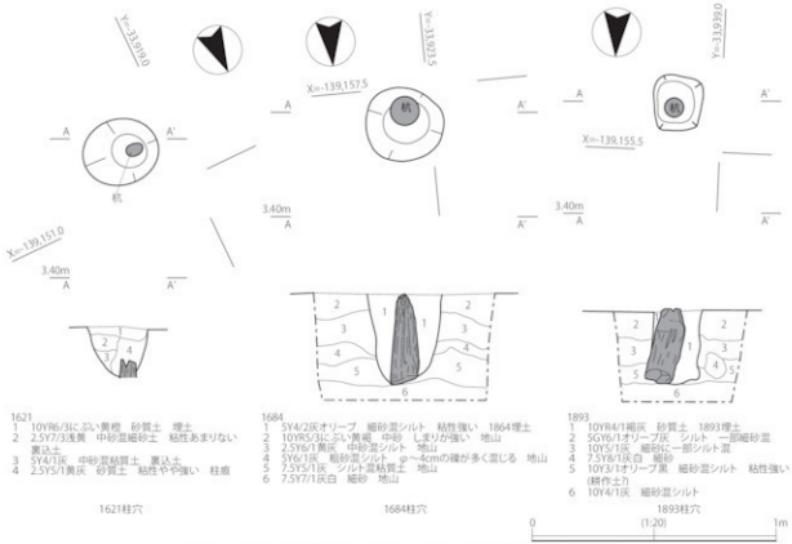


図 561 3区 第3遺構面 1621・1684・1893柱穴 平・断面図

査区南寄りに位置する。遺物は木製鍬（図 560-4）、土師器皿（図 560-5）等が出土した。4は柄の挿入部に部分的に別材を用いている。刃部付近には加工があり、金属刃先を取り付けるための加工と見られる。出土状況からは柱穴の礎板に利用されたものの可能性もあるが、本遺構の堆積状況からは本遺構が柱穴で4が礎板として用いられていたと断定することはできない。

1621 柱穴（図 561） 長径 0.31 m、深さ 0.27 m で梢円形を呈する。調査区南東寄りに位置する。柱穴内西寄りに柱が一部遺存し、断面観察で腐食した柱痕を確認した。断面観察した柱径は約 0.12 m である。

1684 柱穴（図 561、図版 35） 最大径 0.35 m、深さ 0.35 m で円形を呈する。調査区南東寄りに位置する。柱穴内南寄りに柱が遺存する。柱径は約 0.10 m で柱底部は水平ではなく東より西の方がやや高くなっていた。

1893 柱穴（図 561、図版 35） 長軸 0.23 m、短軸 0.19 m、深さ 0.25 m で隅丸方形を呈する。調査区

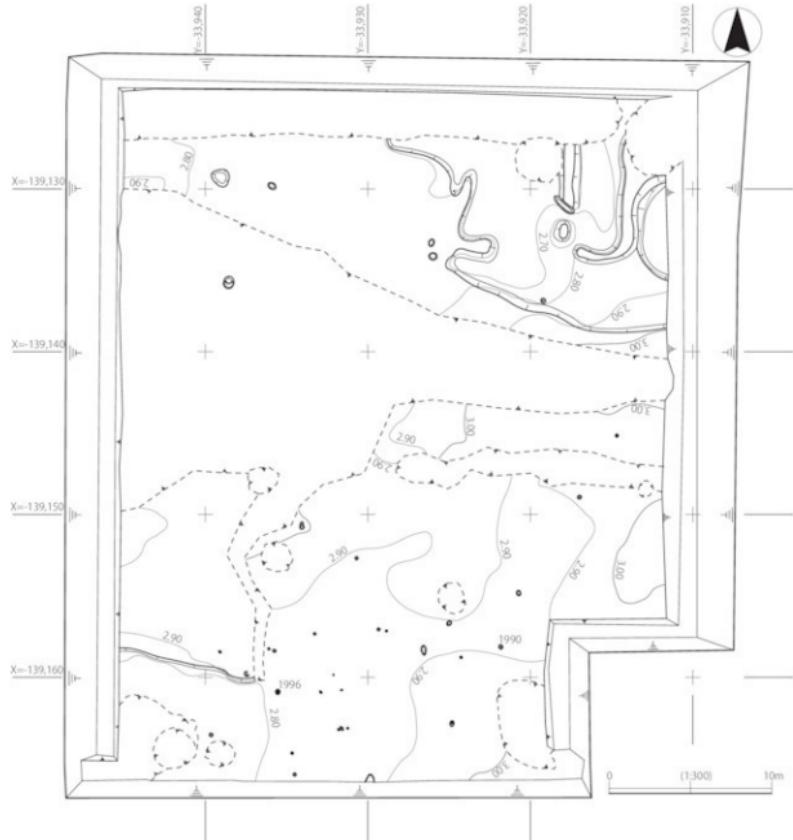


図 562 3区 第4遺構面 平面図

南西寄りに位置する。柱穴内北東寄りに柱が遺存する。柱径は約0.10mで、検出時にはやや西向きに傾いていた。

#### 包含層出土遺物（図560、図版128）

この他包含層出土遺物として黒色土器碗（図560-6）等が出土した。6は黒色土器A類で9世紀中頃のものとみられる。

#### 4. 第4遺構面（図562、図版35）

第4遺構面は、基本層序における3-3面に対応するとみられる遺構面である。

第4遺構面の調査で確認した遺構は、土坑32基、柱穴2基、水田6面を検出した（図562）。各水田の面積は約10m<sup>2</sup>～61m<sup>2</sup>である。また、第3遺構面で検出した1577河川はこの遺構面の段階から既に存在していたものと見られる。調査区北東側で水田面を検出した以外は遺構の分布が希薄で、出土遺物にも乏しく消極的であるが、他の遺構面との対応関係等から飛鳥時代以降の遺構面とみる。

遺構面の標高は調査区内の北東隅T.P.+2.775m、北西隅T.P.+2.807m、南東隅T.P.+2.903m、南西隅T.P.+2.773mであった。主な遺構の詳細は次のとおりである。

1990柱穴（図563） 最大径0.30m、深さ0.11mで円形を呈する。調査区南東寄りに位置する。断面観察で腐滅した柱痕を確認した。観察した柱径は約0.08mである。

1996柱穴（図563） 最大径0.33m、深さ0.25mで円形を呈する。調査区南西寄りに位置する。断面観察で腐滅した柱痕を確認した。観察した柱径は約0.11mである。

包含層出土遺物（図563、図版128） 包含層出土遺物として須恵器甕（図563-1）、須恵器高杯（図563-2）、須恵器环身（図563-3）、土師器甕（図563-4）等が出土した。古墳時代から飛鳥時代にかけてのものである。

#### 5. 第5遺構面（図564、図版35）

第5遺構面は、基本層序における4-1面に対応する遺構面である。第5遺構面の調査で確認した遺構は、古墳時代後期から飛鳥時代のもので、流路1本、溝8本、土坑2基、水田22面を検出した（図564）。調査区北半に東西方向の溝（2042流路）が流れ、その両岸で調査区全面に水田面を検出した。各水田の面積は約8m<sup>2</sup>～60m<sup>2</sup>である。水田はいずれも畦畔が良好に残存し、洪水砂と思われる灰～灰白色砂層に覆われた状態で検出されたが、2042溝の南側の西部では、第3遺構面1577河川による削

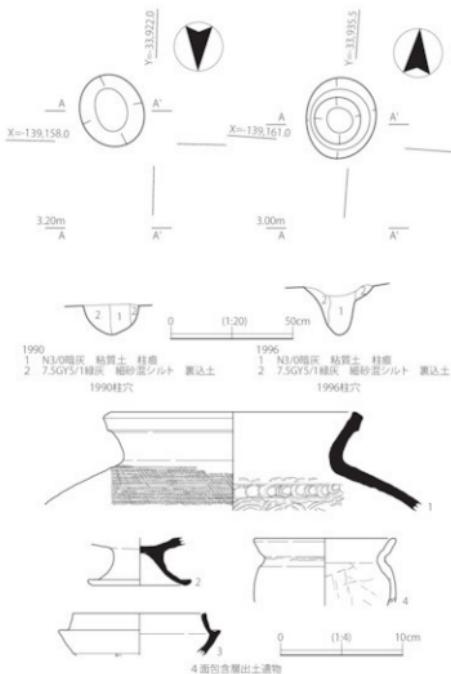


図563 3区 第4遺構面 1990・1996 柱穴平・断面図

包含層出土遺物

平で水田畦畔は検出されなかった。遺構面の標高は調査区内の北東隅 T.P. + 2.529 m、北西隅 T.P. + 2.742 m、南東隅 T.P. + 2.620 m、南西隅 T.P. + 2.419 m であった。主な遺構の詳細は次のとおりである。

2042 流路（図 564） 検出長 34.25 m、幅 2.77 m、深さ 0.24 m で東から西へとやや北向きに蛇行し流れれる流路である。調査区北半に位置し水田に水を供給する機能を有していたとみられる。

2037 溝（図 565、図版 35・128） 長さ 3.82 m、幅 0.73 m、深さ 0.22 m で調査区北東部に位置する。南北方向で直線形を呈する溝である。南端で東西方向の溝（2038 溝）と接続し、全体では L 字形を呈する。2042 流路から水田への水供給に関連する溝とみられる。木製船材を転用した材を導水に用いている。遺物は須恵器环身（図 565-1）、木製船材（図 565-2）等が出土した。1 は古墳時代後期後半のものである。2 はやや反りを持ち、図面上部には波状の加工があり、図面下部に方形孔と切れ込み加工がある。表裏とも手斧による加工痕が明瞭に観察できる。準構造船の底部材の再加工転用品と見

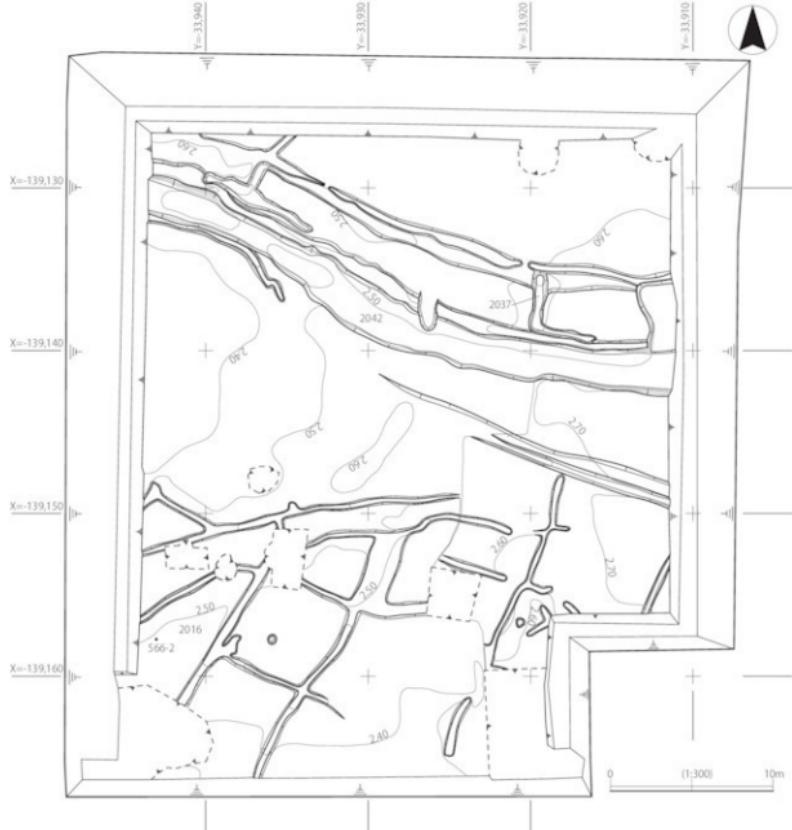


図 564 3 区 第 5 遺構面 平面図

られる。

包含層出土遺物（図 566、図版 128） 包含層出土遺物として須恵器蓋（図 566－1）、須恵器壺（図 566－2）等が出土した。飛鳥時代のものである。2は2016水田の範囲内で出土したが、水田存続時より上層の土層で出土したもので、水田に直接属するものではなかった。

#### 6. 第6遺構面（図 567・568、図版 36）

第6遺構面は、基本層序における4-2面に対応する遺構面である。第6遺構面の調査で確認した遺構は、古墳時代後期後半以降のもので、流路1本、溝3本、しがらみ1箇所、流路の氾濫部1箇所、土坑2基、水田22面、水口4箇所を検出した（図 567）。調査区北半に東西方向の溝（2048流路）が流れ、その両岸で調査区全面に水田面を検出した。各水田の面積は約41m<sup>2</sup>～84m<sup>2</sup>である。水田はいずれも畦畔が良好に残存し、洪水砂と思われる灰～灰白色砂層に覆われた状態で検出された。多くの水田で足跡・農具痕・根株痕等が明瞭に検出され、2055水田と2057水田の一部でこれらを掘削・図化した（図 567）。このうち2055水田では半月状の農具痕が連続した状態で観察された。農具痕の大きさは長軸0.20m×短軸0.12mであった。また2047水田では古墳時代後期後半の須恵器环身が出土した（図 568－2）。遺構面の標高は調査区内の北東隅T.P.+2.291m、北西隅T.P.+2.229m、南東隅T.P.+2.404m、南西隅T.P.+2.065mであった。主な遺構の詳細は次のとおりである。

2048 流路（図 568、図版 36・128） 検出 できた長さ34.68m、幅3.73m、深さ0.33mで東から西へと、やや北向きに蛇行して流れる流路である。調査区北半に位置する。水田に水を供給する機能を有していたとみられる。遺物は須恵器環蓋（図 568－1）等が出土した。

2078 しがらみ（図 568、図版 36） 検出 できた規模南北7.48m、東西2.40m、深さ0.67mの土坑状

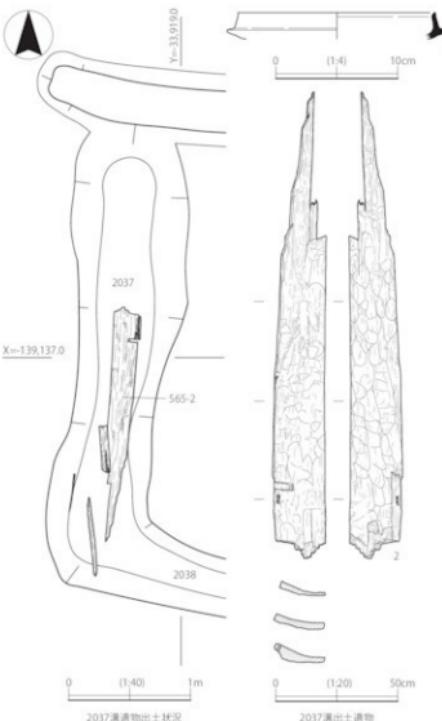


図 565 3区 第5遺構面 2037溝平面図・出土遺物

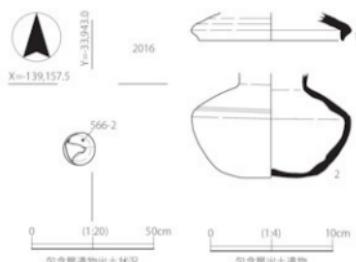


図 566 3区 第5遺構面 包含層遺物出土状況図・出土遺物

の遺構内南半を中心に、41 本の杭が遺構肩部寄りに配置され、そこに東西方向に木材が何本か横たえられたもので、2048 流路に関連するしがらみとして機能したものとみる。

2079 沼濱部（図 568） 東西 11.63 m、南北 8.51 m の不整形な範囲で、厚さ 0.08 m ほど灰黄色粗砂が堆積していて、これは 2048 流路から供給されていた。流路南側肩部には幅 4.48 m にわたって遺構肩である水田耕土と同質の土層が存在せず灰黄色粗砂のみが堆積している部分があり、この部分は 2048 流路が沼濱し灰黄色粗砂が供給されたものと判断した。

#### 7. 第 7 遺構面（図 569、図版 36）

第 7 遺構面は、基本層序における 4-3 面に対応する遺構面である。第 7 遺構面の調査で確認した遺構は、古墳時代後期後半以降のもので、流路 1 本、溝 1 本、水田 17 面、水口 19 箇所を検出した（図 569）。調査区北半に東西方向の溝（2100 流路）が流れ、その両岸で調査区全面に水田面を検出した。

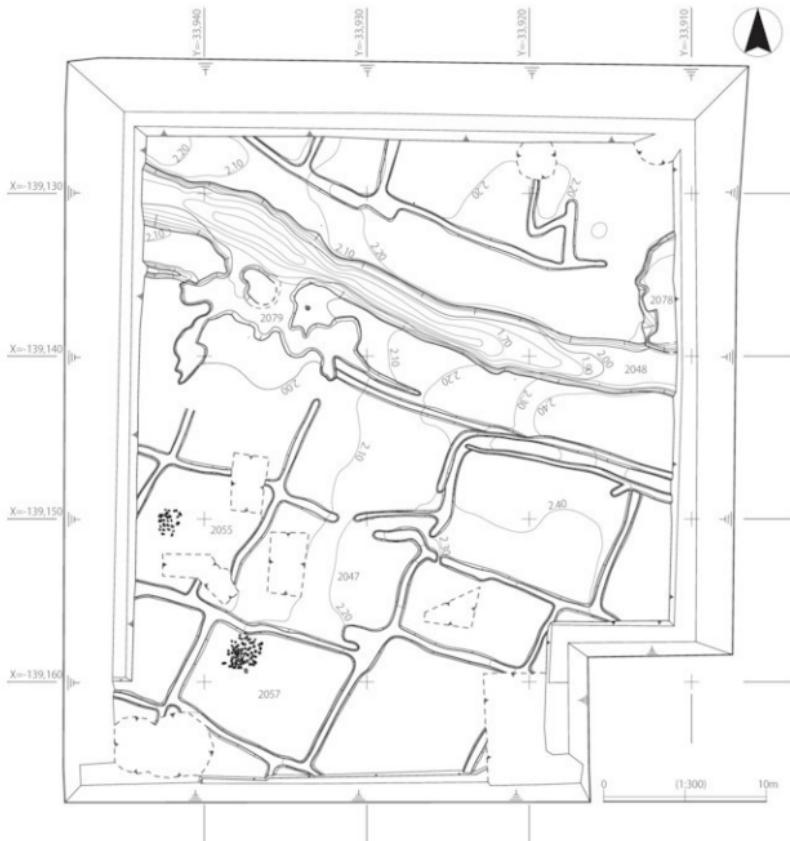


図 567 3区 第6遺構面 平面図

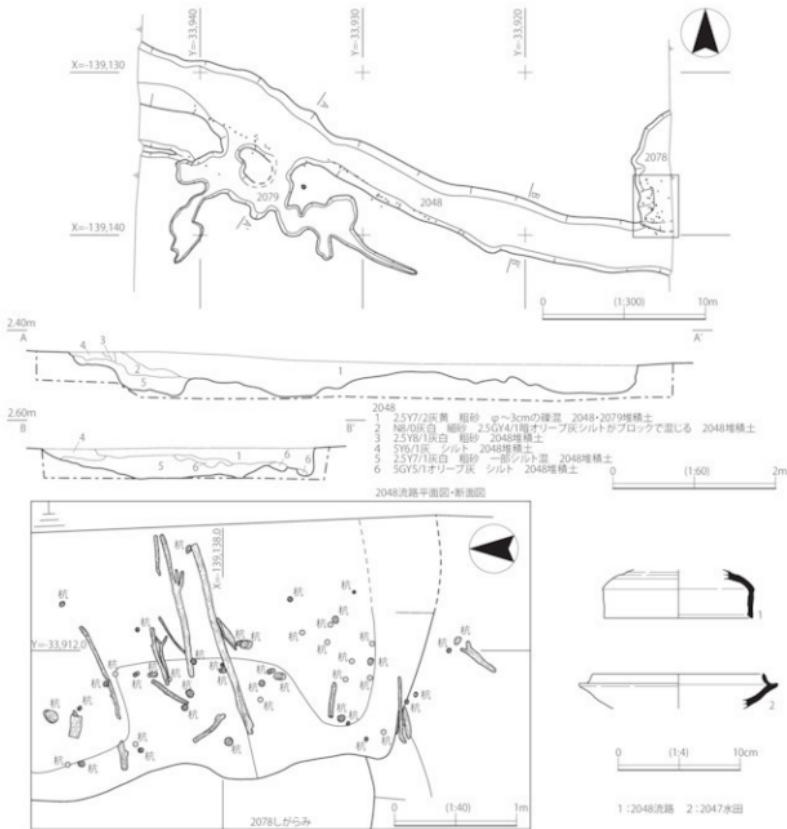


図 568 3 区 第6遺構面 2048 流路・2078 しがらみ平・断面図・2047 水田・2048 流路出土遺物

各水田の面積は約 31 m<sup>2</sup>～136 m<sup>2</sup>である。水田はいずれも畦畔が良好に残存し、洪水砂と思われる灰～灰白色砂層に覆われた状態で検出された。遺構面の標高は調査区内の北東隅 T.P. + 1.745 m、北西隅 T.P. + 1.742 m、南東隅 T.P. + 1.850 m、南西隅 T.P. + 1.683 m であった。主な遺構の詳細は次のとおりである。

2100 流路（図 570、図版 128） 検出できた長さ 31.90 m、幅 4.46 m、深さ 0.52 m で東から西へと、やや北向きに蛇行して流れる流路である。水田に水を供給する機能を有していたとみられる。調査区北半に位置する。両岸に堤防状の盛土を有し、盛土の外側内側ともに杭列を検出した。この杭列は土留めの機能を有していたとみられる。遺物は須恵器環（図 570-1）、土師器鉢（図 570-2）、土師器把手（図 570-3・4）等が出土した。1 は 6 世紀後半のものである。3 は器壁の傾きから鍋の把手と見られる。4 は鍋もしくは櫃の把手である。

水田面出土遺物（図 570、図版 36・128） 水田面出土遺物としては用途不明木製品（図 570-5）、土師器甕（図 570-6・7）、土製脚部（図 570-8）等があった。5は2082水田の水口近辺から出土したもので、上部に孔をあけていて、下端部にも加工があり図示した形状でほぼ完形である。6は2094水田から出土した。7は2100流路北側堤防の脇から出土した。8は土製品の脚部片で、底面に意図的な凹みがある。

#### 8. 第8遺構面（図 571、図版 36）

第8遺構面は、基本層における5-1面に対応する遺構面である。第8遺構面の調査で確認した遺構は、古墳時代後期中頃～後半のもので、流路1本、流路の堤防修築部1箇所、水田25面、水口11箇所を検出した（図 571）。調査区北半に東西方向の溝（2136流路）が流れ、その両岸で調査区全面に水田面を検出した。各水田の面積は約11m<sup>2</sup>～80m<sup>2</sup>である。水田はいずれも畦畔が良好に残存し、洪

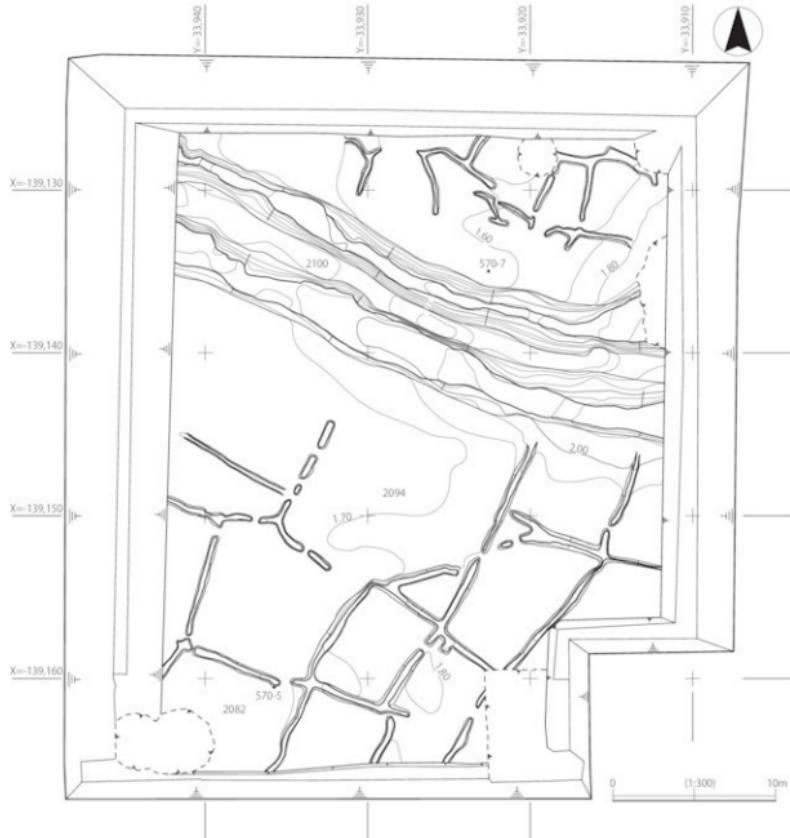


図 569 3区 第7遺構面 平面図

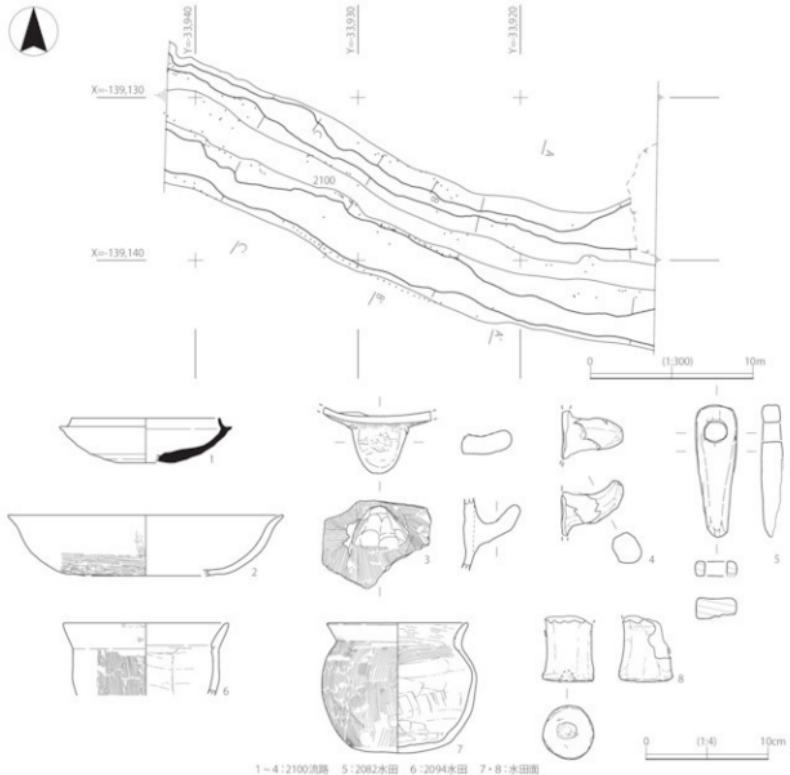


図 570 3区 第7遺構面 2100流路平面図・第7遺構面出土遺物

水砂と思われる灰～灰白色砂層に覆われた状態で検出された。遺構面の標高は調査区内の北東隅T.P.+1.729 m、北西隅T.P.+1.688 m、南東隅T.P.+1.614 m、南西隅T.P.+1.423 mであった。主な遺構の詳細は次のとおりである。

2136 流路（図 572・図版 128） 検出できた長さ 31.97 m、幅 4.27 m、深さ 0.81 mで東から西へと、やや北向きに蛇行して流れる流路である。調査区北半に位置する。水田に水を供給する機能を有していたとみられる。両岸に堤防状の盛土を有し、盛土の外側内側ともに杭列を検出した（図 572 上に点で表現）。この杭列は土留めの機能を有していたとみられる。遺物は流路内から須恵器壺蓋（図 572-1）、土師器壺（図 572-2）等が、流路南側堤防内から須恵器壺蓋（図 572-3）、土師器壺（図 572-4）、土師器鉢（図 572-5）、鞆羽口（図 572-6）等が出土した。3は南側堤防内や西寄りからほぼ完形で出土し、堤防構築時の祭祀等何らかの理由で意図的に堤防内に埋めたものと見られる。6は先端部に溶着した滓がみられる。

2156 堤防修築部（図 572・575、図版 36・128） 長軸 9.00 m、短軸 2.68 mの範囲で、堤防上面から

最大で深さ 1.19 m 堤防が決壊し、その後第7遺構面への移行と同時に、決壊時もたらされた粗砂層の流路肩部側を補強する形で修築されていた。この決壊は第8遺構面の廃絶と直接かかわる洪水による可能性が高い。修築時には流路肩部に灰色粘土を積み重ね（図 575 – 33 ~ 35 層）、木杭と木材で補強し、その外側に周辺水田の復旧で出たであろう土を盛り（図 575 – 26 ~ 29, 31, 32, 36, 37 層）、堤防を復旧させていた。

2137 水田（図 573、図版 37） 東西 11.51 m、南北 6.93 m、面積約 79.8 m<sup>2</sup> の長方形を呈する水田で、足跡痕跡が明瞭に観察された。このうち足跡の痕跡が特に明瞭に観察できた一部分を図化した（図 573）。の中では連続する足跡が 4 組観察され、そのうち図に最も薄いトーンで示した 1 組は南西から北東へと 6 つの足跡が連続するものであった。更に特に明瞭であった 4箇所の足跡を掘削調査した。これらはいずれも指の跡まで明瞭に観察された。そのうち、6 つの足跡が連続するうちの連続する 2ヶ

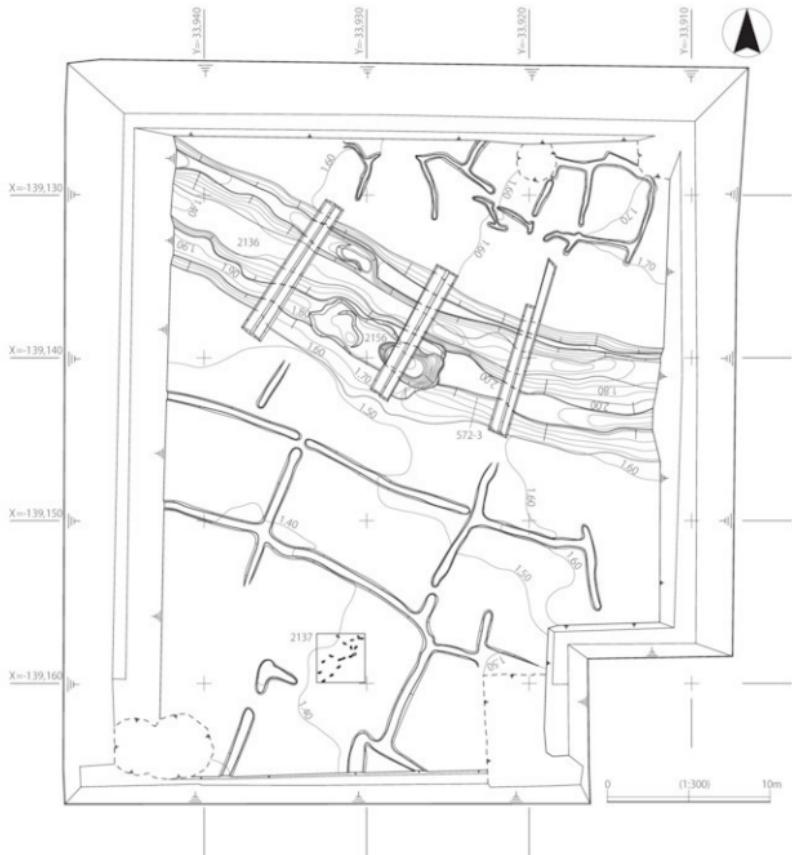


図 571 3 区 第8 遺構面 平面図

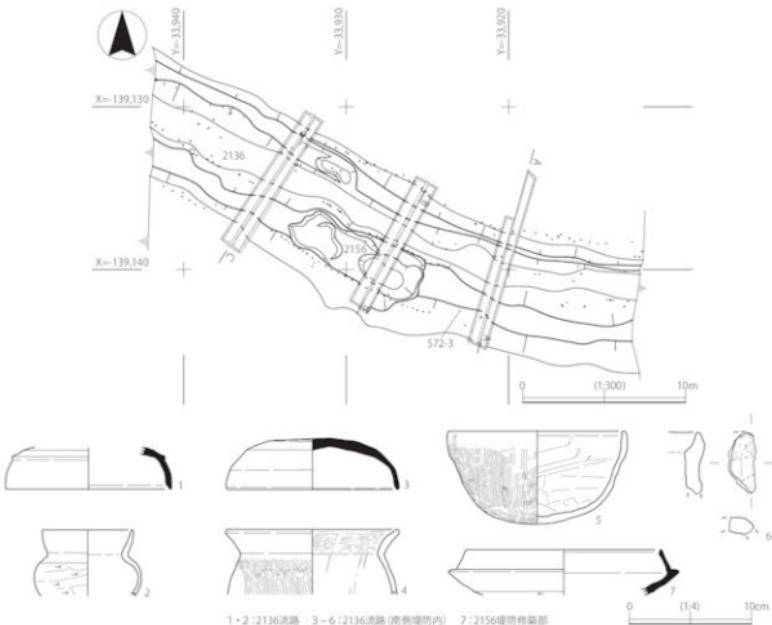


図 572 3区 第8遺構面 2136流路平面図・出土遺物

所を調査したものは、足跡の大きさは右足で23.3cmあり、歩幅は52.4cmであった。

#### 9. 第9遺構面（図574、図版37）

第9遺構面は、基本層序における5-2b面に対応する遺構面である。第9遺構面の調査で確認した遺構は、古墳時代後期以前のもので、流路1本、流路の堤防修築部2箇所、溝1本、水田14面、水口5箇所を検出した（図574）。調査区北半に東西方向の溝（2163流路）が流れ、その両岸で調査区全面に水田面を検出した。各水田の面積は約74m<sup>2</sup>～146m<sup>2</sup>である。水田はいずれも畦畔が良好に残存し、洪水砂と思われる灰～灰色砂層に覆われた状態で検出された。

遺構面の標高は調査区内の北東隅T.P.+

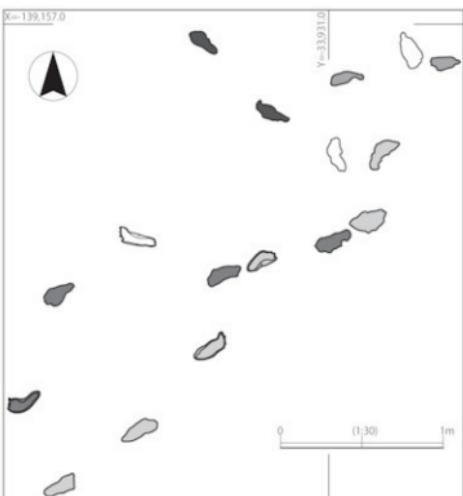


図 573 3区 第8遺構面 2137水田足跡平面図

1.568 m、北西隅 T.P. + 1.563 m、南東隅 T.P. + 1.155 m、南西隅 T.P. + 1.142 m であった。主な遺構の詳細は次のとおりである。

2163 流路（図 575・579・580、図版 37・129） 検出できた長さ 34.68 m、幅 3.73 m、深さ 0.72 m で東から西へと、やや北向きに蛇行して流れる流路である。調査区北半に位置する。水田に水を供給する機能を有していたとみられる。両岸に堤防状の盛土を有し、盛土の外側内側ともに杭列を検出した（図 575 上に点で表現）。遺物は土器類では須恵器壺蓋（図 579-1～6）、須恵器罐（図 579-7）、土師器鉢（図 579-8～13）、土師器甕（図 579-14～16）等が出土した。4 は天井部外面にヘラ書き記号がある。6 は天井部内面に當て具痕がある。12 は把手がつく可能性があるが、残存部に痕跡がなく断定できない。出土遺物は古墳時代後期にまとまりをもつ。本製品としては扉材（図 580-1）、槽（図 580-2）、鋤未製品（図 580-5）等が出土した。1 は堤防の補強材として使用されていた

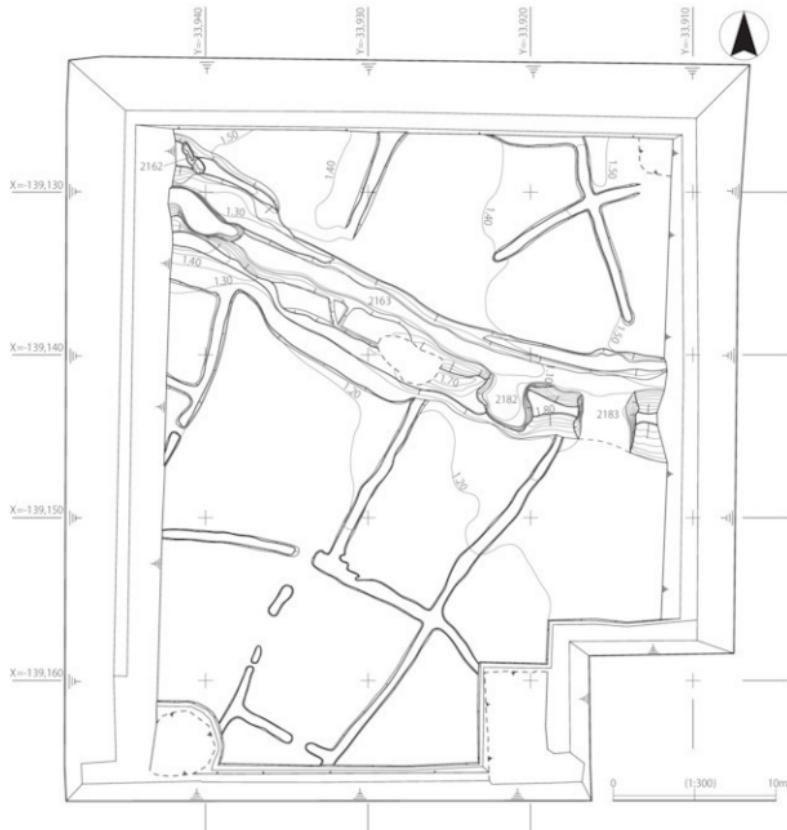
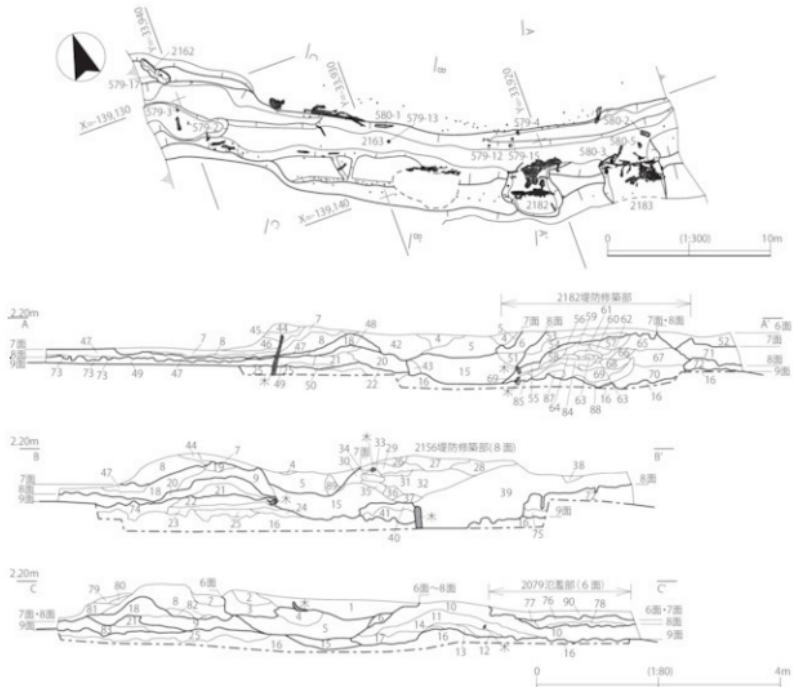


図 574 3 区 第9遺構面 平面図



- 2163  
 1 2.5Y7/2灰質 粗砂 φ~3cmの礫混土 2048堆積土  
 2 NB/0灰白 細砂 2.5G/Y4/1灰白オーリープ灰シルトが  
 ブロックで混じる。2048堆積土  
 3 2.5Y7/1灰床 白砂 一部シルト層 2048堆積土  
 4 2.5G/Y5/1灰白 シルト 2100堆積土  
 5 5Y7/2灰白 粗砂 2136堆積土  
 6 5G/Y5/1灰白 シルト 一部中砂混  
 2048灰質土  
 8 5Y7/1灰白 粗砂 シルトが若干混じる  
 ややまとる 2048灰質土  
 9 5Y7/1灰白 粗砂シルト 2100灰質土  
 10 10Y4/1灰白 粗砂 2136堆積土  
 2136堆積土 8面水田耕土  
 11 N3/3灰床 シルトに10Y6/1灰白シルトがブロックで  
 混じる 2136堆積土  
 12 7.5Y7/1灰白 粗砂 2136堆積土  
 13 7.5Y7/1灰床 細砂14層が層状に堆積する  
 2136堆積土  
 14 10Y4/1灰白 シルト 2136堆積土  
 2.5G/Y2/1灰白 粗砂 2136堆積土  
 16 5Y7/2灰白 粗砂 9面水田耕土  
 17 5Y8/1灰白 粗砂 一部5Y6/7灰シルトが層状に  
 混じる 2136堆積土  
 18 10Y4/1灰白 シルト 2136堆積土  
 19 7.5Y6/1灰白 シルト 2100堆積土  
 20 10Y4/1灰白 粗砂シルト 2136堆積土  
 21 5Y5/1灰白 シルト 2136堆積土  
 22 5Y7/1灰白 粗砂 2136堆積土  
 23 10Y3/1灰白 粗砂 中砂混粘土 2163堆積土  
 24 5Y4/2灰オーリープ 細砂 2163灰質土  
 25 5Y7/1灰白 粗砂 2163灰質土  
 26 2.5G/Y5/1灰白 シルトに10Y4/1灰シルトがブロック  
 で混じる 2100堆積土  
 27 5Y5/2灰オーリープ 粗砂に10Y4/1灰粘土が大きめの  
 ブロックで混じる 2100堆積土  
 28 5Y5/2灰オーリープ 粗砂 5Y4/1灰シルトが  
 ブロックで混じる 2100堆積土  
 29 7.5Y4/1灰 粘土 2100堆積土
- 30 10Y4/1灰 シルト 木質を多量に含む  
 2100堆積土の押さえ土  
 31 5Y4/2灰オーリープ 中砂 10Y4/1灰粘質土が  
 ブロックで混じる 2100堆積土  
 32 5Y5/2灰オーリープ 粗砂に5Y4/1灰粘土が  
 ブロックで混じる 2100堆積土  
 33 10Y4/1灰 粘土 2100堆積土  
 34 5Y4/2灰オーリープ 粗砂 2100堆積土  
 35 5Y4/1灰白 粗砂 2100堆積土  
 36 32層と37層がブロックで混じる 2100堆積土  
 37 N4/0灰白 シルト 2100堆積土  
 38 5Y5/1灰白 粗砂 2100堆積土  
 39 5Y5/1灰白 シルト 2136堆積土  
 40 N3/0灰白 粗砂シルト 2136堆積土  
 41 5Y5/1灰白 粗砂 2136堆積土  
 42 5Y6/1灰白 粗砂 2136堆積土  
 43 5Y6/1灰 シルト 2136堆積土  
 44 5Y7/1灰白 粗砂 2048堆積土  
 45 5Y7/1灰白 粗砂 2136堆積土  
 46 5Y7/1灰白 シルト 2136堆積土  
 47 N4/0灰白 粘土 7面水田耕土  
 48 2.5G/Y6/1灰白 シルト 2136堆積土  
 49 φ~1cmの粗砂 2136堆積土  
 50 10Y4/1灰白 粗砂 2136堆積土  
 51 10Y4/1灰白 シルト 2136堆積土  
 52 7.5Y6/2灰オーリープ シルト 一部中砂混  
 合水耕土  
 53 7.5Y4/1灰白 粗砂 一部細砂混 2136堆積土  
 54 7.5Y5/1灰白 シルト 一部7.5Y8/1灰白シルトが  
 混じる 2136堆積土  
 55 2.5Y8/1灰白 粗砂 5Y6/1灰シルトが層状に  
 混じる 2136堆積土  
 56 2.5Y8/1灰白 粘土 2136堆積土  
 57 10Y5/1灰白 中砂混粘土に5Y7/2灰白中砂が  
 混じる 2182堆積土  
 58 10Y5/1灰白 中砂混シルト 混じる中砂は  
 56層よりやや多い 2182堆積土  
 59 5Y5/1灰 中砂混シルト シルトと中砂が  
 56層程度混りきっていない 2182堆積土
- 60 5Y5/1灰 中砂混シルト 59層よりシルトが  
 やや多い 2182堆積土  
 61 5Y5/2灰オーリープ 中砂混シルト 質は58層に似る  
 2182堆積土  
 62 5Y4/1灰 中砂混シルト シルトが60層より多い  
 2182堆積土  
 63 5Y6/2灰オーリープ 中砂混シルト 2182堆積土  
 64 5Y7/2灰オーリープ 中砂混シルト 63層より中砂が多い  
 2182堆積土  
 65 5Y7/4/1灰白オーリープ灰 中砂混粗砂質土 2182堆積土  
 66 5Y4/2灰 シルト 中砂混シルト 2182堆積土  
 67 5Y7/1灰白 粗質土に5Y7/2灰白中砂がブロックで混じる  
 2182堆積土  
 68 5Y7/1灰白 粗質土 2182堆積土  
 69 N7/0灰白 粗砂に極端な層状に多量に混じる  
 2182堆積土  
 70 2.5Y7/1灰白 粗砂 2182堆積土  
 71 5Y7/1灰白 粗砂 ジルト 2182堆積土 7面水田耕土  
 72 5Y3/1灰白オーリープ 粗砂 シルト ややまとる 8面水田耕土  
 73 2.5Y7/1灰白 粗砂 2182堆積土  
 74 2.5Y7/1灰白 粗砂土 粘質土に2.5Y7/2灰白粗砂がブロックで  
 混じる 2182堆積土  
 75 2.5Y4/1灰白 粗砂シルト 2182堆積土  
 76 2.5Y4/1灰白 中砂混粗砂質土 7面水田耕土  
 77 2.5Y6/2灰黄 細砂混シルト  
 78 2.5Y6/1灰白 粗砂 2182堆積土  
 79 2.5Y6/1灰白 シルト 2048堆積土  
 80 2.5Y6/1灰白 粗砂と層状の粗砂質土 2048堆積土  
 81 5Y3/2灰白 粗砂 2048堆積土  
 82 5Y3/2灰白オーリープ 粗砂 2048堆積土  
 83 5Y4/1灰 中砂に粗質土が所々混じる 2136堆積土  
 84 10Y/R3/1灰白 植物遺体混 2182堆積土  
 85 2.5Y7/2灰白 粗砂 一部中砂混 2182堆積土  
 86 5Y4/1灰白 粘土 2182堆積土  
 87 10Y/R3/1灰白 植物遺体混 2182堆積土  
 88 2.5Y9/1灰白 シルト 2100堆積土  
 89 2.5Y7/2灰白 粗砂 2079堆積土  
 90 2.5Y7/2灰白 粗砂 2079堆積土
- \* 31~35. 層間に薄く細筋が入る  
 \* 56~64. 質の似た底土の大きなまとまりとなる。

図 575 3区 第9遭構面 2163流路平・断面図



図 576 3区 第9遺構面 2182堤防修築部平・断面図

もので、門を通す部分がすり減っている。扉材として使用できなくなったため転用したとみられる。2は流路の東端底部付近からほぼ完形で出土した。

5面から9面にかけて検出した一連の流路はすべて基本的に同じ位置で検出していて、断面観察でもその連続性が確認でき、すべて同一の流路の各時期における状況を示すものと言える。他の面でも触れ

たようにその構築方法は中央部分の流路に対して周辺の水田耕土と同質の土を両側に盛り、その両側に杭を置き横板を設置して土留めとし堤防を構築していた。後述する堤防修築部では修築に敷葉工法が採用されていた。修築箇所以外でも敷葉を検出しており、この工法は堤防全体で用いられていたと思われる。流路が土砂で埋没していくと堤防を更に高くする行為を積み重ね、このように流路が連続することとなったものと見られる。

2182 堤防修築部(図 576・578、図版 37・38) 幅 3.77 m の範囲で、2163 流路の堤防が深さ 0.62 m 決壊し、その後に修築されたものである。修築には樹皮もしくはアシ等の草本等を用いた敷葉工法が使用されており、用いられた敷葉を部分的に検出した。その工法は①洪水等でもたらされた粗砂(図 576-70 層)が残る堤防決壊部に杭を 2 列に設置、②杭の内側に土留め用の木材を設置、③ 2 列の杭の間に敷葉を行う(図 576-87・88 層)、④砂と植物をその上に盛る(図 576-69・85 層)、⑤ 2 列の杭の間に再度敷葉を行う(図 576-84・68 層)、⑥ 2 列の杭の外側に土を盛る(図 576-67 層)、⑦ 2 列の杭の外側の土盛に付け加える形で流路側へと土を盛っていく(図 576-55・58～64・66 層)、⑧ 2 列の杭の外側で土を上にさらに盛る(図 576-65 層)、⑨ 2 列の杭の外側の土盛に付け加える形で流路

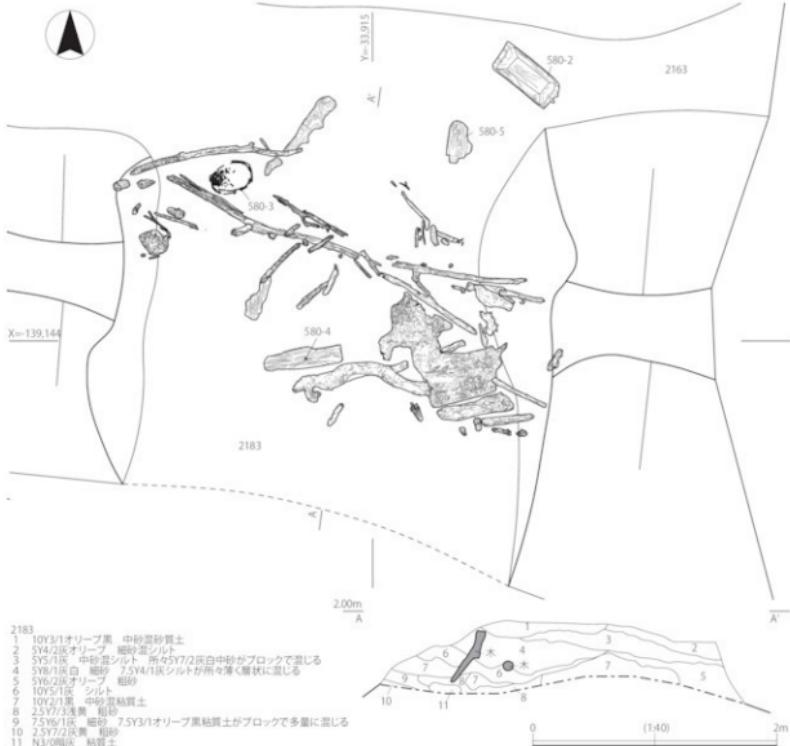


図 577 第 9 遺構面 2183 堤防修築部平・断面図

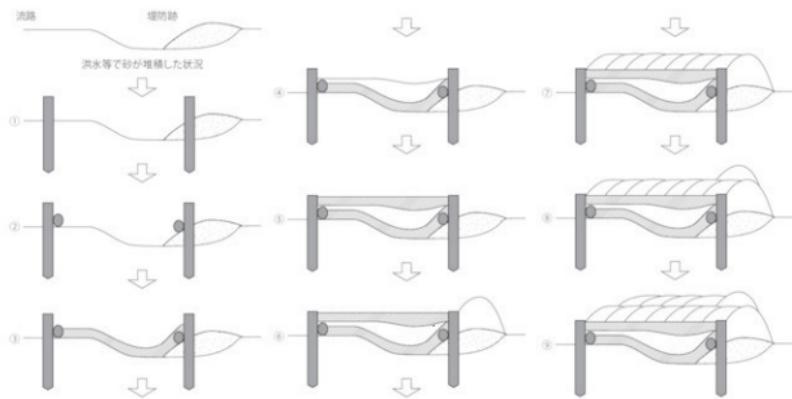


図 578 3区 第9遺構面 2182 堤防修築部模式図

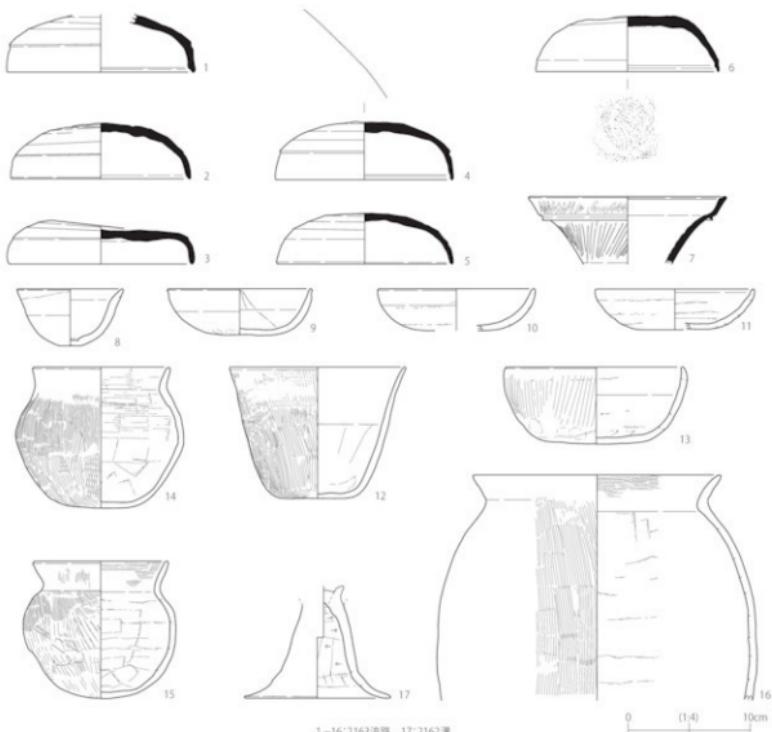


図 579 3区 第9遺構面 2163 流路・2162溝出土遺物

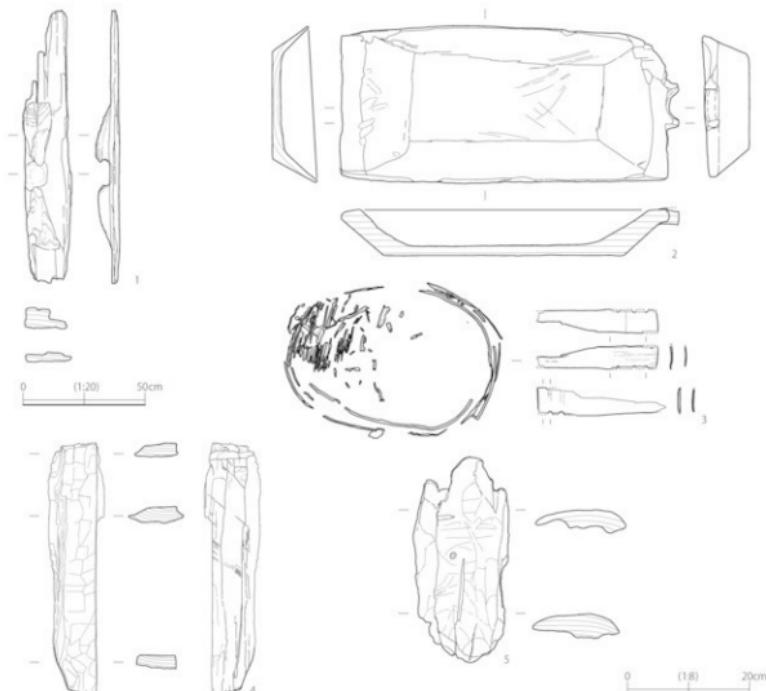


図 580 3区 第9遺構面 2163流路・2183堤防修築部 出土遺物

側へと土を盛っていく(図576-56・57層)、という工程をとっていた(図578)。

2183堤防修築部(図577・580、図版129) 幅3.80mの範囲で、2163流路の堤防が深さ0.71m決壊し、その後に修築されたものである。修築には2182堤防修築部同様樹皮もしくはアシ等の草本等を用いた敷葉工法が使用されており、用いられた土の内部から木製曲物(図580-3)、加工木材(図580-4)等が出土した。3は遺存状態が悪く取り上げ時に細片となったが、検出時には長径約35cm、短径約25cmの楕円形を呈していた曲物である。曲物材の幅は3.8cmで、棒の接合部にあたる端部には紐等を引掛けるための加工が片面は2ヶ所、もう片面は3ヶ所つけられていた。また端部のうち一方には紐状のものが巻かれていた痕

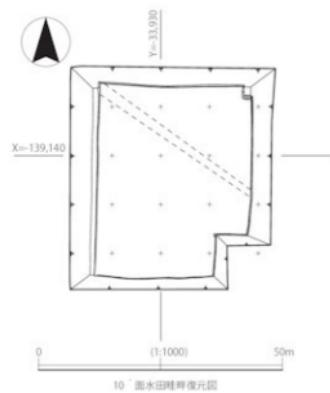


図 581 3区 第10' 遺構面 畦畔平面図

跡があった。曲物底部の遺存はなかった。

2162溝(図575・579、図版129) 長さ2.16m、幅0.70m、深さ0.21mの溝である。調査区北西端付近に位置する。2163流路の北側堤防状に位置し、流路からの導水溝である可能性がある。土師器高环(図579-17)等が出土した。

#### 10. 第10' 遺構面(図581)

調査中には面としては確認することができず、第10' 遺構面到達後に断面調査においてその存在を確認した。基本層序における6-1面に対応し、弥生時代中期の水田面である(図581)。弥生時代の遺構面であるため、古墳時代の遺構面である第9' 遺構面と明確に区別するため、名称を第10' 遺構面とした。

遺構は、中期に属する大畦畔を1基確認した。この畦畔は、調査区の中央北寄りを南東から北西方向へと向かっている畦畔で、南東側での幅1.30m、高さ0.34m、北西側での幅2.28m、高さ0.54mで、



図582 3区 第10' 遺構面 平面図

推定できた長さは40.2mである。この畦畔を規範として、他の調査区に見られたような区画の水田が展開していたものとみられるが、本調査区においては検出することが出来なかった。

11. 第10遺構面（図582、図版38）

第10遺構面は、基本層序における6-4b面に対応する遺構面で、弥生時代中期の遺構面である。第10遺構面の調査で確認した遺構は、流路3本、溝11本、土坑377基、柱穴67基（うち復元できた掘立柱建物4棟、杭列9基）である（図582）。遺構面の標高は調査区内の北東隅T.P.+0.505m、北西隅T.P.+0.436m、南東隅T.P.+0.270m、南西隅T.P.+0.149mであった。調査区の全面で集落面を確認したが、遺物の出土は遺構検出数に比して少量であった。主な遺構の詳細は次のとおりである。掘立柱建物7（図583） 梁間1間、桁行2間の建物で、梁間2.43m、桁行2.51mである。柱間は桁行1.05～1.48mである。柱穴は5カ所認められ、北側中央のものは検出できなかった。柱穴掘形は長径0.28～0.4mの円形で、柱穴底はT.P.+0.116～0.211mであった。調査区の北西に位置する。

掘立柱建物 8 (図 583) 梁間 1 間、桁行 2 間の建物で、梁間 1.60 m、桁行 4.65 m である。柱間は桁

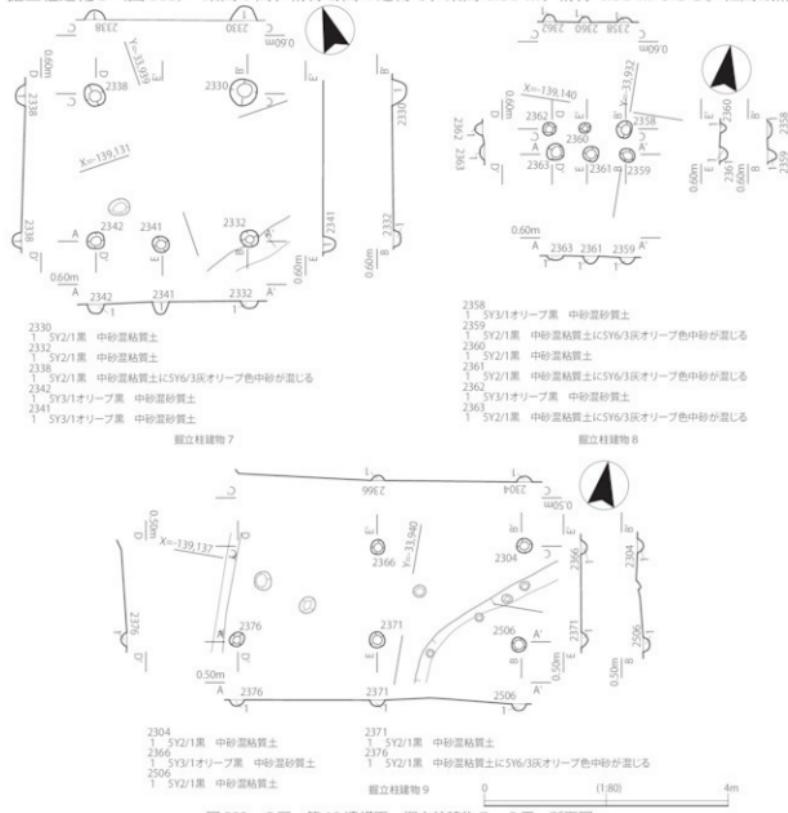


図 583 3区 第10遺構面 掘立柱建物7~9平・断面図

行 $2.30 \sim 2.38$  mである。柱穴は5力所認められ、北西隅のものは検出できなかった。柱穴掘形は長径 $0.27 \sim 0.19$  mの円形で、柱穴底はT.P. + 0.045 ~ 0.148 mであった。調査区の北寄り西端に位置する。

掘立柱建物9（図583） 梁間1間、桁行2間の構造物で、梁間0.43m、桁行1.27mである。柱間は桁行0.60～0.67mである。柱穴は6カ所認められた。柱穴掘形は長径0.24～0.26mの円形もしくは梢円形で、柱穴底はT.P.+0.131～0.223mであった。調査区の中央西寄りに位置する。建物と呼ぶには規模が小さく、何らかの構造物と見られる。

掘立柱建物 10 (図 584) 梁間 1 間、桁行 2 間の建物で、梁間 2.73 m、桁行 4.81 m である。柱間は桁行 2.02 ~ 2.65 m である。柱穴は 6 力所認められた。柱穴掘形は長径 0.27 ~ 0.33 m の円形で、柱穴底は T.P. + 0.104 ~ 0.259 m であった。調査区の西端に位置する。

杭列5 (図585) 長さ3.83 mで、柱穴3基からなる南西-北東方向の杭列である。柱穴間隔は1.83~2.00 mで、柱穴掘形は長径0.23~0.29 mの円形もしくは不整形で、柱穴底はT.P.+0.318~0.414 mであった。調査区の東寄りに位置する。

杭列6（図585）長辺7.27m×短辺5.61mで、柱穴11基からなる。南西-北東方向の杭列と北西-南東方向の杭列が、東角で柱穴を共有している。柱穴間隔は0.81～1.68mで、柱穴掘形は長径0.24～0.30mの円形もしくは椭円形で、柱穴底はT.P.+0.131～0.276mであった。柱穴のうち2305柱穴一基のみ腐食した柱痕が観察され、その直径は0.07mであった。調査区の中央付近に位置する。

杭列7（図585）長さ3.48mで、柱穴5基からなる北西—南東方向の杭列である。柱穴間隔は0.77～0.97mで、柱穴掘形は長径0.20～0.34mの円形もしくは楕円形で、柱穴底はT.P.+0.195～0.268mであった。調査区の中央西寄りに位置する。

杭列8（図586）長さ1.68mで、柱穴3基からなる南西-北東方向の杭列である。柱穴間隔は0.69~0.99mで、柱穴掘形は長径0.24~0.26mの円形もしくは楕円形で、柱穴底はT.P.+0.148~0.264mであった。調査区の中央西寄りに位置する。

杭列9（図586）長さ2.48mで、柱穴5基からなる東西方向の杭列である。柱穴間隔は0.52～0.74mで、柱穴掘形は長径0.23～0.31mの円形もしくは楕円形で、柱穴底はT.P.+0.161～0.241mであった。調査区の中央西寄りに位置する。

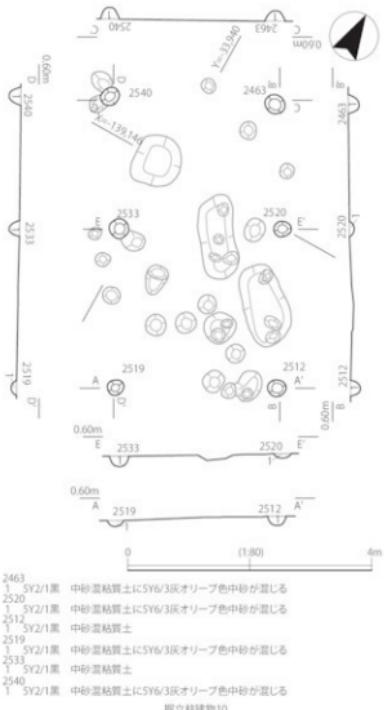


図 584 3区 第10遺構面 掘立柱建物10平・断面図

杭列 10 (図 586) 長さ 3.46 mで、柱穴 5 基からなる東西方向の杭列である。柱穴間隔は 0.64 ~ 1.18 mで、柱穴掘形は長径 0.23 ~ 0.31 mの円形で、柱穴底は T.P. + 0.158 ~ 0.218 mであった。調査区の中央西寄りに位置する。杭列 9 と杭列 10 は近接した位置でほぼ平行につくられており、何らかの通路等の構造物の存在を示す可能性があるとみられる。

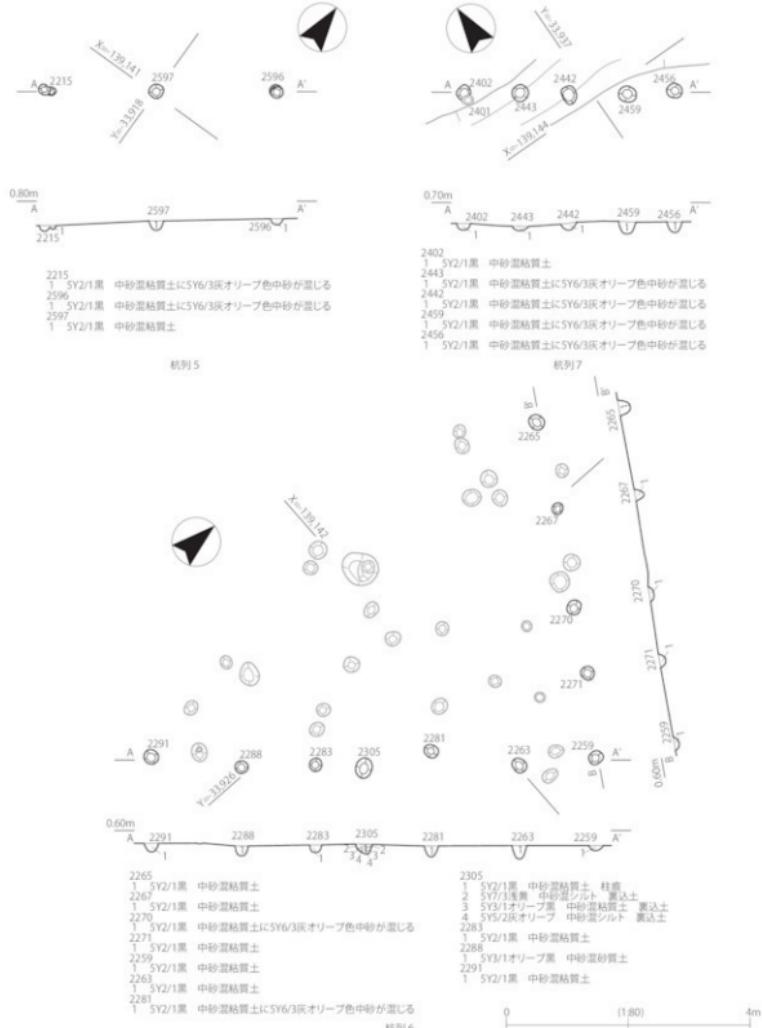


図 585 3 区 第 10 遺構面 杭列 5 ~ 7 平・断面図

杭列 11 (図 586) 長辺 1.90 m × 短辺 1.52 m で、柱穴 5 基からなる。東西方向の杭列と南北方向の杭列が、北西角で柱穴を共有している。柱穴間隔は 0.74 ~ 0.96 m で、柱穴掘形は長径 0.21 ~ 0.49 m の円形もしくは楕円形で、柱穴底は T.P. + 0.104 ~ 0.165 m であった。調査区の中央西端に位置する。

杭列 12 (図 586) 長さ 2.80 m で、柱穴 4 基からなる南北方向の杭列である。柱穴間隔は 0.83 ~ 1.08 m で、柱穴掘形は長径 0.24 ~ 0.36 m の円形で、柱穴底は T.P. + 0.047 ~ 0.182 m であった。調査区

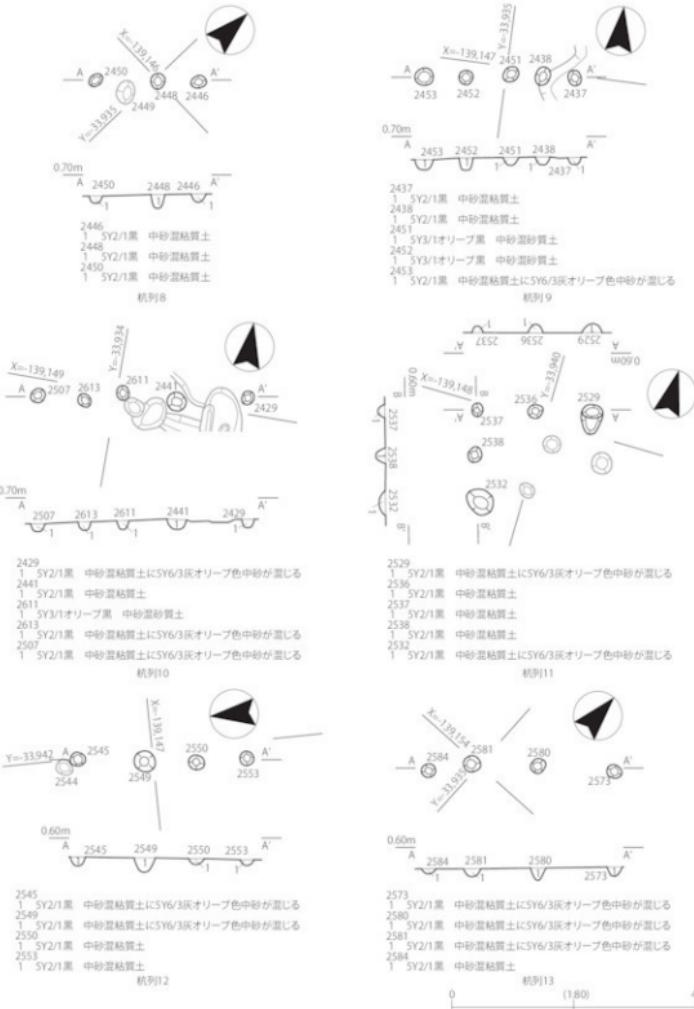


図 586 3区 第10構造面 桁列8~13平・断面図

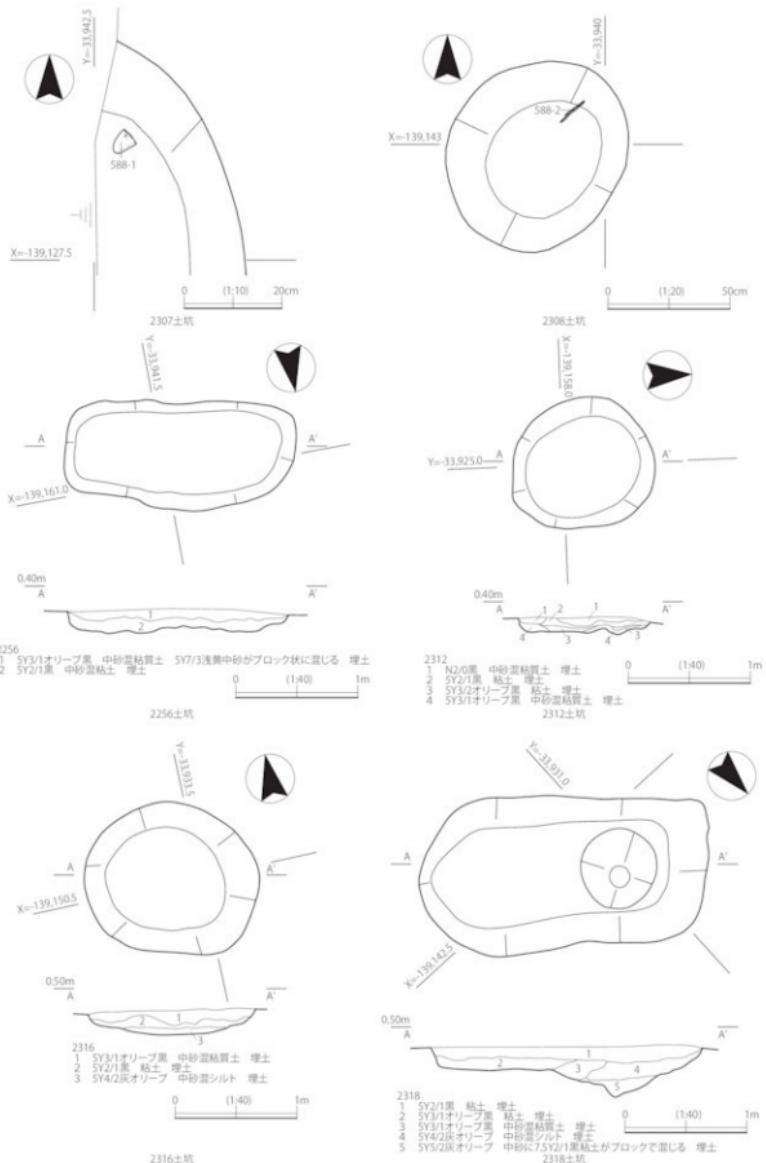


図 587 3区 第10遺構面 2256・2307・2308・2312・2316・2318 土坑平・断面図

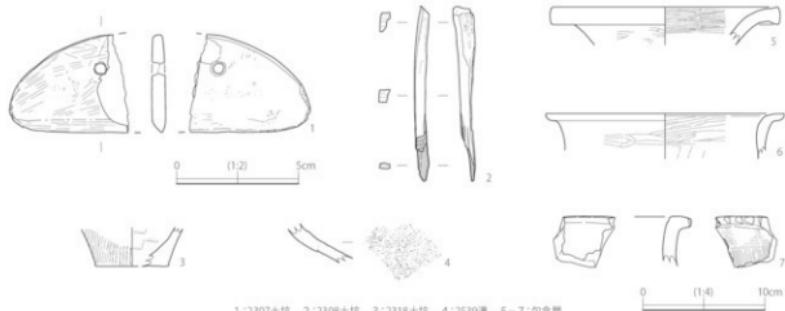


図 588 3区 第10遺構面 出土遺物

の中央西端に位置する。

杭列13(図586) 長さ3.06mで、柱穴4基からなる南西-北東方向の杭列である。柱穴間隔は0.76~1.28mで、柱穴掘形は長径0.24~0.27mの円形で、柱穴底はT.P.+0.071~0.177mであった。調査区の南西寄りに位置する。

2539溝(図582・588、図版129) 長さ0.74m、幅0.32m、深さ0.07mで断面U字状であり、東西方向に走る直線的な溝である。調査区の中央西端に位置する。遺物は弥生土器壺(図588-4)等が出土した。4は壺頸部片で、櫛描文が施されている。

2256土坑(図587) 長軸1.89m、短軸0.88m、深さ0.15mで隅丸方形を呈する。調査区の南西隅に位置する。

2307土坑(図587・588、図版38・129) 長軸0.87m、検出できた短軸0.30m、深さ0.12mで円形の遺構の約半分を検出した。調査区の北西隅に位置する。遺物は石庖丁(図588-1)等が出土した。1は緑泥片岩製である。

2308土坑(図587・588、図版38・129) 最大径0.81m、深さ0.16mで円形を呈する。調査区の中央西端に位置する。遺物は火付棒(図588-2)等が出土した。2は長さ14.3cmで下端が焼け焦げている。火鑽杵(火鑽棒)等として用いられ、先端の焼損により遺棄されたとみられる。

2312土坑(図587) 最大径1.20m、深さ0.15mで円形を呈する。調査区の南寄りに位置する。

2316土坑(図587) 最大径1.43m、深さ0.21mで円形を呈する。調査区のやや南西寄りに位置する。

2318土坑(図587・588、図版129) 長軸2.40m、短軸1.18m、深さ0.41mで隅丸方形を呈する。調査区のほぼ中央に位置する。遺物は弥生土器壺(図588-3)等が出土した。3はいわゆる生駒西麓産の胎土である。

以上の2256・2312・2316・2318土坑を含め同様の形態や規模を持つ土坑は土塙墓や井戸、大型建物の柱穴の可能性も考慮に入れ調査を行ったがそのような痕跡は検出されず性格等は不明である。

包含層出土遺物(図588、図版129) このほか包含層出土遺物として、弥生土器広口壺(図588-5)、弥生土器壺(図588-6・7)等が出土した。5・6は内外面ともミガキ調整が施され、いわゆる生駒西麓産の胎土である。7は口縁部に刻み目を持つ。

(村上 始・實盛良彦)

## 第4節 大将军社跡の調査成果（11-6区、13-6・7区）

### 1. 大将军社跡の概要と調査経過

大将军社は、方位の吉凶を司る八将神の一神である大将军神を祀る神社で、社伝によれば砂村領座の神社であったが明治44年12月8日に延喜式神名帳に記載のある式内社の津杵神社に付近の馬守神社と共に合祀され、忍陵神社と改名された。『四條畷市史』第4巻では、明治35年生まれの古老人の話として、大将军社では「七月三日の夏祭ともなると、一日を休み、夜は百灯明と言って、村人は境内に集まり、素焼の瓦器に灯明を立て、奉納していた」と記述されている（山口1990、原文は1983年7月『広報



図589 大将军社跡（11-6区・13-7区）平面図

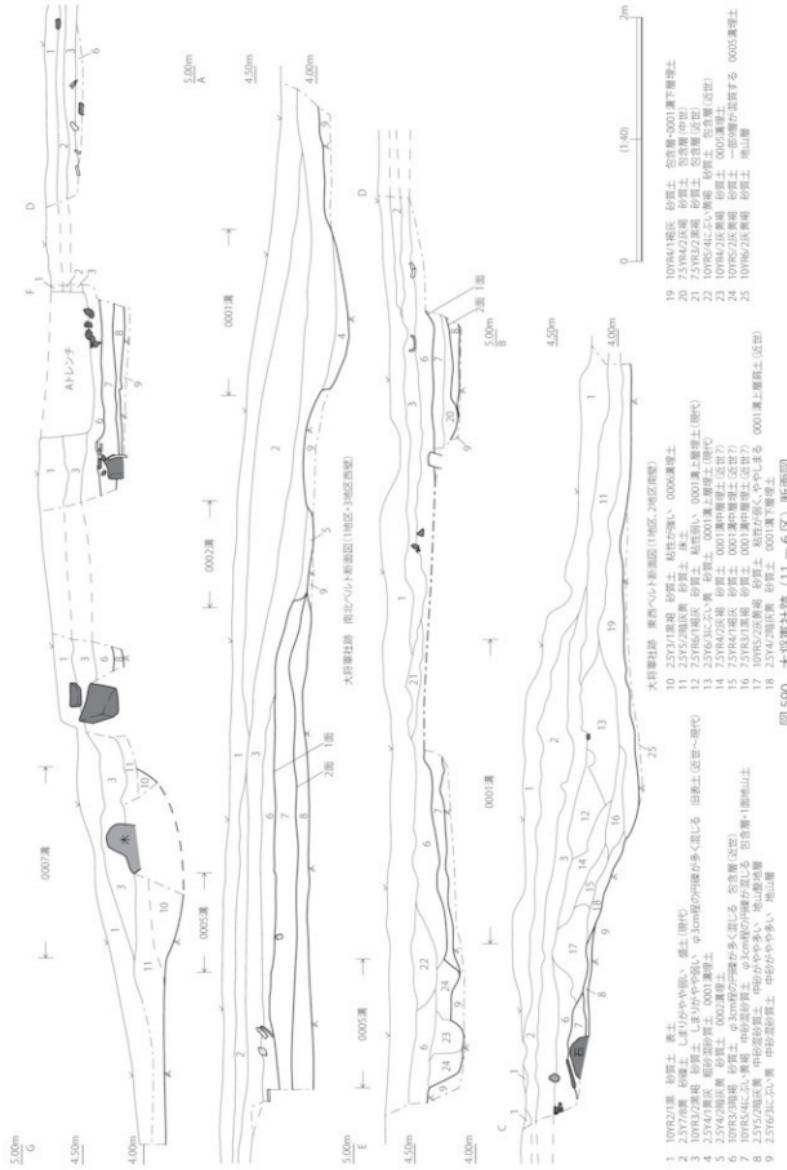


図 590 太將軍跡 (1) - 6 区 断面図

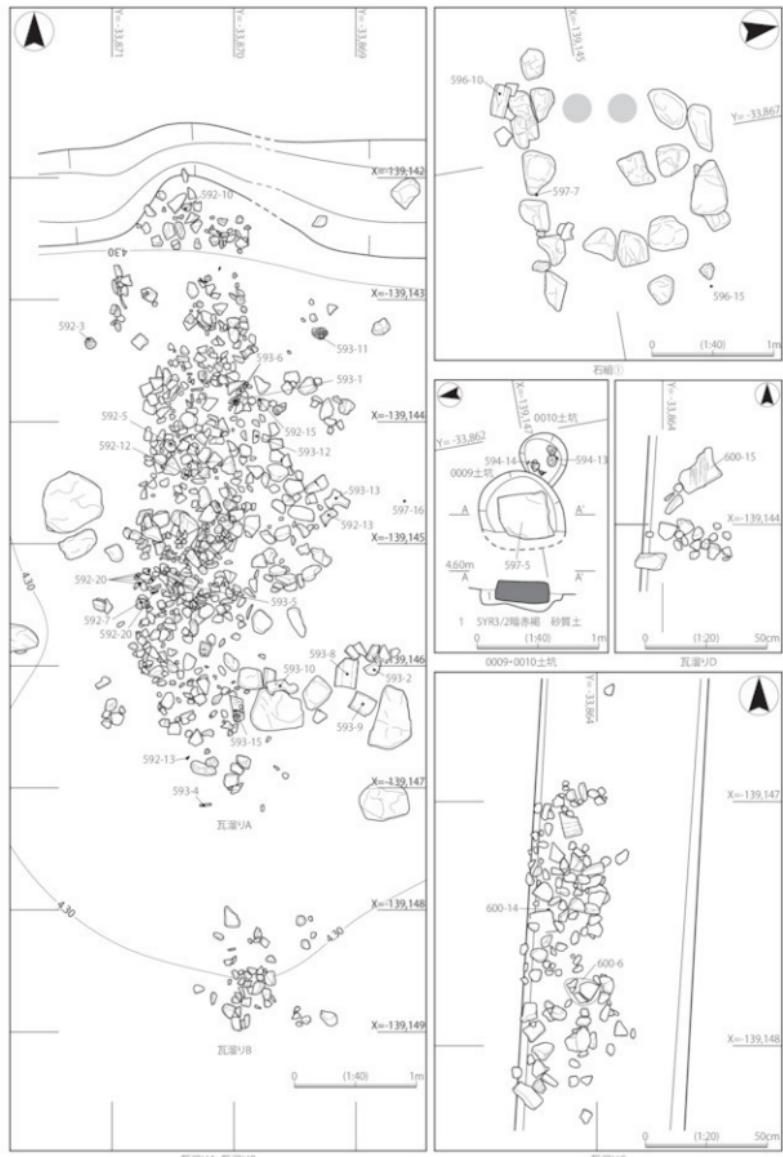


図 591 大將軍社跡 (11-6区・13-6・7区) 遺物出土状況図

『四條畷』に掲載)。これまでこの神社が創建された年代は不明であった。神社跡は廃絶後も土地の高まりとして残存していて忍陵神社が土地を管理し、東側には里道が存在していた。大型店舗建設事業予定期地内に含まれたのに伴い、大阪府の埋蔵文化財取扱い要項に基づき調査を行った。

大将军社跡の調査は2011年度と2013年度にまたがって行い、神社本体部分の調査は2011年度が11-6区、2013年度が13-7区とした。また、神社の一部分に汚水管が埋設される部分は13-6区として埋設底まで調査した。2011年度にまず神社中心部の高まりに4本のトレンチを設定し(A-Dトレンチ)、そこで銅鏡等重要遺物の出土や、社殿基礎遺構を検出したため範囲を高まり部全面に拡張し表面遺構を調査した。断面観察用に2本のベルト(A-D-F-G断面:南北方向、B-C-D-E断面:東西方向)を十字に残し、このベルトで区画した北東側を1地区、北西側を2地区、南東側を3地区、南西側を4地区とした。この区画の境界は南北方向がY=33,870ライン、東西方向がX=139,145ラインにほぼ一致する。その後2013年度に未調査部であった断面観察用ベルト部分等と汚水管埋設部の調査を行った。遺構番号は調査年度に関わらず通し番号とした。

## 2. 神社本体部分の調査(図589・590、図版39・40・130・131)

神社本体部分の層序は、基本的に1層目に表土があり、2層目に包含層の暗褐色土層が、3層目ににぶい黄褐色土層があり上面が神社遺構検出面(1面)である。4層目は暗灰黄色土層で地山整地層とみられ上面が神社創建時遺構面(2面)である。その下層はにぶい黄色土層で神社遺構の地山にあたる。1層目の表土層内では現代に部分的に盛土を行い、高まり部を北と東に拡張していた。盛土下層の旧表土から昭和48年製造の10円硬貨が出土しており、盛土施工はこれより後の時期とみられる。神社本体部分の調査で検出した遺構は全て1面に属し、石組1基、瓦溜り2基、溝5基、柱穴3基、土坑5基であった(図589~597)。以下、主な遺構の詳細を述べる。

石組①(図版39) 現状で17個の礫から成り、東西長南辺1.5m、北辺1.3m、南北幅1.7mのいびつな方形を呈し、東辺側に東西長0.4m、南北幅1.0mの張出し部がある。西辺側では2つの礫が抜き取られていた(トーン部)。石組に用いられる礫の上面はT.P.+4.398~4.565mであった。近世以降の神社本殿基礎遺構で、東側の張出しが賽銭箱等か向拝状の構造が存在したとみられ、東側が社殿正面の可能性が高い。石組南辺礫脇で寛永通宝(図597-7)、石組南西脇で丸瓦(図596-10)が出土した。

この石組以外にも図示したように1面には多くの礫が検出され、これらは全て上面平坦になるよう設置されている点や、その大きさ等からいざれも建物の基礎等として機能したとみられる。その中には接地面が2面にあたるものもあり、2面段階から礫石を持つ建物が存在していた事が想定される。

瓦溜りA(図版39・40) 南北5.2m、東西2.2mの範囲で大量の瓦・土器・礫等がまとまって検出されたものである。Dトレンチ掘削時に、トレンチ西端の旧表土層除去面で小円礫が集中する範囲を検出し、これは瓦溜りAの範囲と完全に一致していた。石組①の西1.5mで、社殿後方に位置する。近世のものとみられる。出土遺物は多く、図592に土器類、図593に瓦類を一部図示した。

瓦溜りB 南北1.0m、東西1.2mの範囲で瓦・土器・礫等がまとまって検出されたものである。

0001・0007溝(図版40) 2011年度に別個の溝として確認し、2013年度に切合いの可能性があった部分(南西屈曲部)を調査し一連の溝と確認した。検出長35.1m、最大幅2.2m、深さ0.3mで平面逆字形を呈し、北東端は13-2区7005溝に、南西端は同区7002溝に接続する。溝底部はT.P.+3.7m付近でほぼ一定である。南辺北側と西辺東側は段掘り状になっており近世段階のこの溝の名残とみられ、近代に現状の規模に拡張され昭和後期に埋没したとみられる。出土遺物は図594-1~7、図

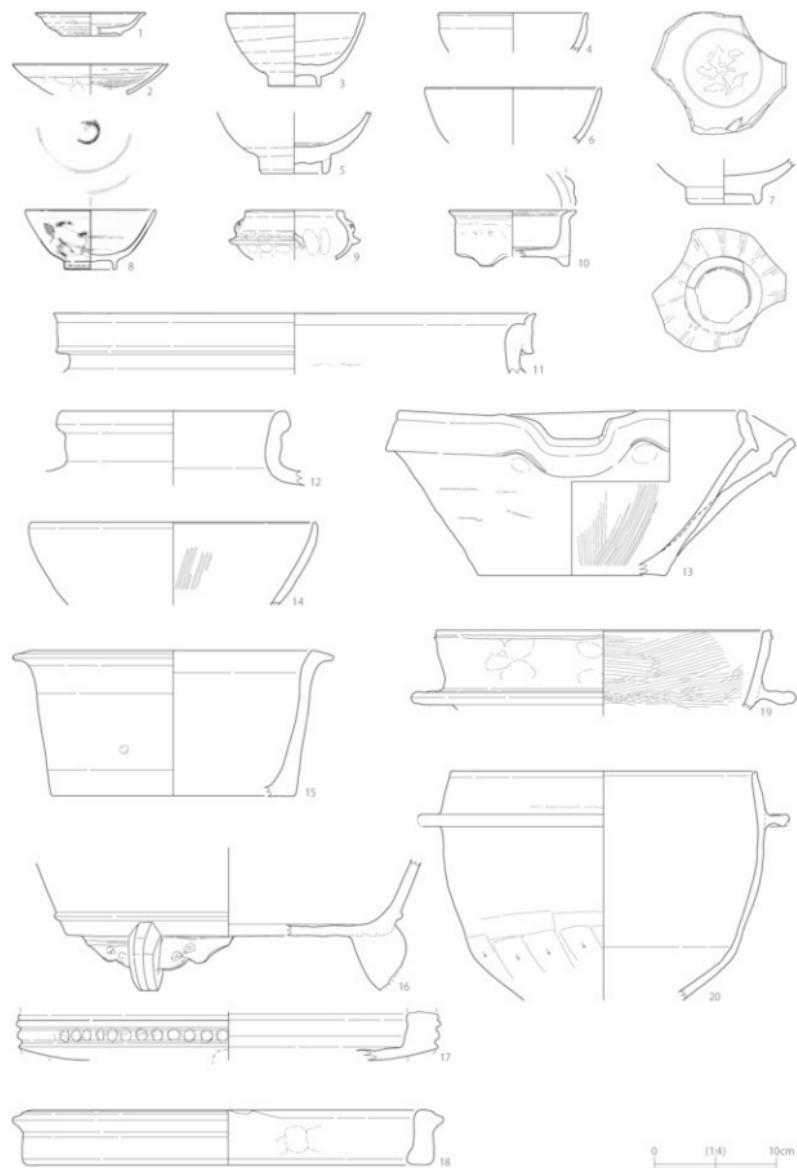


図 592 大将军社跡(11—6区・13—7区)瓦溜りA出土遺物(1)

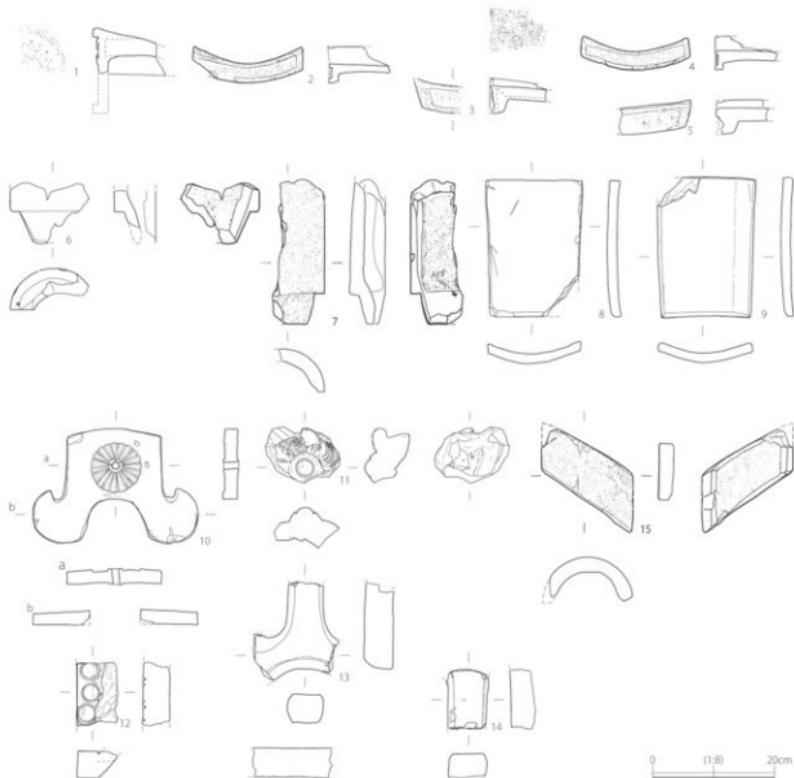


図593 大將軍社跡(11-6区・13-7区)瓦瀬りA出土遺物(2)

597-4。

0002溝 檜出長10.6m、最大幅1.7m、深さ0.4mで近世の溝とみられ、近世段階の0001・0007溝と一連の可能性がある。13-2区7005溝との接続は不明である。出土遺物は図594-8である。

0005溝 長さ18.3m、最大幅1.6m、深さ0.25mで平面ゴ字状に巡る。近世の溝で、出土遺物は図594-9～11である。この溝より内側が神社中心部とみられ最も高まる部分で、T.P.+4.387mであった。

0008・0012・0014柱穴 いずれも直径0.2m程で、径0.1m程の柱痕が残存していた。調査区北側の1地区で検出した。13-2区7186柱穴と合わせ、近世～近代の一連の杭列であるとみられる。

0009土坑(図版40) 2013年度の調査で検出した。直径0.7m、深さ0.15mである。遺物は礎石(図597-5)が出土した。礎石を据え付けるために掘られた遺構である。近世の遺構とみられる。

0010土坑(図版40) 2013年度の調査で検出した遺構である。直径0.4m、深さ0.15mあり、遺構内の上面付近で土師質土器皿等がまとめて出土した。遺物は図594-12～14である。近世の遺構である。

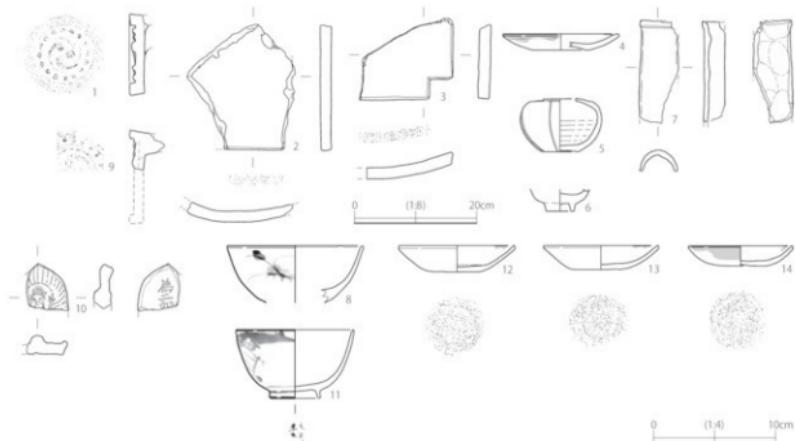


図 594 大將軍社跡（11-6区・13-7区）0001・0002・0005溝・0010土坑 出土遺物

### 3. 神社本体部分出土遺物（図版 130・131）

瓦溜りA出土遺物 図592は瓦溜りA出土の土器類で、1は瀬戸系陶器皿で16世紀末、2は大和型瓦器碗で13世紀中頃、3は外面が刷毛目の陶器で、見込部蛇ノ目釉剥ぎで17～18世紀、4は瀬戸系陶器の天目釉碗で16世紀末、5・6は青磁無文碗で16世紀前半、7は青磁鍋蓮弁文碗で見込に植物文があり15世紀後半～16世紀前半、8は肥前磁器染付碗で18世紀後半、9・10は瓦質土器香炉で9は16世紀中頃、10は16世紀後半、11は信楽焼甕で15世紀後半、12は国産陶器壺で16世紀後半、13は備前焼片口擂鉢で15世紀中頃、14は瓦質擂鉢で15世紀、15・16は瓦質火鉢で15は江戸期、16は15世紀の奈良火鉢、17は瓦質風炉で15世紀、18は瓦質製品で釜敷様の用途か火鉢内での五徳様の用途、19・20は瓦質羽釜で19は16世紀前半、20は16世紀とみられる。

図593は瓦溜りA出土の瓦類である。1は巴文軒丸瓦、2・4は波状文軒平瓦、3・5は唐草文軒平瓦、6・7は丸瓦、8・9は平瓦、10は鬼板瓦、11・12は鬼瓦、13・14は道具瓦、15は面戸瓦。6は頭部と玉縁部の境の段小口に竹管文。7・15は外面に布目痕、内面に斜方向のコビキ痕、16世紀後半以前である。1・3・5～7・11～15は中世後期、2・4・8～10は江戸期とみられる。

0001・0007溝出土遺物 0001溝出土として取り上げた遺物は図594-1～7である。1は巴文軒丸瓦。2・3は棟瓦、いずれも小口部に「巣瓦仲」銘刻印。1～3は江戸期以降。4は陶器皿、内面全体と外側口縁部に施釉。口縁部に煤が付着し灯明皿、近世～近代。5は白磁無頸小壺で17世紀末～18世紀初頭、6は肥前磁器染付盃で19世紀。7は半円筒形土製品。0007溝出土として取り上げた遺物は図597-4で、花崗岩製の礎石で近世のものとみられる。

0002溝出土遺物 出土遺物は図594-8である。肥前磁器染付碗で、18世紀前半～中頃である。

0005溝出土遺物 出土遺物は図594-9～11である。9は巴文軒丸瓦で中世後期である。10は土製仏像で、表面は長谷寺式十一面觀音像があらわされ、裏面は「為二親…」銘があり、室町期以降のものである。11は肥前磁器染付碗で底部に「大明年製」銘があり、18世紀前半～中頃である。

0009土坑出土遺物 出土遺物は図597-5である。5は花崗岩製の台石である。4カ所に矢穴がある。



図 595 大將軍社跡 (11-6区・13-7区) 包含層 出土遺物 (1)

0010 土坑出土遺物 出土遺物は図 594-12 ~ 14 で土師質土器皿。底部糸切り、煤付着し灯明皿。近世。包含層出土遺物 (図版 39・130・131) 上記の遺構以外からも、3 層あるいは 6 層の包含層から数多くの遺物が出土した。図化した遺物は土器・土製品として土師質土器皿 (図 595-1 ~ 6)、陶器灯明具 (図 595-7)、磁器神酒徳利 (図 595-8)、磁器染付油壺 (図 595-9)、須恵器壺 (図 595-10)、瓦器碗 (図 595-11)、瓦質火鉢 (図 595-12・13)、土鍾 (図 595-14)、土製仏像 (図 595-15・16)、円盤状土製品 (図 595-17)。1・2 は底部糸切り、1~4 は口縁部に煤が付着し灯明皿、1~6 は江戸期。7 は 19 世紀中頃、8 は外面緑色釉で 18 世紀末から 19 世紀前半、9 は 18 世紀後半、10 は平安期、11 は 12~13 世紀、13 は 15 世紀。15 は表面が右手に錫杖、左手に蓮華を持つ長谷寺式十一面觀音像があらわされ、仏像右側に「河筋」(河州と同義)、左側に「圭山」銘がある。裏面には「五百九十六 為一切衆生 上馬□… □□ 施」銘があり、室町時代以降のもの。16 は像下部のみの残存だが 15 と同様の文様とみられ、裏面にも銘文がある。17 は江戸期のもので、最初からこの形で焼成され後の加工はない。

瓦類は巴文軒丸瓦 (図 596-1)、菊花文軒丸瓦 (図 596-2・3)、唐草文軒平瓦 (図 596-4~6)、丸瓦 (図 596-7~10)、平瓦 (図 596-11・12)、道具瓦 (図 596-13)、鬼板瓦 (図 596-14)、鬼瓦 (図 596-15・16)。7 は頭部と玉縁部の境の段小口に竹管文、内面に斜方向のコビキ痕、16 世紀後半以前。8~10 は内面に布目痕。1・4・6・7・9・15・16 は中世後期、2・3・8・10・14 は江戸期。



図 596 大將軍社跡 (11-6区・13-7区) 包含層 出土遺物 (2)

石造物は石仏(図 597-1)、五輪塔火輪(図 597-2)、五輪塔空・風輪(図 597-3)。2は江戸期。金属製品としては銅鏡(図 597-6~15)、銅鏡(図 597-16)。銅鏡のうち6~9は1次調査で、10~15は2次調査で出土した。7は石組①南辺礎脇出土。9は鋳着した状態で6層から出土。6は文久永宝(1863年初鋳)。銘文は板倉勝静筆の「草文」、裏面波文十一波。表裏とも研磨がかなり荒く、凸部に研磨痕が残存。7~15は寛永通宝。7・9・10は1659年までに鋳造された古寛永で、7はいわゆる鳥越銭、9のうち鋳着が外れた1枚と10はいわゆる芝銭。8・11~15は1668年以降に鋳造された新寛永で、8はいわゆる不旧手京都七條銭、11・13・14は寛文期の「文銭」、12はいわゆる宝永期四ツ宝銭、15は元文期とされるもの。大將軍社跡(11-1-6区、13-1-7区)で出土した銅鏡はこれらを含め合計31点あり、上記の文久永宝1点を除きすべて寛永通宝であった。出土銅鏡は神社本殿跡とみられる石組①より東側で集中して検出され、賽銭等として用いられた可能性がある。

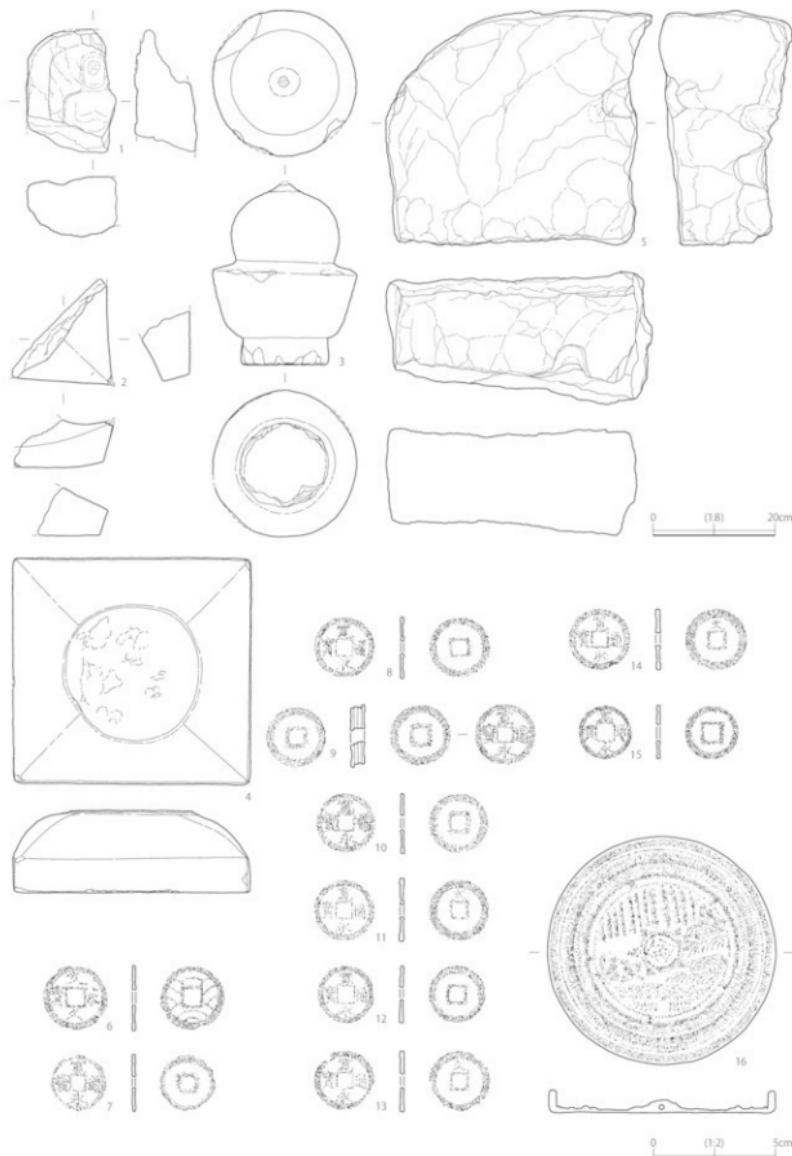


図 597 大将军社跡(11-6区・13-7区)出土石製品・金属製品

16は柴垣柳樹双鳥鏡である。直径9.3cm、鉢高0.55cm、縁高0.95cm、鏡体の厚さ0.1cmである。いわゆる擬漢式鏡で、14世紀後半の製作が考えられる。Dトレーナー掘削時に石組①の西辺から西に1.2mの位置で鏡面を上に向けて出土した。出土標高はT.P.+4.494mであった。

#### 4. 污水管埋設部分の調査(図598・599、図版40・131)

汚水管埋設部分の調査は、調査開始面が神社本体の1面で、汚水管埋設底であるT.P.+3.2mまで掘削調査を行った。検出した遺構は2面(遺構面調査区中央T.P.+4.112m)で瓦溜り2基、3面(同T.P.+4.064m)で落込み1基、溝1基、土坑1基、4面(同T.P.+3.938m)で溝1基、5面(同T.P.+3.872m)で落込み1基、6面(同T.P.+3.750m)で土坑1基、水田1基、7面(同T.P.+3.512m)で河川1本があった。以下、主な遺構の詳細を述べる。

2面瓦溜りC(図591、図版40) 南北1.4m、東西0.5m以上の範囲で瓦・土器・礫等を検出されたものである。図示した出土遺物は図600-6・14である。

2面瓦溜りD(図591、図版40) 南北0.5m、東西0.4m以上の範囲で瓦・土器・礫等を検出。図示遺物は図600-15。

3面0015落込 検出した規模は南北2.8m、東西0.7m、深さ0.1mで、落込底面で0016溝・0017土坑を検出した。図示した出土遺物は図600-1・2である。

4面0019溝 検出長0.7m、最大幅0.4m、深さ0.1mで東西方向の溝である。

5面0018落込 調査区南半で検出した深さ0.2mの落込で、13-2区7220田面に続く水田の可能性がある。当初4面の遺構として捉え、途中で5面に変更した。図示遺物は図600-8~11。

6面0021水田 調査区南端で検出し、この遺構と0020土坑とに挟まれた部分が水田畦畔とみられ、13-2区7220田面に続く水田の可能性がある。畦畔上面からの深さは0.2mで、底面で足跡を2基検出した。図示した出土遺物は図600-3~5である。

7面0022河川 検出長0.7m、最大幅2.7m、深さ0.3mで東西方向の流路である。この流路はこの面より下層でさらに幅が広くなり広幅の流路となるとみられることを断面で確認した。

#### 5. 污水管埋設部分出土遺物(図600、図版131)

2面瓦溜りC出土遺物 出土遺物は図600-6・14で、6は瓦質土器擂鉢で16世紀、14は鬼瓦で神社本体D-E断面ベルト部から6・7層に属して出土したものと接合し中世後期である。

2面瓦溜りD出土遺物 出土遺物は図600-15である。15は雁振瓦で内面に斜方向のコビキ痕があり、16世紀後半以前のものである。

2面包含層出土遺物 出土遺物は図600-7である。7は須恵質土器壺底部である。

3面0015落込出土遺物 出土遺物は図600-1・2で、土師質土器皿であり、2は平安期。

5面0018落込出土遺物 出土遺物は図600-8~11で、8・9は東播系須恵器片口練鉢で12世紀末~13世紀初頭、10は備前焼片口擂鉢で15世紀後半、11は土師質土器羽釜で平安期であろう。

6面0021水田出土遺物 出土遺物は図600-3~5である。3は土師質土器皿、4は瓦器小碗、5は大和型瓦器碗で13世紀後半のものである。

6面包含層出土遺物 出土遺物は図600-12・13である。12は青磁碗、13は須恵質土器壺である。

#### 6. 小結

この調査の結果から、大將軍社の創建時期は、2面で検出した瓦溜りC・D出土遺物からみると室町時代後期(16世紀中頃~後半)とみられる。2面が創建段階の遺構面で、3面は創建以前の遺構面であり、

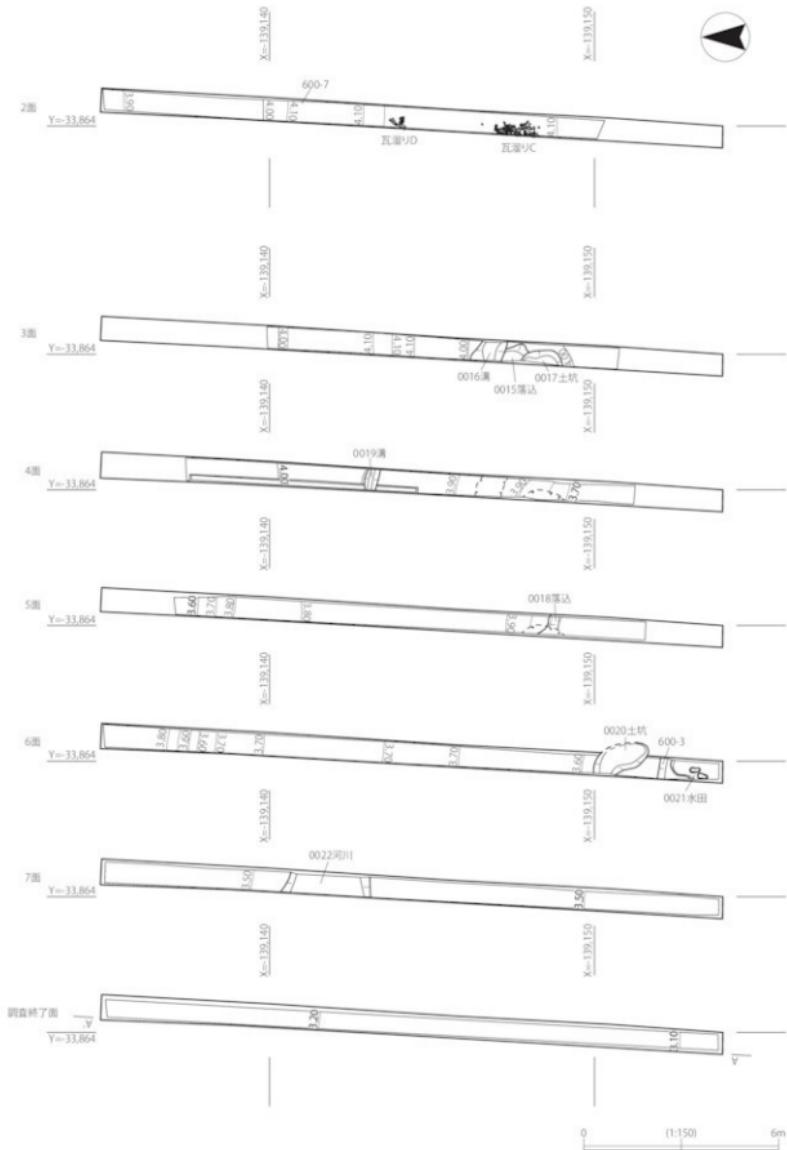


図 598 13-6区(泥水管埋設部)平面図

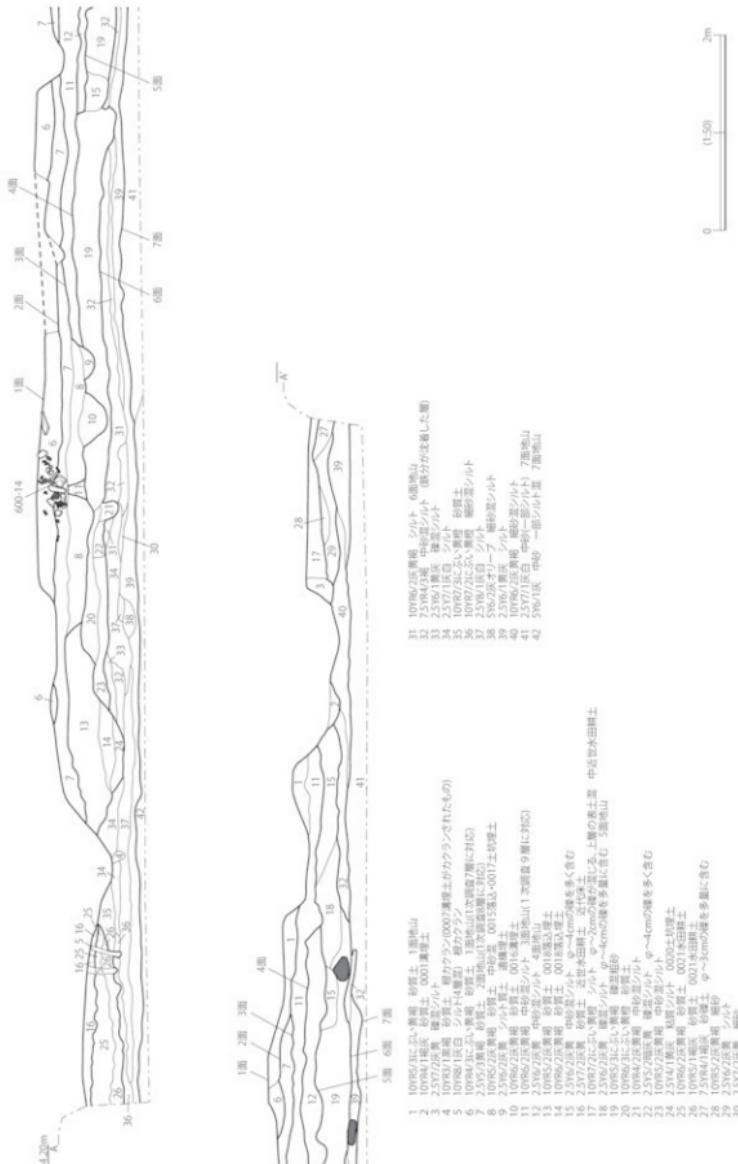


図 599 13-6 区（泥水管埋設部）断面図

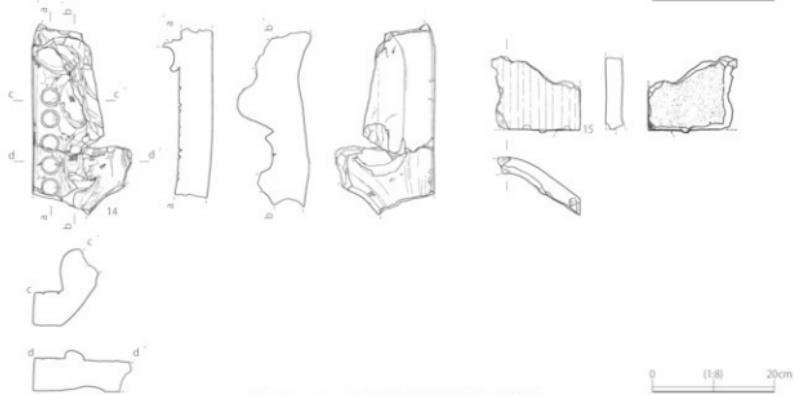
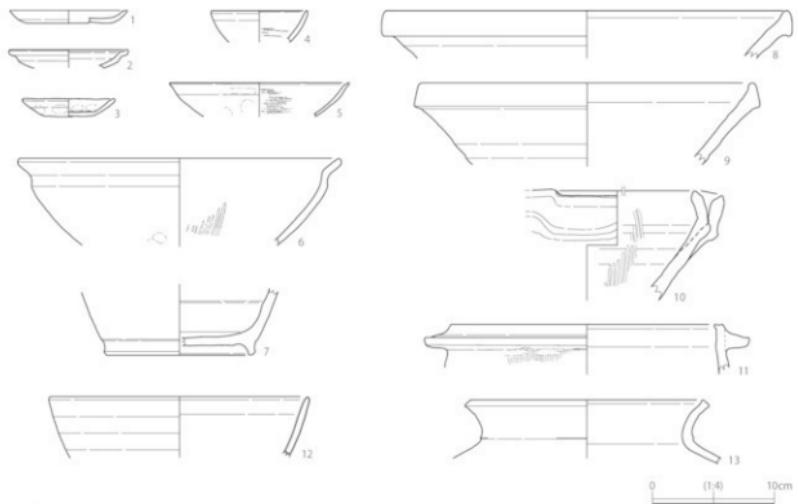


図600 13-6区(泥水管理設部)出土遺物

創建時には大型の鬼瓦(図593-11・12、596-15・16、600-14)や巴文軒丸瓦(図593-1、594-9、596-1)、唐草文軒平瓦(図593-3・5、596-4・6)、いわゆるコビキAを持つものを含む丸瓦(図593-6・7、596-7~9)、面上瓦(図593-15)、雁振瓦(図600-15)等による瓦葺きの屋根を持つ礎石建物の社殿が造営されたとみられる。近世に石組①を基礎とし、鬼板瓦(図593-10、596-14)、菊花文軒丸瓦(図596-2・3)、波状文軒平瓦(図593-2・4)、小ぶりな平瓦(図593-8・9)等による瓦葺きの屋根を持つ、それ以前より小さな社殿に建て替えられ、その際に整地を行い1面が形成されたとみられる。瓦溜りAはその整地時に不要な瓦を集めめたものとみられ、その後も神社存続中に不要となったものや奉納された土器類等が集積されて形成されたものであろう。

(村上 始・實盛良彦)

## 第5節 13-2区の調査成果

13-6・7区として調査を行った大将军社の東側に設定した調査地である。表土・現代作土の機械掘削を行ったところ、大将军社参道が検出されたため、参道については4b層とした砂層上面まで人工掘削を行った。

調査前の状況は、現代の畦道が参道に取り付いており、大将军社本殿との間が若干高まっていた程度で、畦道に接して台石が露出した状態であった。神社本殿の礎石上面と標高がほぼ同じであったため、神社関連の施設があることを想定し掘削を進めたところ、参道が検出された。

発掘調査は、参道に403トレーナーを設置して、参道基底面の確認と参道盛土及び参道機能時に形成された土壤の把握を行い、参道と参道直下に形成された地層を大別4層に分けて調査を行った。

### 第1面（図602）

表土を除去して検出した遺構面で、機械掘削終了面である。大将军社が忍陵神社に合祀された明治44年以降から昭和前期に位置付けられる。

表土中からは、少量の遺物を出土したが、参道を構成する地層（盛土・土壤）と比較して出土量は少ない。なお、この段階から灯明皿の破片が出土しており、灯明皿は釉薬がかかるものと、素焼きのものに分かれた。当初、豆皿・お手塩皿の類が含まれていると考えたが、完形ないしそれに近い形状の小皿は、すべて灯明皿として使用されたものである。なお、釉薬がかかっているものは京焼の柿釉灯明皿で、低温度で焼成されるため、土師質のものが大半であった。

### 表土・トレーナー出土遺物（図601、図版41・132・133・136・137）

表土及びトレーナーから出土した遺物は、図601-1～14に示した。1～3は土師器灯明皿、4は柿釉陶器灯明皿である。5は瓦質上器火鉢である。6～9は401トレーナーから出土した。6は土師器皿である。へそ皿で、4層に帰属する。7・8は肥前焼系磁器碗である。9は肥前焼系磁器皿である。内面見込み及び高台に二重團線、高台直上に團線1本がそれぞれ施される。内面に草花文、外面に連續唐草文の文様を表わし、見込みにはコンニャク印判の一部が残る。10は土人形である。女人を表現

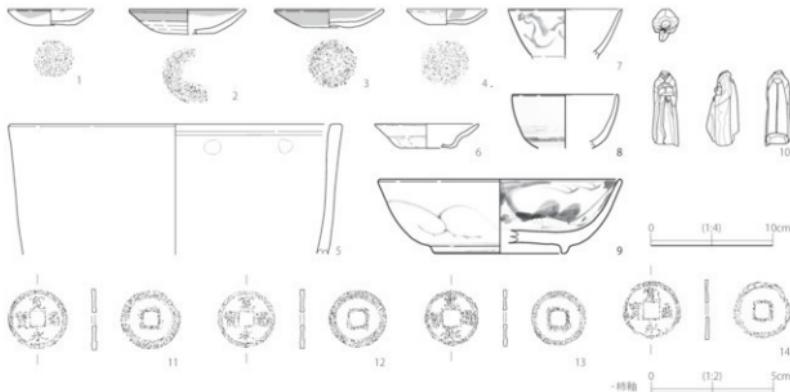


図601 13-2区 表土・401トレーナー他出土遺物

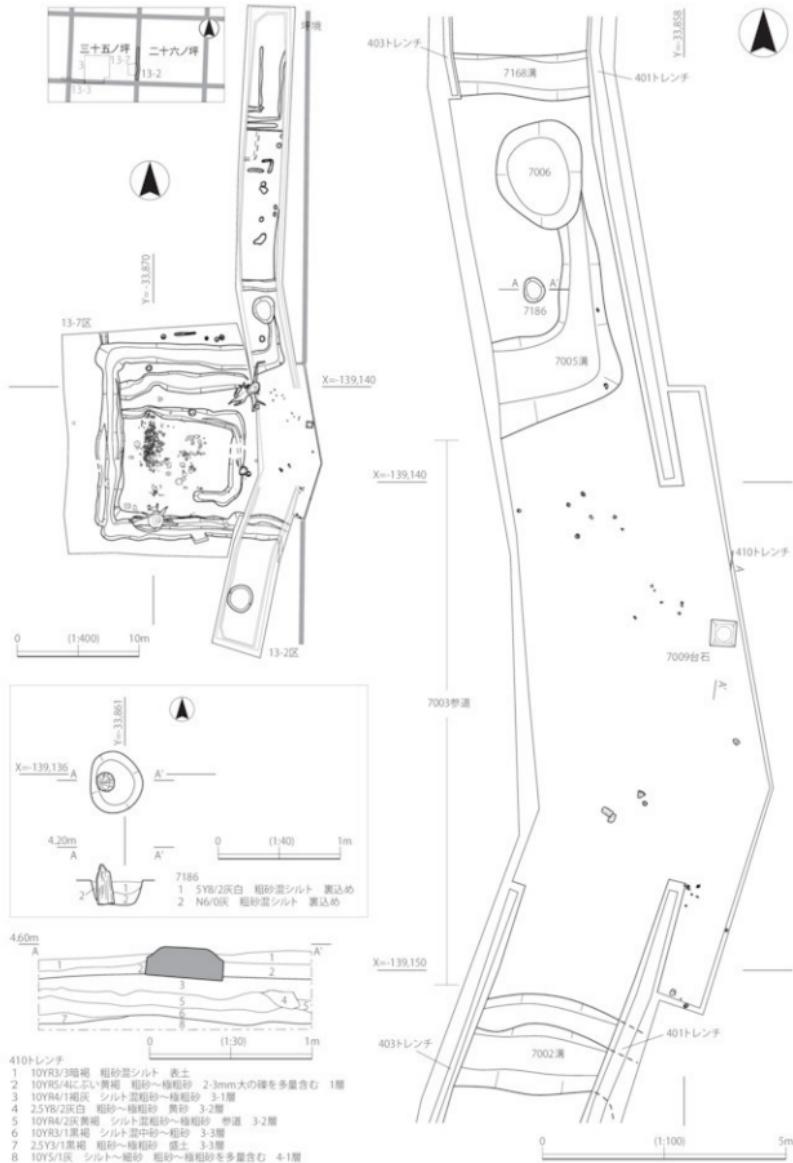


図 602 13-2 区 第1面平面・410 トレンチ断面

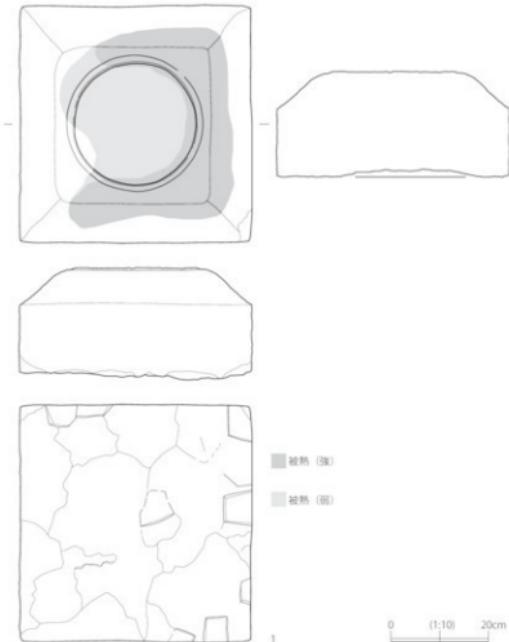


図 603 13-2区 7009台石出土遺物

た。2～3層は各地層の境界部が不明瞭であったが、盛上である粗砂～極粗砂の単位や台石や出土遺物の基底面の標高または出土状況を参照しながら分層発掘を行っており、参道斜面は任意分層発掘に近い状態で各遺構面を検出した。

参道は、4層とした作土層の直上に、盛上を行うことによって構築される。参道には側溝が伴っており、側溝掘削時の排土で側溝に近い部分に、土手状に盛上を行った後、内側に向かって水平に盛土が行われる。なお、7009台石は、設置当初、上部と側面が露出した状態であったと考えられる。

#### 7009台石（図 602・603、図版 41・132）

7003 参道北側で検出された。坪境と参道が直交する場所に当たる。基底面は第2面直上で、参道廃絶時まで台石として用いられたと考えられる。図 603-1 の台石は、平面形が正方形を呈し、上部に円形の台座が作り出される。法量は、一辺 48cm、厚さ 21cm である。被熱痕があり、円形の台座部分を中心に黒変する。

第2面では、7009台石の西側で、参道の側石となる可能性がある石が検出された。神社本殿の礎石と目地が通っており、機能時の参道幅を示す可能性がある。粗砂～極粗砂とした整地層が参道に用いられた範囲の北側の場所で検出されている。参道に平行するように設置されており、側石として機能した可能性を想定しているが、7009台石の西側及び北西側参道斜面で 10～20cm 大の石が複数出土していることや、第3-1・2面で検出された礎集中部の分布と重なることから意図的に廃棄した可能性も

しており、頭部は欠損する。右手には軸受けと考えられる穴がある。11～14は寛永通宝である。11・12は古寛永、13・14は新寛永に分類される。

#### 7003 参道（図 602・604、図版 41）

大將軍社の東側で、層厚 3～5 cm の表土を除去して検出された。幅 11.2 m、南北に広がる水田面との比高は 0.5 m である。

参道を構成する地層は、3 層に大別され、1～3 層として掘削した。1 層は、細砂混シルトを主体としており、表上形成段階の土壤化の影響が顕著である。そのため、一部には、近・現代の遺物が混じる。

2 層は、粗砂～極粗砂と細砂混シルトを主体と、参道中央を中心にして堆積する。3 層は、シルト混粗砂～極粗砂を主体としており、3-1～3-3 層に細分して掘削した。

— 13-3 層に細分して掘削した。

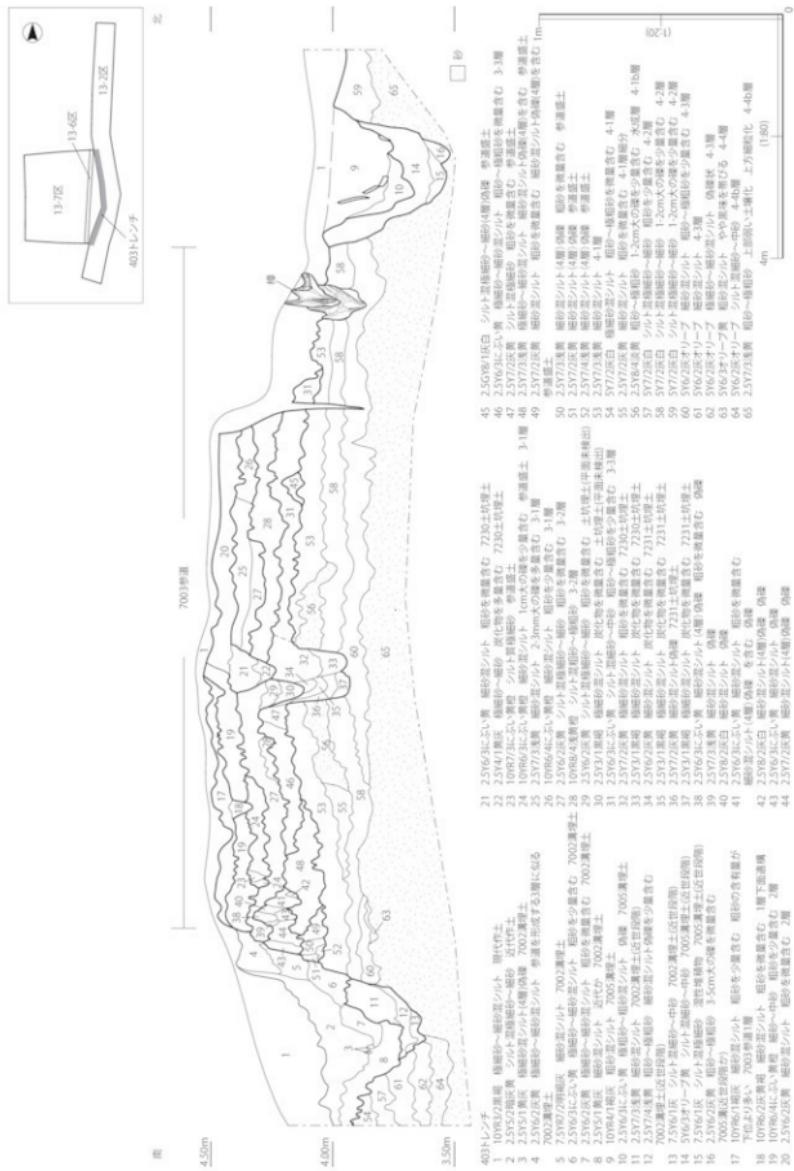


図 604 13-2区 403 トレンチ断面

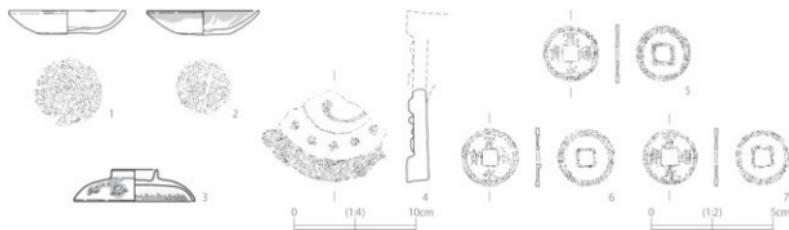


図 605 13-2区 7003 参道第1面出土遺物

あると考えられる。7002・7005溝は、近代（1層形成段階）には坪境で屈曲しており、参道に道（畦畔）が取り付いていたものと考えられる。大将軍社参道の「入り口」になっていたと考えられ、7009台石は、鳥居の台石であった可能性が高い。

#### 7186 柱穴（図 602）

7003 参道北側で検出された。柱根が遺存する。現代作土を除去して検出しており、遺構面の帰属は不明である。ただし、柱穴の裏込め土は、近代以降に形成された土壤に由来するブロック土が入る。

#### 7002 溝（図 602・608、図版 132）

参道南側で検出された。神社本殿・参道を区画する溝である。近代に掘り直しが行われているが、7005溝と異なり、7002溝では同じ位置で掘り直しが行われている。401トレンチでは近代の埋土が溝幅以上に南に広がっている状況が確認されたことから、7005溝と同様、7002溝は401トレンチを設定した場所で、屈曲する可能性が高いと考えられる。

7002 溝からは図 608-9 の堺焼擂鉢が、近代の埋土から出土した。他に、細片で図示していないが、土師質の火鉢口縁部が近世の埋土から出土した。

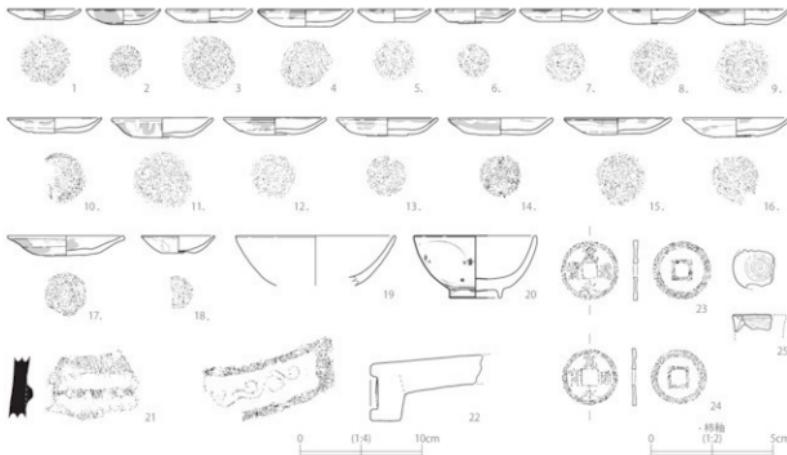


図 606 13-2区 7003 参道1層出土遺物

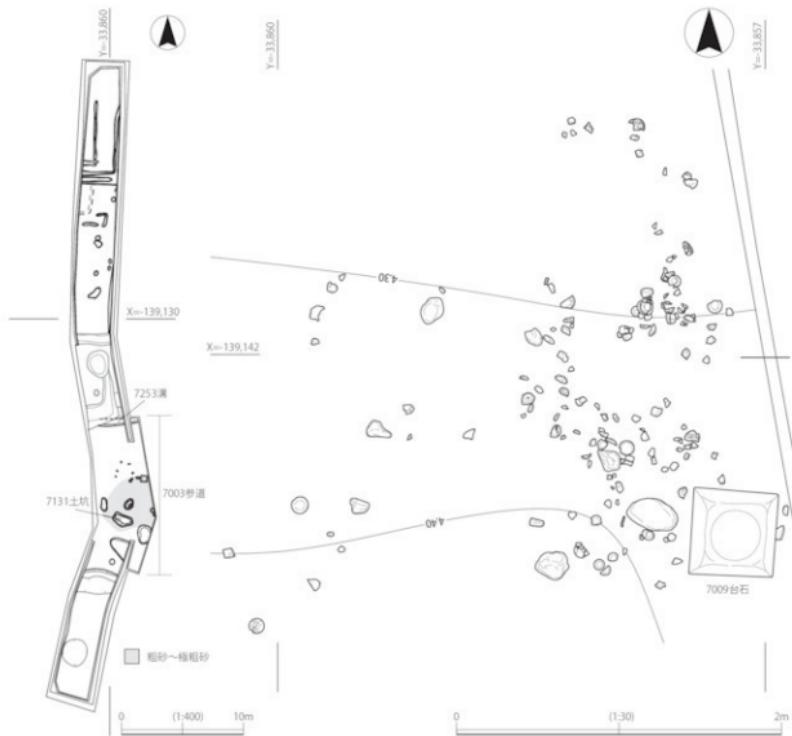


図 607 13-2区 第2面平面

#### 7005溝・7006土坑（図602・608、図版134・137）

7003参道の北側で検出された。7005溝は、神社及び参道を外周する溝で、北方向に曲がって7006土坑に接続する。規模は、幅2.2m、深さ0.5mである。7005溝埋土は、作土に由来する粗砂混シルトを主体としており、瓦・陶器皿・肥前焼系磁器が出土した。

7005溝から出土した遺物は、図608-1～6・10～12である。1は土師器灯明皿である。2～6は柿釉陶器灯明皿である。10は巴文軒丸瓦である。巴文尾部が一部残存する。11は銅線釉の華瓶である。口縁部から外面は施釉されており、高台は無釉。12は白磁紅皿である。貝殻状の型押しで外面は成形される。11・12は、19世紀前半。

7006土坑は、平面形は不整な円形、長軸2.2m、短軸1.7m、深さ0.4mである。出土遺物は、図608-13～15で、7005溝と比較して少量である。13は白磁小碗、15はひだ皿、14は肥前焼系染付碗である。金魚・桜・流水・「常○（月に言か）」の文様がある。19世紀前半。

#### 7003参道第1面出土遺物（図605、図版132・135・137）

1層直上から出土した遺物は、図605-1～7を図化した。1・2は土師器灯明皿である。3は肥

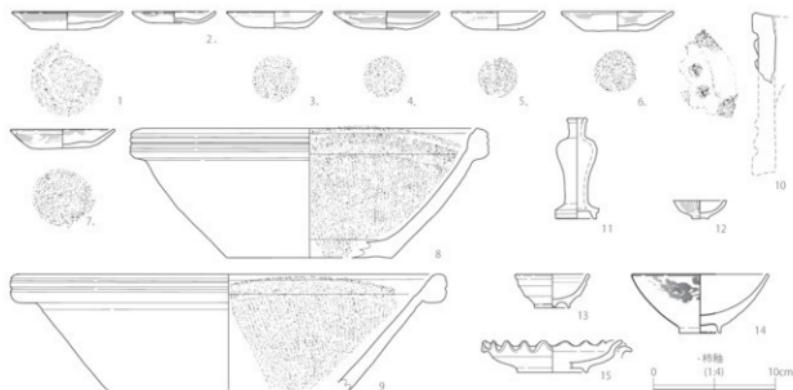


図 608 13-2 区 2005 溝他出土遺物

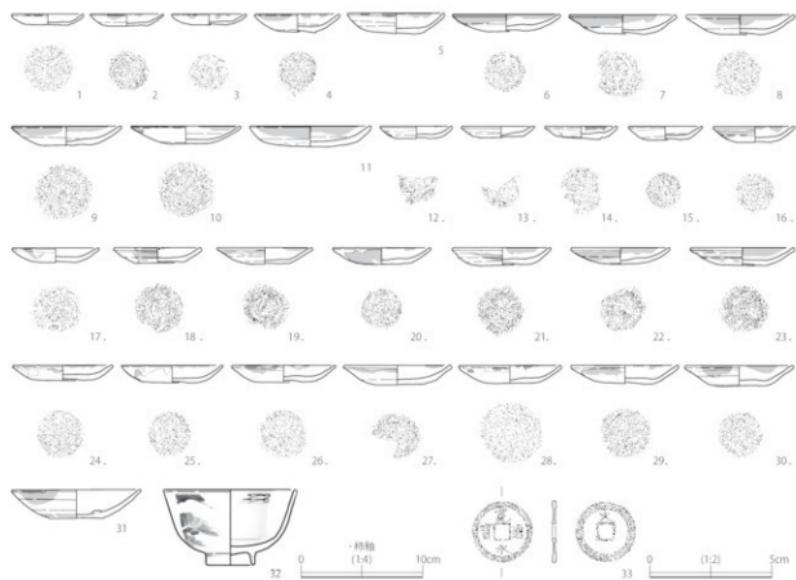


図 609 13-2 区 2003 参道第 2 面出土遺物

前焼系磁器の蓋である。外面は菊・菱形文、内面は瓔珞文の文様がある。4 は巴文軒丸瓦である。巴頭部は小さいもので、尾部は細く伸びる。5～7 は寛永通宝である。新寛永で、無背。

7003 参道 1 層出土遺物（図 606、図版 132～137）

1 層から出土した遺物を図 606-1～25 で図化した。1～4 は土師器灯明皿である。5～18 は柿

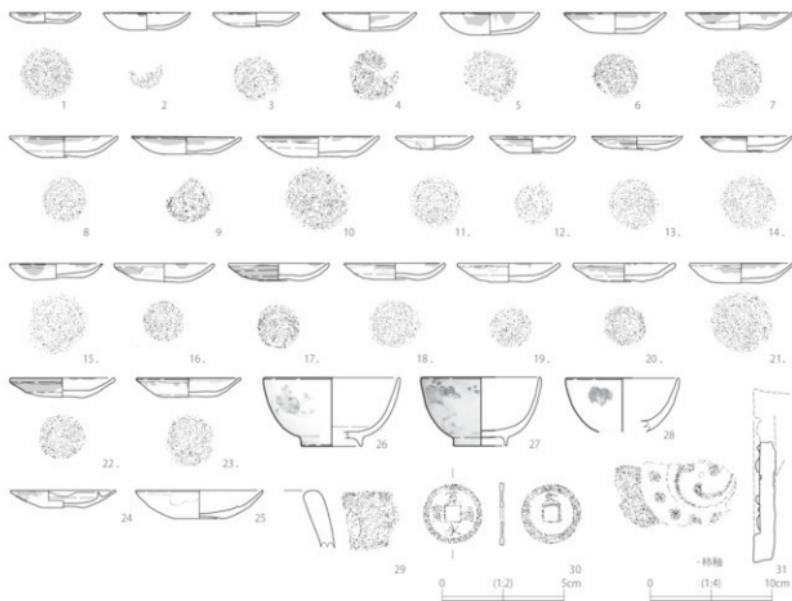


図 610 13-2区 7003 参道2層出土遺物

釉灯明皿である。19は肥前焼系磁器碗である。20は肥前焼系磁器染付碗で、表上及び1層から出土した破片が接合した。外面に草花文が描かれ、高台及び高台直上に圓線がめぐる。21は円筒埴輪の破片である。須恵質で、外面は縱方向のハケ、内面は斜め方向にナデ調整される。22は唐草文軒平瓦である。凹面は磨滅しており、調整は不明で、砂が付着する。凸面は剥離が顕著であるが、板ナデの痕跡が残る。頭は横方向のナデで仕上げられる。23・24は寛永通宝である。23が古寛永、24が新寛永である。25は不明鉄製品である。表面は円形を呈し、側面は端面で広がっている。飾金具として使用されたと考えられる。出土遺物から、1層は、明治時代以降、忍陵神社に合祀される明治44年までの時期に形成されたと考えられる。

## 第2面（図607）

参道を構成する地層内の、粗砂～極粗砂を主体とした範囲を2層として掘削した。参道中央、大将軍社正面にその範囲は限られる。台石の基底面に当たり、台石は全体の形状が露出した状態である。

## 7131 土坑（図607・608、図版134）

7003 参道南側で検出された。平面形は不整形、規模は長軸 1.6 m、短軸 0.9 m、深さ 0.2 m である。埋土は粗砂混シルトで、炭化物を多量含む。第3-2面 7197 ~ 7200 土坑の直上に当たり、これらの土坑の埋土上層を一括して第1面で把握した可能性がある。7131 土坑から、図 608-7 の柿釉陶器灯明皿と 8 の堺焼擂鉢が出土した。

## 7165 ~ 7167 土坑（図611）

7003 参道南側で検出された。埋土は粗砂混シルトで、炭化物を少量含む。第3-3面 7230・7231

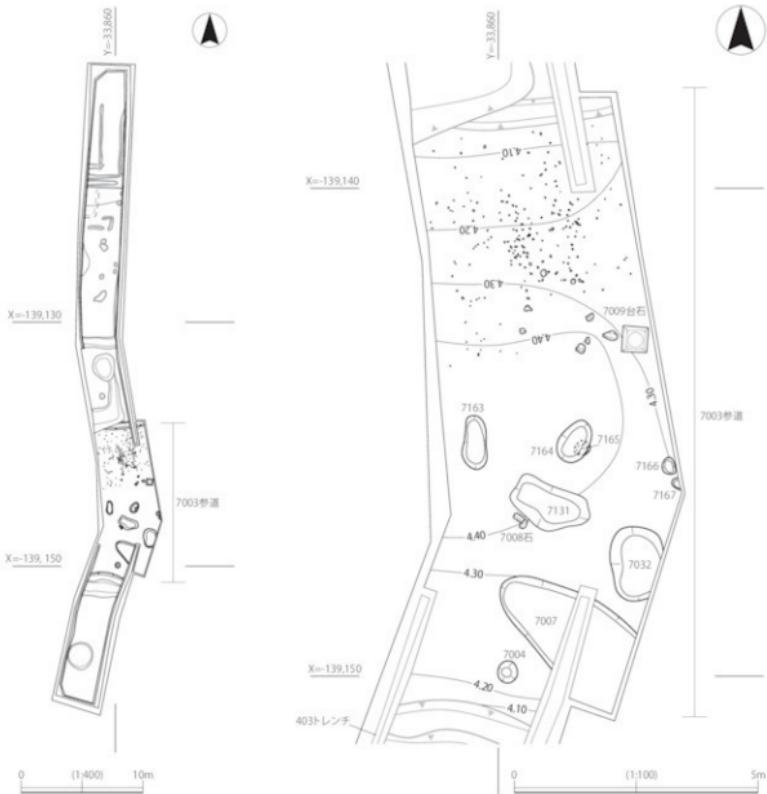


図 611 13-2 区 第3-1面平面

土坑と比較して、炭化物は少量であったが、機能的には同じであった可能性が高いと考える。

#### 7003 参道第2面出土遺物（図 609、図版 133・135～137）

第2面、2層直上から出土遺物を、図 609-1～33 を図化した。1～11 は土師器灯明皿である。12～31 は柿釉陶器灯明皿である。31 は内側に棟があるので、灯明皿の受け皿としても使用されたものと考えられる。32 は肥前焼系磁器の草花文の染付碗である。高台及び高台直上に二重圓線がそれぞれ施される。内面は見込みに 1 本、口縁部に 2 本圓線を入れ、口縁部の圓線間に線引きの文様が入る。33 は寛永通宝である。新寛永で、裏面には「文」の文字がある。

#### 7003 参道2層出土遺物（図 610、図版 132・133・135～137）

1～10 は土師器灯明皿である。11～23 は柿釉陶器灯明皿である。24・25 は瀬戸・美濃焼系磁器灯明皿である。24 は内側に切り込みがある棟があり、口縁部に煤が付着する。貫入り。25 は内面に胎土目が 2箇所残る。内面及び外面口縁部まで施釉され、以下は無釉である。貫入り。26 は肥前焼

系磁器で、草花文の染付碗である。高台に二重圓線、高台直上に圓線1条がそれぞれ施される。27は肥前焼系磁器で、草花文の碗である。28は肥前焼系磁器で、コンニャク印判の碗である。29は土師質土器の火鉢である。30は寛永通宝である。新寛永で、裏面には「文」の文字がある。31は巴文軒丸瓦である。巴文は頭部が小さく、尾部の先端は他の巴文に接する。外縁は幅広で、外縁と巴文の間に、巴頭部と同じ大きさの珠文が配される。また、瓦当面中央には3mmの穴が確認できた。出土遺物から、2層は、江戸時代後期末～明治時代前半の時期に形成されたと考えている。

### 第3-1面(図611、図版42)

2層とした粗砂～極粗砂を主体とした参道盛土を除去して検出された。7009台石は基底面が2層直上と判断されたことからこの段階には機能していなかったと考えられる。7003参道北側斜面では3～5cm大の礫が分布している状況が検出された。

### 7008側石(図611、図版41)

7131土坑の南側で検出された。2点出土しており、据え付けに伴う掘形は検出されなかった。粗砂～極粗砂を参道に用いた範囲の南側で、地層の境界部付近で検出されており、参道の側石であったと考えられる。2点の側石は、上面及び底面の標高がそれぞれ異なっていることや、参道盛土を挟んで直接組み合わさっていた形跡が認められないことから、異なる時期に機能した可能性がある。また、参道で単独で検出されたこと、東西に7008側石と連続するものが認められることや被熱が認められることから、燈籠などの台石であった可能性もある。

### 7003参道3-1層出土遺物(図612、図版132・133・135・137)

3層から出土した遺物は、図612-1～22を図化した。1～13は土師器灯明皿である。14～18は、柿釉陶器灯明皿である。18は、内面に棧があり、受け皿としても使用されたと考える。19は瀬戸・美濃焼系磁器で、灯明皿である。内面及び口縁部まで施釉され、以下無釉である。煤が全体に付着する。胎土目が2箇所遺存する。20は巴文軒丸瓦である。巴文の尾部と珠文が残る。21は石造物の細片である。外区が作り出され、文様と考えられる線状の陽刻が認められる。裏面は破損しており、原形は不明

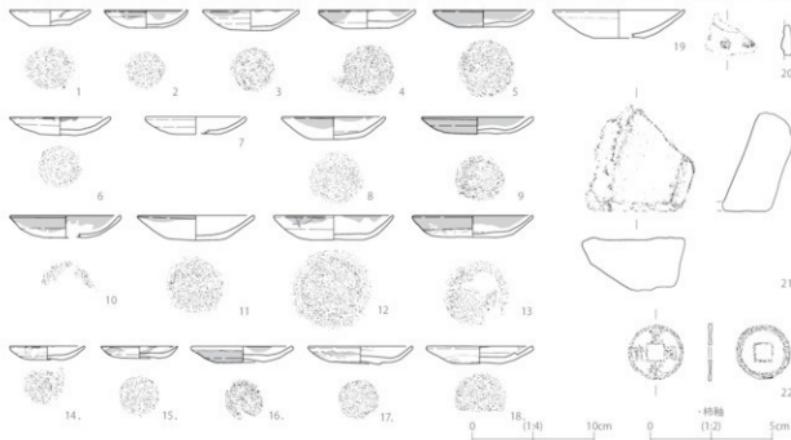


図612 13-2区 7003参道3-1層出土遺物

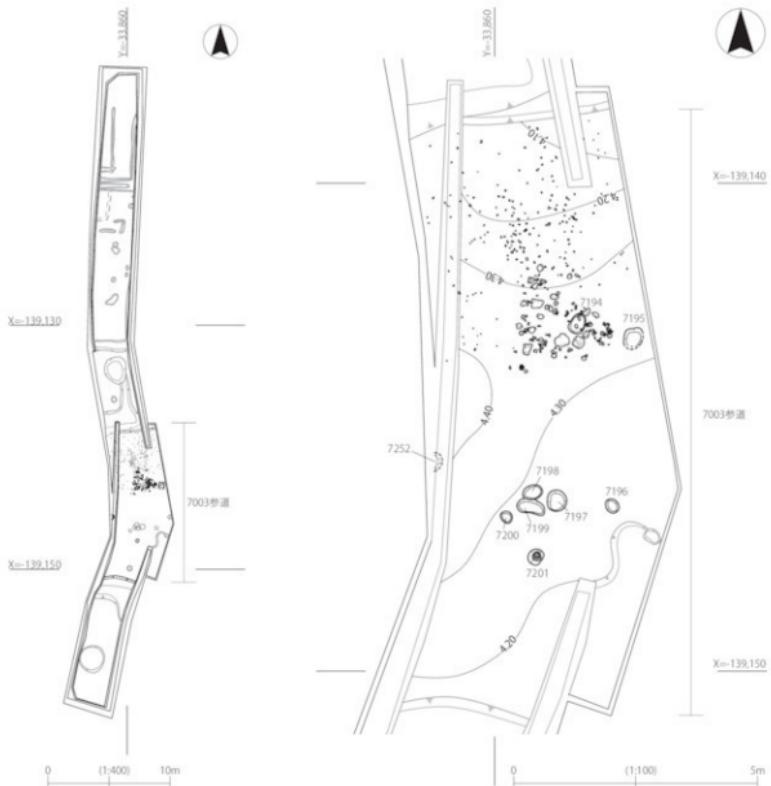


図 613 13-2区 第3-2面平面

である。22は寛永通宝である。新寛永で、無背である。出土遺物と上下の地層の所見から、3-1層は、江戸時代後期に形成されたと考えられる。

#### 第3-2面（図 613・図版 42）

第3-2面では、7009台石直下で、台石を抜き取った痕跡と考えられる7195抜き取り穴が検出された。また、7003参道参道の北側斜面で、3～5cm大の礫が多数出土した。礫は敷き詰めたものというより、ばら撒かれて全体に広がるような状態であった。第3-1面と同様、炭化物が埋土に含まれることが特徴的な土坑が7003参道の南側を中心に検出されている。これら炭化物を埋土に含む土坑の中に、7201火床が含まれる。

#### 7195土坑（図 613・614）

7009台石直下で2層とした参道盛土内の粗砂～極粗砂を埋土とした土坑が検出された。部分的な範囲で検出したため、盛土の一単位である可能性もあるが、土坑の形状から台石の抜き取り穴の可能性が高いと考えられた。平面形は正方形、規模は、一辺0.4m、深さ0.1mである。

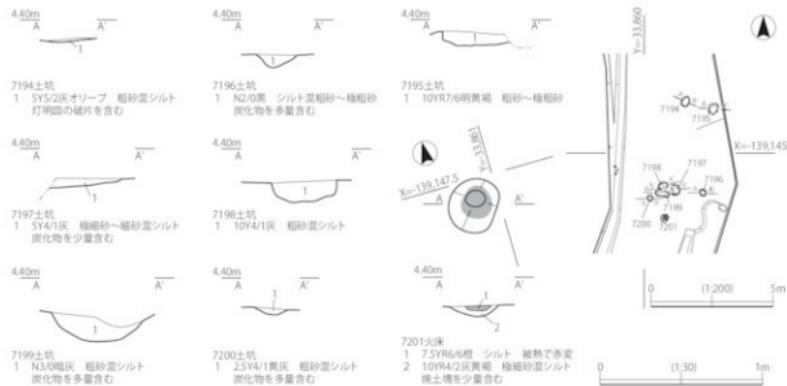


図 614 13-2区 7194土坑他平・断面

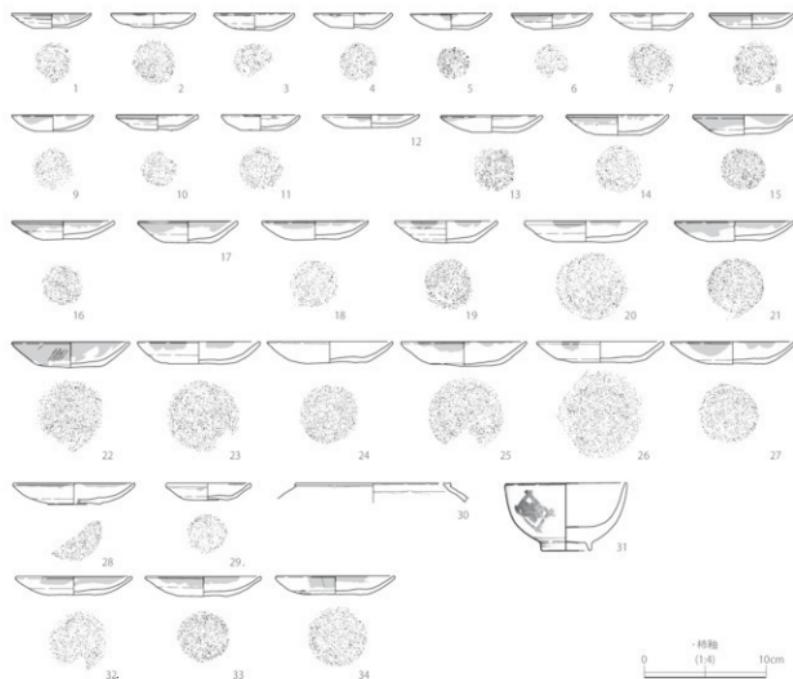


図 615 13-2区 7003参道3-2層出土遺物

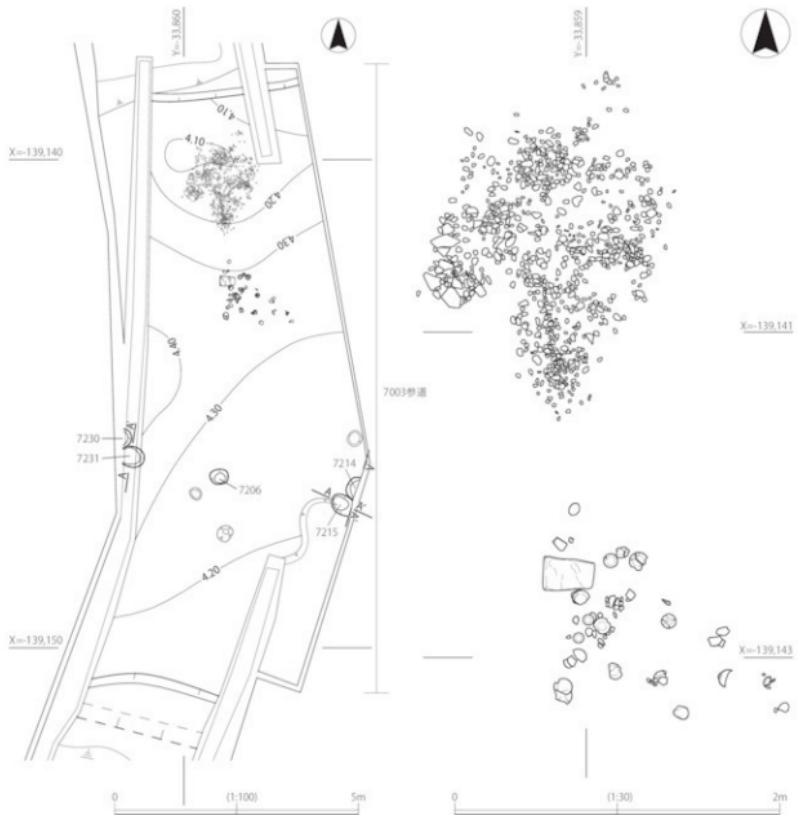


図 616 13-2 区 第3-3 面平面

### 7194 土坑 (図 613 ~ 615、図版 134)

7195 土坑の西側で検出された。灯明皿の破片を含む粗砂混シルトを埋土としており、同様の土坑は 7003 参道南側に集中しており、北側で検出されたのは 7194 土坑のみである。平面形は楕円形に近い形状を呈し、規模は長軸 0.4 m、短軸 0.3 m、深さ 0.02 m である。7194 土坑から図 615-32 ~ 34 の土師器灯明皿が出土した。

7201 火床 (図 613・614、図版 42)

7197 土坑の南側で検出された。平面形は不整な円形を呈し、規模は、直径0.3m、深さ0.06mである。土坑の上部中央に、火床が構築される。被熱を受けて赤変したシルトが円形に検出された。火床は、直径0.04m、深さ0.04mである。赤変したシルトは、下位で偽礫状を呈し、均一に被熱していない状態が観察され、元々被熱した土が用られたことが想定される。なお、上部構造については不明で、燃焼部に關係するような、炭化物等は検出されなかった。遺物は無く、時期の詳細は不明。



図 617 13-2区 7214・7215・7231 土坑断面

7003 参道 3-2 層出土遺物  
(図615、図版132・135・136)

3-2 層から出土した遺物  
の内、図 615-1 ~ 31 を  
図化した。1 ~ 28 が土師器

灯明皿、29 が柿釉陶器灯明皿である。30 は瀬戸・美濃系陶器の壺か。31 は肥前焼系磁器のコンニヤク印判の碗である。高台に二重圓線、高台直上に圓線 1 条がそれぞれ施される。出土遺物と上下の地層の所見から、3-2 層は、江戸時代後期に形成されたと考えられる。

### 第3-3面 (図 616、図版 42・43)

3-2 層としたシルト混粗砂～極細砂を除去して検出した遺構面である。第3-3面では土坑と灯明皿を中心とした遺物や礫の集中部が検出された。土器等が集中する範囲では、土師器灯明皿・肥前焼系磁器碗・台座が出土した。出土範囲は、第4-1面で検出した 7207 溝と、7222 畦畔が途切れる部分に当たり、参道構築後に凹みがあった部分に集中的に投棄された可能性が考えられる。礫集中部の範囲についても同様のことことが指摘でき、7207 溝が存在した位置と同じ場所に礫は集中する。礫は 3-2 面で検出した礫と同じ大きさのもので、2~3cm 大を中心としている。

### 7206・7214・7215・7230・7231 土坑 (図 616・617、図版 42)

7003 参道の南側を中心に土坑が検出された。埋土に炭化物を多量に含んでおり、第1面から参道南側で検出された土坑と、埋土の特徴は似る。埋土に混じる炭化物は、各土坑によって量に違いがあり、7230・7231 土坑は大量に炭化物を含む。

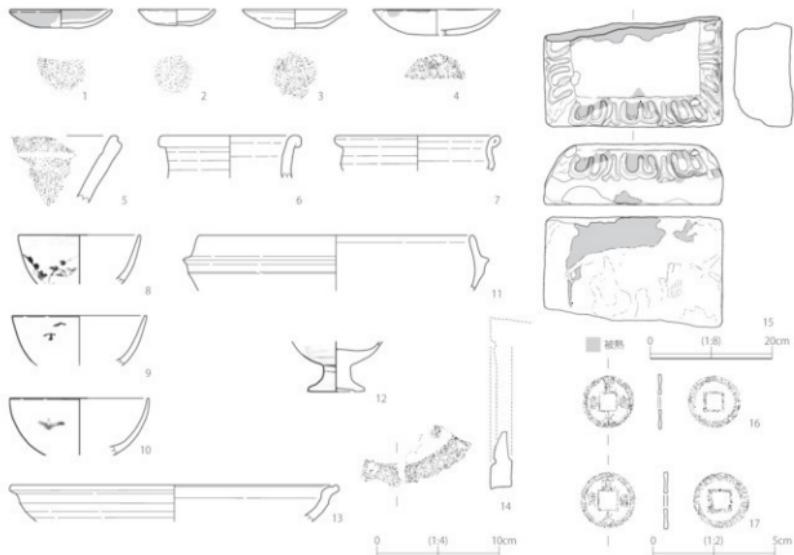


図 618 13-2区 7003 参道 3-3 層出土遺物

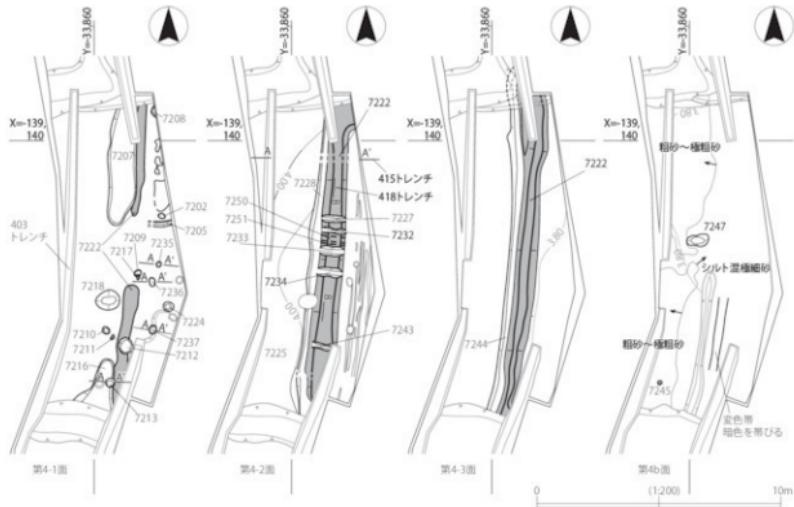


図 619 13-2 区 第4-1~4-4面平面

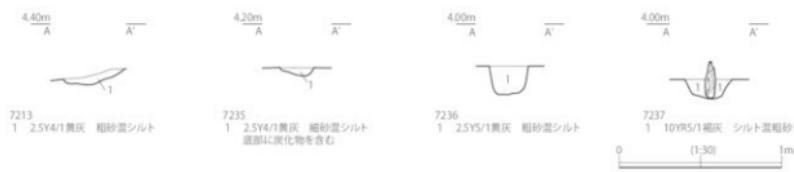


図 620 13-2 区 7213 土坑他断面

7003 参道 3-3 層出土遺物 (図 618、図版 132・133・135～137)

3-3 層から出土した遺物の内、図 618-1～17 を図化した。1～4 は土師器灯明皿である。5 は丹波焼系の擂鉢である。6 は備前焼壺の口縁部である。7 は京・信楽焼系の鉢である。8～10 は肥前焼系染付碗である。11 は土師質土器培焰、12 は肥前焼系仏龕器、13 は瀬戸・美濃焼系皿である。14 は巴文軒丸瓦である。珠文と外縁が遺存する。15 は反花を表す宝鏡印塔などの台座である。半分に破損した状態で出土しており、被熱して黒変する。黒変した部分は剖面にも及ぶことから、破損した状態で被熱したことが想定される。側面は台形状を呈し、上部に蓮弁が表現される。16・17 は寛永通宝である。新寛永で、裏面は無背。出土遺物から、3-3 層は、室町時代後期～江戸時代後期に形成されたと考えている。ただし、16 世紀後半から 17 世紀の遺物は、総じて希薄な状況である。

第4-1面 (図 619・620、図版 43)

3-3 層を除去した遺構面で、畦畔が検出された。畦畔以外は、参道に帰属する遺構で、3-3 層下面ないし 3-3 層形成時に掘削された遺構と考えられる。出土遺物は瓦質火鉢、瓦器・土師器の破片があり、4-1 層は 15 世紀から 16 世紀前半にかけて形成されたと考えている。

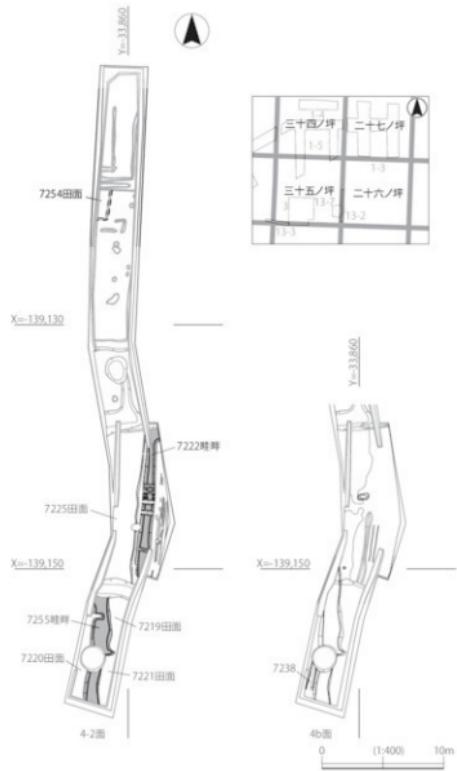


図 621 13-2区 第4-2・4b面平面

東側の肩部が緩やかに低くなっている。耕作時の加工としては鋭角ではない。近世以降の作土によって削平されたことや、7003 参道に伴う 7002 溝に搅乱されたことで、不明な点も多いが、東西の畦畔が X=139.150 近辺にあった可能性があると考えている。なお、7228 溝から図 622-4 の土師器灯明皿が出土した。

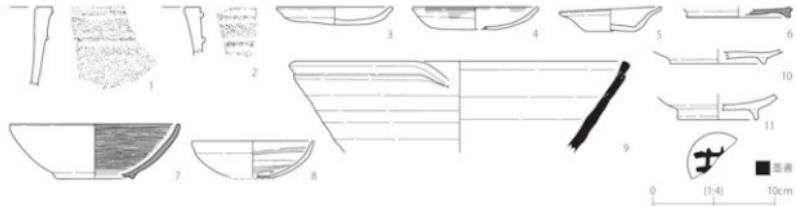


図 622 13-2区 4層他出土遺物

第4-2面 (図619・621~623、図版43・133・136)

4-1・4-1b層とした細砂混シルトを除去して検出した遺構面で、第4-1面と同様、水田が検出された。4-1b層は7222畦畔の西側中央の一部で堆積が確認されており、隣接する調査地である13-6区の断面から、氾濫堆積物と判断される。礫質の砂層で、その供給源は調査地北西に求められる。

7222畦畔の直上では、7227・7232・7233・7243・7250・7251水口が計6箇所検出された。1箇所ずつ機能したと考えられるが、4-1層に対比される畦畔盛土除去面で、検証することはできなかった。4-2層から図622-2の瓦質火鉢が出土しており、4-2層は4-1層とほぼ同時期の、15世紀から16世紀前半に形成されたと考えられる。

また、7222畦畔の東側では、耕作痕が検出されており、作土としては堆積構造が偽礫状を呈し、土質は粗いものの、水田として土地利用されたことが判明した。耕作痕は犁の痕跡と考えられる。

7222畦畔の南側で検出された7255畦畔は7222畦畔と平行するものではなく、

東西の畦畔がX=139.150近辺にあった可能性があると考えている。なお、7228溝から図622-4の土師器灯明皿が出土した。

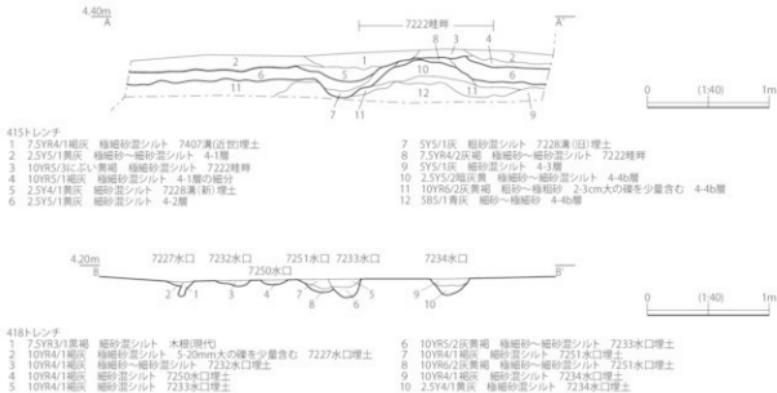


図 623 13-2区 415・418トレンチ断面

#### 第4-3面・第4-4面（図619・622、図版43・136）

第4-3面は、4-2層を除去して検出した遺構面である。第4-3面では、第4-2面と同様、水田が検出された。4-3層は、403トレンチ掘削時に出土した図622-8の瓦器碗が帰属すると考えられ、鎌倉時代から室町時代前期に形成されたと考えられる。

第4-4面は、4-3層を除去して検出した遺構面である。4-3層を除去した段階で、調査地の大半は4b層が露出しており、7245ピット周辺の一部に4-4層とした古土壤が遺存した。第4-4面では、4-3層に帰属する7222畦畔の痕跡が検出された。4-4層からは、黒色土器A類碗が出土した。  
7238溝（図621・622、図版136）

調査地南側、第4-2面の7220水田直下で検出された。埋土は粗砂混シルトで、4-3層とした水田作土と土質は似る。7238溝から図622-3の土師器小皿、9の東幡系こね鉢が出土した。鎌倉時代前期。

#### 第4b面（図619・621）

4-4層を除去して検出した遺構面である。第4b面では、土坑・ピットが検出された。

#### 4層他出土遺物（図622、図版133・136）

4層から出土した遺物は、1・2・5・6・7・10・11である。1は瓦質火鉢で、4-1層から出土した。室町時代前期に位置付けられる。2は瓦質火鉢で、4-2層から出土した。1と同時期のものと考えられる。5は土師器小皿で、4-4層から出土した。上層の混入品と考えられる。10は椀で、4-4層から出土した。全体が磨滅する。黒色土器か。6・11は第4b面の精査時に出土したもので、4-4層に帰属する。6は黒色土器A類椀である。7は黒色土器A類椀で403トレンチ掘削時に出土しており、4-4層に帰属する。11は灰釉陶器椀である。底面に「井」の字に似た墨書が確認できた。平安時代後期。

（後川恵太郎）

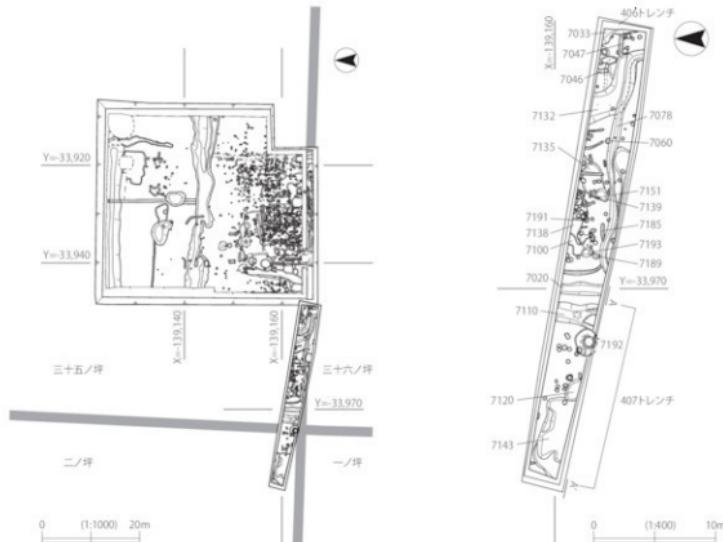


図 624 3・13-3 区 第 2 b 面平面

## 第6節 13-3区の調査成果

3区南西側に設定した調査地である。2層上面まで機械掘削を行って、2b層上面まで人力掘削を行った。2b層以下についてはT.P.+1.5 mまで機械掘削を行って、断面記録と一部平面の記録を行って調査を終了した。

### 第2面（図 624）

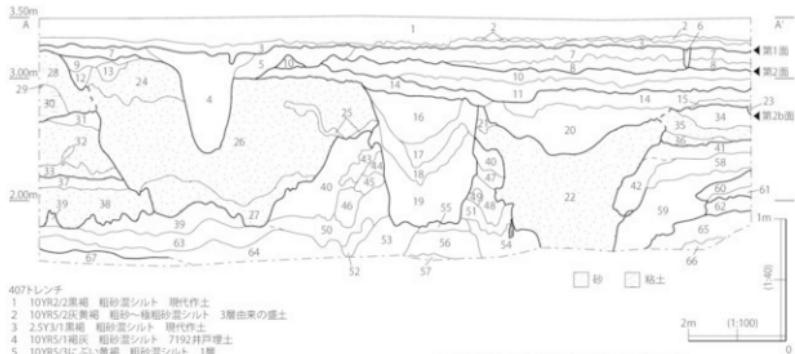
近代から現代の作土及び1層を機械掘削で除去して検出した遺構面である。第2-1面では、東西の耕作関連の溝が検出された。図 624 に図示した 7110 溝は、坪境に掘削された溝で 18 世紀以降に掘削されたものである。近接して、同時期の 7192 井戸が検出された。2-1 層から瓦質土器羽釜が出土しており、室町時代後期以降の遺構面と考えられる。

### 第2b面（図 624）

2層を除去して検出した遺構面で、2b層とした砂層上面に当たる。第2b面では、鎌倉時代から室町時代前期の集落と坪境の溝が検出された。

#### 7078・7132 溝（図 624・626・627、図版 44・138・139）

7078 溝は、坪境に掘削された溝である。規模は、幅 0.7 m、深さ 0.3 m である。7132 溝と切り合った関係があり、7078 溝が新しい。流向は東方向で、東端で屈曲し、南方向に流れると考えられる。南流する部分は 7132 溝と重なる位置にあり、7132 溝廃絶後に 7078 溝が掘削されたと考えられる。埋土は底面直上が湿性堆積物のシルト質粘土、中層から上層が極細砂～細砂混シルトの偽疊である。なお、西側には、同時期に機能した東西の坪境の 7020 溝がある。



- 407トレチ
- 1 10YR2/2黒褐 粗砂混シルト 既代作土
  - 2 10YR5/5黄褐 粘砂～中粗砂混シルト 3層由來の土
  - 3 2.5Y3/1黒褐 粗砂混シルト 現代作土
  - 4 10YR5/1褐色 粗砂混シルト 7192戸埋土
  - 5 10YR6/5灰褐色～灰褐色～中粗砂混シルト 1層
  - 6 2.5Y6/1灰褐 粗砂～細砂 滲潤土
  - 7 10YR5/5にし～黄褐 粗砂混シルト 1-1層
  - 8 10YR4/1灰褐 粗砂～細砂混シルト 1-2層の分離
  - 9 10YR5/5灰 黄褐 粗砂～中粗砂混シルト 2層
  - 10 7.5YR5/1灰褐 粗砂混シルト 2層
  - 11 7.5YR4/1灰褐 粗砂混シルト 2層
  - 12 2.5Y6/2灰褐 粗砂混シルト 2-3mmの大礫を少量含む 滲潤土
  - 13 2.5Y5/1黄褐 滲潤砂～細砂混シルト 通構理土
  - 14 2.5Y6/2灰褐色～灰褐色～中粗砂混シルト 2層の分離
  - 15 10YR5/5灰黄褐 粗砂混シルト 通構理土
  - 16 10YR3/3黒褐 シルト～粗砂混シルト 通構理土
  - 17 10YR7/4(4)にし～黄褐 粗砂～細砂 滲潤土
  - 18 10YR6/5にし～黄褐 粗砂混シルト 通構理土
  - 19 10YR4/1灰褐 粗砂～細砂 滲潤土
  - 20 2.5Y5/2暗黄褐 粗砂～細砂 滲潤土
  - 21 5Y7/1灰白 細砂～細砂 滲潤理土
  - 22 2.5Y8/2灰褐 粗砂～中粗砂 上位で粗粒化 滲潤理土
  - 23 10YR6/5にし～黄褐 粗砂～中粗砂混シルト 1-2層の分離 2-3層の粗粒化を微量含む 滲潤理土
  - 24 10YR6/5にし～黄褐 粗砂～中粗砂 滲潤理土
  - 25 2.5Y6/1黄褐 滲潤砂～細砂 滲潤土
  - 26 2.5Y5/2暗黄褐 粗砂～細砂 滲潤土
  - 27 10Y7/1灰白 滲潤砂～細砂 滲潤土
  - 28 10YR6/5にし～黄褐 粗砂～細砂 1-2cmの大礫を少量含む 上位で粗粒化 2b層
  - 29 2.5Y6/2灰褐 細砂混シルトと粗砂～中粗砂の互層 2b層
  - 30 2.5Y5/1黄褐 細砂～細砂混シルト 2b層
  - 31 10YR6/5褐色 粗砂混シルト 作土 1-2層に對比
  - 32 2.5Y6/2灰褐色～灰褐色 粗砂～細砂 2-3層に對比
  - 33 2.5Y6/3にし～黄褐 細砂～細砂 自然堆積層 2-1区4層に對比
  - 34 2.5Y6/3にし～黄褐 細砂～細砂 自然堆積層 2-1区4層に對比
  - 35 2.5Y7/3浅黃 細砂～細砂 自然堆積層 2-1区4層に對比
  - 36 5Y5/1灰 黃褐色 細砂～細砂 自然堆積層 2-1区4層に對比
  - 37 2.5Y4/1灰褐 粗砂混シルト 作土 2-1区4層に對比
  - 38 5Y5/1灰 白砂～細砂 2-1区4b層に對比
  - 39 10YR5/1灰褐 シルト～粗砂 作土 2-1区4層に對比
  - 40 10YR3/2黒褐 粗砂混シルト 盛土か
  - 41 5Y5/1灰 中砂～粗砂混シルト 作土 2-1区4層に對比
  - 42 2.5Y6/2灰黄 シルト 良質細砂 嵌隙土
  - 43 5Y5/1灰 黑褐色～細砂 盛土か
  - 44 2.5Y4/1灰 黃褐色～細砂 作土か
  - 45 2.5Y6/2灰 黑褐色～細砂 盛土か
  - 46 2.5Y7/1灰白 黃褐色～細砂 盛土か
  - 47 2.5Y2/1黑褐 粗砂混シルト 盛土か
  - 48 10YR4/1灰褐 滲潤砂～細砂 粗砂混シルト偽縫を少量含む 盛土か
  - 49 10YR5/1灰褐 粗砂混シルト 盛土か
  - 50 2.5Y7/2灰 黃褐色～細砂混シルト 粗砂～中粗砂を多量含む 盛土か
  - 51 10YR5/2灰黄褐 粗砂混シルト 盛土か
  - 52 2.5Y6/2灰 黃褐色～細砂質シルト 盛土か
  - 53 10YR4/2灰 黄褐色 粗砂混シルト 盛土か
  - 54 10YR6/5灰 黄褐色～細砂混シルト 通構理 土か
  - 55 10YR6/2灰黄褐 粗砂～細砂混シルト 盛土か
  - 56 2.5Y6/1黄褐 粗砂混シルト 盛土か
  - 57 2.5Y7/1灰白 シルト 盛土か
  - 58 5Y5/1灰 黑褐色～細砂混シルト 作土か 2-1区4層に對比
  - 59 2.5Y7/1灰白 黃褐色～細砂 滲潤理土
  - 60 2.5Y5/1灰 黃褐色～細砂混シルト 粗砂を多量含む 作土か 2-1区4層に對比
  - 61 2.5Y6/1黄褐 細砂～細砂混シルト 倒い士壌か 2-1区4層に對比
  - 62 2.5Y7/2灰 黄褐色 粗砂混シルト 粗砂～細砂 滲潤 作土 2-1区4層に對比
  - 63 2.5Y7/1灰白 黃褐色～細砂混シルト 作土 2-1区4層に對比
  - 64 2.5Y7/1灰白 黄褐色～細砂 2-1区4b層に對比
  - 65 2.5Y4/1黄褐 粗砂混シルト 作土 2-1区4層に對比
  - 66 2.5Y6/1黄褐 シルト混在細砂～細砂 作土か 2-1区4層に對比
  - 67 2.5Y5/1灰 黃褐色～中砂混シルト 作土 2-1区4層に對比

図 625 13-3区 407トレチ断面

7078溝から出土した遺物は、図627-1～7・9～13を国化した。1～6は土師器皿である。7は東播系こね鉢である。9～13は瓦器椀である。9の外面はナデと粗いヘラミガキ、内面は螺旋状の暗文が施される。10の外面はナデ調整、内面に螺旋状の暗文が施される。11は見込みに連結輪状の暗文が施される。12の外面はナデ・指押さえ後、分割性のあるヘラミガキが施される。内面は密なヘラミガキ調整、見込みはハケの後連結輪状の暗文が施される。13の外面は、分割性はあるものの粗いヘラミガキが施される。内面は密なヘラミガキ、見込みは連結輪状の暗文が施される。出土した瓦器椀はII-2～III-2型式に比定できるもので、共伴する東播系こね鉢も同時期のものである。

7132溝の規模は幅1.8m、深さ0.3mである。流向は南方向である。溝の中位まで粗砂混シルトのブロック土で埋没しており、上位には水成層の砂層が一部認められる。7132溝から、図627-8・14が出土した。8は東播系こね鉢である。14は瓦器椀で外面は粗いヘラミガキ、内面は密なヘラミガキ、見込みは連結輪状文の暗文が施される。また、7132溝の東側では、7047溝が接続する。7132溝に排水していたと考えられる。7047・7132溝は、周辺に展開していたであろう水田の灌漑用水路であると同時に、3区や今回の調査地で検出された集落を区画したと考えられる。



図 626 13-3 区 7078・7132 溝平・断面

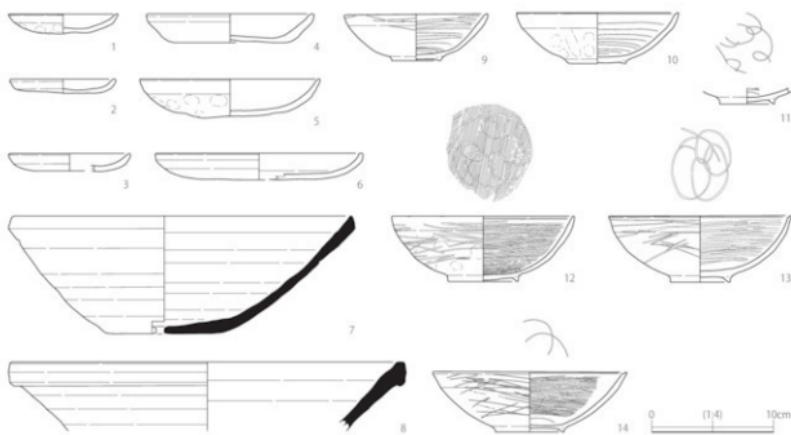


図 627 13-3 区 7078・7132 溝出土遺物

#### 7033 溝 (図 624・629、図版 44)

調査地の東端で検出された。肩部に沿って、護岸的な施設と考えられる杭列が検出されたことや、3区を含めた位置関係から、溝として報告を行う。規模は、幅 0.7 m 以上、深さ 0.4 m 以上である。埋土は、細砂混シルトのブロック上である。杭列は肩部に沿って検出された。芯持ち材の先端を尖らせた杭を用いており、矢板状に加工したものが 1 点含まれる。

#### 7135 土坑 (図 624・628、図版 139)

7132 溝の西側で検出された。平面形は不整形、規模は、長軸 3.0 m、短軸 1.6 m、深さ 0.35 m である。埋土は粗砂混シルトである。7135 土坑から出土した遺物は図 628-1 ~ 10 を図化した。1 ~ 5 は土師器皿である。6 ~ 9 は瓦器碗である。6 の外表面はナデ調整、見込みには連結輪状の暗文が施される。7 の外表面はナデ調整、見込みには連結輪状の暗文が施される。8 の外表面はナデ及び粗いヘラミガキ、見込みはハケ調整の後、連結輪状の暗文が施される。9 の外表面はナデ・指押さえの後粗いヘラミガキが施

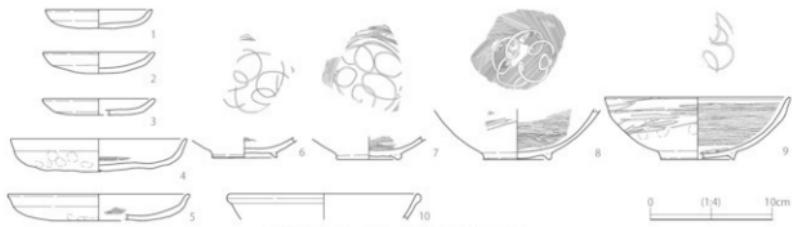


図 628 13-3 区 7135 土坑出土遺物

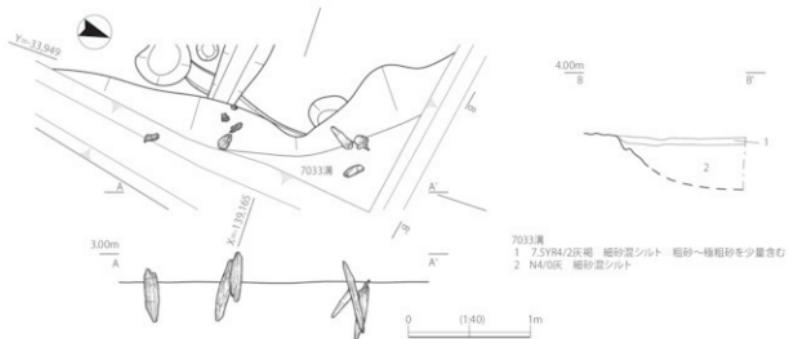


図 629 13-3 区 7033 溝平・立・断面

される。内面は密なヘラミガキ、見込みには連結輪状の暗文が施される。10は白磁碗である。瓦器椀はII-2型式に比定できるもので、共伴する白磁碗も時期的には矛盾しないものと考えられる。

#### 7143 土坑（図 624・630、図版 44）

調査地の西端で検出された。平面形は不整形で、規模は南北 2.2 m 以上、東西 6.5 m 以上、深さ 0.4 m である。埋土は、粗砂一極粗砂である。土坑の内側で、肩部に沿って杭列が検出された。土坑の全容が不明であるため、杭列の機能は不明な点もあるが、西側部分は土坑肩部から離れて、平面的に円弧を描くように検出されており、護岸施設であるだけではなく、シガラミのような水利施設の可能性がある。垂直に打設される杭が大半であったが、これらに直交して水平に打ち込まれた杭もあった。出土遺物は、土師器・砥石等が出土したが、時期を特定する遺物はなかった。

また、7143 土坑に接続する 7130 溝が北西部で検出された。規模は、幅 0.2m、深さ 0.03m である。7143 土坑に排水を行っていたと考える。

#### 7060・7189・7139・7191・7193 柱穴、7100 土坑（図 624・631・632、図版 44・138）

柱穴及び土坑は、多数検出されたが、以下に特徴的なものについて取り上げる。7060 柱穴は、柱の抜き取り穴に 20cm 大の石が落とし込まれていた。7189 柱穴は根石の上に柱根が立った状態で検出された。7139 柱穴は柱根の一部が底部に遺存しており、7060 柱穴と同様、抜き取り穴に石が落とし込まれていた。7139 柱穴から図 632-10 は瓦器椀が出土した。外表面はナデ及び指押さえの後、疎らなヘラミガキ、内面は密なヘラミガキが施される。見込みの暗文は一部が遺存するのみである。II-1～2 型式。



図 630 13-3 区 7143 土坑平・立・断面

7191 柱穴は柱は抜き取られていたが、根石と根巻きの木材が出土した。7193 柱穴は上部は失われていたが、根石が検出された。

7100 土坑は、焼土塊が埋土中に含まれた土坑で、図 632-1~4 が出土した。1・2 は土師器小皿、3 は瓦器椀で見込みの暗文は螺旋状文である。4 は瓦器椀で、外面は分割性のあるヘラミガキが施される。見込みの暗文は連結輪状文である。II-2~3 型式。

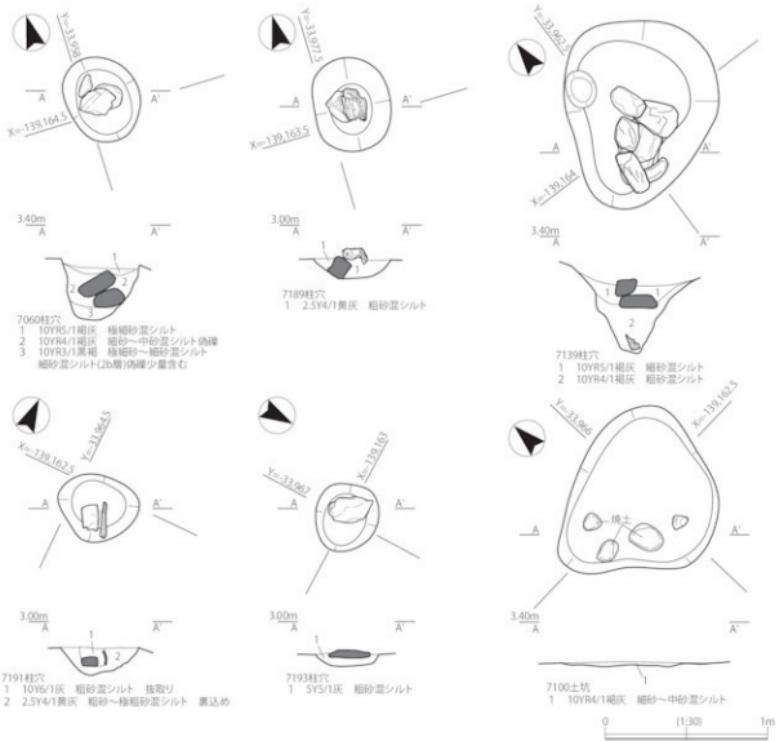


図 631 13-3区 7060 土坑他平・断面

その他の遺構・地層出土遺物（図632、図版138・139）

上記に掲げた遺構以外から出土した遺物を図632-5～9・11～22に図化した。5～7は7120土坑から出土した。5は瓦器小皿で、内面にジグザク状にヘラミガキされる。6・7は土師器皿である。8・21・22は7110溝から出土した遺物である。8は瓦器椀である。外面はナデ及び指押さえが施される。21は砥石で、砥面は4面である。敲打痕と考えられる凹みが砥面の一部で確認できる。22は鉄製品で、留め金具と考えられる。直径2.2cm、厚み4mm。11は土師器小皿で、7185溝から出土した。16は瓦質土器底底部で7046溝から出土した。外面は平滑に仕上げられる。内面はナデ調整される。底部の外周に沿ってヘラケズリで、それより内側は工具を用いたナデ調整が施される。17～19は7151土坑から出土した土器である。17は瓦質土器羽釜である。18は瓦質土器すり鉢である。外面はナデ調整と指押さえによって仕上げられる。内面はハケ調整の後、摺目が付けられる。19は瓦質土器火鉢の脚部である。9は瓦器椀で、7138土坑から出土した。外面はナデ調整後、疎らにヘラミガキが施される。内面は密なヘラミガキで、見込みは遺存していないため暗文は不明である。20は滑石製石鍋で、7046溝から出土した。内外面はケズリによって仕上げられ、煤の付着が顕著である。12は黒色土器A類椀

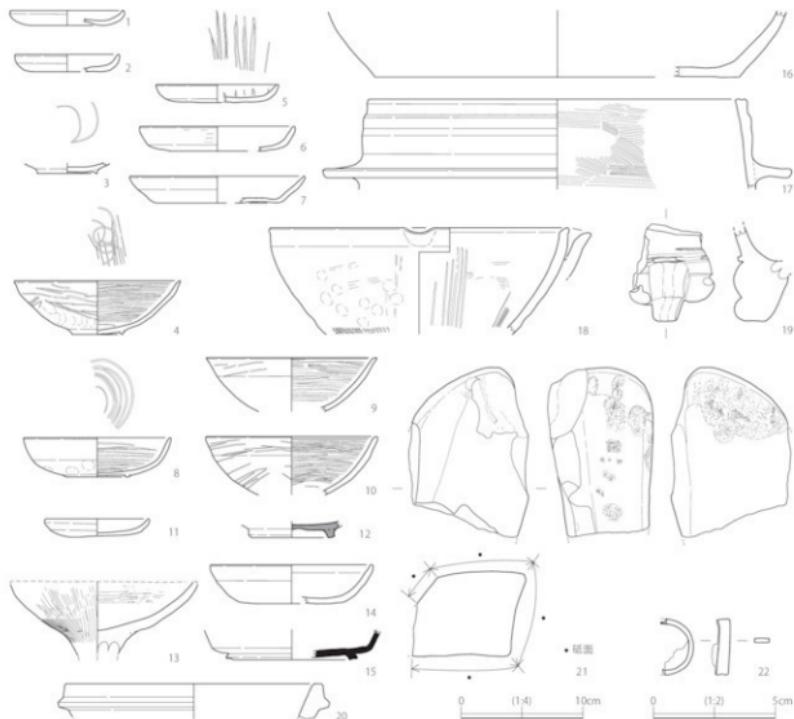


図 632 13-3 区 7100 土坑他出土遺物

である。406 レンチ内、2 b 層の直上から出土している。2 b 層は 13-2 区の 4 b 層に対比できる地層で、13-2 区 4-4 層から出土した平安時代の遺物と時期が合致する。14・15 は 2 b 層削削時に出土した。14 は土師器環である。口縁端部が丸められる。平安時代前期か。15 は須恵器環である。内外面は回転ナデ調整される。奈良時代前期か。

#### 2 b 層以下の調査（図 625、図版 44）

2 b 層以下で T.P.+1.5 m の間に、作土層が 2 層認められた。図 625 の 31 に当たる地層では、上面と下面を精査した。上面では畦畔は確認されず、下面では図 632-13 の土師器高環が出土した。口縁端面は磨滅・剥離しているが、丸くおさめられていたものと考えられる。古墳時代中期後葉以降の資料と考えられる。

水成層の砂層を挟んで、図 625 の 37 に相当する地層の上面（第 4 面）でも精査を行った。水田畦畔が 2 条検出された。遺物が出土しておらず、詳細は不明であるが、2-1 区の調査成果から、古墳時代中期から後期に位置付けられる遺構面と考えられる。

（後川恵太郎）

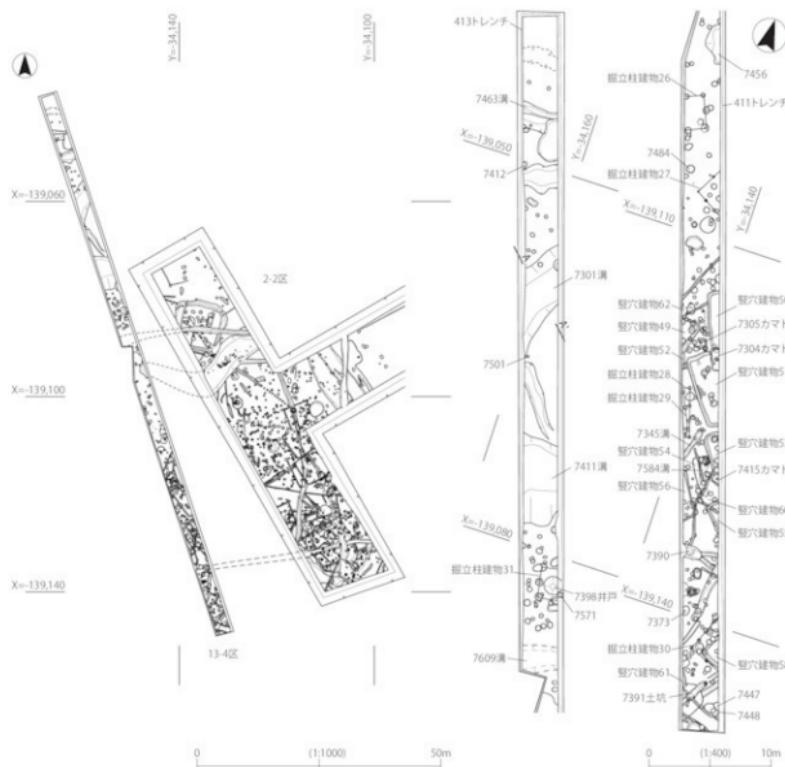


図 633 13-4 区 第 5-2 b 面平面

## 第7節 13-4区の調査成果

2-2区の西側に南北に長い調査地を設定して、発掘調査を行った。第5-2 b面まで機械掘削を行い、第5-2 b面の調査終了後、5-2 b層の途中まで機械掘削を行って調査を終了した。

13-4区では2-2区第5-2b面で検出された古墳時代集落の続きが検出された。北側では、集落縁辺に掘削されたと考えられる溝が複数検出された。

なお、第5-2 b層中では、2-2区第6-1面8059微高地に連続すると考えられる、7601微高地が検出された。

### 竪穴建物 51 (図 633 ~ 636、図版 45・88・141・143)

竪穴建物 53 の北側で検出された。規模は南西辺 6.1 m である。床面はシルト混極細砂～細砂で、上部が土壤化しており、炭化物や焼土塊の混入が認められた。

主柱穴は 7578・7479 柱穴が確認されており、それ以外に 2 基ずつ、7578・7479 柱穴の周囲で柱

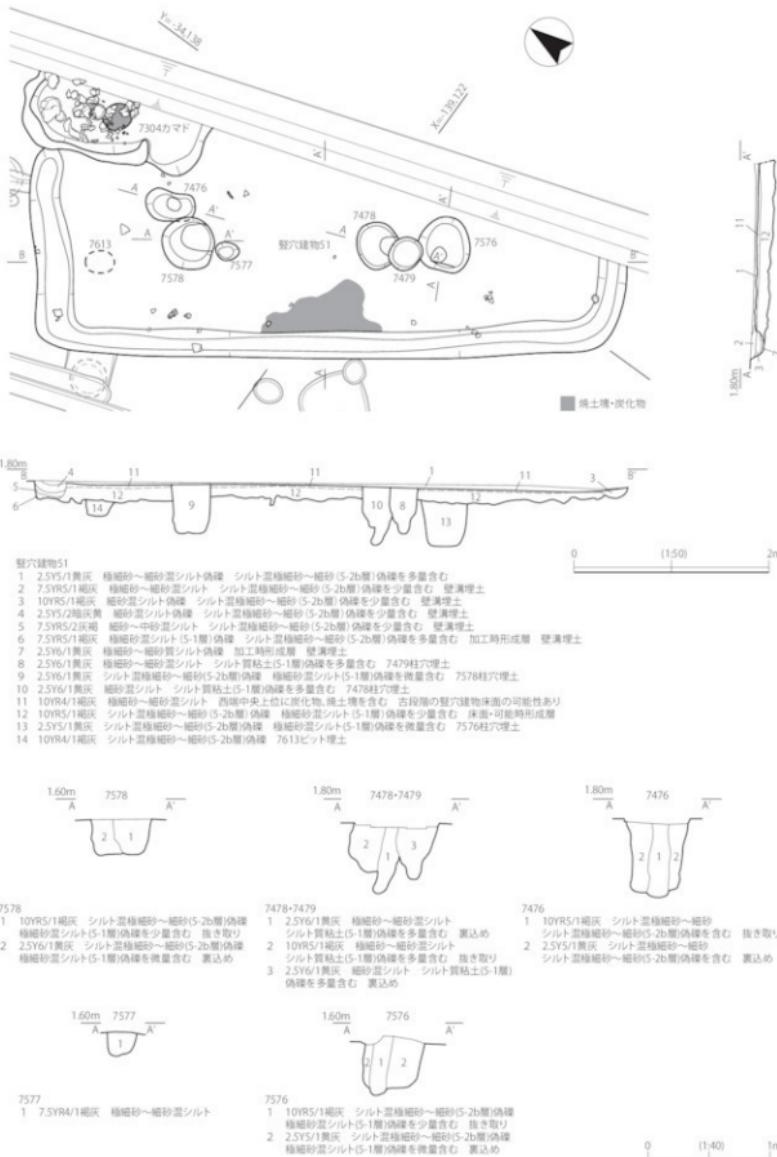


図 634 13-4区 穹穴建物 51平・断面

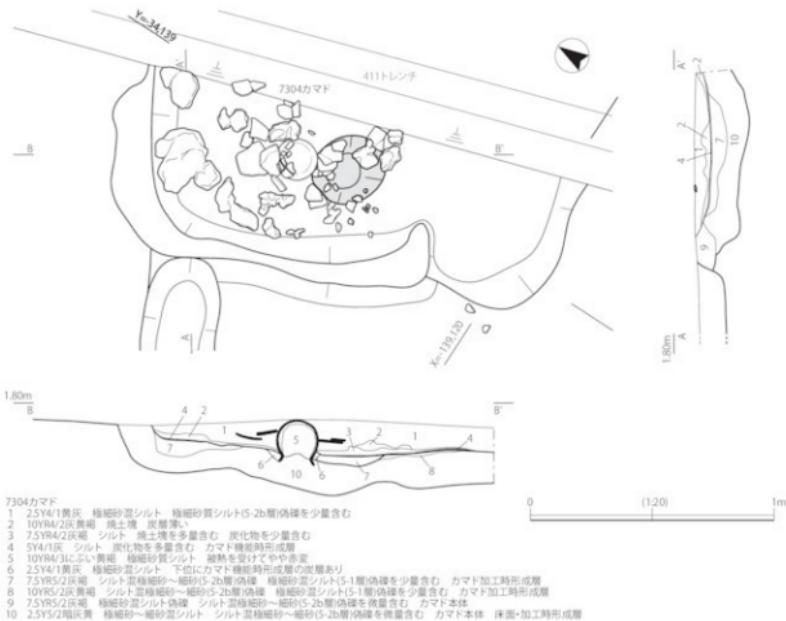


図 635 13-4区 積穴建物 51 7304 カマド平・断面

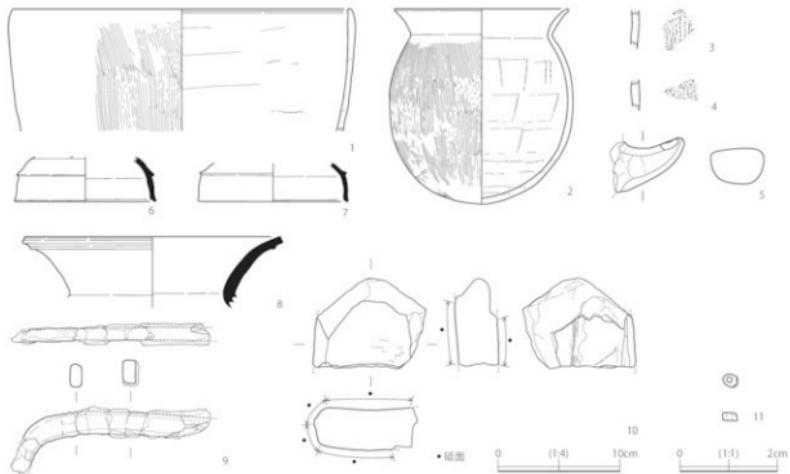


図 636 13-4区 積穴建物 51 出土遺物

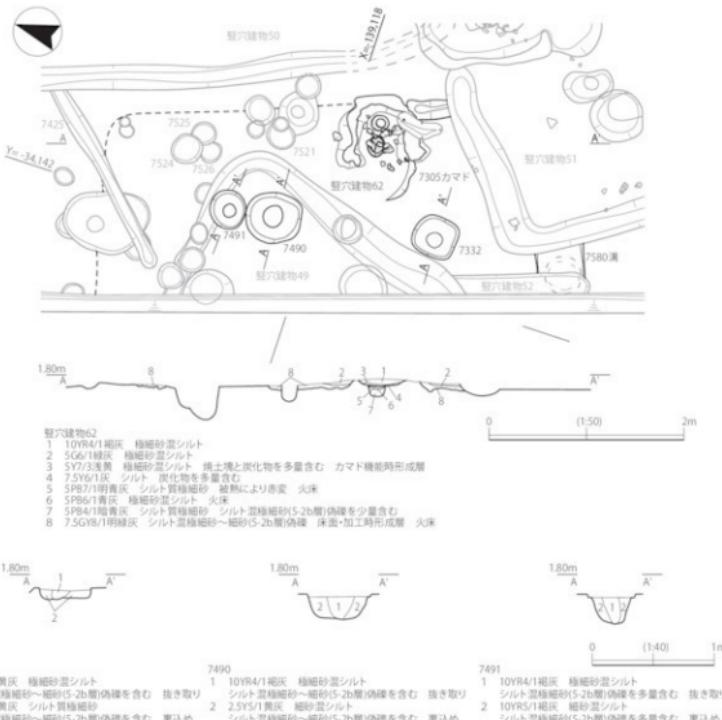


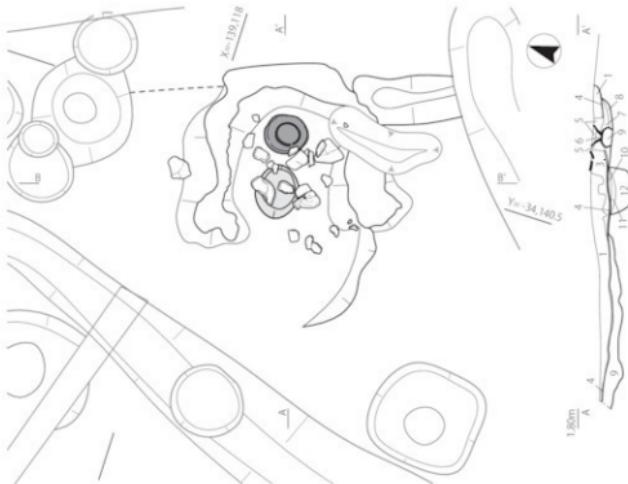
図 637 13-4区 積穴建物 62 平・断面

穴が検出されている。建て替えを2回以上想定しており、床面上部の炭化物や焼土塊は、建て替え前の積穴建物の痕跡の可能性がある。

7304 カマドは、積穴建物の北西側で検出された。規模は、長さ 1.35 m、幅 0.8 m 以上である。カマド中央から支脚として用いられた土師器甕が出土した。土師器甕は、倒立させて使用されており、口縁部が荷重により地中に沈み込んだ状態が確認された。

カマド内は、カマド機能時に形成された、炭化物を多量に含むシルト層（以下、炭層）が堆積する。この炭層は、支脚の土師器甕に近い部分で 2 層に分かれ、口縁部と頸部付近にそれぞれすり付く状況が確認された。また、支脚周辺からは、カマド本体の崩落上や土師器甕の破片が出土している。

積穴建物 51 から出土した遺物の内、図 636-1~11 を図示した。1・2 はカマドから出土した土器である。1 は土師器甕の口縁部である。外面はハケ調整、内面は板ナデ調整される。2 は土師器甕で、支脚として用いられたものである。体部外面は縦方向のハケ調整、内面は横方向に板ナデ調整される。3・4 は韓式系土器の体部片である。鉢ないし甕か。外面に平行タタキが施される。5 は把手である。ナデ調整によって仕上げられる。6・7 は須恵器環蓋である。8 は須恵器甕である。口縁端部には凹みがあ



7305 カマド	
1	7304/1縫灰 積細砂混シルト
2	5G6/1縫灰 積細砂混シルト
3	SY7/3洗黄 積細砂混シルト 土壌塊を多量含む 厚化物を多量含む
4	7.5Y6/1灰 シルト 細粒度を多量含む カマド機能形成層
5	SYR7/3(ふ)灰 シルト 被熱を受け赤変 支脚
6	10Y6/1灰 黄土質小石 休面・加工成層
7	2.5Y6/1青灰 黃土質小石 休面・加工成層
8	SY7/1灰白 黄土質シルト シルト混積細砂～細砂(5-2b層)偽縫を微量含む 休面・加工時形成層
9	7.5GY8/1緑縫 シルト混積細砂～細砂(5-2b層)偽縫 床面・加工時用成層
10	SPB7/1青灰 黒 シルト質細縫砂 被熱により赤変 火床
11	SPB6/1青灰 極細砂混シルト 火床
12	SPB4/1青灰 黒 シルト質細砂 シルト混積細砂(5-2b層)偽縫を少量含む 火床

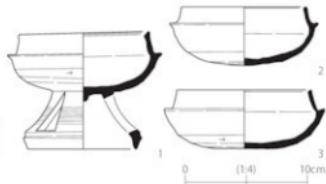
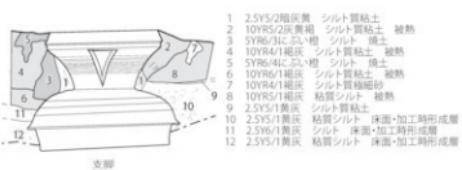


図 638 13-4区 7305 カマド平・断・立面 出土遺物

る面をもち、外面には突帯がめぐる。TK23型式。9は不明鉄製品で、馬具(轡)として用いられたものか。竪穴建物の床面上から出土した。細片となった状態であったが、図示したように復元ができた。断面形は長方形、両端は折損する。一方の端部がやや湾曲する。10は砥石である。砥面は4面あり、裏面には筋状に凹む使用痕が認められる。鉄製品加工用の仕上砥の可能性を考えている。11はガラス小玉である。青色。他に滑石製白玉11点が出土し、内4点は7304カマドから出土した。

竪穴建物50の西側で検出された。竪穴建物の基底面まで土壤化の影響により失われていたが、

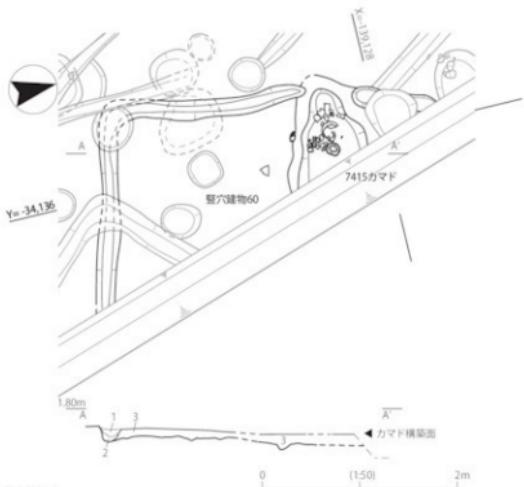
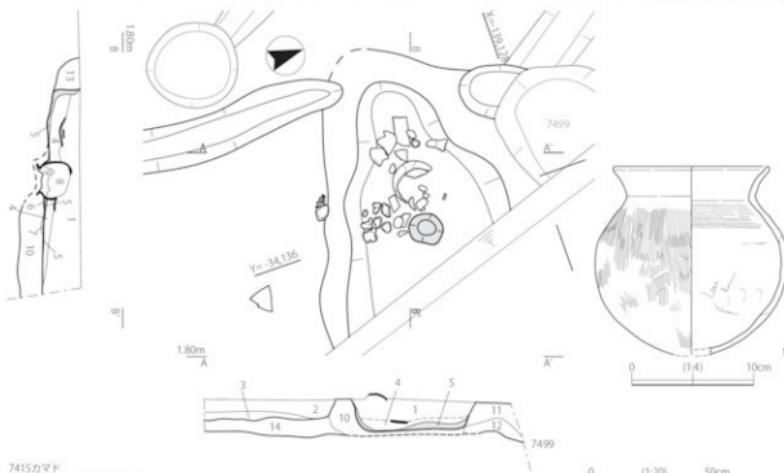


図 639 13-4区 竪穴建物 60 平・断面



7305 カマドと床面・壁溝の一部が検出された。7305 カマドは、竪穴建物の東辺中央部に設置されたと考えられる。カマドの規模は、長さ 0.7 m、幅 0.96 m である。カマド中央で支脚として用いられた須恵器高环が検出された。脚部に粘土が巻かれて用いられている。カマド直上が 2 層とした作土によって削平を受けているため、支脚上部構造は不明である。

支脚に巻かれた粘土は、環部と脚部の接合部にシルト質粘土を貼り付けた後、外側に向かって粘土を巻き付けていったと考えられる。脚部に巻き付けた粘土は、カマド機能面で高さが異

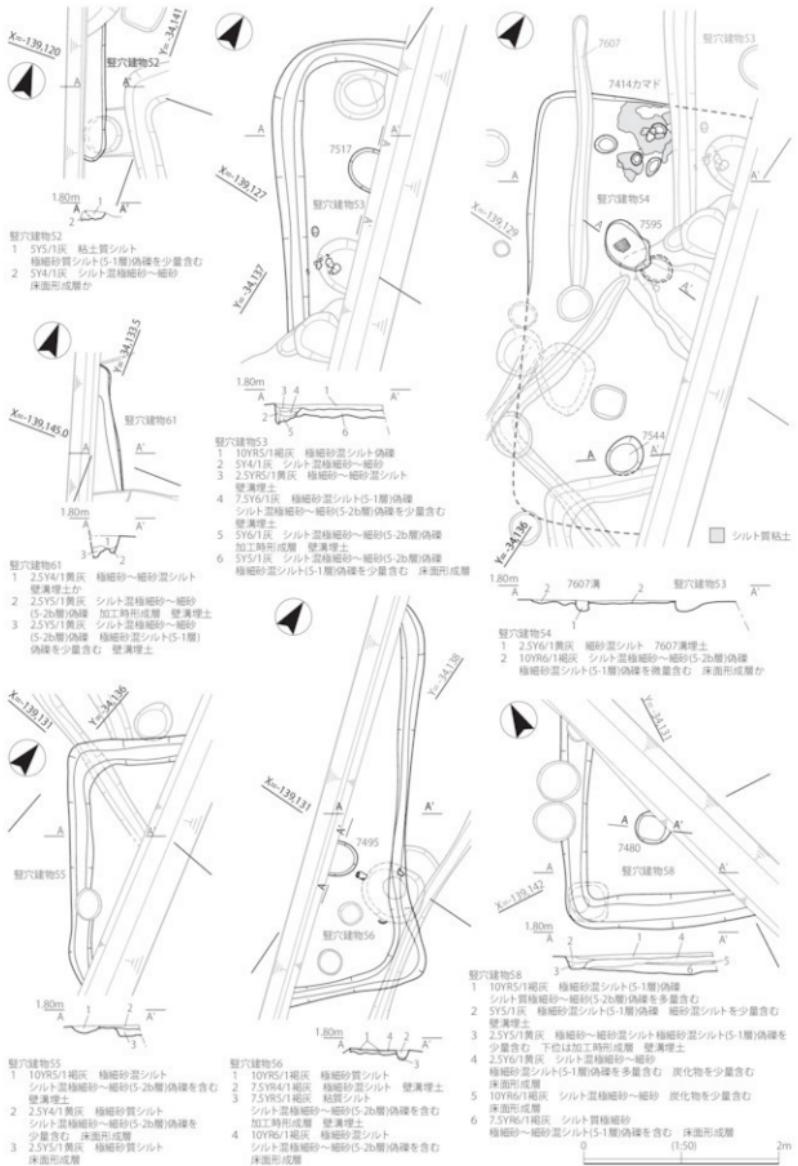


図 641 13-4 区 竪穴建物 52 他平面

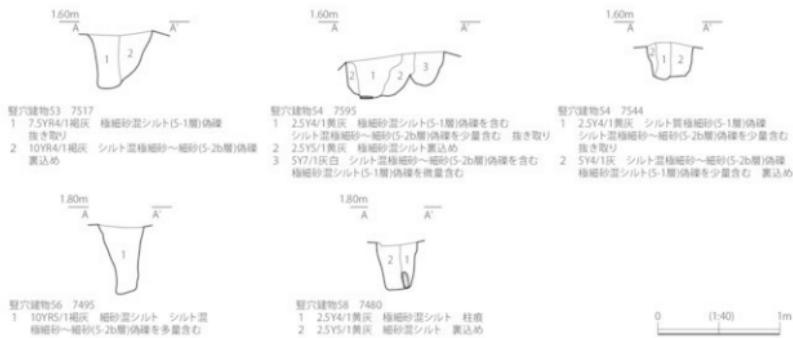


図 642 13-4 区 縫穴建物 53 7517 柱穴他断面



図 643 13-4 区 縫穴建物 54・56・58 出土遺物

なっており、支脚を据える前に粘土を巻いたのではなく、カマド内に設置されてから粘土が巻かれたものと考えられる。カマド内には、カマド機能時形成層の炭化物を主体とした地層（以下、炭層）が堆積し、炭層直上にカマド本体の崩落上と土器片が検出された。支脚の手前では、火床が検出された。平面形は円形を呈し、規模は直径 0.17 m、深さ 0.1 m である。火床は、椀形に掘りくぼめた部分をシルト質極細砂で成形し、上部に極細砂混シルトとシルト質極細砂を突き固めて構築される。カマド南側では、壁溝の一部が検出された。縫穴建物の基底面の大半が失われていることから、壁溝の加工時形成層の一部が認識されたものと考えられる。また、壁溝となる可能性のある 7580 溝も検出されている。縫穴建物 62 から出土した土器は、図 638-1～3 を図示した。すべて 7305 カマドから出土した。1 は須恵器高环で、カマドで支脚として用いられたものである。脚部にはカキメが施され、三角形の透孔が 3 方に開けられる。2・3 は須恵器環身である。出土した須恵器は、TK23～47 型式に比定できる。

#### 縫穴建物 60 (図 633・639・640、図版 46・141)

縫穴建物 55 の北西側で検出された。縫穴建物 55 に切られており縫穴建物 55 が新しい。当初、平面形を誤認して調査しており、床面まで掘り下げた段階で、新たに壁溝を検出しなおして、縫穴建物の平面形を確認した。規模は、西辺 3.5 m 以上、南辺 2.1 m 以上である。床面は極細砂～細砂混シルトのブロック土である。

北西側で 7415 カマドが検出された。規模は本体部分の検出長 1.2 m 以上、幅 0.9 m 以上である。カマド中央では支脚として用いられた土器器表が検出された。カマド内では、カマドの機能時形成層の炭化物を多量に含むシルト層（以下、炭層）が堆積しており、この炭層は支脚の土器器表に近いところで 2 層に分かれ、土器器表の口縁部と頸部にすり付く状態が検出された。なお、この土器器表内には真土のようなシルトが充填されている状況が確認されている。支脚の手前では炭層の除去面で火床が検出

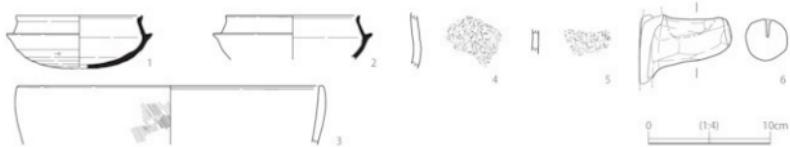
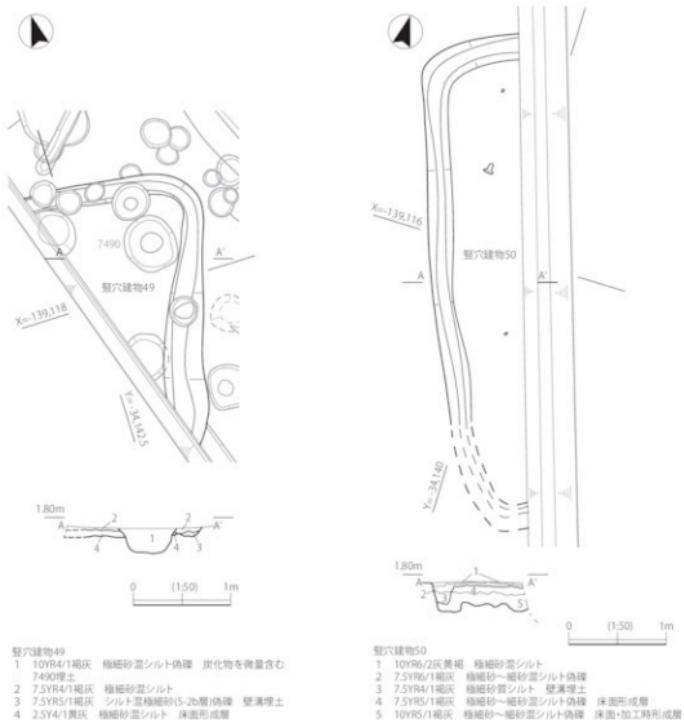


図 644 13-4区 豊穴建物 49・50 平・断面 出土遺物

された。平面形は円形に近く、直径 0.15 m、深さ 0.01 m である。極細砂混シルトで火床は構築されており、ベースとなる床面の地層と境界部は不明瞭であった。

図 640-1 は、7415 カマドで支脚として用いられた土師器甕である。外面は縦方向のハケ、内面は板ナデ調整でナデの痕跡が残る。頸部は横方向の板ナデが施される。出土遺物と豊穴建物 60 の時期は古墳時代中期中葉か。

#### 豊穴建物 52 (図 633・641)

豊穴建物 49 の南側で検出された。南北に直線的に延びる平面形から豊穴建物の可能性があると判断した。大半は調査地外にあるため、全容は不明である。

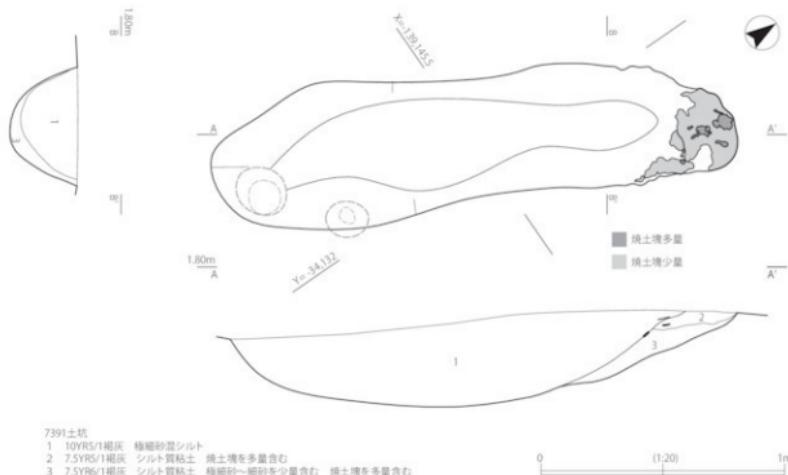


図 645 13-4 区 7391 土坑平・断面

規模は、北東辺 1.4 m 以上である。壁溝は断面で確認したのみで、平面的な検出はできなかった。遺物は出土しておらず、時期の詳細は不明である。

#### 竪穴建物 61 (図 633・641)

竪穴建物 58 の西側で検出された。東側の加工が直線的に見えたことから竪穴建物とした。一部が検出されたのみで、全容は不明。出土遺物は皆無である。

#### 竪穴建物 53 (図 633・641・642、図版 88)

竪穴建物 54 の北東で検出された。竪穴建物 60 に南側を切られる。調査地内に竪穴建物の北西側の一部が検出されたのみで全容は不明である。規模は北西辺 1.2 m 以上、南西辺 2.8 m 以上である。床面は、ベースとなる 5-2 b 層起源のシルト混極細砂～細砂のブロック上で、直上には極細砂混シルトのブロック土が堆積する。床面の直上からは叩石として用いられた可能性がある石製品と、壁溝肩部から土器師細片が出土した。ほかに、滑石製白玉 4 点が出土した。なお、411 トレンチ断面では、カマドは確認できなかった。

#### 竪穴建物 54 (図 633・641・642・643、図版 88)

竪穴建物 60 の北側で検出された。竪穴建物 60 に切られる。竪穴建物 54 検出時から 7584 溝が確認されており、床面の一部が遺存していた範囲を竪穴建物 54 として認識した。壁溝やカマドは検出されなかった。竪穴建物 54 から出土した土器は、図 643-4 の韓式系土器鍋を図示した。外面は平行タタキが施される。他に、滑石製白玉 3 点が出土した。

#### 竪穴建物 55 (図 633・641、図版 46)

竪穴建物 60 の南東側で検出された。大半は調査地外にあり、全容は不明である。規模は、南西辺で 2.5 m 以上、北西辺で 1.1 m 以上である。床面形成層は 2 層に分かれており、底面の高さが一部異なることから、建て替えがあった可能性ある。滑石製白玉が 3 点出土した。

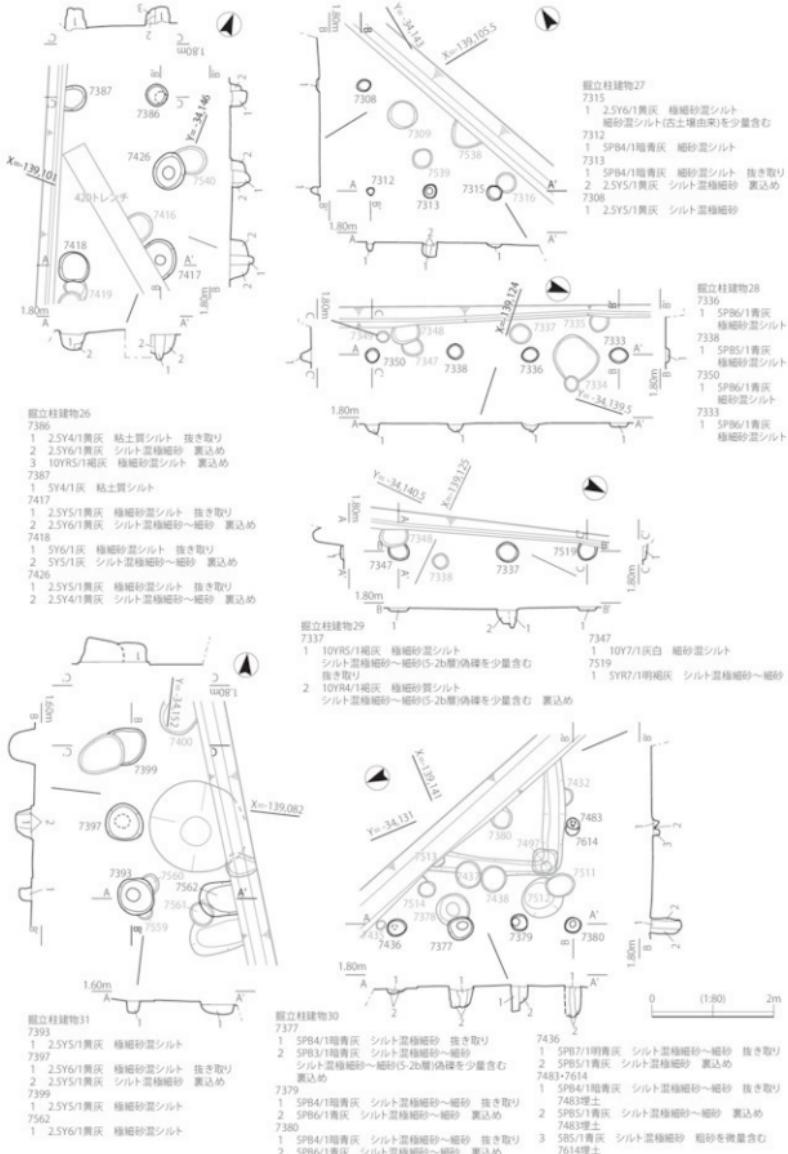


図 646 13-4 区 捜立柱建物 26~31 平・断面

#### 竪穴建物 56 (図 633・641～643、図版 143)

竪穴建物 60 の西側で検出された。規模は、北東辺 3.9 m 以上、南東辺 1.5 m 以上である。床面は極細砂混シルトのブロック土で形成されており、極細砂質シルトが部分的に堆積する。

出土遺物は、床面直上及び壁構内から土師器が出土した。図 643-1・2 は土師器把手である。

#### 竪穴建物 58 (図 633・641～643、図版 45・88・143)

13-4 区南側、竪穴建物 61 の北東側で検出された。規模は、北西辺 2.1 m 以上、南西辺 1.8 m 以上である。床面はシルト混極細砂～細砂のブロック土で形成される。

竪穴建物 58 から出土した土器は、図 643-3 の土師器甕を図示した。口縁端部は端面と、端面からわずかに下が横ナデされるため、端部が斜め上方につまみあげられたような形状に仕上げられる。他に、滑石製白玉が 3 点出土した。

#### 竪穴建物 49 (図 633・644、図版 46・88・143)

竪穴建物 51 の北西で検出された。調査地に北東部分の一部がかかったのみで、全容は不明である。規模は、南東辺 2.7 m 以上、北東辺 2.0 m 以上である。床面は極細砂混シルトのブロック土によって形成される。竪穴建物の埋土は、極細砂混シルトのブロック土で、最終的に埋め戻されたと考えられる。

竪穴建物 49 から出土した遺物は、図 644-1～3 に図示した。1・2 は須恵器環身である。TK47 型式。3 は櫃である。外面は斜め方向のハケ調整、内面は磨滅する。他に、滑石製白玉が 1 点出土している。

#### 竪穴建物 50 (図 633・644、図版 88・143)

竪穴建物 51 の北側で検出された。竪穴建物 51 と切り合い関係があり、竪穴建物 51 の方が新しい。

竪穴建物西側の一部を検出しており、全容は不明である。規模は、南西辺で 5.0 m に復元される。

床面は、細砂～細砂混シルトのブロック土で、地層の境界部は不明瞭ながら 2 層に分かれれる。床面が 2 層に分かれることや、他の竪穴建物と比較して掘り込みが深いことから、建て替えが行われた可能性がある。

床面直上からは、土師器高杯などの破片が出土した。なお、411 トレンチ断面においても炭化物や焼土塊は確認されず、カマドの位置を確認することはできなかった。

竪穴建物 50 からの出土遺物は、図 644-4～6 を図示した。4・5 は韓式系土器鉢の体部片である。4 の外面は繩文タタキ、5 の外面は格子目タタキが施される。6 は土師器把手である。上面に切り込みがある。ほかに、滑石製白玉が 3 点出土した。出土遺物と竪穴建物 51 との切り合い関係から、竪穴建物 50 の時期は、古墳時代中期前葉～中葉に位置付けられる。

#### 掘立柱建物 26 (図 633・646、図版 46)

7456 土坑の南側で検出された。建物構造は 2 間 × 1 間以上で、西側は調査地外にあるため、全容は不明である。土師器・須恵器の細片が出土した。須恵器甕は外面平行タタキ、内面は当具痕が磨り消されている。

#### 掘立柱建物 27 (図 633・646、図版 46)

掘立柱建物 26 の南東側で検出された。建物構造は 2 間以上 × 1 間以上で、東側は調査地外にあるため不明である。土師器細片が出土した。時期は不詳。

#### 掘立柱建物 28 (図 633・646)

竪穴建物 51 の南西側で検出された。建物構造は 3 間 × 1 間以上である。土師器細片が出土した。時期は不詳。

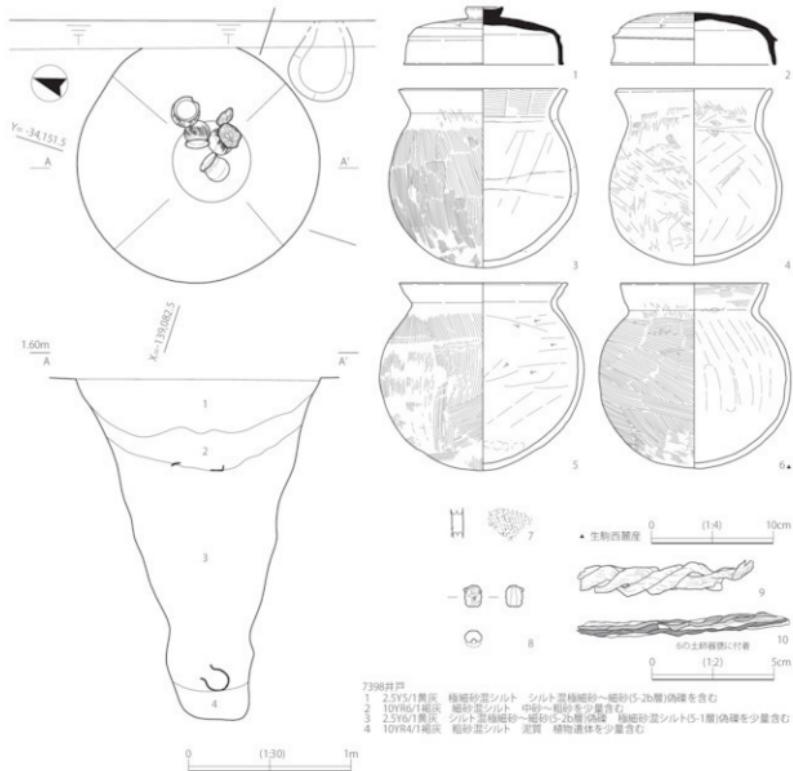


図 647 13-4区 7398 井戸平・断面 出土遺物

#### 掘立柱建物 29 (図 633・646)

掘立柱建物 28 とほぼ同じ位置で検出された。建物構造は 2 間以上 × 1 間以上と考えておらず、掘立柱建物の大半は調査地外にあるため、詳細は不明である。遺物が出土しておらず、詳細な時期は不明。

#### 掘立柱建物 30 (図 633・646)

豊穴建物 58 とほぼ同じ位置で検出された。建物構造は、2 間以上 × 3 間以上である。土師器細片が出土した。時期は不詳。

#### 掘立柱建物 31 (図 633・646)

7411 溝の南側で検出された。建物構造は、2 間以上 × 1 間以上である。土師器・須恵器細片が出土した。須恵器は甕が出土しており、外面平行タタキ、内面の当具痕は磨り消されている。

#### 7398 井戸 (図 633・647、図版 47・142)

7411 溝の南側で検出された。側溝を設定した場所に当たる。平面形は円形、規模は直径 1.5 m、深さ 2.1 m である。埋土は、最下層が植物遺体を多く含んだ、湿性堆積物の極細砂混シルトで、その上位

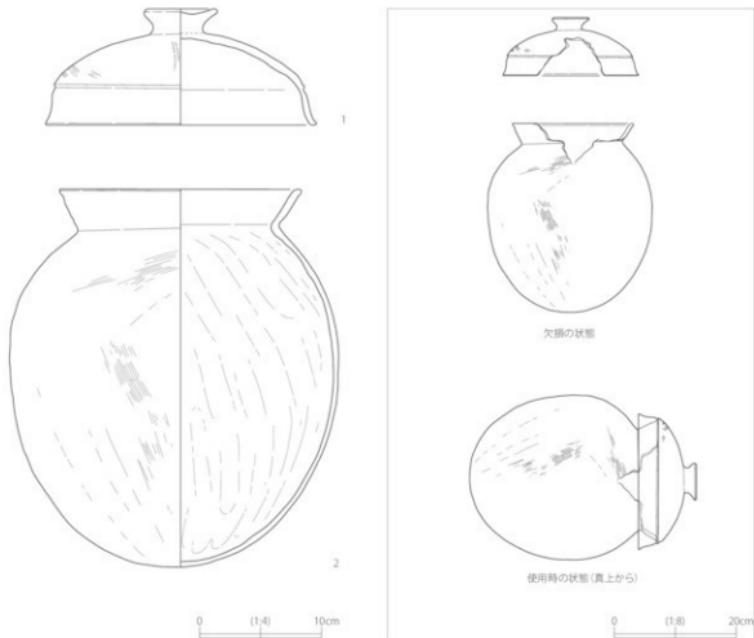
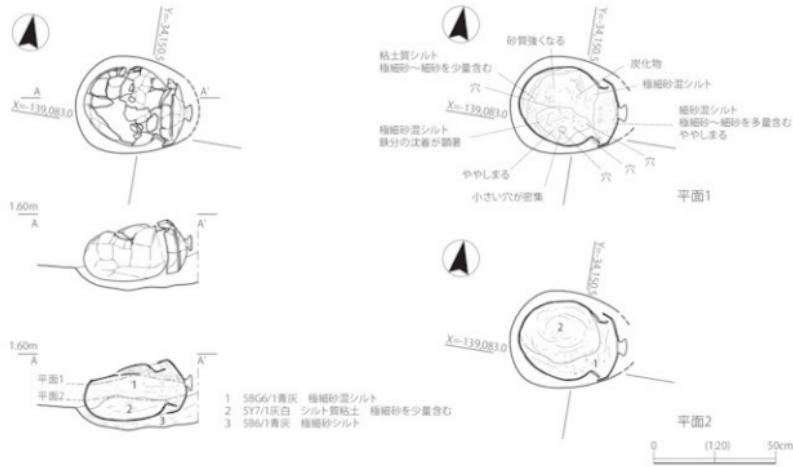


図 648 13-4区 7571 土坑平・断・立面 出土遺物

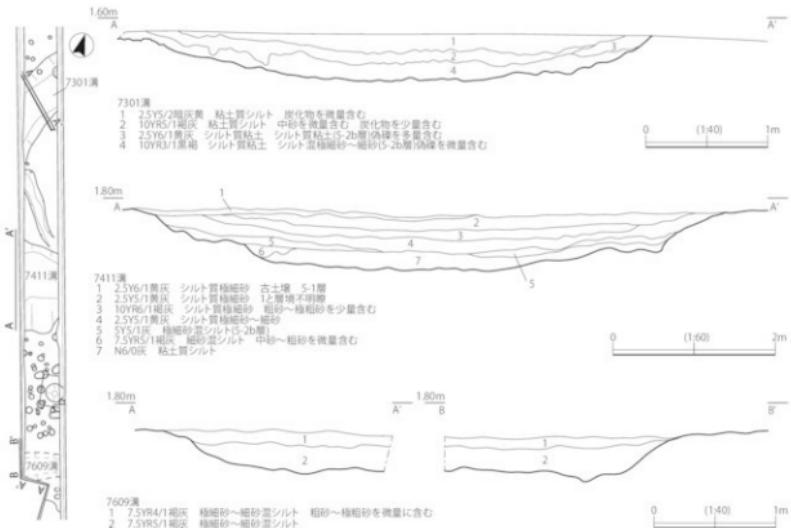


図649 13-4区 7301・7609・7411溝断面

には、ベースとなる5-2b層由来のブロック土が堆積する。上層には、周辺或いは井戸内で形成された土壤と考えられる細砂混シルトの堆積が認められる。この細砂混シルトから、須恵器壺蓋が出土した。また、井戸底面に近いところからは、完形あるいは完形に近い、小型の土師器壺4点、滑石製白玉6点、瓢箪、猪歯牙が出土した。土師器壺の1点は、頸部に紐が巻かれた状態で出土しており、釣瓶として用いられたものと考えられる。また、この紐とは別個体の図647-9も埋土中から出土した。猪歯牙は、若獣のもので、土師器壺の周辺から出土した。瓢箪は、完形のものではなく、体部や底部片がそれぞれ出土した。2-2区1891井戸の瓢箪のように種子は伴わず、釣瓶として使用されたものか。

7398井戸から出土した遺物の内、図647-1~10を図示した。1・2は須恵器壺蓋である。井戸の中位から出土した。1は天井部に扁平なツマミが付く。2は口縁端部に面があり、外面の稜はシャープに仕上げられる。TK216型式。3~6は土師器壺で、井戸底から出土した。3の体部外面は縦方向のハケ調整、内面は板ナデ調整である。4の器形は、頸部の屈曲が不明瞭で、体部から口縁部にかけて緩やかに外反する。外面は斜め方向のハケ調整、内面は板ナデ調整される。5の外面は縦・斜め方向のハケ調整、内面はケズリ調整が施される。6の外面は斜め方向のハケ調整で、肩部は横方向に近いハケ調整で仕上げられる。内面は指ナデ調整される。7は韓式系土器の体部片で、外面に格子目タタキが残る。8は土玉で、井戸埋土を洗浄したものの中から出土した。半分に割れており、孔が確認できたことから、土玉と判断したが、周辺で確認された植物根の周囲にできた高師小僧の可能性がある。突起部が2箇所確認できたが、表面が剥離した可能性があり、突起部は加工によるものか不明である。9は瓢箪周辺の埋土を洗浄した際に出土した紐である。植物の纖維3本を交互に編み込んで紐として利用された。10は、6の土師器壺の頸部に巻かれた状態で出土した紐である。植物の纖維2本を左撚りにしたもの1単位として、3単位を左撚りに編み込んで釣瓶の紐としていた。

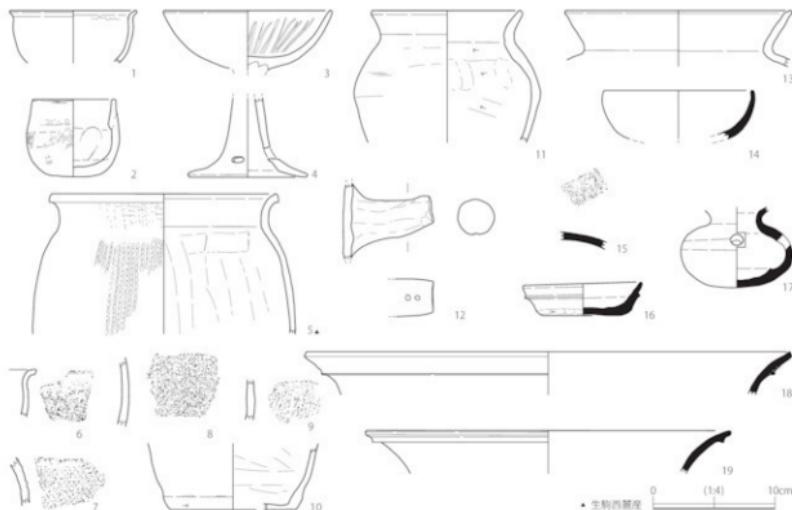


図 650 13-4 区 7301 溝出土遺物

### 7571 土坑 (図 633・648、図版 47)

7398 井戸の南東で検出された。側溝を設定した位置に当たり、7398 井戸との切り合いは明確におさえられなかった。平面形は楕円形を呈す。規模は、長軸 0.5 m、短軸 0.4 m、深さ 0.25 m 以上である。土師器甕が蓋をされた状態で出土した。蓋は、須恵器の杯蓋を模したものである。蓋・甕ともに口縁部を欠損しており、蓋は欠損部を下に向け、甕は欠損部を上に向け、横倒しになった状態で出土した。土器棺の可能性を検討しつつ、甕内の埋土を掘り下げたところ、小穴と硬化した部分が検出された。小穴は、植物根が腐食して、空洞になっていたもので、甕体部の下側まで確認できた。内部の土を土壤洗浄したところ、二枚貝の微細な破片と、滑石製白玉の断片が出土した。図 648-1 は須恵器を模した土師器の蓋である。外面は横ナデ調整され、一部ハケメが残る。内面は横ナデ調整される。2 は土師器甕で、外面がハケ調整、内面はナデ調整される。土師器蓋は、TK23 型式の須恵器に近いもので、7571 土坑は古墳時代中期後葉に位置付けられると考える。

### 7301 溝 (図 633・649・650、図版 88・140・143)

7398 井戸の北側で検出された。規模は、幅 4.4 m、深さ 0.4 m である。埋土は、下層が湿性堆積物のシルト質粘土、中層から上層が周辺或いは溝内で形成された土壤と考えられる粘土質シルトで、中層に炭化物が含まれている点が上層と異なる。完形に近い個体が出土したのは中層からで、上層及び下層からは土器の細片が出土した。7301 溝から出土した遺物の内、図 650-1～19 を図示した。1・2 は土師器鉢である。内外面は磨滅。2 の外表面はハケ調整、内面はナデ調整される。3・4 は土師器高環である。3 の外表面は磨滅、内面は放射状暗文が施される。4 の外表面は磨滅、透孔が 3 方向に穿たれる。5～10 は韓式系土器である。5 は甕である。外表面は繩文タタキで、口縁部まで施されるが、横ナデ調整によって痕跡が残るに留まる。6 は鉢か。外表面には格子目タタキが残る。7・9 は鉢ないし鍋の体



図 651 13-4 区 7411 溝出土遺物

部片である。7の外面には格子目タタキ、9の外面には縄席文タタキが施される。8は鍋の体部片で、外面は格子目タタキが施される。10は平底鉢で、外面は磨滅しているが、格子目タタキが部分的に残る。下端はケズリ調整される。11・13は土師器裏である。13は内傾斜する口縁端部で、横ナデ調整で仕上げられる。12は把手で、下部に穴が2箇所確認できる。14は土師器を模した須恵器坏身である。楕形を呈す。15は須恵器蓋で、列点文2単位と柳描直線文が天井部に施される。16は須恵器坏である。口縁端部直下に鈍い突帯がめぐる。外面下端は静止ヘラケズリないし低速の回転ヘラケズリ調整が施される。17は須恵器裏である。内外面は回転ナデ調整によって仕上げられる。18・19は大型の腹口縁部である。外面の突帯はいずれもシャープに仕上げられる。他に、滑石製白玉が12点出土した。須恵器はTK73～216型式に比定でき、7301溝は古墳時代中期初頭～前葉に機能したと考えられる。

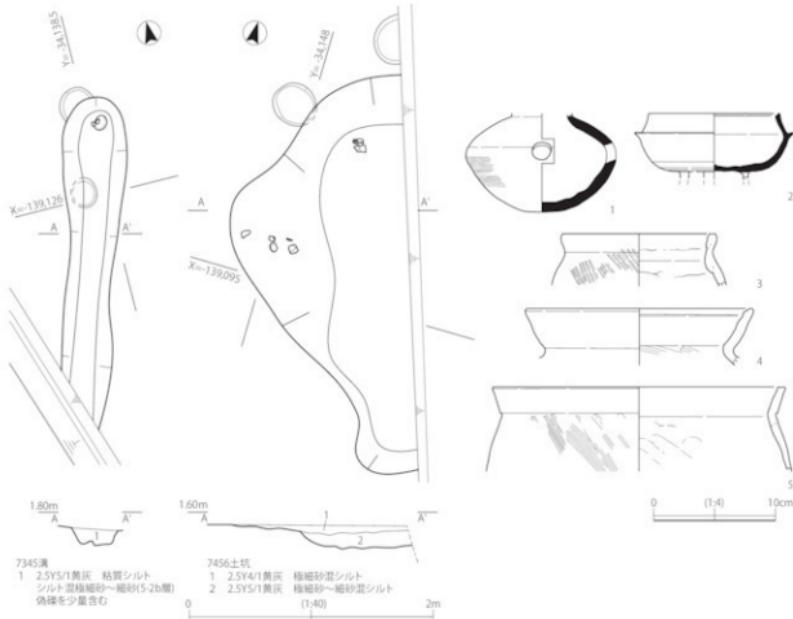


図 652 13・4区 7345溝・7456土坑平・断面 出土遺物

#### 7411溝(図633・649・651、図版88・140・144)

7398井戸の北側で検出された。調査地の幅が狭いため、一部を確認したに留まっているが、やや北に偏する東西の溝と考えられる。幅7.3m、深さ0.7mである。埋土は、下層が湿性の粘土質シルト、上層が暗色を帯びたシルト質極細砂である。また、上層と下層の間には、周辺の5-2b層が崩落土或いは風化した極細砂混シルトが入る。底面直上には、溝の加工時形成層は認められず、2-2区1191溝や7411溝の北側で検出した7301溝と同じく、地形的に低い部分、谷地形ないし谷地形を一部加工した溝であった可能性がある。

2層を除去した段階に、7411溝埋土の上面で、南北方向に延びる畦畔状の高まりが検出されており、7411溝廃絶後に水田として用いられた際の擬似畦畔の可能性がある。7411溝から出土した遺物の内、図651-1~23を図示した。2・4・6・14・20が7411溝の上部の水田として調査を行った地層から出土した土器で、それ以外はすべて7411溝の下層から出土した遺物である。1は須恵器把手付椀である。2は須恵器壺蓋である。3・4は須恵器壺である。5は北河内特有の須恵器無蓋高杯の杯部である。6は須恵器を模した土師器の壺身である。7は須恵器壺の口縁部である。8は須恵器壺の体部片である。9は須恵器を模した土師器壺である。外表面はハケ調整、内表面は回転ナデ調整で、口縁端部はわずかに肥厚し、丸みを帯びた内傾斜する面をもつ。10~12は土師器壺である。11の外表面は横・斜め方向のハケ調整、内表面は単位幅が不明瞭なヘラケズリが施される。12の外表面は斜め方向のハケ調整、肩部に横方向のハケが施される。内表面はヘラケズリの後ナデ調整される。13~20は韓式系土器である。

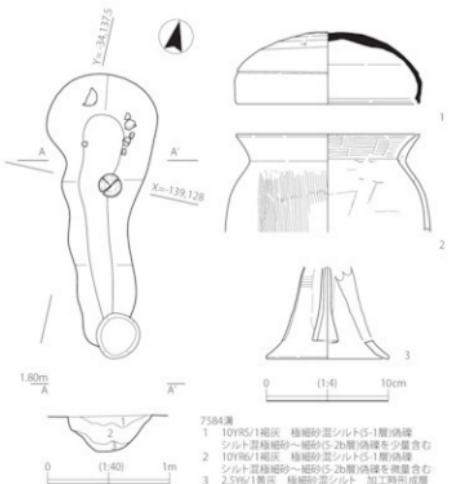


図 653 13・4 区 7584 溝平・断面 出土遺物

細砂混シルトが堆積する。出土遺物は土師器細片が出土した。時期不詳。

#### 7345 溝・7456 土坑（図 633・652、図版 46）

7345 溝は竪穴建物 53 の西側で検出された。規模は、幅 0.5 m、深さ 0.1 m である。埋土は粘質シルトを主体とし、5・2 b 層に由来するブロック土である。図 652-1 の須恵器甕が出土した。

7456 土坑は掘立柱建物 26 の北側で検出された。湧水が激しく、平面の検出が困難であったため、周辺をかなり削り込んだ状態で遺構検出した。平面形は不整形で、規模は東西 1.4 m 以上、南北 3.2 m、深さ 0.2 m である。

埋土が類似することから、2-2 区 1191 溝に連続する可能性がある。1191 溝が平面的に大きく屈曲することになり、不自然な連続性に一見みえるが、5-2 b 層上面の凹地を加工して 1191 溝が機能したこと考慮すると、「四地」を形成する流路（図 401、1890 流路）が蛇行することからその可能性があると考えられる。

7456 土坑から出土した遺物の内、図 652-2～5 を図示した。2 は 411 トレンチから出土した土器で、位置関係から 7456 土坑出土遺物と判断した。2 は須恵器高环である。TK208～23 型式。3 は韓式系土器甕である。口縁部は厚みがあり、端部に丸味を帯びた面をもつ。外面は平行タタキ、内面はナデ調整で、粘土接合痕が明瞭に残る。4・5 は土師器甕である。

#### 7584 溝（図 653、図版 47・141）

竪穴建物 54 直上で検出されており、竪穴建物 54 より新しい。規模は幅 0.91 m、深さ 0.30 m である。埋土の中層から須恵器高環、土師器甕・高环が出土した。

図 653-1 は須恵器高環で、MT15 型式に比定できる。2 は土師器甕である。3 は土師器高环で、長方形の透孔や脚部外面上位のカキメは須恵器の製作技法で作成されたものである。細片を図示。他に、滑石製白玉 3 点が出土した。

13～15 は甕である。16・20 は鉢である。外面に平行タタキが施される。20 の外面下端は磨滅しているが、ケズリ調整されたと考えられる。17・18 は鍋ないし甕で外面には格子目タタキが残る。19 は甕である。外面は格子目タタキ、内面は板ナデ調整される。21 は把手で、下面に土器乾燥時の支持棒の穴が開く。22 は磨石で、下面に平滑な面がある。23 は砥石で、線状の凹みが認められる。鉄製品のための砥石か。7411 溝では上記以外に滑石製白玉 2 点が出土した。

#### 7391 土坑（図 633・645、図版 46）

竪穴建物 58 の南側で検出された。長軸 2.15 m、短軸 0.6 m で、深さ 0.35 m である。焼土塊や遺物を含むシルト質粘土の埋土は北東側に集中し、この埋土を切って極

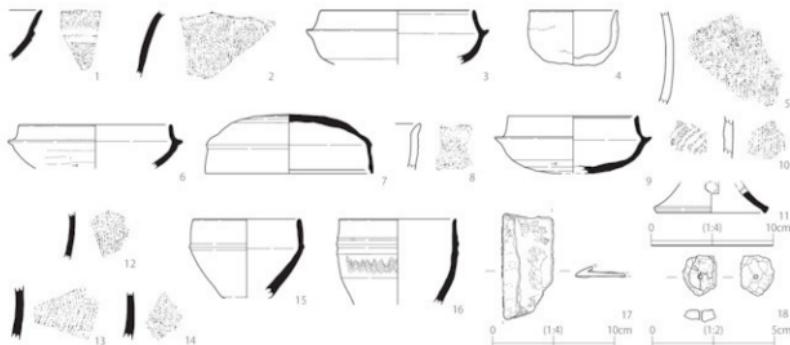


図 654 13-4 区 7373 柱穴他出土遺物

その他の遺構出土遺物（図 654、図版 88・141）

図 654-1 は須恵器有蓋高环の口縁部で、7373 柱穴から出土した。2～4 は、7390 土坑から出土した。7390 土坑からはこれ以外に滑石製白玉 16 点が出土した。5 は韓式系土器鍋の体部片で、7412 ピットから出土した。6 は須恵器環身で、7447 ピットから出土した。7 は須恵器環蓋で、7448 土坑から出土した。8 は韓式系土器鉢の口縁部で、7463 溝から出土した。9 は須恵器環身で、7484 柱穴から出土した。10・11 は竪穴建物 60 を検出する過程で出土した。10 は須恵器を模した土師器表裏部である。11 は須恵器高环脚部である。12～14 は須恵器で、2 層から出土した。12 は器種不明。甕か。外面は繩巻文タタキと沈線が施される。13 は甕底部片である。14 は高环形器台の環部か。外面はヘラ描き沈線で鋸歯文が表現される。15 は須恵器把手付椀で、側溝掘削時に出土した。口縁部と体部の境界に丸味を帯びた突帶がめぐる。底部は欠損する。16 は須恵器把手付椀で、把手は遺存しなかつた。7501 ピットから出土した。17 は鉄製鍬先で、411 トレンチから出土した。2 層より下位を掘り下げた際に出土したもので、時期は不明である。18 は滑石製有孔円板である。7609 溝から出土した。7609 溝から出土遺物はこの 1 点のみであった。全体に破損しており、表面には加工時のものと考えられる段とケズリ痕が認められた。素材剥片か。

た。7501 ピットから出土した。17 は鉄製鍬先で、411 トレンチから出土した。2 層より下位を掘り下げた際に出土したもので、時期は不明である。18 は滑石製有孔円板である。7609 溝から出土した。7609 溝から出土遺物はこの 1 点のみであった。全体に破損しており、表面には加工時のものと考えられる段とケズリ痕が認められた。素材剥片か。

#### 第 6-1 面（図 655）

2-2 区第 6-1 面で検出された 8059 微高地の延長部、7601 微高地が検出された。微高地の上部の検出に留まっており、本来の規模は不明。なお、調査地北側で部分的に 6 層の断面観察を行ったが、土壤化が弱く、作土として用いられたか不明である。  
(後川恵太郎)

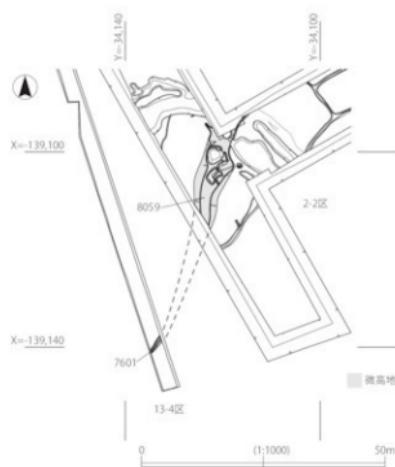


図 655 13-4 区 第 6-1 面平面

## 第8節 13-5・8区の調査成果

13-5・8区（以下、5区・8区と呼称）は、今回の調査範囲の西端に位置し、13-4区の北西端からは60～120m離れている（図2）。この部分は堆積環境が11-1調査地とは若干異なっていたため、別に層序を設定して調査を進めた。そして、11-1調査地の西端にあたる2-2区の断面（66トレンチ）と層序対比することにより、両者の関係を検討した（表2）。

5区と8区は約20mしか離れておらず、並行して調査をおこなうことができたため、両方の断面同時に検討し、統一した層序番号をつけた。なお、これらの調査区の北側と北東側には、第二京阪道路建設に先立って調査された03-6・06-3調査地および03-5・06-2調査地、西側には寝屋川北部地下河川の讚良立坑築造に先立って調査された09-1調査地が存在する。層序や各層準の時期に関しては、これらの調査地との関係も勘案しながら検討をおこなった。

### 第1項 層序（図656～658、図版48）

今回の調査区では、地層を大きく12層に分層した。

5区・8区とも2.5～3mの盛土が施されており、その下に近・現代の作土層が残存していた。第1層はその下に堆積していた地層で、3層に細分された。第1-1層は中砂～細礫混シルトで、擾乱を受けていた。一方、第1-2・3層はともにシルト～粘土で、第1-3層のほうが細粒であった。両者とも淘汰がよく、構造は不明瞭であった。なお、8区では第1-1b面において7901土坑が確認された。これは、東西方向にのびる長さ約5m、幅約1m、深さ0.3mの土坑が5基並ぶものである。

第2層は、シルトないし極細砂混シルトである。構造が不明瞭な部分も多いが、シルトがブロック状を呈する部分もあり、作土層と推定される。なお、8区と5区東壁断面南半では、この地層の下部に地震によって形成されたと思われる変形構造（羽毛状・火炎状の流線パターンなど）が認められた。

第3-1層は8区および5区の一部において、2層に細分された。その上部は、細砂～極細砂混シルトであり、腐植と思われる黄灰色の物質を含んでいた。下部は5区が中砂～粗砂混シルト、8区が細砂～極細砂混シルトで、腐植と思われる物質を含んでいた。

また、第3-2層は細砂～中砂混シルトであった。5・8区とも、これらの層準において、地震によって形成されたと思われる変形構造が顕著に観察された。特に8区では、第3-1層下部から第3-2層上部にかけての範囲において変形が著しかった。なお、09-1調査地の「第4-1層」は、写真で確認したところ2層に細別可能であり、それらは第3-1層と第3-2層に対比される。

第3-3層は、5区が細砂～中砂混シルト～粘土であった。坪境の南側においては、その下位にシルト偽礫を含むシルト質細砂～極細砂が認められ、さらにその下には有機物薄層を挟むシルトが堆積していた（第3-3b層）。一方、8区は中砂混シルトで、全体として構造が不明瞭であったが、下部に有機物薄層を挟む部分が認められた。この層準は09-1調査地の「第4-2層」に対比される。この調査地では全体を「水成層」としているが、8区と同様、作土層の下位に母材の堆積物が残存していたと思われる。なお、この層準の下部から下位の第4-1層にかけて変形構造（羽毛状・火炎状の流線パターンなど）が認められた。しかし、上部では変形構造は不明瞭であり、上面はほぼ水平であった。泥質堆積物は上部ほど水分を多く含んでおり、厚密を受けていないため流動性に富む。そして、より下位では粘性・可塑性に富み、最下部では剛性が高まる性質を持っている。このため、地震によって生じる変形ゾーンは、上から順に液相流動変形ユニット、含水塑性変形ユニット、脆性変形ユニットに細分

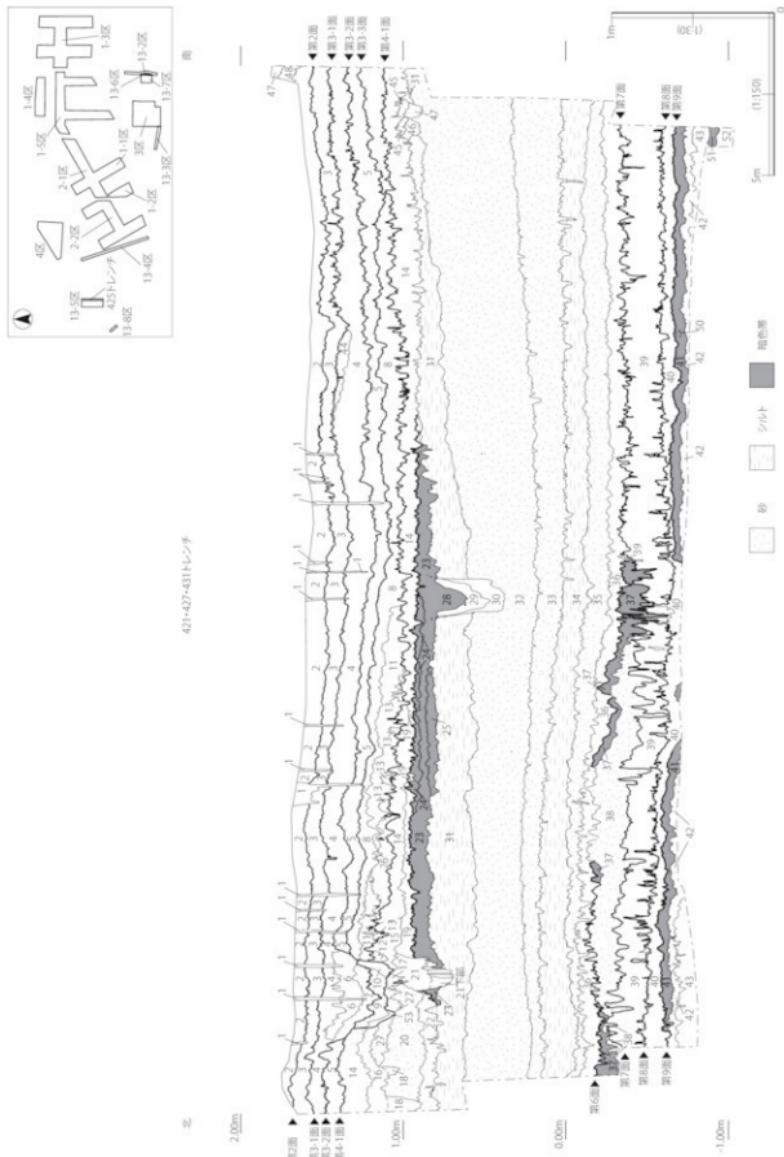


図 656 13-5区 東壁断面①

図 657 13-5 区 東側断面③

される。これにあてはめると、この層準の上部は液相流動変形ユニット、下部から第4—1層にかけての範囲は含水塑性変形ユニットとなり、この層準の上面即ち地盤が発生した可能性が高い。

第4層は大きく第4-1層と第4-2層の二つに細分された。このうち第4-1層は、5区北端の坪壠部分よりも北では、第4-1-1～4-1-3層に細分された。

第4-1層は、5区の坪境以南においては中砂～細礫混シルト、8区においては中砂～極粗砂混シルトであった。その上面は、第3-3b層が残存している部分では比較的段差がよく、坪境畦畔・溝が検出されたが、地震による変形構造の影響もあり、それ以外の遺構は検出されなかった。また、5区南部と8区では、その下面（第4-1b面）に隣接する遺構を検出した。

5区の坪境以北における第4-1層（第4-1-1層）は、中砂～細礫混シルトであった。この下には粗砂～細礫と極細砂～シルト偽礫が混じった地層があり、第4-1-2層とした。また、その下位には葉理のみられる細砂～細礫が堆積しており、さらにその下には極細砂～シルト偽礫と中砂～極粗砂が混じる地層が認められた。前者は、03-6調査地の「第8-2b層」に対比される。後述するように、これは坪境の溝（7741溝）の中に堆積した砂礫である。一方、後者は溝の加工時形成層および機能時堆積層と考えられる。溝の北側の肩は調査範囲外に存在し、さらに北には03-6調査地の「第9層」に対応する地層があると想定される。調査ではこれを第4-1-3層と呼び、7741溝をこの上面に帰属すると理解した。

第4-2層は、中砂～極粗砂質極細砂～シルトである。5区中央部でのみ確認され、他の部分では第4-1層砂の耕作の影響で遺存していなかった。

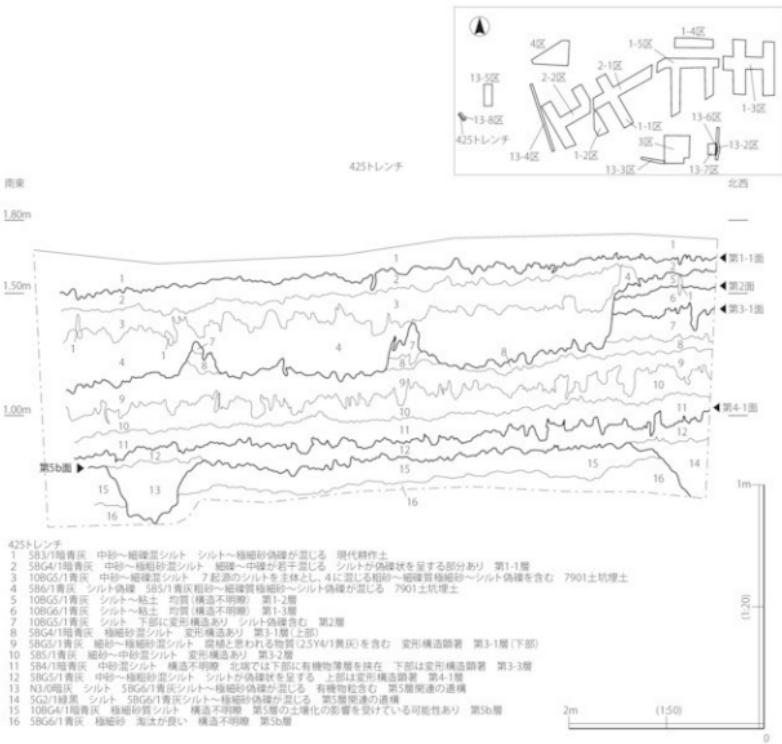


図 658 13-8区 南西壁断面

第5層は有機物粒を多く含むシルトで、暗色帯（古土壤）である。青灰色シルトの偽礫を含んでおり、擾乱されていると思われる。なお、この層準は5区東半部分以外ではほとんど遺存していなかった。この層準の下面（第5b面）では古墳時代の遺構を検出した。

第5層の下には砂・泥からなる堆積物が認められた。これは11-1調査地において「第5-2b層」と呼称された層準に対応する。今回は、この調査地との対応関係を考慮して第5b層と呼称したが、これは層相の異なる複数の堆積物が累重したものであり、堆積過程を明確にするためには、堆積ユニットごとに名称をつける必要がある。ここでは、この層準を第5b-1層上部・下部、第5b-2層、第5b-3層に細分して説明したい。第5b-1層上部は淘汰のよい極細砂～シルトで、全体として上方細粒化しており、下部に極細砂と有機物薄層が互層をなす部分が認められた。第5b-1層下部は平行葉理のみられる細砂～極細砂で、下位から中位までは上方粗粒化し、中位から上位にかけては上方細粒化していた。なお、この層準は南東側に向かって層厚が厚くなり、粒径も細砂～中砂へと変化していたほか、斜交層理の認められる箇所があった。第5b-2層の上部はシルト質極細砂で、細砂の薄層を挟在する部分が認められた一方、生物擾乱を受けたと思われる部分も認められた。また、ヒシの種実が多数

含まれており、水深の比較的深い場所で堆積した可能性が高い。第5 b - 2層の下部は細砂と極細砂の互層であり、ヒシの種実が多数含まれていた。第5 b - 2層は、上部と下部を合わせて上方粗粒化した堆積物ととらえられ、上部の段階は堆積速度が遅かったと思われる。第5 b - 3層はヒシの種実を多数含むシルトである。この層準の下部から第6 b層上部にかけての範囲には、地震による変形構造が顕著であり、羽毛状・火炎状の流線パターンが明瞭に観察された。しかし、第5 b - 3層の上部は小さな偽礫が若干含まれる程度であり、上面も変形していなかった。上部は液相流動変形ユニット、下部から第6 b層上部は含水塑性変形ユニットにあたる。したがって、第5 b - 3層の上面段階に地震が発生したと推定される。

第5 b - 2 ~ 3層にはヒシの種実が多く認められ、その堆積時期には水位が上昇して、水深の比較的深い沼沢地が広がったと推測される。また、第5 b - 1層下部は南東側に厚く堆積し、粒径も南東に向かって粗くなっていた。さらに、部分的に認められた斜交層理の傾きは南東→北西であり、第5 b - 1層下部を構成する堆積物は南東方向から供給されたと思われる。

第5 b層の下には古土壤（暗色帶）があり、第6層とした。これは下の砂層（第6 b層）を母材のひとつとして形成されたもので、第6 b層が堆積した5区北部にのみ存在していた。なお、この層準が認められなかつた5区南部では、上位の第5 b - 3層中にこの層準起源と考えられる偽礫は含まれておらず、この部分にはもともと第6層は形成されなかつた可能性が高い。また、第6 b層は、下部が細砂と極細砂の互層で、上部はプラナー型斜交層理のみられる粗砂～極粗砂であった。

第6 b層に覆われた地層を第7層とした。第7層は極細砂質シルトであり、第6 b層が存在していた部分では、上面に人の足跡が多数認められた。また、中位から第8層にかけての範囲では、地震による変形構造（羽毛状・火炎状の流線パターンなど）が顕著に認められた。これは含水塑性変形ユニットに相当し、第7層上部が液相流動変形ユニットにあたる。このことから、この変形構造は第7層上面段階に発生した地震によって形成されたと推定される。なお、第6 b層が堆積していない部分では、第7層の上を第5 b - 3層が覆っていた。この部分では、第5 b - 3層上面段階の地震による変形構造と第7層上面段階の地震による変形構造が重なっており、第7層上面も含めて顕著に変形していた。

第7層の下には黒褐色シルトが堆積しており、第8層と呼称した。この層準にはヨシの遺体が多く含まれる。ただし、地震による変形が著しく、本来の構造を把握することは困難であった。

第9層は有機物質を多く含む黒色シルト（暗色帶）である。その層準の中位にはオリーブ灰色シルトがレンズ状に挟まれる部分がある。この状況は、03 - 5調査地の「第4層」最上部と酷似する。

また、その下にはヨシの遺体を横位に挟在するシルトの第10層、大量のヨシの遺体を横位に挟在する腐植質シルト（暗色帶）の第11層、ヨシの遺体を多く含む黄灰色シルトの第12層が確認された。今回の調査では、これよりも下位は確認していないが、03 - 6調査地における385 井戸周囲の地層観察所見によれば、第12層がT.P. - 1.4 mまで続き、その下には砂層が存在すると思われる。

## 第2項 遺構・遺物

今回は、中世と推定される第2層（第2層上面）から本格的に調査を開始した。そして、5区は弥生時代前期と考えられる第8層を掘削し、第9面（第9層上面）を検出して調査を終了した。また、8区は工事の影響がおよぶT.P. 0.5 mまで人力掘削し、第5 b面（第5層下面）で終了した。

### 第2面～第3 - 3面（図659）

第2面に関しては、5区・8区とも顕著な遺構は検出されなかった。第3 - 2面（第3 - 2層上面）

に関しても、平面精査時には遺構は認識できなかったが、5区東壁断面を検討したところ、第3－3面で検出した7702溝がこの面に踏襲されていたことが明らかになった（図660）。作土である第3－2層からは、5区、8区とも遺物はほとんど出土しなかった。図化し得たものとしては、8区の第3－2層から出土した瓦器椀の破片（図662－2）がある。高台の形状から、13世紀後半のものと思われる。

5区の第3－3面（第3－3層上面）に帰属する遺構としては、7702溝を検出した。この溝は幅2.0～2.6m、深さ0.2mで、東西方向にのびていた。表層地割や絵図、小字図にもとづく条里型地割復原図（中尾・山根編 2009：図662）を参考にすると、この溝の位置は八条四里十四ノ坪・十五ノ坪間の坪境にあたる。したがって、この溝は坪境の水路と推定される。このほか、5区の中央付近においては、第3－3層から礫が1点出土した（図659）。これは第3－3層を構成する碎屑物の粒径とは全く異なっているため、同じ營力で運搬されてきたとは考えられず、人為的に持ち込まれたものと思われる。一方、8区においては、第3－3面の遺構は検出されなかった。

第3－3層の出土遺物には、図662－1・3がある。前者は8区の第3－3層から出土した瓦器椀の破片で、12世紀後半～13世紀前半のものである。また、後者は前述した第3－3層から出土した礫である。中央部に凹みがあり、石製品の破片と考えられる。石材は閃錫岩である。

#### 第4－1－1面～第4－1－3面（5区北部、図659）

5区の坪境周辺においては、第3－3層の下に部分的に第3－3b層が存在しており、第4－1－1面（第4－1層上面）の遺存状況は比較的良好であった。この面から検出されたのが、7703溝と7704畦畔である。前者は第3－3面7702溝と重なっており、その前身となる坪境水路と考えられる。この溝の幅は1.0～1.5mと推定され、深さは0.2～0.3mである。また、後者は前者の南側に沿って造成されていた。7702溝の影響で北側の遺存状況が悪いものの、幅0.6～1.5mと推定され、高さは0.2mである。この畦畔の肩部は第3－3b層に覆われており、明瞭に検出できた。

坪境部分から北は第4－1層が細分された。このうち、第4－1－2層を除去した面（第4－1－2b面）では溝を検出した（7720・7721溝、図版48）。坪境部分は、東西方向にのびる幅4.5mの範囲が溝状に下がっており、大きくみればひとつの溝といえるが、その中は二つの溝に分かれていた（7720・7721溝）。このうち、7721溝のほうが深く、7720溝はそこから分岐しているように思われた。7720溝の規模は幅1.2～1.5m、深さ0.1～0.2mである。一方、7721溝の規模は、一段下がった部分で幅を計測すると、幅0.7～2.5m、深さ0.2mである。なお、5区北端で7721溝に合流する南北方向の溝状の落ちも検出したが、ごく一部が検出されたにすぎないため、詳細は不明である。

7720・7721溝の下には、上から順に細砂～細礫、シルト偽礫と中砂～極粗砂が混じる地層が認められた。前者は03－6調査地の「第8－2b層」に対比される。同調査地においては「落ち込み」と呼称される放棄流路のうち、坪境にあたる部分付近にのみ存在し、5区においても坪境部分だけに堆積した可能性が高い。また、後者は溝の機能時堆積層・加工時形成層と推定される。これらのことから、この部分には東西方向にのびる溝（7741溝、図版48）が存在し、それが03－6調査地の「落ち込み」に連結していたと推測した。今回の調査ではこの溝の南側の肩は検出されたが、北側の肩は調査範囲外に存在する。この溝の北には03－6調査地の「第9層」に対比される地層が存在すると予想され、これを第4－1－3層とすれば、7741溝は第4－1－3面（第4－1－3層上面）に帰属するといえる。

この坪境からは、遺物が比較的まとまって出土した（図662）。5は7720溝から出土した土師器皿である。（伊野 1995）の分類ではBbタイプに属し、11世紀後半のものと思われる。6は7721溝

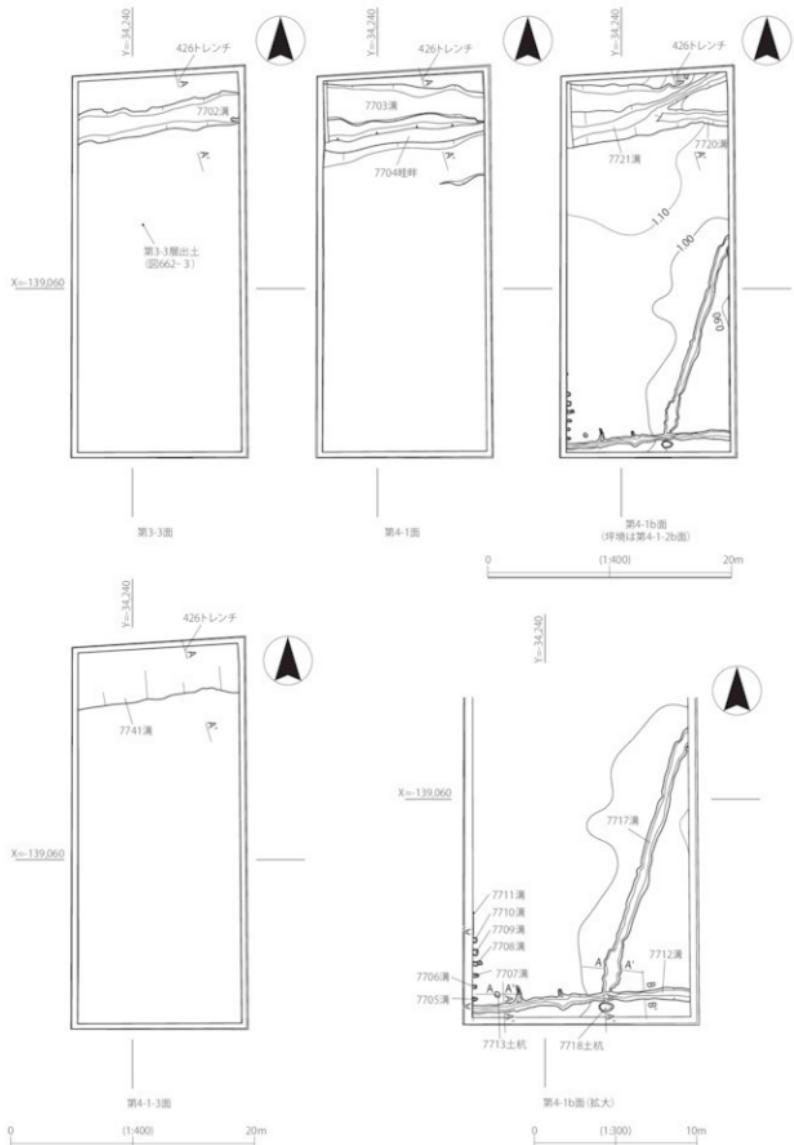
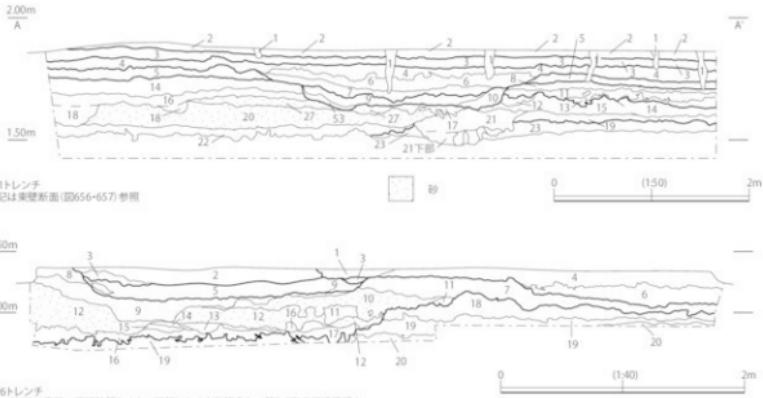


図659 13-5区 第3-3面～第4-1b面平面



- 421トレンド  
注記は東壁断面(図656-657)参照
- 426トレンド
- 1 SRGS/1青灰 極細砂質シルト 下部にシルト偽縫合む 第3-2面の境縫理土
  - 2 SRGS/1青灰 極細砂質シルト 海太は比較的白い 第3-3面7702溝理土
  - 3 TORGA/1山灰青 細粒～粗粒砂～砂質シルト 偽縫合が見れる 第3-3面7702溝理土、加工形造成層
  - 4 SRGS/1青灰 中等粒度砂～砂質シルト 偽縫合が見れる 第3-3面7702溝理土
  - 5 SRGS/1青灰 中等粒度砂～砂質シルト 偽縫合が見れる 第3-3面7702溝理土
  - 6 TORGA/1山灰青 中等粒度砂～砂質シルト 偽縫合が見れる 第3-3面7702溝理土
  - 7 SRGS/1青灰 中～細粒砂質泥～砂質シルト 極細粒～シルトが偽縫合を呈する 第4-1層
  - 8 SRGS/1青灰 中～細粒砂質泥～砂質シルト 極細粒～シルトが偽縫合を呈する 第4-1層
  - 9 SRGS/1青灰 中～細粒砂質泥～砂質シルト 極細粒～シルトが偽縫合を呈する 第4-1層
  - 10 S7/1山灰青 中～細粒砂質泥～砂質シルト 極細粒～シルトが偽縫合を呈する 第4-1-2b層(上部)
  - 11 SBS/1青灰 極細砂質シルト 粗粒砂～粗粒砂が見れる 第4-1-2b層 中～細粒砂質泥～砂質シルト 第4-1-2b層(下部)
  - 12 S7/1山灰青 中～細粒砂質泥～砂質シルト 極細粒～シルトが偽縫合を呈する 第4-1-3面7741溝理土
  - 13 S7/1山灰青 中～細粒砂質泥～砂質シルト 極細粒～シルトが偽縫合を呈する 第4-1-3面7741溝理土
  - 14 S7/1山灰青 中～細粒砂質泥～砂質シルト 極細粒～シルトが偽縫合を呈する 第4-1-3面7741溝理土
  - 15 S7/1山灰青 中～細粒砂質泥～砂質シルト 極細粒～シルトが偽縫合を呈する 第4-1-3面7741溝理土
  - 16 S7/1山灰青 中～細粒砂質泥～砂質シルト 極細粒～シルトが偽縫合を呈する 第4-1-3面7741溝理土
  - 17 S7/1山灰青 中～細粒砂質泥～砂質シルト 極細粒～シルトが偽縫合を呈する 第4-1-3面7741溝理土
  - 18 SBS/3リーフ層 相手～極細砂 19起因のシルト偽縫合が見られる 下面に牛足跡あり 第4-1-3面7741溝理土
  - 19 NJ/0山灰青 シルト 海太良い 有機縫合む(暗色系) 第5層
  - 20 TORGA/1山灰青 シルト 海太良い 第5層

図 660 13-5 区 坪境部分断面

の最下部から出土した土師器皿で、ほぼ完形に復元できた。Aa タイプに属し、11世紀後半～12世紀初頭のものと思われる。7～16は7741溝の埋土下層から出土したものである。7は山茶椀の破片の可能性があり、高台の形状から11世紀後半～12世紀前半に属すると推定される。8・9は土師器皿である。形態的にはAa タイプであり、口縁端部外面は一段ナデである。11世紀後半～12世紀初頭に属する可能性が高い。10もAa タイプに属する上師器皿で、口縁端部外面は二段ナデである。11世紀末～12世紀初頭のものと思われる。11は5区東側側溝掘削中に出土したもので、出土時の観察所見から7741溝の下層に含まれていたと考えられる。Bb タイプに属する土師器皿で、11世紀後半に属する。12はB タイプに近い形状の土師器皿であるが、口縁端部はつまみ上げられていない。11世紀後半のものと思われる。13・14は黒色土器B類椀の口縁部片、15は高台部分の破片であり、11世紀前半～中頃のものである。16は平瓦の破片であり、凹面に布目痕、凸面に網目タタキが認められる。側面には二次的に研磨された面が2面認められ、破片となってから研磨具に転用されたと推定される。

以上の遺物からみて、7741溝の時期は、11世紀後半～12世紀初頭と推定される。ただし、黒色土器B類椀の存在から、掘削時期が11世紀中頃まで遡る可能性もある。また、7721溝最下部出土の6も同時期であり、7741溝埋没後すぐに7721溝が掘削された可能性が高い。

なお、03-6調査地の報告書(奥村編 2008)では、層序の記述(9ページ)において「第9層」(5区の第4-1-3層)出土土器の下限を「11世紀後半」としているが、「第9層」出土遺物の記述(15～16ページ)には12世紀中～後葉の瓦器椀が含まれている。台帳で確認したところ、これは「第8-2層・第9層」出土として登録されており、第4-1-2層に含まれていた可能性がある。

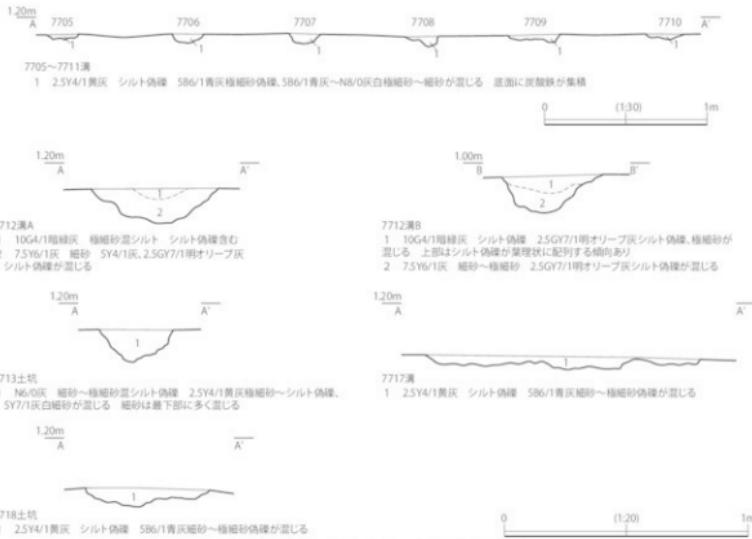


図 661 13-5 区 第4-1 b 面遺構断面

#### 第4-1面（5区南部・8区）

5区南部では、第3-3 b層が残存していない部分が多く、第3-3層段階の耕作の影響で第4-1面の遺存状況は悪かった。また、8区においても、北西部で第3-3層最下部に有機物薄層が認められただけであり、状況としては5区南部と同様であった。そのうえ、第3-3層から第4-1層にかけての範囲は地震による変形構造が著しかった。このため、第4-1面に帰属する遺構は検出されなかった。

#### 第4-1 b面（5区南部・8区、図 659・661、図版 49）

5区のうち、坪境よりも南側においては、第4-1層は細分されなかった。また、第4-1層段階の耕作によって第4-2層が削られた部分では、第4-1層を除去した段階で第5 b層が露出し、第4-1 b面（第4-1層下面）から第4-2 b面（第4-2層下面）に帰属する遺構が同時に検出された。なお、この場合、第5 b面上に帰属する遺構も検出されるはずであるが、5区南部にはその面の遺構は存在しなかった。

第4-1 b面の遺構には、7705～7711溝、7712・7717溝、7713・7718土坑がある。

7705～7711溝は調査区西端にわずかにかかっていたものである。西壁断面では7710と7711の間に溝と思われる浅い落ちが確認でき、0.5 m程度の間隔で平行にのびる溝群であったと推定される。遺存した深さが0.05 m前後と浅く、不明な点が多いものの、畠の耕作痕の可能性が考えられる。

7712溝は調査区南端を東西方向にのびるもので、幅0.5～0.8 m、深さ0.1～0.2 mである。埋土は2層に分かれ、このうちの下層は加工時形成層と考えられる。なお、この溝の西半には、北から合流する溝状の落ちが2つ検出された。7717溝は北東から南南東にのびて7712溝に合流するもので、幅0.8～1.1 m、深さ0.05～0.1 mである。埋土は第4-1層起源のシルトの偽礫と第5 b層起源の細砂～極細砂の偽礫が混じるもので、地震による変形構造が顕著に認められた。なお、この溝を完掘し

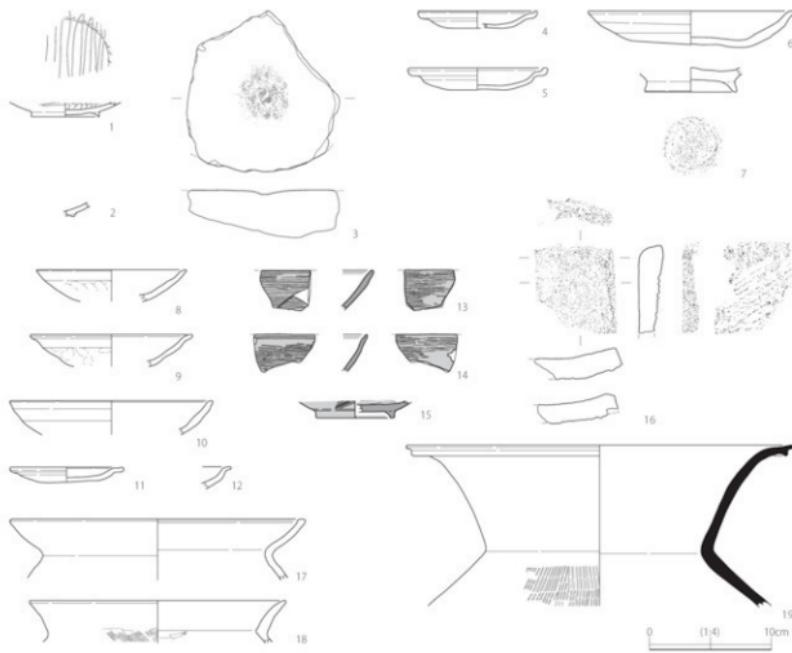


図 662 13-5・13-8区 第3-3層他出土遺物

たところ、底面において 7719 柱穴（図版 49）を検出した。これは、後述する掘立柱建物 32 の柱穴である。

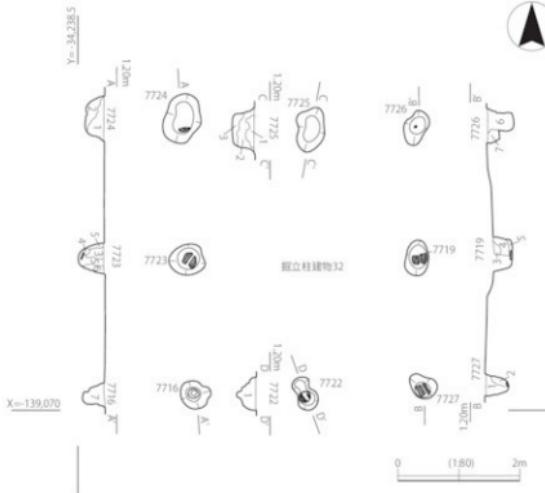
7713 土坑は 7712 溝の北側で検出された。直径 0.3 m、深さ 0.1 m であり、埋土は第 4-1 層・第 4-2 層・第 5 層起源の偽礫が第 5 b-1 層起源の細砂と混じっていた。7718 土坑は 7717 溝と 7712 溝の合流地点の南側で検出された。長径 0.9 m、短径 0.5 m、深さ 0.1 m であり、埋土は第 4-1 層起源のシルトの偽礫と第 5 b-1 層起源の細砂～極細砂の偽礫が混じるものであった。

一方、8 区においては 7905 溝を検出した（図 665）。8 区には第 4-2 層と第 5 層は残存していないため、第 4-1 層を除去して検出した遺構は、第 4-1 b 面・第 4-2 b 面・第 5 b 面のいずれかに帰属すると思われる。この溝に関しては、埋土に第 4-1 層起源の偽礫が含まれていたため、第 4-1 b 面に帰属する遺構と判断した。この溝の規模は長さ 1.8 m、幅 0.7 ~ 0.8 m、深さ 0.1 m で、東西方向にのびていた。なお、8 区南東部における第 4-1 b 面は東へ向かって緩やかに下がっていた。この形状は第 4-1 層段階の耕作によって形成されたものである。

5 区南部と 8 区の第 4-1 層からの出土遺物は少なく、図化できたものは図 662-4 だけである。5 区南半部から出土した土師器皿であり、Bc タイプに属し、12 世紀初頭のものと思われる。

#### 第 4-2 b 面

5 区南部では、第 4-1 層を除去した段階で第 5 b 層が露出した部分も多かったが、東側には第 4-



標立柱建物32A

- 1. S8G6/1 青肩 シルト偽脚 S5/0/シルト偽脚、S7/1/底白偽脚+細筋が茎に沿る
  - 2. S7/1/底白 シルト 假脚 S5/0/1/青肩シルト偽脚、S5/0/シルト偽脚が茎に沿る
  - 3. S7/1/底白 シルト+細筋 S5/0/1/底白シルト偽脚が混じる S5/0/シルト偽脚が若干混じる
  - 4. S8G6/1 青肩 シルト偽脚 S5/7/1/底白+細筋+偽脚が混じる S5/0/シルト偽脚が若干混じる
  - 5. S8G6/1 青肩 シルト偽脚 S5/0/シルト偽脚、S7/1/底白偽脚+細筋が茎に沿る
  - 6. S7/1/底白 シルト+細筋 S5/0/シルト偽脚が混じる S5/0/シルト偽脚がぬわぬわに混じる  
柱状吸水した塊の堆積物か?
  - 7. N5/0/ シルト+偽脚 S5/0/1/青肩シルト偽脚、S7/1/底白偽脚+細筋が茎に沿る

獨立柱建物328

- 1) N4/赤 シルト偽球  $S_{B6G}$ /青矢キレット偽球、5/71底白細～縦細が混じる  
2) S7/71底白 細緻～縦細  $S_{B6G}$ /青矢キレット偽球、N5/71底白偽球が混じる  
3) S7/71底白 細緻～縦細  $S_{B6G}$ /青矢キレット偽球が混じる、N4/05(シルト)偽球がわずかに混じる  
4) S8G6/青 矢キレット偽球  $N_{D4}$ /05(シルト)偽球が混じる、5/71底白細緻～縦細球が若干混じる  
シルト偽球は陸上によろよろと配する傾向があり  
5) S7/71底白 細緻～縦細  $S_{B6G}$ が若々しき  
6) N4/05 シルト偽球  $S_{B6G}$ /青矢キレット偽球、5/71底白細緻～縦細が混じる  
7) S7/71底白 細緻～縦細  $S_{B6G}$ /青矢キレット偽球が混じる、N4/05(シルト)偽球が混じる  
8) S7/71底白 細緻～縦細  $S_{B6G}$ /青矢キレット偽球が混じる、シルト偽球は

獨立建築物226

- | 柱立種群3C |          | N4/0灰シルト偽縛、S5Y/1灰白細砂+極細砂が混じる |                                    |
|--------|----------|------------------------------|------------------------------------|
| 1      | 5BG6/1青灰 | シルト偽縛                        |                                    |
| 2      | 5BG6/1青灰 | シルト偽縛                        | N4/0灰シルト偽縛が混じる S5Y/1灰白細砂+極細砂が若干混じる |
| 3      | S5Y/1灰白  | 粘土60%、絆細砂40%                 | S5Y/1灰青色シルト偽縛が混じる N4/0のシルト偽縛が若干混じる |

獨立柱建物32D

- 1 N5/0压 シルト偽理 SBCG/1費压シルト偽理 SY7/1压自細砂～粗細粒偽理が混じる

図 663 13-5区 挖立柱建物 32 平・断面

7728 溝は幅 0.8 ~ 2.5 m、深さ 0.3 ~ 0.4 m で、南東 - 北西方向にのびていた。この溝の埋土は 3 層に細分される。そのうち、最下部は加工時形成層と考えられるもので、この上に有機物薄層を挟在するシルトが堆積したのち、有機物を含んで暗色を呈するシルトによって完全に埋積された。なお、この溝には土器片が集中する部分が認められた（図 664）。これらは加工時形成層の直上付近に分布していた。土器片は同一個体のものと思われるが、遺存状況が悪く、ほとんど接合しなかった。図 662-18 はその口縁部を図化したものであり、古墳時代中期の土師器應と思われる。

また、この溝の周囲からはほぼ同じ方向にのびる溝を8条検出した。これらは、深さが0.05m前後の浅い溝である。7728溝を挟んで南西側のもの（7729・7730・7731・7732・7733溝）はほぼ平行して分布していた。また、北東側のもの（7737・7739・7740溝）は散漫に分布し、7737溝の北

2層が残存していた。第4-2層を除去すると柱穴が検出され、掘立柱建物32が認識できた(図664)。

掘立柱建物 32(図 663)は、桁行 4.4 ~ 4.6 m、梁間 3.8 ~ 3.9 m の規模を有する 2 间 × 2 间の建物で、主軸は N 1° W である。埋土の状況からみて、柱はすべて抜き取られたようである。また、柱穴のうち 7716・7725 柱穴以外の 6 基には、礎板が残存していた。柱穴からは土器片が数点出土しただけであり、時期は不明であるが、正方位に則っているため、隣接する 03-6 調査区で検出された 8 世紀後半～9 世紀の建物群と同時期のものである可能性が高い。

第5b面 (図版49)

5区北半部では第5層が比較的広い範囲に残存しており、第5b面に帰属する遺構が検出された。検出された遺構は溝10条、土坑7基である(図664)。

まず、溝から説明する。

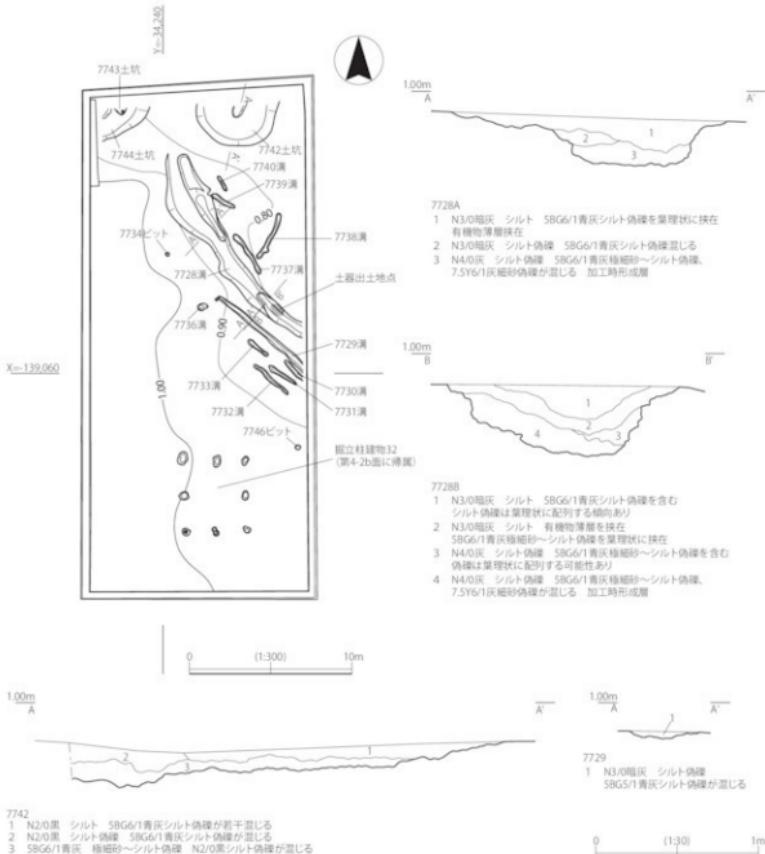


図 664 13-5区 第4-2b面・第5b面平面・遺構断面

東には南南西-北北東方向にのびる 7738 溝（深さ 0.08 m）も検出された。

5区北端においては、7742～7744土坑を検出した。7742土坑は北半が調査範囲外にのびるが、検出された範囲では長径約5mである。深さは0.2m程度の部分が多いものの、中央付近は一段低くなり、深さが約0.4mとなっていた。7744土坑は5区北西隅で検出されたもので、大半が調査範囲外にあたっていた。検出された範囲では長さ3.5m以上、深さ0.3mである。ただし、中心に近い位置は一段低くなっている、その部分の深さは0.4mであった。西側側溝掘削中に図662-19が出土したが、これはこの部分に含まれていたと考えられる。須恵器甕であり、古墳時代中期に属する。なお、7743土坑は7744土坑の底面が0.2mほど下がる部分にあたり、この土坑と一連の遺構と思われる。

そのほか、5区から検出された遺構としては、7734 ピット・7736 溝・7746 ピットがある。これ

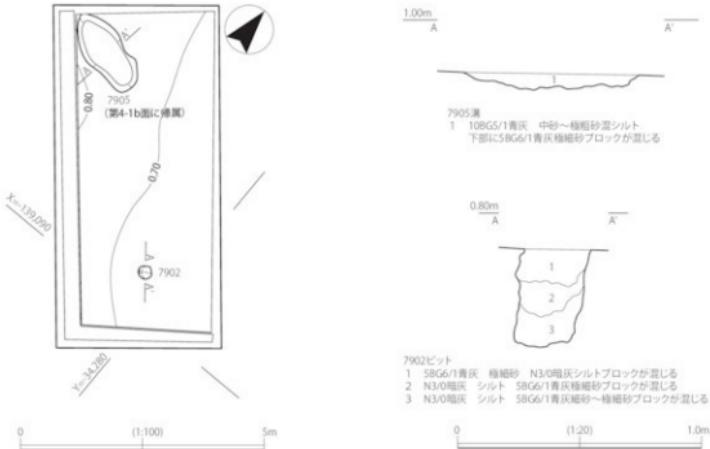


図 665 13-8 区 第4-1 b面・第5 b面平面・断構断面

らの深さは 0.05 ~ 0.1 m 程度である。さらに、7736 溝に関しては埋土が第5層そのものであり、下部に偽礫を顕著に含まないことから、人為的な遺構ではない可能性がある。

8 区で検出された第5 b面に帰属する遺構は、7902 ピットのみである(図 665)。また、南西壁断面(425 トレンチ断面)においては遺構が2つ認められた(図 658)が、いずれも側溝内で収束し、平面では検出されなかった。7902 ピットは、直径 0.3 m、深さ 0.6 m である。その埋土は3層に細分され、それらすべてに第5層と第5 b層起源の偽礫が含まれていた。なお、この遺構はやや斜めに掘り込まれていたため、底面から上の約 0.2 m 分は断面ラインから外れてしまった。

5 区においては、第5層中から遺物が若干出土した。図 662-17 はそのうちのひとつで、布留形甕の口縁部片である。古墳時代前期後半～中期前葉に属する。

#### 第5 b層

ここでは、第5 b-1 ~ 5 b-3 層の状況を下層から順に説明する。

第5 b-3 層はシルトで、ヒシの種実を多く含んでいた。この堆積物は水深の深い状況下で堆積したと考えられ、この時期に調査区周辺では水位が上昇した可能性が高い。なお、この層準からは弥生時代中期に属する可能性のある土器片が1点出土した。

第5 b-2 層にもヒシの種実が多く含まれており、水位の高い状態が継続したと推定される。ただし、この層準は上方粗粒化した氾濫堆積物であり、河川の影響を受けていたと思われる。後述するように、第5 b-1 層下部の段階では、5 区の東側に存在する流路から供給された堆積物によって地形形成がなされており、この流路は既に第5 b-2 層段階には存在していた可能性がある。

また、第5 b面の等高線(図 664)からは、5 区の南西部が高く、そこから北東方向へ緩やかに下がっていたことが読み取れる。第5層段階の遺構形成や第4-1 層段階の耕作による影響も考慮する必要があるが、その起伏は第5 b-1 層下部の層相変化と対応しており、本来の形状を反映していると思われる。第5 b-1 層下部の粒径の側方変化や古流向を考慮すると、5 区の東側に存在する流路から供給さ

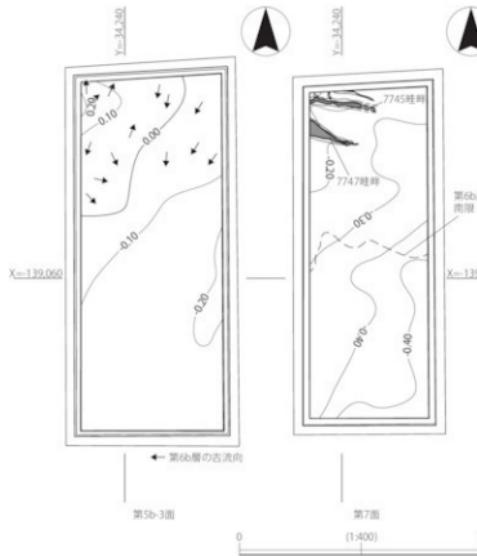


図 666 13-5 区 第 5b-3 面・第 7 面平面

る、同調査地 1 区から 3 区にかけて蛇行して北東から南西にのびる流路が存在したこと、そしてその周囲でのみ「第 13 層」と「第 14 層」が認められ、それ以外の場所では「第 13 層」しか存在しなかったことが判明した。また、03-6 調査地西部にはこれらの砂が分布せず、5 区南半部と類似した状況の箇所があったことも明らかになった。層相の類似性から、「第 13 層」上部の古土壤が 5 区の第 6 層、「第 13 層」下部が第 6 b 層、「第 15 層」が第 7 層に対比される。なお報告書では、弥生時代中期後半の上器が出土した「第 15 面」の溝が「第 14 面」にも踏襲されたとされているが、「第 14 面」では「第 15 面」の溝は完全に埋没しており、溝の両脇の高まりも「第 14 面」には存在しなかったことが判明した。

第 5b-3 面（第 5b-3 層上面）の等高線（図 666）をみると、5 区北西部が高くなり、そこから南東に向かって下がっている。これは、第 6 b 層の堆積によって形成された微起伏を反映している。第 6 b 層ではブラナー型斜交層理が明瞭にみられたため、その古流向をクリノコンパスで計測し、座標北を基準にした角度に換算したうえで、この等高線図に矢印で示した。これによれば、この砂は 5 区北西隅付近から放射状に供給された部分と、5 区北東隅から南南西方向に供給された部分によって構成されていた。前者は第 7 面で検出された 2 本の畦畔の間を流れる水によって供給されたと推定され、流れの中心部分では砂の上面がやや盛り上がっていた。このような形状や堆積構造からみて、これらは 5 区の北側にあたる 03-6 調査地の流路から供給されたクレバススプレー堆積物と考えられる。

#### 第 7 面（図 666、図版 49）

この面は、第 6 b 層の砂を除去することで検出した。この砂は 5 区北半にしか存在しなかったが、その部分で畦畔を 2 条検出した。また、その周囲からは人の足跡が多数検出された。

れた氾濫堆積物によって高まりが形成され、その一部が 5 区南西部で検出されたと推測される。

#### 第 6 層・第 6 b 層

この層準は 5 区北半で確認されたが、今回の調査では遺構・遺物は検出されなかった。ただし、この層準は譲良郡条里遺跡西部の地形形成や遺構分布を理解するうえで重要であるため、調査では隣接する 03-6 調査地の層序も合わせて検討をおこなった。

03-6 調査地では弥生時代中～後期の層準として、「第 13～15 層」が設定されている。このうち、「第 13 層」は上部に形成された古土壤とその下位の砂、「第 14 層」は上部のシルトと下部の砂から構成される。報告書ではその分布状況が詳しく記述されている

いため、調査データを確認したところ

検出された畦畔は、北側のものを 7745 畦畔、南側のものを 7747 畦畔とした。両者はほぼ平行して西北西—東南東方向にのびており、両者の間隔は 1.5 ~ 2.5 m である。7745 畦畔の北には畦畔が取りつくようにみえる部分もあったが、検出された範囲が狭く、7745 畦畔に比べてかなり低いため、畦畔とは断定できなかった。第 7 面における畦畔配置の詳細は不明であるが、第 7 層上面を覆う砂(第 6 b 層)を運搬した主要な水流がこれらの畦畔間を流れたことからすれば、2 本の畦畔が平行して配置されたのは、水田域内の水回りと関連していた可能性がある。なお前述したように、03-6 調査地では、この面に対比される第 15 面において、両脇に畦畔を伴い、北東から南西に流れる溝が検出されている。5 区はその延長に位置しており、03-6 調査地と 5 区の間が水田域となっていたと考えられる。第 7 層の出土遺物は、閃緑岩の礫 1 点のみである。その大きさは 14.6 × 9.7 × 7.2 cm、重量は 131.9 g である。表面には平滑な面が存在するが、研磨されたかどうかは不明である。この礫は第 7 層を構成するシルトや極細砂と同じ營力では運搬されないため、人為的に持ち込まれたと推定される。

#### 第 8 面・第 9 面

第 8 面・第 9 面からは遺構は検出されなかった。また、第 8 層からは遺物も出土しなかった。

#### 第 3 項 まとめ

13-5・8 区では、遺構・遺物とも比較的少なかったものの、周辺調査区との層序対比をおこない、各層準の時期をある程度推定できたほか、既往の調査地における層序の問題点も明らかにでき、その訂正のための手がかりが得られた。最後に、周辺調査地との層序関係をまとめておきたい（表 2）。

まず、第 1 層から第 3-3 層に関しては、09-1 調査地および 03-6・06-3 調査地との関係が時期推定の手がかりとなる。第 1-1 層は、18 世紀後半の磁器が出土した 09-1 調査地の第 2-1 層に対比される。また、第 1-2 層は 09-1 調査地「第 2-2 層」、03-6 調査地「第 2・3 層」に対比され、前者からは 17 世紀前半の瀬戸美濃天目茶碗、後者からは 16 世紀後半の土器が出土した。さらに、第 2 層に対比される 03-6 調査地「第 5 層」からは、15 世紀後半の瓦質火鉢が出土した。ただし、これらの遺物は少量のため、地層の時期よりも古い可能性も否定できない。

今回の調査では、8 区の第 3-2 層からは 13 世紀後半、5 区の第 3-3 層からは 12 世紀後半～13 世紀前半の瓦器椀の破片が出土した。しかし、第 3-3 層に対応する 09-1 調査地「第 4-2 層」からは 13 世紀後半の瓦器椀の破片が出土しており、今回の出土土器は地層の時期を示さない。

第 4-1 層に関しては、5 区において坪境の溝から土器がまとまって出土したことから、時期推定の手がかりが得られた。これによれば、第 4-1-3 層上面 7741 溝が 11 世紀後半～12 世紀初頭と推定される。また、第 4-1-2 b 面 7721 溝の最下部出土土器からみて、第 4-1-2 b 層によって 7741 溝が埋没し、7721 溝が掘削された時期も 11 世紀後半～12 世紀初頭の中におさまると思われる。ただし、第 4-1-2 層の継続期間や第 4-1-1 層の時期については不明な点が多い。

第 4-2 層は、03-6 調査地第 10-1 層、09-1 調査地第 5-2 層に対比される。今回は遺物がほとんど出土しなかったが、これらの調査地から出土した遺物によって 8 世紀～11 世紀前半と推定される。また、第 5 層の時期は、5 区および 03-6・09-1 調査地の出土遺物から古墳時代前～後期と思われる。

次に、第 6 b 層～第 5 b-1 層の状況をみていきたい。その時期は、03-5・03-6 調査地などの成果から、弥生時代後期から庄内式期と推定される。その堆積過程を整理すると、まず 06-3 調査区に存在した流路から供給された第 6 b 層が 5 区北部に高まりを形成した。高まりの上には土壌(第 6 層)

表2 13-5・13-8区と周辺調査地との層序対比

※時期の推定は主に、13-1-5区・03-6調査地・09-1調査地の遺物にもとづく。a・b・cは時期推定の明確となる土器が出土した調査地（a：03-6調査地、b：13-1-5区、c：09-1調査地）。

※時期の欄で「」をつけたものは、遺物量が過量などの理由により不確定要素を含むもの。

受講済のうち、( ) を付したものは、部分的に通存していたもの。

1) この算出は、(森本編、2009) の図10-1 ( $\lambda = 138.820$  ライン) の計算値。

3) 「3-3b」とされた要素は部分され、混乱された要素を 3つ程度含む。

が形成されたが、第6 b層が堆積しなかった部分は第7層が露出した状態になっていた。なお、11-1-4区断面(図10-11)の「第5-2 b層」に含まれている「20~24層」(砂)の上には、土壤が形成されたことが写真で確認できる。この土壤は5区の第6層に、「20~24層」は第6 b層に対比される。

第6層の上には第5 b-3層のシルトが堆積した。この層準にはヒシの種実が多く含まれており、水位が上昇して沼沢地となったと推定される。第5 b-2層にもヒシの種実が多く含まれており、水深の深い状態が続いたと考えられるが、この堆積物は氾濫堆積物であり、この段階で5区の東側に流路が出現した可能性がある。第5 b-1層下部になると堆積物の粒径が粗くなり、ヒシの種実は含まれなくなる。これは、流路の影響が強くなったことを示している。この堆積物は、粒径の側方変化や古流向からみて、5区の東側に存在した流路から供給されたと考えられる。

第7~9層に関しては、それと酷似する状況が03-5調査地東部(03-5-4~8区)で確認されていることが注目される。この部分では、「第3-3 a層」上面(「第2-3面」)において弥生時代中期後葉の水田が検出された。この層準の層相は第7層、さらにその下の「第3-4 a層」は第8層、「第4層」は第9層に酷似している。また、03-5-4・8区では「第3-3 a層」を覆う堆積物の上に「第3-2 a層」と呼ばれる土壤が形成されたが、これは5区の第6層に対比される。さらに03-5-8区では、軟X線写真を用いた堆積相解析(7地点)の結果、「第3-2 b層下部」が含水塑性変形ユニットとなっており、これより上位に地震発生層準が存在することや、「第3-3 a層最上部」が液相流動変形ユニット、「第3-3 a層下部」以下が含水塑性変形ユニットにあたり、「第3-3 a層」上面段階にも地震が発生したことが推定されている。これらは5区の第5 b-3層上面段階と第7層上面段階に発生した地震に対比できる。

一方、今回調査された11-1-4区の「第6-5 b面」は、遺構の検出状況からみて、隣接する03-5-10区の「第2-2 b面(第3-2 a層下面)」に対応すると思われる。したがって、同区の「第2-2面(第3-2 a層上面)」が11-1-4区の「第6-1面」に対応する。「第6-1層」は5区の第7層に対応するので、5区の第7層と03-5調査地南西部(03-5-2・10区)の「第3-2 a層」が対比されることになる。また、03-5-2・10区における「第3-3 a・4 a層」は、5区の第8層にあたる堆積物がシルト層を挟むことによって細分された、と理解できる。同様に、11-1調査地の「第7層」と「第8層」も5区の第8層が細分されたものと思われる。しかし、そのように考えると、前述した03-5調査地東部との層序対比とは矛盾する。さらに、11-1調査地の「第6-1面」に対応する03-4調査地の「第8 a-1面」と03-5調査地の「第2-2面」をつなぐと、両者が接する部分で後者側が0.5 mも高くなり、矛盾が生じる。こうした矛盾は、03-5調査地の中で層序対比に誤りがあることを示している。つまり、その南西部における「第3-2 b層」は11-1-4区の「第5-2 b層(20~24層)」に対比できるが、東部で「第3-2 b層」とされたものは11-1-4区の「第5-2 b層(20~24層)」であり、異なる時期の砂礫層を同一の地層と認証しているのである。そう考えれば、5区の層序と整合的に理解でき、03-4調査地との高さの違いも解決できる。

03-5調査地東部における「第3-2 b層」は、X=138,820ライン(森本編 2009:図666-1)においては東側に厚く堆積し、その上位には土壤が形成された(森本編 2009:図666-1の「31層」)。この層準は5区の第6層に対比される。その上には西側と東側に厚く砂が堆積し、中央付近はやや低くなつた。このうち、西側の砂は「第1面」の「流路1」形成以前に存在した流路に関連する堆積物であ

り、周囲に氾濫堆積物を厚く堆積させて河岸を形成していた。「微高地2」とされたものは、主にこの流路の右岸に形成された自然堤防にあたる。このような流路の特徴は11-1-2-2区の「第5-2b層」中で認められる流路と共通しており、位置関係からみて、両者は連続する流路であった可能性が高い。さらに、5区の東側に想定される流路も、この流路の分流路と考えられる。一方、この断面の東側でみられる砂は、東へいくにつれてさらに厚くなるが、その部分では「31層」が残存していないため、その上下の層準を区別することが難しい。この堆積物の古流向は南東→北西であり、西側の堆積物とは供給源が異なっている。また、少なくとも3つの堆積単位に細分され、第6b層と第5b-2層～第5b-1層下部に対比される堆積物が重なっていると考えられる。

X=-138,820ラインにおいて西側と東側に厚く砂が堆積して低くなった部分は、泥によって埋積された。その泥層の下部には、有機物を含んで暗色を呈する地層（同「27層」）が存在する。これは、堆積速度が遅くなつて植物遺体が多く取り込まれた地層と思われる。その上位の泥を第5b-1層上部に対比させると、「27層」は第5b-1層下部と上部の境界にあたつており、両者の間に堆積速度の遅くなつた時期があることになる。03-5-2区の「第3-1a層」は、上下の層序関係からみてこの層準に対比され、場所によっては明瞭な土壤が形成されていたことがわかる。

また、第9層は03-5調査地の「第4層」、03-4調査地の「第8b層」に対比される。この両調査地の境界付近の層序対比をおこなうと、滋賀里IV式土器が出土した「第8b-3層」は03-5調査地東端までは存在するものの、西側では「第3-3a層」に削られて残存しないため、5区の第9層と類似する層準は03-4調査区の「第8b-4～5層」にあたる可能性がある。ここでは、第9層の時期を縄文時代晚期（後葉以前）としておく。さらに、第10・11層も同様の観点から層序対比すると、第10層が03-4調査区の「第8b-5層下部」、第11層が「第8b-6層（第8b-7～9層が吸収して一体化）」、第12層が「第8b-10層」に対比される。第12層の下にある砂層の最上部は03-4調査地の「第9a'層」に対応し、03-4調査地の年代測定結果から、縄文時代中期後葉に堆積したと推定される。

（井上智博）

#### 引用文献

- 伊野近富 1995『土師器編』中世土器研究会編「概説 中世の土器・陶磁器」、真陽社、pp.225～244。  
奥村茂輝編 2008『讚良都条里遺跡』VII、（財）大阪府文化財センター調査報告書第182集、166p.  
中尾哲行・山根一航編 2009『讚良都条里遺跡』VIII、（財）大阪府文化財センター調査報告書第187集、504p.  
森本 薫編 2009『讚良都条里遺跡』IX、（財）大阪府文化財センター調査報告書第188集、488p.

## 第5章 自然科学分析

### 第1節 讀良郡条里遺跡出土ガラス小玉の分析

讀良郡条里遺跡から出土したガラス小玉3点については、国立文化財機構奈良文化財研究所の降幡順子氏に依頼し、顕微鏡観察、透過X線画像解析、蛍光X線分析装置(EDAX製EAGLEIII)を用いた非破壊での成分分析を実施しており、以下の分析結果を賜った。

- 1) 顕微鏡観察から、黄緑色小玉(図444-29)は気泡の量が非常に多く、孔と並行方向に伸びる気泡が確認でき、橙色小玉(図444-28)は両端面に通じる気泡列が、淡青色小玉(図444-30)では孔に平行して並ぶ気泡列が観察できたことから、これら3点のガラス小玉は引き伸ばし法により製作されたと考えられる。また、透過X線画像から、橙色小玉の内部には周囲よりもやや密度の高い粒子状の部分が散在していることが観察できる。
- 2) 蛍光X線分析結果から、二酸化ケイ素( $\text{SiO}_2$ )、酸化ナトリウム( $\text{Na}_2\text{O}$ )、酸化アルミニウム( $\text{Al}_2\text{O}_3$ )、酸化カルシウム( $\text{CaO}$ )、酸化カリウム( $\text{K}_2\text{O}$ )、酸化マグネシウム( $\text{MgO}$ )、酸化鉄( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )、酸化チタン( $\text{TiO}_2$ )、酸化銅( $\text{CuO}$ )、酸化鉛( $\text{PbO}$ )、錫( $\text{Sn}$ )、ジルコニウム( $\text{Zr}$ )などを検出した。これらの結果から、酸化鉛含有量が顕著に認められないことからアルカリケイ酸塩ガラスであると考えることができる。また酸化ナトリウム、酸化アルミニウムの含有量が多く認められることから高アルミナソーダ石灰ガラスに分類することができる。

高アルミナソーダ石灰ガラスは弥生時代後期からも出土する。これらは古墳時代の高アルミナソーダ石灰ガラスとは基礎ガラスの化学組成が若干異なるという研究報告がされており、それによると弥生時代の高アルミナソーダ石灰ガラスは、酸化アルミニウムが4~6%程度、酸化チタンは0.4%以下であるのに対し、古墳時代の高アルミナソーダ石灰ガラスは酸化アルミニウムの含有量は8%を超え、酸化チタン含有量も0.4%以上となるものが大半であるといふ。今回結果は古墳時代の高アルミナソーダ石灰ガラスとより類似しているといえる。

着色剤は、黄緑色半透明のガラス小玉に散在している黄色粒子は人口黄色顔料である錫酸鉛( $\text{PbSnO}_3$ )であり、これと銅により複合的に黄緑色が得られる。5~6世紀の高アルミナソーダ石灰ガラスの着色に用いられた錫酸鉛の原料は東南アジア産であることが鉛同位体比で示されており、流通はこの時期に多い傾向を示す。橙色不透明のガラス小玉は銅による着色で、コロイド技術が用いられていると考えられている。橙色ガラスの表面の一部および孔内面を覆っている黒色層からは銅と硫黄を顕著に検出した。橙色小玉表面の銅の含有量が高いため風化の影響が大きいことが考えられ、さらに一部の表面は腐食生成物に覆われていることが考えられる。淡青色透明ガラス小玉は1%程度の酸化銅による着色である。これらは古墳時代の高アルミナソーダ石灰ガラスに認められるものである。

このような特徴を示すガラス小玉は、古墳時代前期後葉に出現するといわれている。さらに古墳時代中期以降は色調が多彩なガラス玉が流通することが報告されていることから、今回照査したガラス小玉は古墳時代中期以降に一般的に流通していたガラス小玉と矛盾しない。

(降幡順子・後川恵太郎)

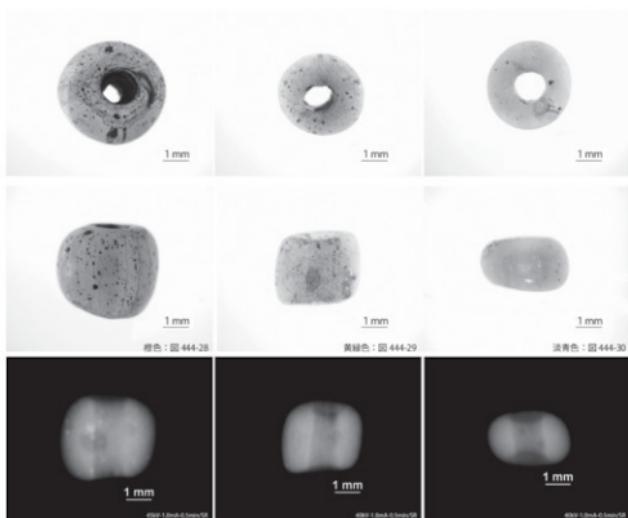


写真1 ガラス小玉の顕微鏡写真およびX線透過画像

表3 非破壊分析結果 (wt%) (錫とジルコウムは定性分析)

	Na <sub>2</sub> O	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CuO	PbO	Sn	Zr
444-28	褐色	12.7	12	10.0	54.5	2.1	3.3	0.51	0.07	3.5	9.0	2.9	○
444-29	黃綠色	14.2	0.85	8.4	65.7	2.3	3.6	0.43	0.07	2.1	1.1	1.2	○
444-30	淡青色	13.0	0.71	6.8	70.8	2.7	2.7	0.45	0.20	1.4	1.1	0.2	○

図 667 非破壊分析結果（左：黄緑色ガラス小玉、右：淡青色ガラス小玉）

## 第2節 讀良郡条里遺跡出土鍛冶関連遺物の分析

讀良郡条里遺跡から出土した鍛冶関連遺物については、交野市教育委員会真鍋成史氏、日鉄住金テクノロジー(株)八幡事業所TACセンター大澤正己氏・鈴木瑞穂氏に依頼し、肉眼観察、マクロ組織の観察、顕微鏡組織の観察、化学組成分析を実施しており、以下の分析結果を擧った。

### 1. 分析結果

図82-5：資料番号SAR-1：取鍋か、1-5区4-2層出土

- (1) 肉眼観察：坩堝の小破片(15g)の可能性があるため分析に供された。内外面は黒灰色に変色するが、熱影響は弱く、金属（またはその鉱物）などの溶着は見られない。胎土は灰褐色で、砂粒（無色鉱物主体）や有機質の混和物が確認される。
- (2) マクロ組織：写真2-1に坩堝断面を示す。内外面とも熱影響がほとんどなく、観察面では、表層にガラス質滓は確認されなかった。
- (3) 顕微鏡組織：写真2-2・3に示す。胎土部分の拡大である。素地は粘土鉱物で、やや角張った形状の砂粒を混和している。

上述のように断面表層部の熱影響は非常に弱く、溶着金属等の情報も得られなかった。

図169-5：資料番号SAR-2：椀形鍛冶滓、1-5区4967溝出土

- (1) 肉眼観察：小形でやや薄手の椀形鍛冶滓(49g)である。側面1面は直線状の破面である。上面外周には砂粒を多量に含むガラス質が付着する。また内側は緑灰色の緻密な滓部で弱い着磁性がある。表面は風化が著しい。下面是全面灰白色～淡褐色の鍛冶炉床土が付着する。炉床土中には砂粒が多量に混和されている。上面は木炭痕のない滑面であり、鉄塊の脱炭処理が行われた可能性が考えられる。
- (2) マクロ組織：写真2-4に示す。上側（明灰色部）は鍛冶滓、下側（暗灰色部）は鍛冶炉床土およびその溶融物（ガラス質滓）である。
- (3) 顕微鏡組織：写真2-5・6に示す。5は滓部の拡大である。白色樹枝状結晶ウスタイト(Wustite: FeO)、淡灰色柱状結晶ファヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO<sub>2</sub>)が晶出する。鍛錬鍛冶滓に最もよくみられる鉱物組成である。一方、6はガラス質滓部分の拡大である。
- (4) 化学組成分析：表4に示す。全鉄分(Total Fe) 45.22%に対して、金属鉄(Metallic Fe) 0.05%、酸化第1鉄(FeO) 44.57%、酸化第2鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 15.05%の割合であった。造滓成分(SiO<sub>2</sub> + Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> + CaO + MgO + K<sub>2</sub>O + Na<sub>2</sub>O)は36.00%で、このうち塩基性成分(CaO + MgO)は3.92%とやや高めであった。主に砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO<sub>2</sub>)は0.23%、バナジウム(V)が0.01%と低値であった。酸化マンガン(MnO)も0.10%と低値である。また五酸化磷(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)は0.70%とやや高めで、銅(Cu)は0.01%であった。

図168-1：SAR-3：椀形鍛冶滓、1-5区4967溝出土

- (1) 肉眼観察：やや小形の椀形鍛冶滓(78g)の側面部破片である。側面5面は破面である。上面表層には白色の小礫を含むガラス質滓が付着する。また上面表層には中小の気孔が密に分布する。滓の色調は明灰色で弱い着磁性を持つ。下面是茶褐色の鍛冶炉床土が付着する。炉床土中には砂粒が混和されている。鍛錬鍛冶滓に分類される。
- (2) マクロ組織：写真2-7に示す。左上の明灰色部は鍛冶滓、右下の暗灰色部は鍛冶炉床土および

その溶融物（ガラス質滓）である。

- (3) 顕微鏡組織：写真2-8・9に示す。1-9は鍛治滓部分の拡大である。発達した淡灰柱状結晶ファヤライトが晶出する。一方、1-10はガラス質滓の拡大である。部分的に白色粒状結晶ウスタイトが晶出する。

資料番号 SAR-4：鍛造剥片<sup>(注1)</sup> 様遺物

SAR-4-1：4967 溝出土

- (1) 肉眼観察：色調は黒灰色で、部分的に淡褐色の土砂が付着する。また表裏面とも波状の凹凸がみられる。

- (2) マクロ組織：写真2-11に示す。厚手で表裏面には細かい凹凸がみられる。

- (3) 顕微鏡組織：写真2-12に示す。素地のガラス質滓中に灰褐色多角形結晶マグネタイト( $\text{Fe}_3\text{O}_4$ )が晶出する。鍛錬鍛治滓の晶癖であり、微細な鍛治滓破片と判断される。

SAR-4-2：4967 溝出土

- (1) 肉眼観察：色調は表裏面とも暗灰色で、白色の砂粒が点在する。

- (2) マクロ組織：写真2-14に示す。ほぼ全面が暗黒色の土砂である。

- (3) 顕微鏡組織：写真2-15に示す。素地は粘土鉱物で、内部に微細な砂粒が混在する。鍛造鉄器などの表層に付着した土砂が剥離したものと考えられる。

資料番号 SAR-5：金属製品

SAR-5-1：1-5区 4967 溝出土

- (1) 肉眼観察：細い線状の微細な鉄器破片である。全体は緩やかなS字状で、両端は破面と推定される。表面は全体が茶褐色の銹化物で覆われる。

- (2) マクロ組織：写真2-17に示す。縦方向の断面を観察した。内部には金属鉄（明白白色部）が良好に残存する。

- (3) 顕微鏡組織：写真2-18に示す。金属鉄部は3% ナイタルで腐食したところ、ほとんど炭素を含まないフェライト(Ferrite:  $\alpha$ 鉄) 単相の組織が確認された。0.5 mm程の非常に細い製品であるのに金属鉄の残りが良好であることや、鉄中の非金属介在物が少ないとから、古墳時代中期の遺物ではなく、比較的新しい時期の混入品の可能性もある。

SAR-5-2：1-5区 4967 溝出土

- (1) 肉眼観察：棒状の微細な鉄器破片である。両端は破面と推定される。表面は全体が茶褐色の銹化物で覆われており、全体が銹化していると考えられる。

- (2) マクロ組織：写真3-20に示す。縦方向の断面を観察した。全体が銹化しており、金属鉄部は残存しない。

- (3) 顕微鏡組織：写真3-21に示す。銹化鉄部の拡大である。部分的に層状のパーライト(Peralite)組織の痕跡が残存する。炭素含有率の推定等は困難な状態であるが、この部分の金属組織の痕跡からは0.2% 前後の軟鉄と推測される。

図202-3：資料番号 SAR-6：楔形鍛治滓、1-5区 4837 井戸出土

- (1) 肉眼観察：楔形鍛治滓の破片(52g)である。側面4面は破面で、中小の気孔が点在するが緻密である。上面には微細な砂粒を含むガラス質滓が点々と付着する。滓部は緑灰色で、弱い着磁性がある。下面是全面灰白色の鍛冶炉床上が付着する。炉床上中には砂粒が混和されている。破面

を観察すると結晶が肥大化したためキラキラと光る。高温操業であったことが考えられる。上面に木炭痕を有することなどから、鍛錬鍛治滓として分析に供された資料である。

- (2) マクロ組織：写真3-22に示す。明灰色部は鍛治滓である。また上側の暗灰色粒は被熱した無色鉱物であり、羽口などの炉材粘土に混和された砂粒と推定される。下面の暗灰色部は鍛治炉床土およびその溶融物（ガラス質滓）である。
- (3) 顕微鏡組織：写真3-23・24に示す。ともに滓部の拡大である。全体に発達した淡灰柱状結晶ファヤライトが晶出する。さらに部分的に微細な淡灰色マグネタイトが晶出する。
- また滓中には写真3-23の中央に示すような、薄い膜状の鉄酸化物が複数確認される。鍛造剥片が鍛冶炉中に飛散して、熱影響を受けて分解しかけた状態のものと推測される。鍛造剥片を包含することからも鍛錬鍛治滓と判断できる。
- (4) 化学組成分析：表4に示す。全鉄分(Total Fe)は37.30%と低めであった。このうち金属鉄(Metallic Fe)は0.12%、酸化第1鉄(FeO)が44.48%、酸化第2鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)3.73%の割合である。造滓成分(SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O)は48.99%と高値傾向が顯著で、塩基性成分(CaO+MgO)も6.37%とやや高めである。粘土の使用の可能性を考えられようか。主に砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO<sub>2</sub>)は0.25%、バナジウム(V)が0.01%と低値であった。酸化マンガン(MnO)も0.21%と低めである。銅(Cu)は0.02%とやや高め傾向を示す。

図256-11：資料番号SAR-7：鍛治滓、2-2区4-1層出土

- (1) 肉眼観察：ごく小形で偏平な鍛治滓破片(13g)である。側面4面は破面と推測される。気孔が多数散在する面もみられるが、大きさに対して重量感のある滓である。滓の色調は暗灰色で、やや着磁性が強い、上面には部分的に白色のガラス質滓が付着する。ガラス質滓中には被熱した砂粒が含まれる。
- (2) マクロ組織：写真3-25に示す。観察面では明灰色の鍛治滓の割合が高い。上下面表層に若干炉材粘土またはその溶融物（ガラス質滓）が確認される。
- (3) 顕微鏡組織：写真3-26・27に示す。2-26は上面表層部の拡大である。下側の暗色粒は熱影響を受けた無色鉱物で、羽口などの炉材粘土に混和された砂粒と推定される。微小明白の金属鉄粒も確認された。また、2-27は中央部の拡大で、白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰柱状結晶ファヤライトが晶出する。鍛錬鍛治滓に最も一般的な鉱物組成といえる。

図442-27：資料番号SAR-8：高坏(脚部内容物)、4区4-2層出土

- (1) 肉眼観察：不定形な塊状の上砂と推測される。色調は淡褐色で、内部には微細な砂粒が含まれる。また部分的に茶褐色の鉄酸化物が確認される。熱影響などがほとんどないことから、やや湿地状の環境で、高坏の廃棄後に脚部内で鉄分を含む土砂が固まった可能性が考えられる。
- (2) マクロ組織：写真3-28に示す。青灰色部は土壤中に沈殿した鉄分(水酸化鉄)、暗黒部は上砂である。
- (3) 顕微鏡組織：写真3-29・30に示す。表層部の拡大である。熱影響を受けた痕跡はなく、肉眼観察の項で述べたように廃棄後脚部内に固着した可能性が高い。

## 2.まとめ

讃良郡条里遺跡から出土した、古墳時代中期の鍛冶関連遺物を調査した結果、以下の点が明らかとなつた。

〈1〉今回調査を実施した鉄滓4点(SAR-2、3、6、7)は鍛治滓に分類される。このうち化学分析を実施した2点(SAR-2、6)は、ともに鍛治滓としては鉄酸化物の割合が低め(ToTaI Fe: 45.22%、37.30%)であった。金属顕微鏡を用いた断面観察結果をみても、楕円鍛治滓(SAR-2)以外は、ほぼファヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO<sub>2</sub>)組成であり、ウスタイト(Wustite: FeO)やマグネットайт(Magnetite: Fe<sub>3</sub>O<sub>4</sub>)結晶の割合は低い。

以上の滓の特徴から、鉄(錫鉄塊)の脱炭処理後の鉄塊中に含まれる酸化鉄主体の滓を熱間で鍛打加工して絞り出すような作業や、鉄素材(金属鉄)が大きく目減りするような、複数回の折り返し鍛錬を伴う作業は、ほとんど行われていなかったと推察される。既に一定の形状に鍛打成形された鉄素材を用いて、鍛造鉄器製作が行われた可能性が高いと考えられる。

一方で鍛治滓(SAR-2、6)の塩基性成分(CaO、MgO)は、やや高め傾向を示す。これが製鉄原料に起因するものであれば、始発原料は塊状鉄鉱石と推察される。その場合、これらの鉄滓は上述したような鍛造鉄器製作に伴うものではなく、鉄塊系遺物に固着した製錬滓の分離除去で生じた(精錬鍛治滓)可能性も考慮する必要がある。特に、SAR-2のように上面に滑らかな凹面を有する鉄滓は精錬鍛治滓の可能性が高いといえよう。ただし、近隣の交野市の森遺跡では錫鉄塊が鍛治関連遺物と一緒に出土するなど<sup>(注2)</sup>、類例はあるものの、不純物(製錬滓)の除去作業前の鉄塊が、この時期に鍛治原料として流通していたか否かは研究的にも大きな課題で、慎重な検討を要する。ライム(CaO)やマグネシア(MgO)などの塩基性成分は鍛治作業時の木炭灰などから付加される可能性もある<sup>(注3)</sup>。

讃良郡条里遺跡では鉄塊系遺物が確認されていないことからも、鉄素材を熱間で鍛打加工して、鉄器を製作する作業が主に行われた可能性が高いと考えられる。

〈2〉鍛造剥片様遺物(SAR-4)は1点(4-1)が微細な鍛錬鍛治滓、もう1点(4-2)は剥片様の土砂であった。ただし楕円鍛治滓(SAR-6)中には、熱影響を受けて分解しかけた状態の鍛造剥片様の鉄酸化物が複数確認されている。

〈3〉金属製品(SAR-5)のうち、1点(5-1)は大きさと厚みを考えると古墳時代中期の遺物としては金属の残存状況が良好である。しかし、鋳化の状況や出土時の状態から考えて、混入の可能性は低いものと考えられる。もう1点(5-2)は全体が鋳化しているが、部分的に亜共析組織の痕跡が確認できた。炭素含有率の推定等は困難な状態で、この金属組織痕跡から0.2%前後の軟鉄と推測される。

〈4〉取銅(SAR-1)は全体に熱影響が弱く、溶着金属の付着等もみられなかった。高坏(SAR-8)でも同様の取銅もしくは坩堝の可能性を考えたが、その痕跡は確認できなかった。この地区では鋳造作業は行われていなかったようだ。

(大澤正己・鈴木瑞穂・真鍋成史・後川恵太郎)

(注)

(1) 鍛造剥片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄肌(金肌)やスケールとも呼ばれる。鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト(Hematite: Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、中間層マグネットайт(Magnetite: Fe<sub>3</sub>O<sub>4</sub>)、大部分は内層ウスタイト(Wustite: FeO)の3層から構成される。このうちのヘマタイト相は1450°Cを越えると存在しなく、ウスタイト相は570°C以上で生成されるのはFe-O系平衡状態図から説明される。

(2) 大澤正己「交野市森遺跡とその周辺遺跡出土鍛治関連遺物の金属学的調査」[森遺跡III](交野市埋蔵文化財調査報告1990-1)  
1991

(3) 松本建達・堀川循正・羽場暎美「前近代製錬滓におけるCa、Mg、Pの由来-還元・造滓における木炭灰の働き-」『鉄の歴史-その技術と文化-フォーラム第5回公開研究発表会講演論文集』2003

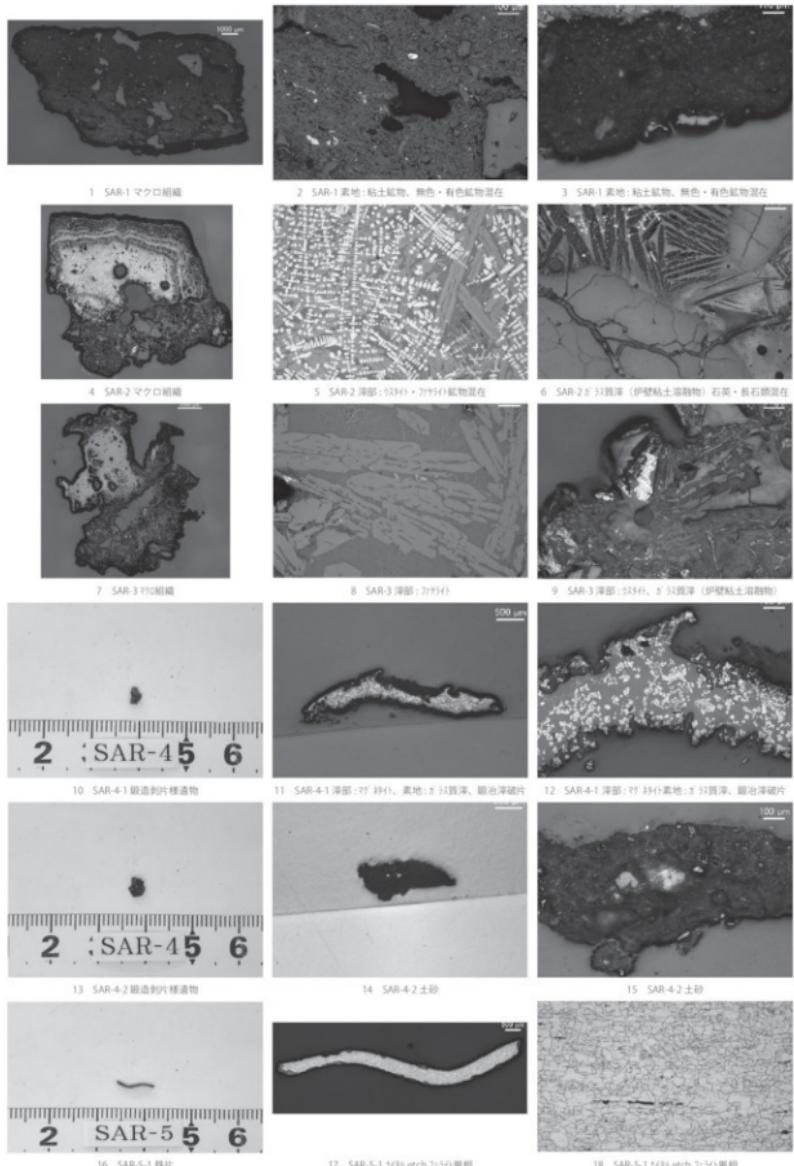


写真2 講良郡条里遺跡鍛冶関連遺物顕微鏡組織（1）

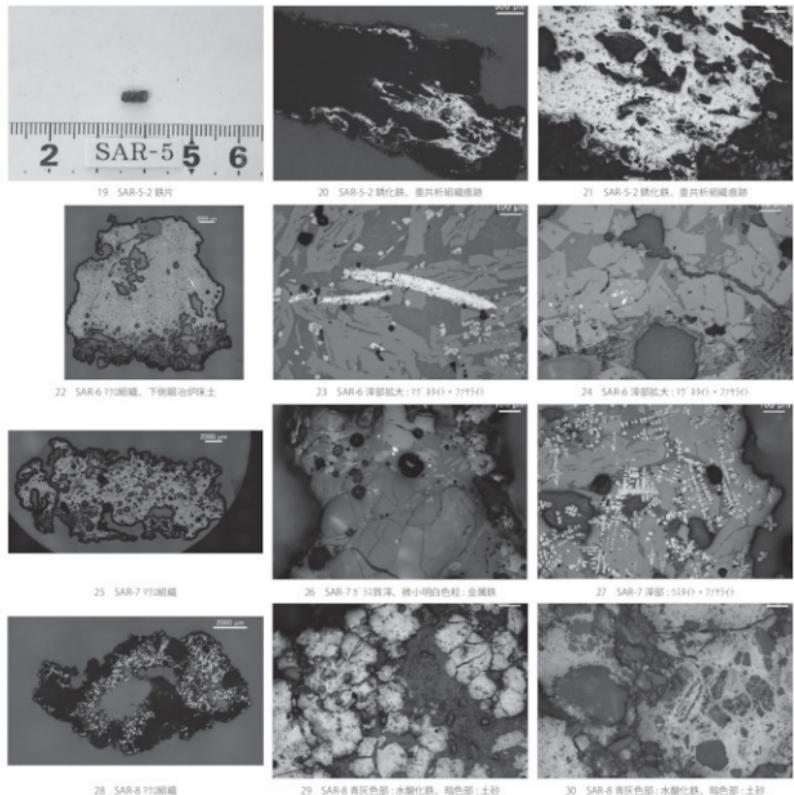


写真3 讀良郡条里遺跡鍛冶関連遺物顕微鏡組織（2）

表4 供試材の化学組成

## 第6章 総括

### 第1節 遺構の変遷と出土遺物

今回の発掘調査では、縄文時代晚期から近代に至る、多種多様な遺構・遺物が各遺構面で確認された。以下では、各遺構面で検出された遺構の変遷を周辺の調査成果と合わせながら、総括する。なお、地層名・遺構面の名称は、2-1・2-2区の調査成果に準じた地層名を使用する。

#### 江戸時代後期～明治時代（第1-1面、図668）

##### 遺構：

大將軍社の遺構、水田・畠が検出された。2-1区1-1層及び近代作土が形成された段階に当たる。大將軍社の参道では、土師器・陶器の灯明皿が鳥居の台石周辺から大量に出土した。近在する村の古老からの聞き取りによれば、大將軍社は明治44年に忍陵神社に合祀されるまで、毎年7月3日に灯明皿を用いた神事があり、周辺の人々の信仰を集める神社であったといふ。

大將軍社の周囲では、条里型地割を踏襲した水田が検出された。4区と2-1区北側では畠が検出されている。1-3・1-4・1-5区では、この段階の基幹水路として機能した溝が検出されており、建築部材（桁柱か）を転用、あるいは、別の場所にあった木樋を再利用した木樋が確認された。また、1-1・2-1区では、条里坪境の南側で四條畠市と寝屋川市の市境が、この時期に形成された地割（溝・田面の段）に起因することが判明した。なお、1-1・2-1区第1-3面では、この段差の南側で、近世以前の溝が検出されており、さらに古い段階に地割の起源が求められる可能性がある。

##### 遺物：

大將軍社参道の台石周辺から灯明皿が多数出土した。灯明皿は、釉薬（柿釉）が施された陶器と土師



図668 江戸時代後期～明治時代（第1-1面）



図 669 室町時代後期～江戸時代中期（第 1～3 面）

器（無釉）に分かれる。完形ないし完形に近いものにおける出土傾向は、江戸時代後期末から明治時代にかけて形成された 1・2 層では、陶器が 7 割以上を占める。それに対し、室町時代後期～江戸時代後期にかけて形成された 3 層は、土師器が 9 割近くとなり、その比率は逆転している。

#### 室町時代後期～江戸時代中期（第 1～3 面、図 669）

遺構：

大將軍社の遺構、水田が検出された。大將軍社は、16 世紀中頃～後半の創建で、当初は基壇をめぐる溝も小規模なものであった。大將軍社の参道では、灯明皿を用いた神社行事がこの時期から始まっている。

大將軍社の周囲には、条里型地割を踏襲した水田が検出されており、2-1 区では溜池と、溜池に接続する溝が検出された。溜池は、鎌倉時代以前には用いられなかった水利施設で、この時期に灌漑システムが大きく変化したことを見ている。

遺物：

大將軍社から柴垣柳樹双鳥鏡や同時期の土器・瓦が多数出土した。

#### 鎌倉時代～室町時代前期（第 2 面、図 670）

遺構：

集落・水田が検出された。3 区では、三十五ノ坪と三十六ノ坪の坪境に接して集落が検出されており、曲物を使用した井戸や掘立柱建物が検出された。集落の存続時期は平安時代後期から室町時代前期で、大將軍社は集落の廃絶以降に創建されたものと考えられる。13-2 区では、大將軍社参道の直下から当該期の水田が検出された。

遺物：

3・13-3 区では、瓦器碗や陶磁器、銭貨など当該期の遺物が多数出土した。1・2・4 区は水田域であったため、瓦器の細片などが少量出土した。



図 670 鎌倉時代～室町時代前期（第2面）

平安時代後期（第3面、図 671）

遺構：

1・2区では、平安時代後期の、条里型地割の水田が良好な状態で検出された。水田は長地型地割で、1・5・2・1区では坪境畦畔が良好な状態で検出された。3区では、皇朝十二銭が出土した平安時代中期の溝が検出されており、中世の集落はその段階まで遡ると考えられる。

1・5・2・1区では、当該期の作土の間に水成層の砂層があり、上下で異なる位置で畦畔が検出された。条里型地割の水田は、層位的な上下関係と4区から出土した須恵器・黒色土器により、平安時代前期（9世紀）まで遡るのは確実と考えられる。

1・5・2・1・4区では、当該期の作土から奈良時代後期の土器が出土しており、条里型地割の水田の上限を示す資料となる可能性がある。4区では、奈良時代から平安時代前期の集落の一部も断片的ながら確認されており、当該期に機能したと考えられる井戸が2基検出されている。なお、1・5区では、海獣葡萄鏡が当該期の地層直上から出土しており、律令体制下の讃良郡条里遺跡の動態において注目される資料である。

遺物：

平安時代中期～後期の出土遺物としては、3区で延喜通宝8点が土師器皿などと共に出土した。2・1区坪境畦畔内からは、当該期と考えられる土師器皿が出土した。

奈良時代の土器は、1・4・1・5・2・1・4区の地層から出土している。全体的に個体数が少ないことや、出土した地層が削平を受けていたことから、いずれの調査地においても奈良時代に形成された地層と断定するには至らなかった。

また、1・5区では飛鳥時代の須恵器が出土した。内1点の平瓶は、平安時代以降の砂層中から出土した資料である。飛鳥時代の遺構・遺物は希薄な状況にある。飛鳥時代以降の水田経営については今回の調査では明らかにできなかった。



図 671 平安時代後期（第3面）

弥生時代後期～古墳時代後期（第5b面、図 672）

遺構：

1-3・1-5区東側では弥生時代後期から古墳時代中期初頭の集落、1-5・2-1区では古墳時代中期初頭から古墳時代中期後葉の集落、2-2・13-4区では古墳時代中期初頭から古墳時代後期後葉の集落、4区では古墳時代中期後葉から後期中葉の集落が検出された。集落周辺の低地は各時期の水田として土地利用されている。2-2・13-4区の集落は、調査地の南側に隣接する都屋北遺跡の集落に連続するものである。また、2-2区では、周溝が検出されており、古墳ないし祭祀遺構が集落内に近接して構築されていた。

2-1・2-2区では、古墳時代中期初頭から古墳時代後期にかけての水田が検出されており、その変遷は以下のとおりである。1) 弥生時代後期の氾濫堆積物によって形成された地形の起伏が平坦化し

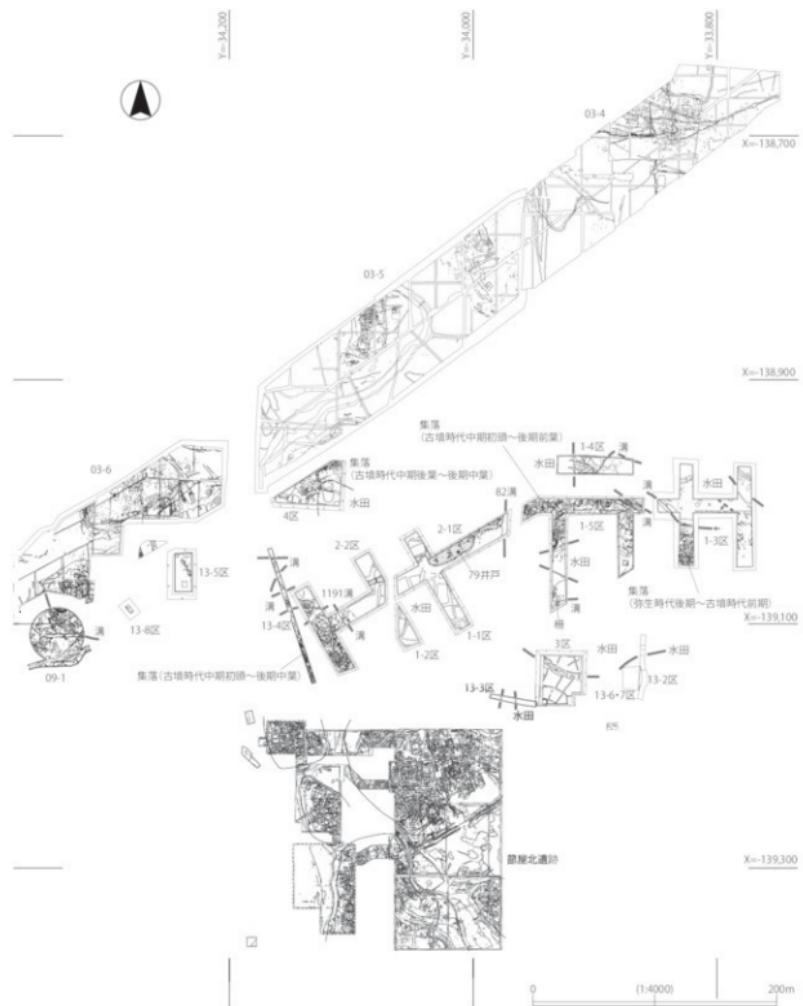


図 672 弥生時代後期～古墳時代後期（第5 b面）

て、古墳時代中期初頭以前の大区画水田が展開する。2) 古墳時代中期から後期の氾濫堆植物である砂層の堆積によって地形に起伏ができる、小区画の水田が展開する。

3区でも古墳時代中期～後期以降、飛鳥時代にかけて機能したとみられる水田が複数面検出され、水田への導水機能を持つとみられる流路の堤防構築に敷葉工法が用いられていた。

古墳時代集落内・外で検出された溝については、2-1区 82溝、2-2区 1191溝、13-4区

7301 溝は、弥生時代後期に形成された地形の低所に加工が施されたもので、微高地と水田域（低地）を画する溝（2-2区 1300溝、4区 467溝）が灌漑用であるのに対し、集落を区画する機能があり、その性格が異なる。1-5区では、集落内の複数の竪穴建物を区画した小規模な溝が検出されており、各地点で溝機能が異なることが想定できた。

遺物：

#### 古墳時代中期～後期

1-5・2-1区の集落ではTK73～TK10型式新段階、2-2・13-4区の集落ではTK73～TK43型式、4区の集落ではTK208～TK209型式の遺物が出土した。特筆すべき遺物として、1-3区では、初期須恵器などとともに櫛描直線文を施した高环形器台が出土した。1-5区では、竪穴建物39からON231～TK73型式の須恵器环蓋、竪穴建物35から須恵器二重縁・透孔（円窓？）がある土師器壺、4967溝から鉛錠・輪羽口など鍛治関連遺物、4921井戸から陶質土器の可能性がある高环、5467井戸から東日本系の土師器壺、4837井戸から井戸枠に転用された屏板と鍛治関連遺物が出土した。ほかに、東海系の宇田型甕の破片が出土している。

2-1区では、82溝からON231～TK208型式の須恵器・韓式系土器・網代・多数の木製品が出土した。2-2区では、838溝・1388溝（周溝）からTK73型式の須恵器、1191溝からON231～MT15型式の須恵器やU字形板状土製品、917井戸から井戸枠に用いられた準構造船底板が出土した。4区では、子持勾玉・白玉等の大量の滑石製石製品及び未製品、ガラス小玉が出土した。また、2-2からも滑石製子持勾玉が出土した。13-4区では、竪穴建物51からガラス小玉、7571土坑から須恵器を模した土師器蓋が合わされた土師器甕が出土した。

表5 古墳時代遺構変遷

	TK73型式	TK216型式	TK208型式	TK73型式	TK47型式	MT15型式	TK10型式 (a)	TK10型式 (b)	TK43型式
1-5区	△竪穴建物 29・31 竪穴建物 11 竪穴建物 10 竪穴建物 35 竪穴建物 27 竪穴建物 18 4704井戸/布留4-5号 竪穴建物 30 竪穴建物 39 竪穴建物 31 4921井戸 △5298井戸	△竪穴建物 47・48 竪穴建物 11 竪穴建物 40・41 竪穴建物 17 竪穴建物 15 竪穴建物 15 竪穴建物 19 4640井戸 竪穴建物 15 竪穴建物 19 竪穴建物 42 4690井戸 4967溝 竪穴建物 23 竪穴建物 22 4738溝 竪穴建物 13 竪穴建物 20 竪穴建物 20 竪穴建物 19 竪穴建物 42 竪穴建物 33 5467井戸 5467井戸		竪穴建物 12 竪穴建物 16 竪穴建物 16 竪穴建物 19 竪穴建物 42 4690井戸 4720溝					
2-1区	82溝				△81井戸				
2-2区	1191溝 838-1452溝 △竪穴建物 14 △竪穴建物 9	竪穴建物 6 (西) 竪穴建物 7 竪穴建物 17 1300溝 1214土坑 1359カマド		竪穴建物 9 竪穴建物 15 竪穴建物 5 竪穴建物 12 竪穴建物 16 1359カマド		竪穴建物 8 竪立柱建物 33 竪穴建物 6 (東) △竪立柱建物 10-11			917井戸
4区			竪立柱建物 7 竪穴建物 1	竪穴建物 2・3 △竪立柱建物 2 467溝		竪穴建物 3 竪立柱建物 3 竪立柱建物 4 △竪立柱建物 5			
13-4区	7301溝 7398井戸 741溝 △竪穴建物 60		竪穴建物 51 7571土坑 竪穴建物 49						

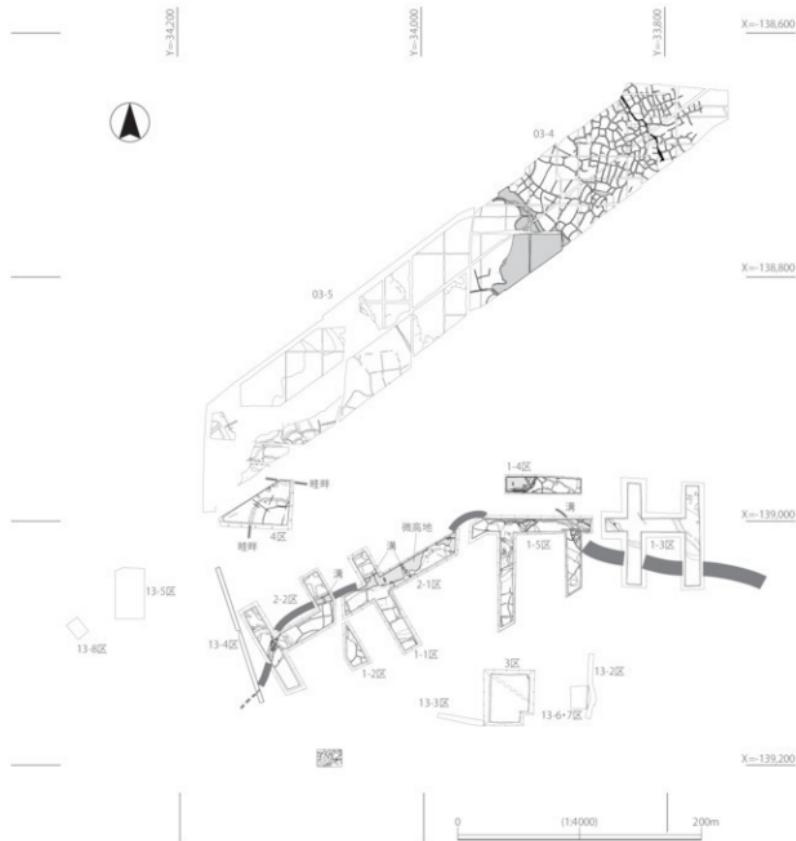


図 673 弥生時代中期後葉（第6面）

#### 古墳時代前期

1-3区・1-5区では、井戸や土坑等から古墳時代前期の土器が出土した。庄内式併行期の土器は確認されず、この時期には集落が営まれていなかった可能性がある。古墳時代前期の土器は、布留1式及び布留3~4式に位置付けられる。山陰から瀬戸内地域、東海地域から搬入された土器が布留3~4式に伴っている。

#### 弥生時代後期

1-3・1-5区では、弥生時代後期初頭～後期前葉と後期後葉の土器が出土した。1-3区では土坑・流路、1-5区では土坑・斜面地に形成された古土壤（5-2-2層）からそれぞれ出土している。また、2-2区では流路内から弥生時代後期後葉の土器が出土した。1-3区から出土した土器には、瀬戸内地域の影響を受けた高環や台付長頸壺（生駒西麓産）がある。

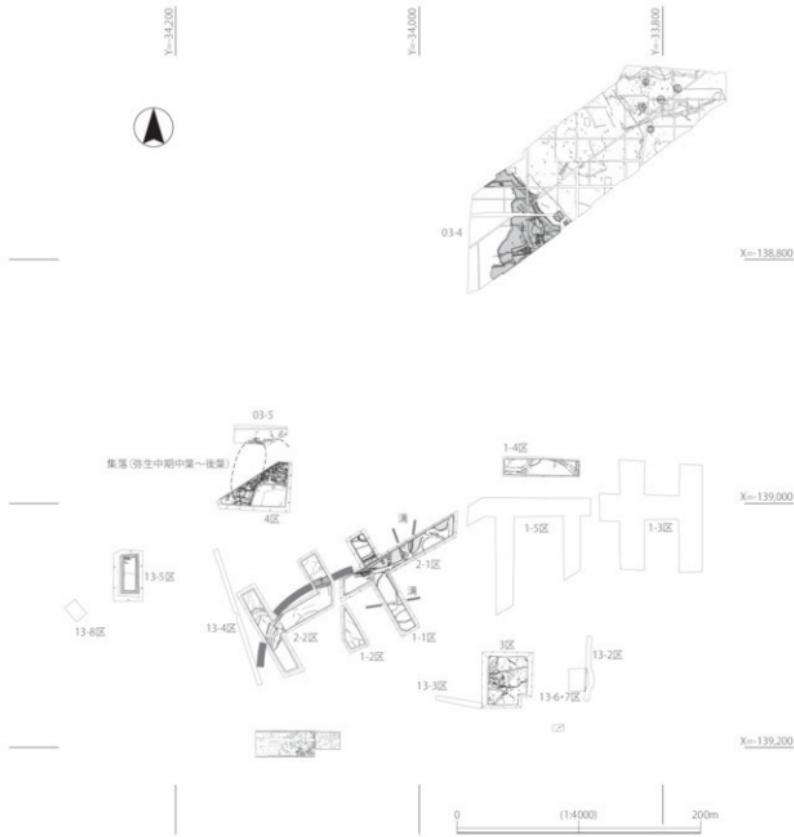


図 674 弥生時代中期中葉～後葉（第6 b面）

弥生時代中期後葉（第6面、図 673）

遺構：

弥生時代後期以降に形成された氾濫堆積物の砂層と湿性堆積物の泥層を除去して検出された水田が調査地全体で検出された。微高地周辺の低地では、平坦化が進んでいたため、区画が 200 m<sup>2</sup>に達する広いものが含まれる。4 区では、同段階に形成された地層を除去した遺構面で、弥生時代中期後葉に位置付けられる土坑が検出されたことを時期比定の根拠としている。

遺物：

2-2・4区で瀬戸内西部～中部地域の影響を受けた、凹線文が施された高環が土坑及び作土から出土した。調査地全域で、当該期に盛行する集落は認められず、大半が水田として土地利用されたため、総じて土器は少ない。

### 弥生時代中期中葉～後葉（第6b面、図674）

#### 遺構：

弥生時代中期中葉から後葉にかけて形成された古土壤と作土を除去した遺構面で、集落が3・4区で検出された。4区の集落では、灌漑及び区画として用いられた溝が多数検出されており、微高地では柱根が遺存する柱穴も多数確認された。第二京阪道路・藤屋北遺跡においても、同時期の集落が検出されており、古墳時代と同様に、立地条件の良好な場所を選んで、小規模な集落が展開したようである。

#### 遺物：

4区の集落では、大量の弥生土器が出土した。弥生時代中期中葉、Ⅲ様式前半に位置付けられる資料である。甕は、Ⅱ様式と同様、ハケ調整のものも含まれるが、ヘラミガキ調整が多用されるようになる。頸部の屈曲は「く」の字形で、逆「L」字形のものは微量である。2-2・4区の弥生土器の中には、タタキが認められる土器が出土した。近江地域の搬入品、或いは、その影響下で成立した土器も出土しており、受口状口縁をもつ壺のほか、頸部及び胴部に横方向の粗いハケ調整が施される甕が出土している。木製品では、護岸施設に転用された鍤の未成品が出土しており、小規模な木工が集落内で行われたと考えられる。

また、石製品では、サヌカイト製石鐵のほか、粘板岩製の石庖丁を転用した石劍（尖頭器）が出土しており、類例の少ない資料である。

### 弥生時代中期前葉（第7面、図675）

#### 遺構：

弥生時代中期中葉以前に形成された氾濫堆積物の砂層と湿性堆積物の泥層を除去した遺構面で水田が検出された。2-1・13-5区では、小区画の水田が確認されたほか、4区では同段階の灌漑用水路として用いられたとされる溝が検出されている。それ以外の調査地では、未調査地を除いて、大畦畔が検出されており、調査地周辺にも、水田域が広がっていたことが想定される。

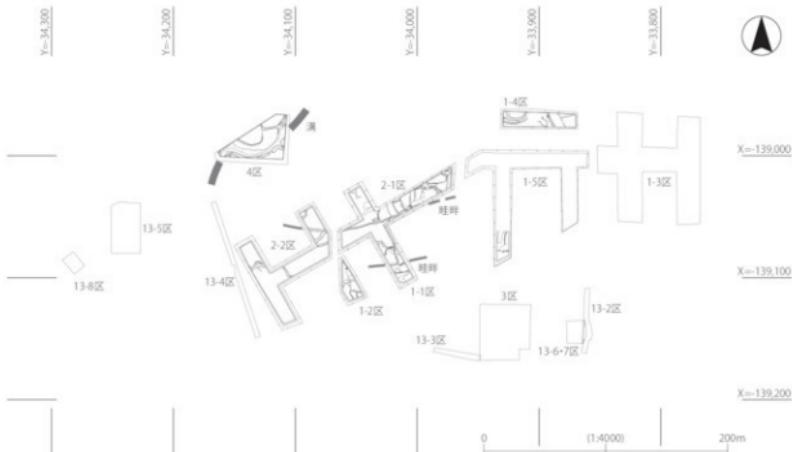


図675 弥生時代中期前葉（第7面）



図 676 弥生時代中期前葉（第7 b面）

た段階があったと考えられる。

#### 遺物：

#### 遺物：

1-1・1-4・2-1区で当該期の弥生土器が出土した。調査地全体は、水田として土地利用されるため、細片となった土器が出土した。

#### 弥生時代中期前葉（第7 b面、図 676）

#### 遺構：

1-1・1-2区で集落が検出された。井戸・土坑等が検出されており、用排水に用いられたと考えられる小規模な溝も確認されている。弥生時代中期中葉のものと比較すると、小規模なもので、切り合い関係を持つ遺構も少数である。集落の廃絶時には水田化しているが、弥生時代中期前葉の水田を維持管理し

た土器は、I 様式の特徴を払底したII 様式後半弥生時代中期前葉の資料が出土した。集落周辺では、出土量が多い傾向にある。甕は粗いハケが施され、大きく外反する口頭部をもった、淀川水系に分布する甕が出土している。壺の口縁端面は刻目が施されるか、無文である。壺・鉢類に施される櫛描文様は、直線文・波状文を主としており、直線文が縦じて多い傾向にある。石製品では石庖丁やサヌカイト製の搔器が出土した。

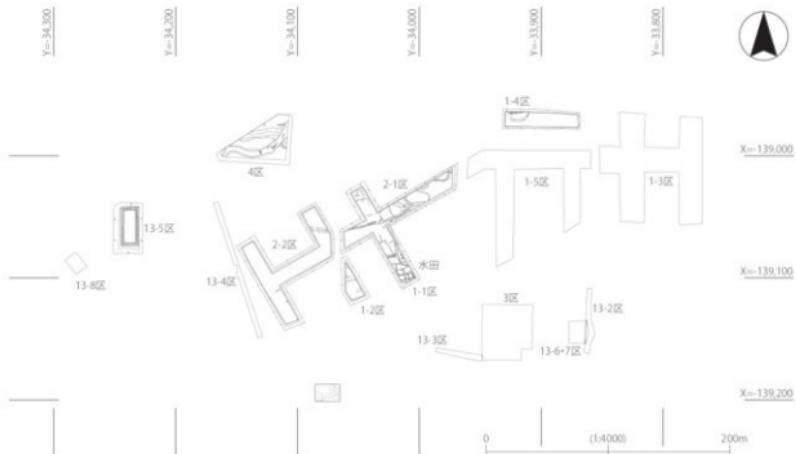


図 677 弥生時代前期後葉（第8面）



図 678 繩文時代晩期以前（第10面）

弥生時代前期後葉（第8面、図 677）

遺構：

1-1・2-1・2-2・4区で水田が検出された。1-1区の小区画水田は弥生時代中期前葉の集落が立地した砂層を除去して検出された。また、当該期の大畦畔が2-1・2-2区で東西に検出されており、調査地周辺の大規模な水田開発がこの段階に行われた可能性が高いと考えられる。また、2-2区では、当該期の弥生土器壺を納めた土坑が検出された。

遺物：（弥生時代前期中葉）～後葉

1-3・2-1・2-2・4区では、沈線文が4条以上施された弥生土器が出土した。多くは破片であったが、2-2区では胴部に突帯文と多条沈線文が施された壺が土坑から出土した。播磨・山陰東部地域からの搬入品の可能性がある。

1-4区では、第8-1面で検出された4068溝から、図70-12の壺が出土した。削り出しの段と沈線文3条が施される。共伴した甕は沈線文が5条施される。壺は前期中葉から後葉、甕は前期後葉に位置付けられる資料である。8-1層から出土した突帯文土器は、長原式新段階に位置付けられる資料で、3条の沈線文が施された弥生土器壺と同じ地層から出土している。一方、7-2層は4条以上のヘラ描き沈線文が施された壺体部片が出土しており、突帯文土器は長原式と水走式に位置付けられる資料が出土している。斜面地に形成された古土壤から出土した資料で個体数が少數であるため、以下は仮説の領域を出ないものであるが、4068溝を画期として、1) 8-1層が繩文時代晩期に形成された可能性、2) 長原式と水走式が層位的に分けられる可能性を示すと考えられる。

また、1-2区9層から、ヘラミガキ調整後に沈線文4条が施され、その下に貝殻腹縁で三角文が施された弥生土器壺が出土した。沈線文4条は新しい要素であるが、前期の中でも古い時期の特徴を示し、9層とした地層が弥生時代前期中葉以前に形成されたことを示す土器と考えられる。また、2-2区では5-1層掘削時に浮線文土器の口縁部が出土した。水I式に位置付けられる資料である。

## 縄文時代晚期以前（第10面、図678）

遺構：

1-4区では、微高地の縁辺に当たる場所で、土坑やピットが複数検出された。古土壤を除去した遺構面で検出されており、弥生時代前期後葉の遺構も含まれる可能性がある。長原式新段階の突帯文土器が出土しており、集落の本体が1-4区北側に存在する可能性がある。

遺物：

第8面の調査成果で述べたとおり、1-4区では縄文時代晚期の突帯文土器が出土した。これ以外に氾濫・流路内堆積物から出土した資料で、1-5区・4区から宮滝式から滋賀型I式に位置付けられる深鉢の破片が出土した。10層形成が縄文時代後期末～晚期前葉以前となる可能性を示唆する土器と考えられる。また、4区では、北白川下層式の縄文土器が出土した。周辺では、第二京阪道路の調査や諏良川遺跡で当該期の縄文土器が出土しており、山麓部に所在した集落の土器が混入したと考えられる。

(後川恵太郎・實盛良彦)

出土遺物の分類・編年については、下記の文献を参照した。

大川清・鈴木公雄・工業普通編 1996 『日本土器事典』

(財) 大阪府文化財センター 2007 『私部南遺跡I』

寺澤薰・森井貞雄 1989 『河内地域』『弥生土器の様式と編年近畿編I』

(財) 大阪府文化財センター 2006 『古式土師器の年代学』

平安学園考古学クラブ 1966 『陶邑古窯址群I』

田辺昭三 1981 『須恵器大成』

大阪府近つ飛鳥博物館 2006 『年代のものさし—陶邑の須恵器—』

古代の土器研究会編 1992 『古代の土器1都城の土器集成』

古代の土器研究会編 1993 『古代の土器2都城の土器集成II』

古代の土器研究会編 1994 『古代の土器3都城の土器集成III』

角田文商編 1997 『平安京提要』

中世土器研究会編 1995 『概説中世の土器・陶磁器』

九州近世陶磁学会編 2000 『九州陶磁の編年九州近世陶磁学会10周年記念』

上原真人 1993 『木器集成図録近畿原始編』

## 参考文献

大阪府教育委員会 2010 『郡屋北遺跡I』

大阪府教育委員会 2012 『郡屋北遺跡II』

大阪府教育委員会・(財) 大阪府文化財センター 1991 『河内平野の動態II』

大阪府教育委員会・(財) 大阪府文化財センター 1993 『河内平野の動態VI』

大阪府教育委員会・(財) 大阪府文化財センター 1996 『河内平野の動態III』

大阪府教育委員会・(財) 大阪府文化財センター 1998 『河内平野の動態IV』

大阪府教育委員会・(財) 大阪府文化財センター 1999 『河内平野の動態VII』

(財) 大阪府文化財センター 2008 『讚良郡条里遺跡VI』

(財) 大阪府文化財センター 2008 『讚良郡条里遺跡VII』

(財) 大阪府文化財センター 2009 『讚良郡条里遺跡VIII』

(財) 大阪府文化財センター 2009 『讚良郡条里遺跡IX』

(財) 大阪府文化財センター 2011 『讚良郡条里遺跡X』

長友朋子 2004 「近畿における編年研究の経緯と現状」『第53回理歴文化研究集会弥生土器中期土器の併行関係発表要旨集』

濱田延充 1993 『生駒西麓第三・IV様式の編年』『弥生文化博物館研究報告2』大阪府立弥生文化博物館

濱田延充 2001 「畿内第4様式の尖像・西ノ辻N地点出土土器の再検討-」『ヒストリア』大阪歴史学会

山口博 1990 『四條畷市史』第4巻

## 第2節 小型海獸葡萄鏡および柴垣柳樹双鳥鏡について

### 1.はじめに

讃良郡条里遺跡の今回の調査で出土した特異な遺物の一つとして、2点の銅鏡があげられる。そのうち1点は小型海獸葡萄鏡で、通常の海獸葡萄鏡にある外区部分を欠いており、特徴的な製作方法が想定される鏡である。しかし、今回の讃良郡条里遺跡での出土は中世包含層からの出土であり、出土地点では下層に製作・使用時期の遺構面も存在せず、この鏡の出土意義を考える要素に乏しい。また、もう1点は柴垣柳樹双鳥鏡で、出土地点から大將軍社との関連で評価することが出来るが、類例に乏しい鏡である。そこで、ここではこれらの鏡について他の出土例等を概観しながら検討し、今回出土した意義について考えることとしたい。

### 2.既往研究概要

海獸葡萄鏡自体の研究史は古く、中国大陆では宋代から研究されていた。日本では明治時代に八木奘三郎が「海獸葡萄鏡」の名を用い、漢式の鏡とした（八木 1902）。高橋健自はこれを出土例等から改め、唐式鏡として分類した（高橋 1911）。それ以来数多の研究があり組まれてきたが、讃良郡条里遺跡出土のものと同様の外区を欠く小型海獸葡萄鏡については、それほど取り上げられた回数は多くない。これらの鏡はその報告があらわれる最初期から既に海獸葡萄鏡の内区のみを一つの鏡として鋳造したものであろうことが指摘されていて（横山 1988）、片山昭悟によって研究対象として取り上げられている（片山 1994）。そして、2001年には杉山洋と大谷徹がそれぞれこの外区を欠く小型海獸葡萄鏡を主体的に取り上げて研究を行った（杉山 2001、大谷 2001）。杉山は後にこれを改稿したものを公表している（杉山 2003）。これらの研究によりこの種の鏡の基本的な点が明らかとなってきた。

柴垣柳樹双鳥鏡は、和鏡の中でも室町期に盛行した「擬漢式鏡」の一種として分類される鏡で、類例の少ない鏡である。類例のうち長野県雲泉寺経塚出土鏡は出土が古く、同時に出土した経筒に紀年銘があったため広瀬都賀等に早くから取り上げられた（広瀬編 1938 等）。広瀬は戦前の和鏡研究の中心人物であり、その論考は現在でも基本文献となっている（広瀬 1974 等）。その後この鏡は中野政樹により擬漢式鏡の例として概説に取り上げられた（中野 1969）。擬漢式鏡についてはその後久保智康が分類と年代観を

述べ（久保 1997、1999）、青木豊はその分類と変遷を詳細に考察している（青木 1997）。近年では青木を中心にして全国の出土和鏡が集成されている（青木ほか編 2007）。



図 679 謳良郡条里遺跡出土小型海獸葡萄鏡実測図とその原鏡模式図



図 680 講良郡条里遺跡出土

#### 柴垣柳樹双鳥鏡実測図

双鳥鏡は、直径 9.3cm、鉢高 0.55cm、縁高 0.95cm、鏡体の厚さ 0.1cm である。鏡背面中央に亀形鉢が頭を向かって左に向いて配される。亀形鉢の甲羅中央には菊花菱紋を充填する。内区は向かって上部に柳の枝が垂れている様子を表し、右部に柴垣紋様を配する。左部に双鳥紋を充填し、その表現や類例から双鳥は雀である可能性が高い。下部には直線的な土坡が表現される。土坡の下には類例では流水が表現されるが、本鏡では2列の珠点状の表現に簡略化されている。内外区の境には5窠の窠紋形界圈を有するが、その表現は入り組みがなく外周円形である。また界圈に沿った内側には圓線とそれに重なる小形珠紋帶を有する。外区は内側から櫛齒紋帶、隆帶上の断続連珠紋帶、櫛齒紋帶の順で、最外周には突線がめぐっている。縁は直角中継である。

青木豊の「擬漢式鏡」分類（青木 1997）のII類に<sup>1)</sup>、久保智康分類（久保 1997）のII類に分類される。後述する類例と比べ流水の表現が簡略化されており、14世紀後半の製作が考えられる。

#### 4. それぞれの類例

小型海獸葡萄鏡 外区を欠く小型海獸葡萄鏡の類例は、これまでに幾度か集成が行われている（横山 1988、大谷 2001、杉山 2001、2003 等）。その研究に導かれてながら探索すると、12 点の類例が管見に及んだ（表）。個々の類例の詳細を述べることは紙幅の関係もあり省略するが、表をもとにその傾向をみると、12 点のうち 8 点が奈良県内の出土で突出している。その内容も、7 世紀から 8 世紀にかけて都が置かれていた藤原京城・平城京城での出土が多い。それ以外では埼玉県、石川県、愛知県、兵庫県で 1 点ずつ出土していて、大阪府下では初の出土である。

表 6 外区を欠く小型海獸葡萄鏡集成表

番号	地図	所在地	出土遺跡	直径(cm)	出土遺構	造鏡時期	文獻
1	地図	滋賀県守山市大谷口	明月向遺跡	3.68	古坟層	漢文～奈良を含む、たる古墳層	○
2	石川県	白山市吉田町	今室遺跡	3.94	積石塚(CX02)	今宮V期(10世紀前半頃)	○
3	愛知県	西尾市吉良町立石田	立石田遺跡	3.50	古墳	不詳	○
4	奈良県	奈良市吉野町	平城京第31号院(奈良西条二坊土壇)	3.91	S2026(東御門)	奈良時代(8世紀)	○
5	奈良県	奈良市	奈良市新屋敷遺跡	3.98	古墳層	奈良時代(8世紀)	○
6	奈良県	奈良市西ノ京	西ノ京跡(西ノ京古墳)	3.98	古墳層	奈良時代(8世紀)	○
7	奈良県	奈良市西大寺町	西大寺古墳	3.80	327号墳(北上層)	古墳寺跡(古墳群跡)中墳	○
8	奈良県	橿原市石室町	石室大寺古墳	3.80	地下1土壇	7世紀末～8世紀初期	○
9	奈良県	橿原市石室町	石室大寺中古墳	4.00	地下1土壇	7世紀末～8世紀初期	○
10	奈良県	橿原市石室町	神淵宮(第60号)西方古墳西地区	3.79	4号(奈良五条大路S/W360路面上)	飛鳥朝中期(7世紀後半)	○
11	奈良県	守山市守山町	守山寺寺地	3.90	S2071(東面南向)20號(南向)10號(北向)	平城朝期(8世紀後半)	○
12	山梨県	甲斐郡笛吹郡(笛吹市)	笛吹市立古墳	3.90	御代之津御物2(北面外壁)10號	7世紀末～8世紀初期	○
13	八重山島	鍋屋村	鍋屋村多里遺跡	3.90	古墳層	中墳	未記

柴垣柳樹双鳥鏡 この鏡は、各種の和鏡図録等を総覽しても掲載の極めて少ない鏡である。筆者の管見に及んだ類例は、同種鏡としては2点あった。1点は東京国立博物館所蔵の長野県上田市平井字唐沢口（旧西内村域）の靈泉寺経塚出土鏡である（小山編 1923、広瀬編 1938、蔵田 1964）。明治30年頃に同地の白山社境内より出土したものという。この鏡は、直径 8.8cm、縁高 0.7cm である。讃良郡条里遺跡出土鏡と紋様構成はほぼ同様であるが、鉢が花蕊座鉢である点が異なる。石組みの石室内から小刀、笄（こうがい）、小柄（こづか）等とともに経筒に入れられた金属製経筒2、和鏡5、銅錢13が出土したうちの1点で、同時に出土した経筒には「天文五年」（1536年）銘がある。経筒銘より古い14世紀前半から中頃の製作と見られている（青木ほか編 2007）。

2点目は島根県松江市の下黒田遺跡出土鏡である（昌子編 1988）。この鏡は、直径 9.8cm、縁高 0.9cm である。こちらも讃良郡条里遺跡出土鏡と紋様構成はほぼ同様であるが、亀形鉢の向きは反対で頭を右に向いている。また双鳥紋の充填部はやや上の位置である。土坑から横位での上半分を欠いた備前焼壺に入れられた状態で、土師器皿16以上、北宋銭・明銭計29枚、糞殻、人毛とともに出土した。この土坑は出土遺物から遺跡の東側に広がる黒田館跡に関連する15世紀後半の地鎮等に伴う遺構と報告されている（昌子編 1988）。鏡の製作年代は14世紀前半とみられている（青木ほか編 2007）。

このほか、紋様構成のよく似た鏡として静岡県下田市の白濱神社境内遺跡古宮山地区出土鏡があげられる（大場 1943、長野・日野 1962、深澤ほか編 2011）。この鏡は柳樹双雀鏡で、鉢は捩菊座鉢とされ、内区には讃良郡条里遺跡出土鏡とは異なり柴垣の表現がない。ただし外区紋様には柴垣様のものを使っている。面径約 6.8cm、縁高約 0.5cm とやや小さい。江戸時代の文化九（1812）年に神社の現本殿地奥付近から発掘された記録が残る鏡である<sup>2)</sup>。同時に出土したとされている和鏡3面と「嘉禄元年」（1225年）銘の御正駄が神社に所蔵されているが、柳樹双雀鏡のみ失われ現存しない。同時に出土した鏡はいずれも13世紀のものとされ、本鏡も同時期のものとされている（深澤ほか編 2011）。

## 5. 讃良郡条里遺跡出土鏡の位置付け

外区を欠く小型海獣葡萄鏡の類例を概観すると、奈良県内、それも藤原京・平城京城での出土が多いことが注目される。この点からは、これまでに指摘されるように畿内中央での製作によるものとみてよいだろう（大谷 2001、杉山 2001、2003）。寺家遺跡等の海上交通の要衝での国家的祭祀遺跡から出土している点も、中央からの流通であることを裏付けると言える。

讃良郡条里遺跡出土鏡は湯道の切断痕跡があり、初めからこの面径の鏡として製作されたことが明らかである。杉山洋が想定するような枝構造の連鉄式鑄型による鋳造かどうかは判断できないが（杉山 2001）、大谷徹が想定するように「祭祀に用いるための儀鏡」として（大谷 2001）、原鏡となる外区の存在した海獣葡萄鏡（図 679－2）から意図的に外区を省き面径を縮小した鏡が製作されたものと考えられる。鏡面等が研磨されず、鋳放しの状態で出土するものが多いこともこの点を裏付ける。

今回の讃良郡条里遺跡では中世包含層からの出土であったが、微高地であり中世の削平も考えられる位置であった。今回の調査地の北側で行われた発掘調査では奈良時代にこの地域で早くから条里制が施行されていたことがわかっている（中尾ほか編 2009）。この鏡が中央からの流通と考えられることを考慮すれば、この条里制施行に関係する有力者が、この地域に持ち込み祭祀に使用した鏡である可能性も考えてよいだろう。また、この種の鏡は都城内で溝から出土し、沿岸の祭祀遺跡で用いられるなど水との関連が注意され（片山 1994、大谷 2001、杉山 2003）、鏡と水は從来からその関連が深いこと

が指摘されている（中野 1969 等）。讃良郡条里遺跡も古代河内湖の沿岸付近にあたる遺跡であり、今回出土した鏡は藤原・平城京期の祭祀のあり方と広がりを考える上で重要な資料といえるだろう。

柴垣柳樹双鳥鏡については、これまで 2 点の類例が出土している事がわかった。その紋様表現を比較すると、讃良郡条里遺跡鏡は紋様の一部に簡略化が見られ、14 世紀後半の製作と見られる。青木豊は窠紋形界囲の入り組みがなくなり外周円形となるのは 14 世紀中頃としており（青木 1997）、久保智康は「花形の界囲」すなわち青木が「窠文形」とする界囲の出現自体を 14 世紀後半まで降らせている（久保 1997、1999）。『全国出土和鏡集成』では本鏡式は 14 世紀前半からの製作が考えられているが、青木や久保の指摘を考慮すれば、あるいは本鏡式の製作時期自体が若干降る可能性も考慮に入れるべきであろう。出土例は全て「製作時期」から一世紀以上経過しているとみられる点も注意すべきである。

室町期の擬漢式鏡については、これまでに京都市内の八条院町付近で製作が行われていたことが一連の発掘調査により明らかになっている<sup>3)</sup>（網 1996）。擬漢式鏡の製作については一稿を草したことがあるが（實盛 2011）、讃良郡条里遺跡出土鏡が八条院町付近での製作かどうかは現時点では不明である。しかし、八条院町出土の鋳型には柳葉状の紋様があるものも含まれているようであり、仮に八条院町付近での製作であるとすれば、京の製品の流通を考える上で本鏡は重要な資料となると言えるだろう。

柴垣柳樹双鳥鏡が出土したのは、明治 44 年に忍陵神社に合祀された砂村鎮座の大將軍社（山口編 1972、山口 1990）の境内地である。この大將軍社は、方位の吉凶を司る八将神の一神である大將軍神を祀る神社で、これまで創建年代が不明であった。今回の調査で、室町後期（16 世紀中頃～後半）まで遡ることが明らかとなったが、本鏡もそれを裏付ける遺物の一つと言える。出土位置は神社敷地中心の社殿跡付近であり、御正脉等として用いられたものか神社への奉納鏡の可能性が考えられるだろう。

本節の作成に当たっては、下記の諸氏・諸機関にお世話になった。記して謝意を表したい。

鐘方正樹、楠恵美子、杉山 洋、深澤芳樹、降幡順子、国立文化財機構奈良文化財研究所、奈良市教育委員会。

（實盛良彦）

## 註

- 1) ただし、青木はこの II 類について、その紋様が櫛歯紋帶以外は漢鏡との関連が希薄であることから「本来擬漢式鏡と呼称すべき鏡ではないものと考えられる」としている（青木 1997）。
- 2) 国学者で著名な平田篤胤が文化九（1812）年に著した『白瀧神社略縁起』に記録されている。
- 3) 八条院町付近での既往の調査およびその報告については、上村 2002 や山本 2010 に一覧表が掲載されている。

## 参考文献

- 青木 豊 1997 「所謂擬漢式鏡に関する考察」『國學院大學考古學資料館紀要』第 13 輯、國學院大學考古學資料館。
- 青木 豊ほか編 2007 「全国出土和鏡集成」平成 16 年度～平成 18 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書。
- 網 伸也 1996 「和鏡鋳型の復元的考察」『研究紀要』第 3 号、財團法人京都市埋蔵文化財研究所。
- 上村和直 2002 「京都八条院町をめぐる諸問題」『研究紀要』第 8 号、財團法人京都市埋藏文化財研究所。
- 大谷 敬 2001 「浦和市明花向遺跡出土の小型海獸葡萄鏡」『埼玉考古』第 36 号、埼玉考古学会。
- 大堀容進 1943 「伊古奈比咩命神社」伊古奈比咩命神社事務所。
- 片山耕信 1994 「奈良時代の鏡 千二百年前にあこがれた紋様」。
- 久保智康 1997 「京都國立博物館藏和鏡」京都國立博物館。
- 久保智康編 1999 「中世・近世の鏡」日本の美術第 394 号、至文堂。
- 藏田 蔵 1964 「経塚論 六、東京國立博物館保管、中部地方出土の経塚遺物（下）」『MUSEUM』第 159 号、美術出版社。
- 小山眞夫編 1923 「小縣郡史」余編、小縣時報局。
- 實盛良彦 2011 「三重県神島八代神社所蔵二神二獸鏡について—室町期鋳鏡製作の可能性を探る—」『帝积岐遺跡群発掘調査室年報』

- XXV、考古学研究室紀要第3号、広島大学大学院文学研究科帝积跡群発掘調査室・考古学研究室。  
 昌子寛光編 1988 「下黒田遺跡発掘調査報告書」松江市建設部建設課・松江市教育委員会。  
 杉山 洋 2001「小型海獸葡萄鏡について」『日本文化史研究』第33号、日本文化史学会。  
 杉山 洋 2003「唐式鏡の研究」鶴山堂出版部。  
 高橋健自 1911「鏡と劍と玉」富山房。  
 長島健・日野一郎 1962「金工と石造品」「伊豆下田」地方史研究所。  
 中尾智行ほか編 2009「讃良郡条里遺跡」Ⅷ、財团法人大阪府文化財センター。  
 中野政樹 1969「和鏡」日本の美術第42号、至文堂。  
 広瀬都彌編 1938「扶桑紀年銘鏡風説」大阪市立美術館学報第一、大阪市役所。  
 広瀬都彌 1974「和鏡の研究」角川書店。  
 深澤太郎ほか編 2011「静岡県下田市白浜神社所蔵考古資料調査報告」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第3号  
     第1分冊、國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター。  
 八木焚三郎 1902「鏡鑑説」「考古便覧」嵐山房。  
 山口 博編 1972「四條畠市史」第一巻、四條畠市役所。  
 山口 博 1990「四條畠市史」第4巻、四條畠市役所。  
 山本雅和 2010「平安京左京八条三坊九町跡」財团法人京都市埋蔵文化財研究所。  
 横山貴広 1988「海獸葡萄鏡小論」「寺家遺跡発掘調査報告」Ⅱ、石川県立埋蔵文化財センター。

#### 表文献

- ①大谷徹 2001「浦和市明花向遺跡出土の小型海獸葡萄鏡」『埼玉考古』第36号、埼玉考古学会。
- ②小嶋芳孝編 1988「寺家遺跡発掘調査報告」Ⅱ、石川県立埋蔵文化財センター。
- ③宮内庁書陵部 1992「出土品展示目録 古鏡」学生社。  
     宮内庁書陵部陵墓課 2005「宮内庁書陵部所蔵 古鏡集成」学生社。
- ④三好美穂ほか 1995「平城京左京四条三坊十坪の調査 第314次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成6年度、奈良市教育委員会。
- ⑤立石堅志ほか 1991「平城京左京四条四坊十三坪の調査 第208次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成2年度、奈良市教育委員会。
- ⑥鍾方正樹ほか 1994「平城京右京二条三坊三坪の調査 第273-2・283次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成5年度、奈良市教育委員会。
- ⑦蓮沼麻衣子ほか 2000「西隆寺旧境内・右京一条二坊の調査 第306次・第309次」『奈良国立文化財研究所年報』2000-Ⅲ、奈良国立文化財研究所。  
     片山昭悟 1994「奈良時代の鏡 千二百年前にあこがれた紋様」。
- ⑧齊藤明彦・今尾文昭 1989「四条大田中」「大和を撮る 1988年度発掘調査速報」奈良県立橿原考古学研究所附属博物館。
- ⑨花谷浩編 1996「飛鳥・藤原宮発掘調査概報」26、奈良国立文化財研究所。
- ⑩奈良国立文化財研究所編 1991「飛鳥・藤原宮発掘調査概報」21、奈良国立文化財研究所。
- ⑪山下史朗編 1988「深江北町遺跡」兵庫県教育委員会。

## 付編 讚良郡条里遺跡出土鏡の分析

讚良郡条里遺跡で出土した銅鏡2点については、国立文化財機構奈良文化財研究所の降幡順子氏に依頼し、蛍光X線分析装置(EDAX製EAGLE III)を用いた非破壊での成分分析を行った(図681)。分析にあたっては発掘調査時のいわゆるガジリ部や、鋒が剥がれた部分等比較的腐食の程度が少ない箇所を顕微鏡観察により分析位置として選択した。ただ、あくまでも非破壊での分析であり、表面腐食層の影響は排除できないため、分析した値は測定位置表面での値を示すとどまるこことを記しておく。

また、この分析時に撮影した透過X線写真的分析の結果、降幡氏により柴垣柳樹双鳥鏡の外区部分にタタキ仕上げとみられる補修痕が見つかった(図682)。

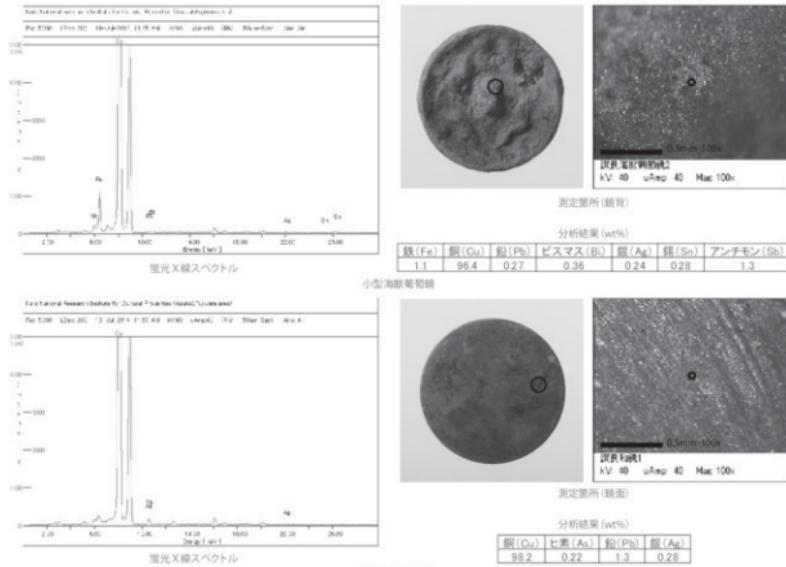


図681 小型海黙葡萄鏡・柴垣柳樹双鳥鏡成分分析結果

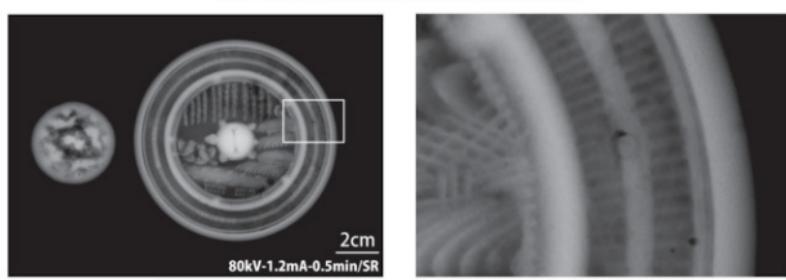


図682 小型海黙葡萄鏡・柴垣柳樹双鳥鏡透過X線写真